THE KAIZO

改造

五月號

編輯部專用

1922

市橋善之助譯

清宮彬裝

▽四六版二百八十八頁挿畫八葉△
▽定價貳圓拾錢書留送料拾七錢△

レオナルドの手記

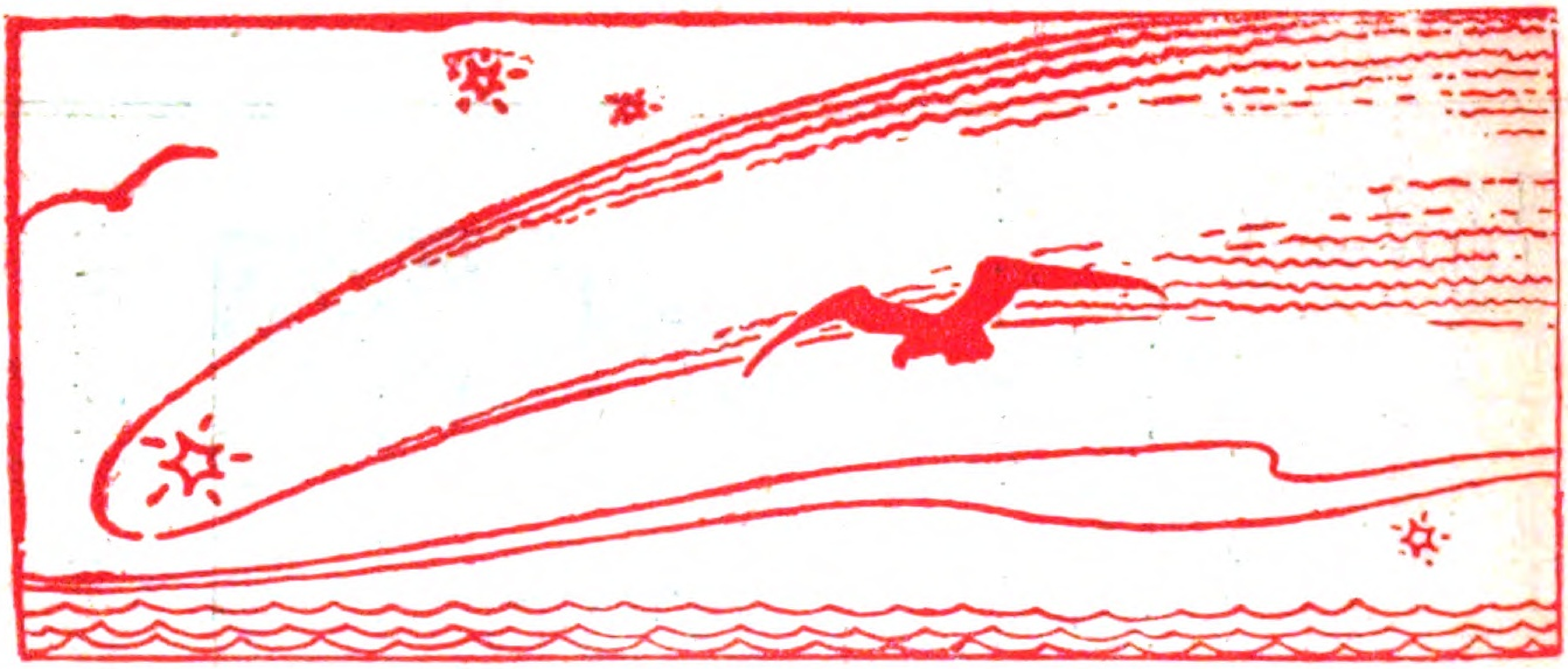
新刊

文藝復興期の天才レオナルド、ダビンチの手記である。ダビンチの名は早くから我が國に知られて居たが、彼の鋭い人生の豫言は只、短い一語一語が驚異すべき箴言として記憶されてゐるに過ぎなかつた。疾に世に出ずべくして、今日まで我が國語に移されなかつたのは寧ろ奇とすべきである。難解を以て知らるゝ彼の言葉は今こゝに、市橋氏の非常な自信と深い理解とに依つて世に薦めることを得た。恐らく近代に於ても彼ダビンチ程の深さと廣さとに透徹した睿智の人は他に見出し得ないであらふ。彼の偉大な藝術は今更呶々を要しないが、自然科學に深き神秘に其の神の如き睿智はこゝにこの一卷をなしてゐる。

東京牛込
神樂町二
叢文閣
電話番町四八一二番
振替東京四二八八九



改造　五月號　目次



時評

創作

文學博士 故 箕作元八先生遺著 (全一冊) 最新刊

第十八世紀佛蘭西文化史
社會主義運動史

菊版布裝天金箱入美本・本文五百八十餘頁
挿繪三色版コロタイプ石版等美術圖版九葉

定價金五圓 (郵税拾八錢)

世界の形勢に對し、權威ある歴史的批判を以て、久しく國民を指導し來れる箕作文學博士の死は、國際關係の變轉最も極りなき今日に於て何人も痛措にたへざる所なり。爰に講堂以外、未だ世に現れざりし博士遺稿中、不朽に傳ふべきもの數種を擇び遺稿全集四卷成る。其の第一部に收めたる『第十八世紀フランス文化史』は曩に出でたる『フランス大革命史』の序曲にして、次に出づべき『ナポレオン時代史』と共に、近世歐洲に於ける民主主義運動史の開幕三部曲を成すもの。今や世界的大文化運動たる社會主義運動の由來及び發達を通叙せる『社會主義運動史』と合册し發行す。共に博士最大得意の題目にして、現下の時勢の最も熱望する讀物たるを信ず。

發行所 東京神田 冨山房 振替一〇五 賣捌 全國書店



偉人ガンヂイ（禁轉載）



獄門を出でんとするデブス氏

モウパッサン全集第拾五巻（完結）

谷崎精二氏外二氏譯（最新刊）

（四六判細活字印刷洋布装箱入 定價金貳圓六拾錢送料拾七錢）

女の一生 外一篇
家庭の平和

奔放の描寫を以つてモウ氏一代の傑作と稱せらるゝ女の一生は、從來刊行されたるものとは頗る面目を新たにして谷崎精二氏が譯出せるもの「家庭の平和」は「女の一生」よりも長篇なる傑作の戯曲にして矢口達氏の譯出に係る。他の短篇は從來發表し得ざりし自然主義の極致を發表せる名篇也。

ウエスターマーク原著 島村民藏氏譯

人間結婚史

倫教大學の教授たりし原著者が該博の智識を傾倒して人間結婚の發表をあらゆる方面より觀察研究したるもの也。

定價參圓貳拾錢送料拾九錢

田中王堂氏著

創造と享樂

人生何をか創造し何をか享樂すべき王堂先生が深遠の學識と堂々の筆を以て其の大思想を吐露せられたるもの也。

定價貳圓參拾錢送料拾五錢

萩原井泉水氏著

新俳句提唱

俳壇の巨匠井泉水先生新俳句を提唱せらる所謂俳壇の何派たるを問はず苟も俳句に指を染むる人士の必讀の書也。

定價貳圓參拾錢送料拾七錢

ドーデエ原作 八木さわ子氏譯

プチ・ショウズ

本書は佛國文學中稀に見る藝術品にして流暢の譯文を以て有名なるさわ子女史の筆は原文の妙を傳へて餘蘊なし。

定價金貳圓◇送料金拾五錢

東京市麹町區飯田町一の貳 株式會社 天佑社 （振替東京一〇一二八番 電話九段長一一七三番）

大日本全史

全部完成

下卷新刊（江戸時代より明治維新迄九百九十頁）菊版布裝天金挿繪三色版コロタイプ寫眞版二十一カット百廿大小地圖多數

特價金六圓（正價金七圓）郵稅內地二十四錢臺樺鮮支五拾錢

附錄全卷總索引

上卷（上古より平家の滅亡まで九百七十餘頁）挿繪地圖大小百三十餘

中卷（頼朝の覇業より秀吉の薨去まで九百六十頁）挿繪地圖大小百四十餘

各卷定價金七圓（郵稅各卷同一）

國史專攻文學士 大森金五郎氏著

「歷史敎育の普及が現下の急務たる際、平易にして興味深く、通俗にして低級ならず、浩瀚にして而も讀み易き一大國史、好個の國民的讀物として一般に推奬す。」とは東京日日紙の本書に加へし讃評なり。

上卷三版。中卷三版。今や下卷新に成る。江戸時代より明治維新に至る政治・軍事・經濟・産業・文藝・美術・民族其他國民生活の全般に亘り、國史上の有ゆる問題と最新の研究を網羅して堂々一千頁、挿繪百數十個、五十頁の總索引を加へて爰に十有餘年苦心の大著述を完成せり。全卷を通じ記述の平明深切、之を貫くに著者が國史を愛重する熱烈の精神を以てせるは正に我が最初の國民的大日本歷史として本書の最大特色ならずんばあらざるなり。

發行所 東京神田 冨山房 振替一〇五 賣捌 全國書店

小説六つ

野上彌生子著

◇四六版布裝天金函入◇

◇定價金貳圓五拾錢◇

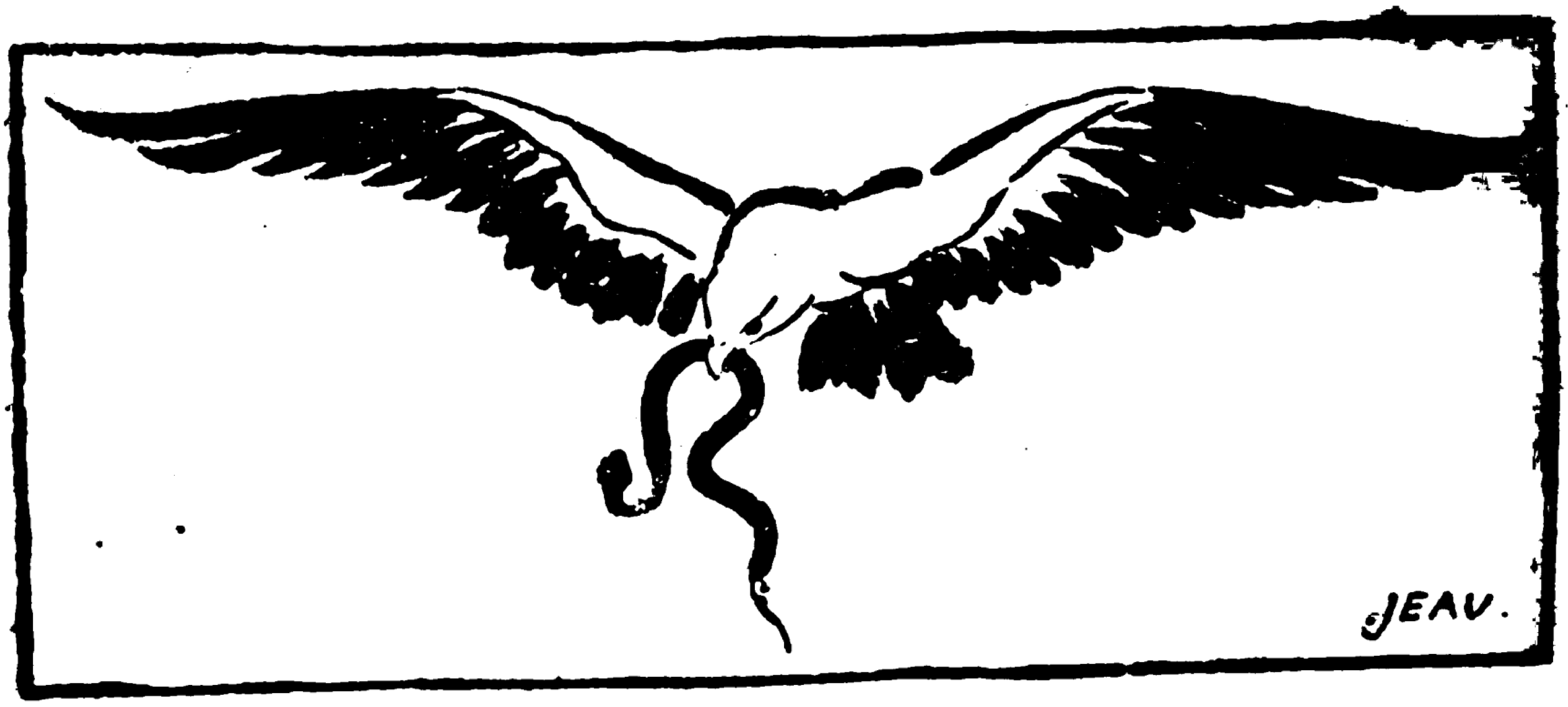
◇書留送料金拾六錢◇

ガンヂイと眞理の把持

文學博士　鹿子木員信著　印度革命の靈ガンヂイ

饒平名智太郎著　ガンヂイ評傳及其思想と運動

物質的に褌一つの野蠻生活をしながら、精神的に愛と眞理の把持に徹した至高至純の生活者が、ガンヂ其人だ、如何なる懷疑者



改造五月號

感懷一事

このごろはもう何も考へまいと思ふことが多いし、またその方が氣樂で、自分の性分に合ふたやうな心持がするが、さてそうもいかぬと見えて、つまらぬことを先きから先きへ取越し苦勞して、あたら花の日を仇で過すことが多い。

近ごろ百般の世相が、丁度花みる人の心事そのままだ、そこに何等の眞劍味も誠實味も見えない、おのれの生命力に對しては眞實で嚴肅であらねばならぬのに、それが著書を通し、創作を通し、論文を通し百般の政治、實業を通して打見たるその各人の態度に、その片鱗に、その一句に、ここそは實に生命を削つた所だと思はせたり、感激させたりする所が見當らない、のみならず、たまにそれがあるにしても、ややもすればそれが一場の芝居であり、或は賣らんがためのキザの技工であつて見れば、讀後にどれだけ不愉快にされるか。

自分はこのごろ、或る人の「自傳」を繰りかへし一讀した、そして氣持よく、そして嚴肅に讀過した、勿論その主義に贊否は別として、歸心矢の如くして母國の地を踏む能はざる彼の心情に一片の同情がグングンとのびて行く。

彼が春深き美作の國を追憶する所、天涯の遙かにある可愛い年頃のまな娘に思ひをよする處、母國の主義者に流す一片の婆心それは涙ならでは讀むことが出來なかつた——虛心、主義のために、レニンに比すべき人物、西鄉伊藤以上——「自傳」を讀むうちに、そうした感懷が瀕りに波打つてくる。

ナゼにかく自分は動かされて行くのだらうと再びふり返つて見た、それは矢張り「鈍牛のやうなその人格へ」の反映であつた。天地を動かす力、それはやはりこの「個性の强さ」にある。三たびかへりみて我政界を眺めたらそこにはただ喟然たる嘆息のみが殘されていた。



個人主義者と社會主義者

河上　肇

一　或日の講話

今年の一月の末、それは雪のふる寒い晩であつた、私はかねてからの約束を果すために、大學の寄宿舍の茶話會へ行つて次のやうな話をした。その話題は、同月發行の『改造』に出てゐた有島武郎氏の『宣言一つ』を讀んで思ひ付いたのだが、しかし直接に同氏の『宣言』を批評するつもりで、ものを言つたのでないと云ふことは、その內容が示す通りである。

*　*　*

人間には生れながらにして男女といふ性の區別があるやうに、昔から個人主義者と社會主義者（今日謂ふ所の狹い意

味の社會主義者のとでは無い。（それは話を進めて行く中に自然明瞭にする積りだ）との二つの型があるやうに思ふ。勿論男の中にも女らしい男が居り、女の中にも男らしい女が居るばかりでなく、どんな強い豪傑にでも何處かには女々しい方面があり、どんな花車な美人にでも何處かには男々しい部分があつて、大概の人が氣質から言へば男女兩性の混合から成り立つてゐるやうに、絶對的の個人主義一方の人もゐなければ、絶對的の社會主義一方の人もゐない。絶對的に何れか一方に徹底しては、人間は到底生存し得られぬから、世の中に左様な人はゐないのである。之を社會の經濟組織について見ても、今日の資本主義的組織は個人主義の徹底的に發展したものだと看做されてゐるが、しかし一家の內では可なりの程度まで社會主義――共產主義――が行はれてゐる。即ちボーレの言ふやうに資本主義の社會で行はれてゐる個人主義と謂ふのは、實は家族單位の利己主義であつて、家族の內部では利他主義が行はれてゐるのである。將來社會主義、共產主義が實現せられる世の中になつても、其處には又必ず個人主義の殘滓が留保せられるに決まつてゐる。例へば一枚の着物を社會の全員が一緒に着てゐると云ふ譯に行くものでは無いから、着物は銘々、自分の着物を着てゐなければならぬ。帽子でも靴でもさうだ。食物でも住居でもさうだ。それは如何なる形式で許容されるにしても、兎も角何等かの形に於ける『個人的占有』は事實上必ず存在するので、絶對的の『共產』は行はれ得るものでは無い。斯様な譯で、吾々の物質的生活について考へて見ても、徹底的には個人主義も社會主義も共に行はれ得るものでは無く、何時如何なる國の社會組織を見ても、それは必ず個人主義と社會主義との混合から成り立つてゐるのであるから物質的には何人も絶對的の個人主義者となることが出來ぬと同じやうに、何人も絶對的の社會主義者となることは出來ない。しかし私が茲に問題としやうと思ふのは斯様な物質的生活の方面のことでは無い。私が先きに、人間には個人主義者と社會主義者との二つの型があると言つたのは、主として精神的生活の方面について言つたのである。尤も精神的のエゴイ

ストは物質的生活に於てもエゴイズムを主義とし易く、精神的のソーシアリストはおのづから物質的生活に關してもソーシアリズムを理想とし易い傾向はあるが、しかし物質的には少しもエゴイストでない人が、精神的には極端なエゴイストである場合もある。それはその人の大事だと思つてゐるものが、物質界になくて精神界にあるのだから、そのエゴイズムは物質問題に關して現はれずに、精神問題に關して現はれるのである。兎も角、今私が問題としやうと思つてゐるものは、精神的の個人主義者と、精神的の社會主義者とである。

この頃私の考へる所によると、――と言つても、勿論人から話を聽いたり物を讀んだりして、段々に思ひ付いたことなのだが、――藝術家とか科學者とか云ふ類の人には、私が茲に謂ふ意味のエゴイトストが多いやうである。それは自分の學問とか藝術とかに最高の價値を置いて、一切のものを其の手段に役立て之が犧牲としやうとする所から、おのづから、さうなるものと思はれる。

私は今から十數年前に、始めて京都大學に招ばれた頃、當時催された學生の歡迎會で、何か話をせよと促された時、次のやうな事を述べたのを未だに記憶して居る。――昔し大阪に一人の商人がゐて、大自慢の煙草入れを持つてゐた。それは何百金かを投じて手に入れた素晴しい品物なので、よく人に見せては自慢した。賞める人があると自分の娘の器量を賞められた時よりも悦んだ。その商人が或る時その煙草入れを腰にさして、大阪から東京行きの汽車に乘り込んだ。一等室は割合にすいてゐたに拘らず、汽車に乘り込んだ時から、自分の座席に近く座を占めた一人の男がある。何となく擧動が怪しく感ぜられたので、或は掏摸ではないかと思つて、彼は始終注意を怠らなかつた。そのうち汽車は無事に東京――當時の新橋停車場――に着いた。彼は隣りの乘客に對し無禮な推測をしたことを、心の中で半ば後悔しながら、停車場を出ると後をも見ずに、豫ねてからの定宿に俥を走らせた。宿に着き部屋に通つて、女中の運んで來た茶

を飲み了ると、再び女中が這入つて來た。今度は手に一枚の名刺を携へて來て、このお方が初めてではあるが是非お目にかゝりたいとのお言葉です、と云ふ傳言を齎した。それは彼と略ぼ前後して此の同じ家に投宿した客の一人だと云ふことであつた。兎も角會つて見やうと云ふことで通して見ると、豈に圖らんや、それは大阪から同じ汽車に乘つて來た人で、彼が内々掏摸では無いかと疑つた件の人物であつた。ところが更に驚いたのは、實は私は大阪で可なり名を賣つてゐる何某といふ掏摸の親分です、突然お目に懸つて甚だ失禮を致します、といふ其の男の挨拶であつた。さて此の前置の下に、その男の言ふ所を聽くと、彼は商人の腰にさしてある煙草入れを一目見ただけで、それは稀有の珍品だと思つた、それで此の代物をものにして來るからと子分に耳打ちして汽車に乘り込んだのだが、とう／＼其の計畫を果すことが出來なかつた。しかし一旦子分に漏らした以上、素手で歸つては私の顏が臺なしになるから、甚だ性急に至極の難題を持ち出す譯だが、例の品を相當の代償でお讓りは願はれまいか、と云ふことであつた。意外の話に、商人は頗る面喰つたが、しかし例の煙草入のために其れほど人を苦めたかと思ふと、心の中で非常な滿足を感ぜずにはゐられなかつた。そこで何れ位の値を踏んでゐるか聞いて見たくなつたので、讓らうと云ふほどの決心もなかつたが、兎に角いくらで讓つてくれと言ふのかと訊いて見た。ところが彼が三度目に驚いたのは、御不足かも存じませぬが只今其れ以上の持ち合せがありませぬからと言つて、先方の打ち出した金額は意外にも千圓といふ巨額であつたことだ。千圓でならば讓つてやつても實に善い商賣になる。そればかりでは無い、これまで人が思ふやうに値打を認めてくれなかつた此の煙草入が、始めて千圓といふ價格を有ち得たことに、彼は非常な滿足を覺え、千里の名馬が始めて伯樂に逢つたやうな氣持がした。それで先方の懇願に任せ、それでは讓らうと云ふことに話を決めると、掏摸の親分は懷から手の切れるやうな百圓札を十枚並べて、惜氣もなく其れを煙草入と交換した。兎も角もこれは面白い目に逢つたものだと云ふので、商人は大

に悦に入り、それから早速酒肴を命じた。酒の進むに從ひ、掏摸の親分は、彼等の生活の内幕や、その數々の失敗談や成功談を物語つた。商人は種々な珍らしい話に、講談を聽くよりも面白いと思つた。益々悦に入つた彼は、今夜はまあ緩つくり飲むさ、私は一寸失禮して一風呂あびてくるから、と云ひながら、大分醉の廻つた後女中に導かれて風呂場に這入つた。いゝ氣持になつて彼が再び自分の部屋に歸つた時、例の掏摸の先生が影を見せなかつたのは言ふまでもなく、煙草入れと共に、手に切れるやうに思つた百圓札十枚も、勿論其處には跡をも止めなかつた。彼は自分の最も大事にしてゐた煙草入れを、相手に御馳走までしながら、悠々と取られて仕舞つたのである。其の時、件の商人は、自分はこれまで商賣の上で隨分殘念に思つた經驗は少からず有つてゐるが、今度くらゐ腹の立つ目に逢つたことは無いと言つて、ぢだんだ踏んで悔しがつたと云ふことだ。これは私が今度赴任の途中、靜岡縣の梅龍寺に立ち寄つた時、間宮英宗師から聞いた話で、或は事實談として誰も知つてゐる有名なことか、或は誰かが作つた講談本にでも出てゐるのかそれは私の知らぬ所だが、今此の話を私が持ち出して來たのは、斯ういふ物の取られ方をした商人はさぞ悔しかつたであらうが、しかし其れと同じ程度に斯ういふ物の取方をした掏摸はさぞ愉快でたまらなかつたらう、と思ふからだ。私は確實な統計的材料を有つてゐないから斷言はし兼ねるが、掏摸や泥坊など云ふものは、仕事の無かつた日や、監獄へぶち込まれたりしてゐる日を、總て計算に入れて平均を取つて見たなら、その一日の收入は、仕事に骨の折れる割合に、甚だ少いものでは無いかと思ふ。しかるに、それに拘らず斯樣な反社會的の職業が世の中から跡を絶たぬのは、收入のみが目的でなく、仕事それ自身の中に少からぬ興味——報酬——があるからでは無いか。さう考へると、私等學問に從事してゐる者も、實は掏摸の仲間なのである。私は今この京都大學に迎へられ、始めて諸君にお目に懸つて、何か話をせよと要求せられたに就ては、私は何がために學問をしてゐるかと云ふことを、當然お話すべき義務があるやうに思ふ

が、それは掏摸が何遍監獄へぶち込まれても、面白くて已められぬと云ふのと、同じ心持になりたいと心掛けてゐると言ふべきであらう。斯樣な事を申すと強いて奇矯の言を弄するやうに聞えるかも知れないが、私は元來日本の學者が實際の利益といふことを重んじ過ぎてゐるのが、我國學問の進歩せざる最大原因だと考へてゐる。苟くも學問を以て身を立てゝゐるものゝ、その學問を何かの手段と心得てゐるやうでは、自分自身で學問を第二義的のものとしてゐるのだ。そんな事で學問を尊重すると云ふ氣分が出てくる筈がない。しかも自ら尊重せずして、立派な學問が生れる道理がない。學問の本義は眞理の發見にある。さうして眞理といふものは、必ず人生に役立つものだ。それが直ちに人生の用を成さない場合はあつても、それは何時かは廻り廻つて必ず人生の實用に供せられるものだ。だから學問に從事する者は用途如何と尋ねる必要はない。只偏に眞を追求することに安神してゐれば善い。奉仕すべき最上の神は眞だ。其は勿論名利の手段に供せらるべきではない。國家又は社會のための學問といふも亦よろしくない。それは國家又は社會のためにさへ決して手段とされては爲らない。斯く言へばとて、私は一切の研究題目が皆な平等の價値を有つべきだと云ふ積りでは無い。それ〴〵の研究對象は、學問の見地から、種々なる價値の等差を附せられ得るだらう。それを爭ふのではない。私の只問題とする所は、研究者が研究に從事する場合の主觀的態度だ。學問それ自身を目的とすると云ふ態度でなければ、本當の學問は仕上がらぬものだと云ふのが、私の言はんと欲する所だ。せめて私は掏摸が其の仕事自身に目的を見出してゐる程度に、學問そのものに目的を見付けたいものだと思ふ。——私は今から十數年前に、斯樣な話をしたことがある。それは大學の寄宿舍の食堂か何かで催された小さい會で、その時の御馳走は寄宿舍の賄の拵へた簡單な食事であつたのが嬉しかつた事と、私が話を終へると、席に居られた戶川博士が、只今の河上講師の話は云々と話し出された時、生れて始めて職名を以て名を呼ばれたのを奇異に感じた事とは、私の今明瞭に記

憶して居る所である。しかしそんな事は今問題ではない。問題は學者の研究的態度についてだ。其れは其れ自身を目的とすべきもので、一切他を顧みる必要はないと云ふ考だ。

斯樣な考、これは私が始めて京都に來た當座に述べた考だ。それから早や十數年たつ。この十數年間に自分が果してどんな道を辿つて來たかと云ふことは、今私の問題とするところではない。……

さて私は自分が學問をしてゐるので、假に學問について述べたが、それは藝術について言つても、矢張り同じことであらうと思ふ。そこで假に私の考を正いとして話を進めて見ると、學者とか藝術家とか云ふものは、自分の學問なり藝術なりに最高價値を認め、一切のものを之が手段となし犧牲となすことによつて、持つて生れた天分の全力を竭し得、之によつて始めて自分の學問なり藝術なりを十分に仕上げることが出來るのである。それゆへ純粹の學者、純粹の藝術家は極端なエゴイストたるべき筈である。民衆のためにとか、社會のためにとか云ふ考は起らないで、寧ろ民衆を犧牲にし、社會を犧牲にすることによつて、自分の學問なり藝術なりを高め且つ深めることにのみ精進する所の、極端なる個人主義者でなければならない。

近頃竹田博士がコローの繪の思ひ出について誌されてゐる短文の中で、私は彼れの友人ミレーの逸話を見て、果して彼も極端なるエゴイストであつたと思ふ。斯く言へば、ミレーの傳記を詳しく知つて居られる諸君の中には、私を以て甚しき暴言を吐く者とされる方があるかも知れぬと思ふが、しかしミレーが一生悲慘極まる貧乏な生活をしたことは、疑もない事實であらう。彼が死ぬる時、最愛の妻子に遺したものは、若干の繪――それは今でこそ大變な高價に賣買されてゐるけれども、當時は殆ど誰も顧みなかつた反古同樣のもの――に過ぎなかつた。恐らく之は大體に於て間違のない事實であらう。さうして私は只此の事實からして、彼をして甚しきエゴイストだつたと推定するのである。と云ふ譯

は私は先きに彼れの最愛の妻子と言つたけれども、實は彼にとつて妻子は最愛のものでなくて、最愛のものは自分自身の藝術であつたらうと思ふからだ。彼は愛すべき妻子の生活をも犧牲として自分の藝術に奉仕することにより、始めて貴重なる作品を今日の吾々に遺すことが出來たのだ。この偉いエゴイストが、自分の妻子をさへ顧みなかつたのに、自分が死んでから後の世の人々を眼中に置いてゐたとは、とても考ふべからざることだ。吾々は今日ルーブルの畫廊で、彼れの作品の前に立ち、分相應の享樂をすることが出來る。しかし私は思ふ、ミレーその人は、決して吾々のために此等の繪を描いたものでは無い。彼は自分自身のために描いたのだ。後世の人が其れを鑑賞して悅ぶだらうといふやうな考は、彼が繪筆を執つてゐた時、恐らく彼れの思ひも染めなかつた事であらう。

しかし私はミレーの生涯や性格について何等の智識をも有つてゐない。以上は只私の考から演繹的にミレーの爲人を推定しただけのもので、私の考を歸納的に證明するための材料した積りでは無い。ところが私の手許には、近頃古屋芳雄氏の譯されたベルハアレンの『レムブラント』がある。これが私の書棚にある唯一の畫家傳だが、試に此の書物の第三章『レムブラントの性格』を開けて見ると、その冒頭には『レムブラントの性格の最後の本質は、その計るべからざる、大なる大なるエゴイズムにある。多くの一流の人たちは、多くはその素質をもつてゐる。彼等は皆藝術のために生き、其藝術はまた彼等自身に他ならなくなつてゐる。彼等は至純な動機から仕事をし、それがひきをこすところの世の離歎などには無關心であつた。……彼等の德操上の觀念或は道德的尺度に於ける完き缺如は、常に彼等が自己以外のあらゆるものに對して、超越した無關心を持つてゐるところから來てゐる云々』と述べてある。私は自分の考が、偶然手許にある此の一書により、有力に裏書されつゝあることを發見して更に讀み續けた。私は自分の注意した一二の文句を、更に援用するであらう。

『これらの無限の自愛心は、彼(レムブラント)と倶に住むあらゆる人に及ぼして來る、彼れの妻、そはむしろ彼自身ともいふ可く、彼れの感じに於ては、彼女はただ彼れ自身のうちに生きてゐたのである。彼女が美しければ彼は自分が美しいかの様に得意であつた。彼れの父、母、兄弟、姉妹、小供、下女、友達などをも彼は凡て彼自身に對する如き歡びを以て描いた。……然しこゝに注意に値する現象がある。そはこれらの人々が一たび彼れのナイーブな驚異すべきエゴイズムにその汁をすひとられた後で彼から離れ去るとしても、彼はこの損失を人が考へるほどに深くも、また堪へがたくも感じなかつたといふことである。例へば彼はあれ程愛してゐたサスキア(彼れの妻)の死に際してすら比較的速かに自らなぐさめた。そしてその死が彼れの生活の夢の中に引き裂いたところの缺陷をみたすためには、他の一婦人、即ちその單純なる下女ですらよかつた。』(前揭書三六、三七頁)

之で見ると、レムブラントが彼れの妻を愛したのは、只彼れの藝術のための手段として愛したに過ぎなからう。『彼れのナイーブな驚異すべきエゴイズム』により『その汁をすひとる』ために愛したまでである。斯樣にして彼れの『無頓着と激烈なるエゴイズム——即ち彼れの最終の日まで百千の祭禮の炬火の如く輝きつゞけたところのものは、彼にその落魄の時にすら勝利を保證してゐたのである。實にかゝる性癖は彼れの仕事や精神的勞作に對しては絕對に必要なものである。もしそれ、彼にしてかくの如く武裝されてゐなかつたならば、彼れの仕事は中途にして折られ、彼れの年齡が彼に冠したところの高き頂きを欠いだことであらう。』(同上三八頁)。レムブランドの生涯は『あらゆる個々の詳細に亘つて闡明されて居り、吾々は『彼をその極めて些細な點まで知ることが出來』るのだと云ふ。さうしてベルハアレンは彼を『外からでなく、うちから』摑まうとして、以上の如く述べてゐる。私は委しいことは知らないけれども、上に述べたベルハアレンの觀察には十分の信賴を置いて差支なからうと思ふ。

私は嘗て市川左團次氏の演じた『修善寺物語』を觀たことを憶えてゐるが、この物語の主人公たる彫刻師は、自分の娘が死んだ時、父としての愛惜の涙をこぼす前に、先づ死顔を寫生した。若い女の死相を彫刻したいといふエゴイストの願望は、彼をして自分の子供の死を悲むの餘裕を有せしめなかつたのである。しかし百代の寶となるべき藝術や學問は、斯樣なエゴイストの產物に外ならぬ。それほど迄に自分の藝術なり學問なりに執着し精進しなくては、後の世に殘るべき作品は、人間の力では、到底產まれ得ないのである。

「永平初祖學道用心集」を見るに、『夫れ佛法修行の者は、尙ほ自身の爲めにせず、況や名聞利養の爲めに之を修せんや、但だ佛法の爲めに之を修すべき也』としてある。玆に佛法のために佛法を修すとしてあるのは、之をゼルプスト・ツエツク（自己目的）とするといふ意味であつて、それで無ければ、佛法の修行も到底できないと言ふのである。だから更にいふ『行者は自身のために佛法を修すと念ふべからず、名利のために佛法を修す可らず、果報を得んがために佛法を修す可らず、靈驗を得んがために佛法を修す可らず、但だ佛法のため佛法を修する、是れ道なり』。如何なる他の目的のための手段としても、苟くも手段としては、總て駄目なのである。その意味に於て、佛法修業者も極端なエゴイストでなければ、成道ができぬといふのである。

勿論徹底的のエゴイストは、結果から言へば、不思議にも、後世のために無上の寶を遺して死ぬことである。しかし彼から言へば、それは眞に偶然であつて、最初から最後まで彼れの意圖内になかつたことである。彼は自身の生存してゐる社會——同時代の社會に對しては、極端なエゴイストとして終始する。今斯樣なエゴイストが彼の住む社會から可愛がられぬのは仕方ない。だからミレーも極端な貧乏に甘じた。生前何等の榮譽をも受くることが出來なかつた。レムブラントも『此世を去る時には全く孤獨であつた。ウエストチルクの登記錄を見ると當時の彼れの葬式の記錄を讀むこと

が出來る。それによると、彼が死後に殘した總てのものは、リンネルの衣服、描くための畫布、及び畫具のみであつたと言はれて居る。』エゴイストは社會から皆な斯樣な待遇を受ける。之を今の日本に當嵌めて言へば、帝展の特選になるとか、大學で學位を貰ふとか云ふ類のことは、彼等の夢にも問題にしなかつた所であるが、たとひ問題にした所で、それは彼等にとり絕對に緣のない事柄であつた。俺は俺の好きなことをして暮すから、どうぞ俺に取り合つて呉れるな、誰の邪魔にもならぬやうに隅の方へほうつて置いて異れ、――こう云ふのが彼等の態度である。斯樣なエゴイストは寂しい。その寂しさに耐へ得る人間でなければ、徹底的にエゴイストには爲り得ない。それは勇氣を要することである。非常な勇者でなければ、徹底的のエゴイストにはなり得ない。しかも徹底的のエゴイストで無ければ、偉い學者にも藝術家にもなり得ない。

だからクロポトキンは、偉い學者になれなかつたのだと私は思ふ。ミレーやレムブラントと違つて、彼は私の專門學に緣が近いので、彼については稍々正確な材料を引用し得る便利がある。私は彼れの『自叙傳』の卷頭に載せられたブランデスの序文の中から次の一節を引用するであらう。之は森戶辰男君の譯になつたもので、同氏の『クロポトキンの片影』一三〇頁以下にある。

『クロポトキンの生活における危機は、二つの轉機を持つてゐるのであるが、そのことに就いて少しく述ぶる所がなければならぬ。

『彼は三十に近づいた――それは人間の一生での決定的の年齡である。彼は純然たる科學者であり、且つ貴重な科學上の發見をなした。彼は、北アジヤの地圖が不正確なものであること、アジヤの地理に關する以前の概念が間違つてゐるだけでなく、フムボルトの學說も亦事實と矛盾することを見出した。そこで彼は二ケ年以上の間孜々として研究

に發明した。其時突然にも或る一日、事實の眞の關係が彼の腦裡に閃いた。彼はアジヤに於ける大陸構成の主要なる山系は、北から南へ走つてゐるのでもなく、西から東へ走つてゐるのでもなく、南西から北東へ走つてゐるのであることを思ひ付いた。そこで彼は此の發見を驗證に附し個々の事實に適用して見た。ところがそれは驗證に堪えた。斯樣にして彼は科學的啓示の歡喜をば、その最も高尙な最も純粹な形に於て知ることができ、その精神に及ぼす作用が如何に高雅なものであるかを感じた。』

『丁度其時に危機が襲來した。此等の歡喜が非常な少數者の運命に限られてゐるといふ考へが、いま悲しみを以て彼を充たした。彼は獨りで自分のために此の智識を享樂する權利があるか否かを自問した。彼は彼れの前には、もつと高尙な義務、卽ち新發見をなすために勞作するよりも旣に得られた智識を民衆に普及させることに盡力する義務の存することを感じた。』

クロポトキンの自叙傳を讀む者は、何人でも、彼が徹底的の非エゴイストたることを感ぜずにはゐられまい。だから彼は學者にはなれなかつたのだ。その兆候が早くも三十歲にして現はれたのだ。私は其れを少しも惡いこととは思はない。彼といふ人間の型が非エゴイスなのだ。エゴイストも一つの型であり、非エゴイストも亦た一つの型である。どちらの型の人でも、その善いものは、皆な吾々の社會の寶だ。人間は學者に爲らなければならないと云ふ理屈はない。クロポトキンがその天分に應じて新生面を開かうとするのに、私は何等の異存をも感じない。しかし此の序文の作者ブランデスは、此のところに立ちとまり、彼れ自身の意見を述べて言ふ。

『私の意見を云へば、私は彼が正しいとは考へない。斯樣な考を持つてゐたとしたら、パスツールは彼が今日あるやうな人類の恩人とは爲れなかつたであらう。結局、萬事は長い間には民衆の利益になるものである。人が自分の材能

の及ぶ限りの最も充實した生産を世界に提供し得た時、彼は萬人の幸福のために、その最善をなしたものと私は思ふ。それは兎も角、此の根本觀念がクロポトキンの特質であり、それは彼の精髓を含んでゐる。

『そして此の心的態度は、彼をして一層進んだ行動を採らしむるに至つた。丁度フィンランド旅行の途中のことである。それは、史前時代に於て北ヨオロッパ全部が氷の下に埋もれてゐたと言ふ新しい考へ——それは當時に於ては異端であつた——が彼に浮んだので、其の新發見をなさんために企てられた旅なのであるが、その途次、彼は飢え渇いてパンのために苦闘しつゝある貧乏人、苦める人々に對する同情によつて、非常に強い感激を受け、かくて彼は勞働者で貧乏人である多數民衆の教師となり補助者となることが、彼れの最高且つ絶對の義務であると考へるに至つたのである。……』

新たなる發見をして自分の智識を高め且つ深めるよりも『既に得られた智識を民衆に普及させることに盡力する義務』に大なる價値を認めた彼れの心的傾向、そうして『飢え渇いてパンのために苦闘しつゝある貧乏人、苦める人々に對する同情によつて、非常に強い感激を受け』、遂に『勞働者で貧乏人である多數民衆の教師となり補助者となること』を、自分の『最高且つ絶對の義務であると考へるに至つた』彼れの心的傾向、——ブランデスは其れを『正しいとは考へない』と言つてゐるが、私の心は強く其れに引きつけられる。

私は昨年の秋『寂しき秋』といふ短文の中に、次のやうな記事を載せたことがある。『或る病院にゐた施療患者が日々の氷代を拂ふ金が無いからと云ふので——其の病院では、施療患者も氷代の實費だけは納めなければならぬ規定であつた——退院したと云ふ話を聞いた。慘酷が固定して制度となると、悲しい話も、さまで人の心を動かさなくなる』。醫學の進歩が多數の貧民に及ぼす幸澤の如何に薄いものであるかは、此一事を以ても想像できやうと思ふ。私は生死が人

間の大事であることを承知してゐる積りである。醫學といふものが如何に人生にとつて大切な學問であるかも、能く心得てゐる積りである。如何に社會の經濟組織が改造され、如何に人間の物質的生產力が發展し、如何に吾々の物質的境遇が改善されて來ても、吾々は度々病氣に襲はれるであらうし、死は何人も免れ得ぬであらう。たとひ完全なる共產主義が實現されて、一切の人が衣食足るの時節が到來しても、幼にして親を喪うた子の悲み、老いて子を亡くした親の歎き、其等は永世に人間の世界から絕えぬ所であらう。幾分でも其の悲みを救ひ、其の歎きを減ずるものは、醫學の力である。私は常に、醫學の進步に貢献せんがため努力しつゝある學者の業績に、滿腔の感謝を献げつゝある者である。けれども吾々の眼前に落ち來る種々の出來事は、社會に甚しき貧富の懸隔を存する限り、醫學は如何に進步しても、その進步した醫學の恩福は、極めて小數なる富者の家族に獨占せられつゝあることを敎はする。醫學の立場から言へば、一定の休養をしなければならぬ、一定の營養を取らなければならぬ、一定の藥を服用し一定の手當をしなければならぬ患者が、今日如何に多く放擲されてあるか、——それは吾々が態々貧民街に住まつて見なくとも、容易に想像され得ることである。氷代の實費を納めることが出來ぬために、高熱の患者が施療病院から退去を命ぜられた。陋巷に放棄せらるゝ斯かる患者の身になつて考へる時、——玆に或る醫學者がゐて、學問上の新たなる發見をするよりも、先づ社會から貧乏といふ大病を退治することが、自分の最高の義務だと信じ、研究室を出て、社會改造運動に身を投ずる時、——私は其れを『正しくない』とは斷言し得ない。彼にして一切の世間を顧みず、研究室に閉ぢ籠つて醫學上偉大なる發見をなし得たならば、ブランデスの言ふやうに、彼は慥に、『人類の恩人』となるに相違ない、『結局、萬事は長い間には民衆の利益になるものである』から、學者は純粹の學者として徹底することに於て、『萬人の幸福のために、その最善をなした』ことになるのでもあらう。けれども、人の氣質によつて、『結局』の利益や『長い間』の問題を考へる餘裕のない人

がある。多數民衆の現在の不幸が餘りに强く彼を刺戟して、彼をして之に風馬牛たらしめ得ないのである。それほどまでに他人の不幸を强く身に感じ得る氣質、──それは徹底的に學者になり徹底的に藝術家となるには不相應な氣質だとしても、──私は其れを輕蔑したくない。私は其れを有り難い氣質だと思ふ。人間として想像し得らるゝ限り、徹底的の非エゴイストだと思はれるクロポトキンが、立派な地理學者となるべき才能と境遇とを有つてゐたに拘らず、彼が敢て『學者』となり得ざりしことを、誰か咎むる權利を有するぞ？『彼は決して他人に犠牲を强要することなく、自ら犠牲となるのである。それは彼が一生を通じて實行し來た所である」而もそのやり方は、犠牲が彼に何の苦にもならぬやうに見えるやうな仕方に於てである。彼はその事を殆ど意に介しなかつた。』徹底的のエゴイストも偉いが、徹底的の非エゴイストも亦た偉い。私はレムブランドにも頭を下げるが、クロポトキンにも亦た頭を下げる。

どちらの型の人物も正しくないとは言へぬと思ふ。どちらの型の人間も皆な有益だ、と私は思ふ。しかし又翻つて考へると、世には時勢の相違といふものがある。退いて百代の計を樹つべき時代もあれば、出でて一世の業に盡すべき時代もある。さうして今の世はと言へば、それは、現在に於ける人類の物質的境遇の改造が最大の急務とされてゐる時代である私は經濟學を專攻してゐる一學究であるから、自然自分の持場を過重する傾向を免れぬだらうとは覺悟してゐるが　しかし社會改造問題が『現代生活の核心をなすものであつてそれがそのアルファでありオメガである』といふ感じを抱いてゐる者は、經濟學者以外にも少くないであらうと思ふ。──斯樣な時代に、吾々は退いて自己を培ふことに專心すべきであるか、又たとひ僅かなりとも既に得たる智識を分配することに力を致すべきであるか？　恐らく其れは人の氣質が最後の斷定をなすべき問題でもあるだらう。……

＊　＊

私の數年來の癖で、私はちよつとした話にも豫め原稿を作つて其れを朗讀することにして居る。茶話會でした以上の『話』も、實は原稿を『朗讀』したのである。しかし其の時の氣分で、私は原稿の最後の數頁を朗讀することを控えた。有島氏の『宣言一つ』に對して『一つの懺悔』を附け加へやうかと思つてゐたのだが、やめておいて可かつたと思ふ。

話をやめてから、二人の質問者があつた。一人の質問者の言ふところによると、偉大なる藝術家、偉大なる學者は、熱烈なる人類の愛に燃えてゐるで、斷じてエゴイストを以て目すべきでない、と言ふのであつた。次の質問者の言ふところによると、人間は總てエゴイストであつて、クロポトキンがあんな生活をしたのも、畢竟は彼れの利己心からだと觀るの外は無い、と言ふのであつた。何れも質問の名に於て發言されたが、それは各自の意見の主張であつた。それで、私はさうは思はないと答へるより外、致方がなかつた。

その室には一つの火鉢が私の坐席の側に置いてあるだけで、ストーブはなかつた。話を終へる、私は急に寒さを感じて來た。それで私は暇を乞うた。幹事の人が私に包んでくれた菓子を原稿と一緒にカバンの中へねぢこんで、雪のなかを我が家へと急いだ。

二 次の日の問答

私は前に掲げたやうな話をした日の翌日、更に或人と次のやうな問答を重ねた。

A 君がやつた昨夜の話は、君としては不穩當な筋の話だと思ふ。

B 何故？

A　何故といふに、あれでは多くのブルヂョア的學者やブルヂョア的藝術家をジヤスチフアイすることになるから。

B　僕の考では、個人主義者と社會主義者との區別は男々の性別の如きもので、ブルヂョアとかプロレタリアとか云ふやうな階級別とは、何のかゝはりも無いゝのだと思ふ。しかし君の言ふところに道理があるかも知れない。それは問題として當分殘しておいて貰はう。

A　君はクロポトキンの『靑年に訴ふ』を讀んだか？

B　實はまだ見てゐない。

A　その中には昨夜君が話の後半に述べたやうなことが、頻りに力强く述べてある。醫者のことも丁度君が言つたやうな意味で引合ひに出されてゐる。

B　さうか？　それは今日まで見ないでゐて善かつた。

A　また例の負け惜みで自分の寡聞を辯護しやうと云ふのか？

B　負け惜みではない。僕は自分でものを考へたいと思つてゐるので、ひとの書いたものを讀むのが、ひどく怖いのだ。他人がちやんと解決を與へてゐるものを最初から鵜吞みにすると、自分で考へる力がうせて仕舞ふからね。

A　クロポトキンの『靑年に訴ふ』を見ると、君が謂ふ個人主義者としての型は全く認められてゐないやうだ。

B　クロポトキンならさうだらう。さうであるべき筈だ。今こそ僕にも其のクロポトキンを讀む時が來たやうだ。君はそれを持つてゐるのか？

A　原本もあるが、その飜譯は大杉榮氏がしてゐる。『勞働運動』に連載されてゐたのを見なかつたのか？

B　標題は見ながら、つい內容を見ずに仕舞つた。

A　あれはクロポトキンの著述の中で最も廣く讀まれたもので、二十あまりの諸國語に翻譯されてあると云ふことだ。大杉君は十數年前にあれを日刊『平民新聞』に譯載して何ケ月か牢に這入つたさうだ。それをまた書きかへて、近頃『勞働運動』に連載してゐた。同君の『正義を求める心』の附錄にあるのが其の新譯だ。惜しいことに、書物に纏める際に大分削られた。

B　『青年に訴ふ』はそんなに有力な本か？　早速一つ讀んで見ることにしやう。

A　僕はクロポトキンの立場に立つてゐるので、昨夜の君の話にはどうしても全部の同意をしかねるのだ。先きほど提出した質問も實はそのために外ならない。

B　それではクロポトキンを熟讀してから、又改めて君の話を聞くとしやう。

A　それはそれとして、僕は君が人間の型を二つに分けたのに反對だ。君の說によると、偉い學者は總て個人主義者の型に屬しなければならぬやうだが、そんな學者が經濟學者の中に一人でもあるか？　經濟學史をたどつて見ると、偉大な學者でレムブラント型に屬するものは一人もゐないやうだ。

B　經濟學といふやうな人間に關する學問になると、大分趣が違ふやうだ。僕の主張は、同じ學問でも、例へば微生物學とか天文學とか數學とかいふやうな、人間と縁遠いものになるほど適切に當てはまると思ふ。クロポトキンにしても地理學者にこそなり切らなかつたが、終生社會學者であつたとは言へやう。同じ藝術家でも、小說家よりは詩人、詩人よりも畫家、畫家よりも音樂家といふやうに、人離れの程度が多少づゝ違ふやうに思はれる。

A　それでは人間の型を二つに分けながら、それをまた一緒にして仕舞ふやうな議論になりはせぬか。

B　だから僕は言つたつもりだ、――どんな豪傑でも何處かには女々しい方面があり、どんな花車な美人でも何處かに

は男々しい部分があつて、大概の人が氣質から言へば男女兩性の混合から成り立つてゐると。僕は假に個人主義者と社會主義者との型を分つたけれども、大概の人はこの二つの型の混合から成り立つてゐるのみでなく、一定の事業はこの二つの型が適當に調和されてゐる人物をこそ要求するものだ、とさへ思つてゐるのだ。同じ學問でも、經濟學といふやうな人間の生活と密接な交渉をもつたものになると、極端なエゴイストにはとても向かない。

A　それは何故だらう？

B　それ自身として面白くないからさ。天文學とか、動物學とかいふものになると、それ自體が面白い學問なのだから、他に目的はなくてもやれるが、經濟學といふやうな、それ自體としては、無趣味極まる學問になると、他に目的がなければやれるもので無い。エゴイストばかりから成り立つてゐる社會がもしあつたとするならば、恐らくそんな社會には、今日吾々がやつてゐるやうな社會經濟學は、最初から發生しなかつたに相違ない。

A　待ち給へ、それだと話が少し變つてくるぞ。君が昨夜話したところによると、學者とか藝術家とかいふものは總てエゴイストの型に還入るべきものゝやうであつたが、今日の話振りによると同じ學者、同じ藝術家のうちにも、いろ〳〵な雜種があると云ふことになりはしまいか？

B　さう言へないことも無い。さうして、さう言へば、マルクスもクロポトキンも皆な學者になる。エゴイストの型に屬せざる學者がいくらも居ると云ふことになる。

A　さうか？　それで君の話も大體分つたが、分つて見ると隨分詰らない話だね。

B　さうかもしれない。しかし僕は、人間の世には昔から求心力と遠心力とが働いてゐるやうに思ふのだ。偉い個人が出來上るのは、エゴイストを中心とした求心力の働きで、社會を構成する總ての成員が或る程度の平均を保つて社會の

水準を高めて行くのは、ソーシアリストによる遠心力の作用だ。個人が發達しなければ人類は固より發達し得ない。しかし或る個人のみが拔き出て發達するやうでは、取り殘されたものがみじめだから、一方には平均を破らうとする力が働いてゐると同時に、他方には拔き出たものを抑えて他と平均を保たさうとする力が働いてゐる。さういふ二つの力が宿命的に人間に宿つてゐて、そのために或人は個人主義者たる性格を賦與せられ、或人は社會主義者たる運命を投げられてゐるかに思はれる。生産と分配とは古來經濟上の二大問題だが、同じやうな問題が人世の全般に亘つて存在してゐるやうに感ぜられる。『人が自分の材能の及ぶ限りの最も充實した生産を世界に提供し得た時、彼は萬人の幸福のためにその最善をなしたものと私は思ふ。……結局、萬事は長い間には民衆の利益になるものである』とブランデスは言つてゐるが、長い間には結局民衆の利益になると云ふやうな言譯をしたのでは、安心して居れない人がある。世の中の不幸なる多くの人々を見て、彼等が自分の眼の前で溺れてゐるやうに感ずる人がある。長い間の結局のことを慮る遑なく、馳せ行いて眼前の急を救はうとする人がある。僕はそれを人間の宿命的性格によつて解釋しようと言ふのだ。ボーレの『資本主義と社會主義』を見ると、彼は頻りに資本主義を辯護してゐるけれども、最後に至つては、個人主義と社會主義との爭ひは結局グラウベン（信仰）の問題に歸着すると言つてゐる。さうだ、それは結局グラウベンの問題なのだ。僕は僕自ら自分を動かす根本の動力を反省して見て、そこに理屈はないやうに思ふ。彼と我と、同じ學問をしながら氷炭相容れざるが如き見地に立つのは、畢竟お互の宿命的性格が然らしめるので、議論をして見ても學問上では片はつくまいと思ふのだ。さう云つたやうな感じを述べたのが、つまり昨夜の話だ。つまらぬと言へば、勿論つまらぬ話に相違ない。

A　何れにしても僕は君がエゴイストを是認するのが氣に喰はぬ。

B　僕は是認も否認もしないのだ、只一つの說明――現に在る事實の解釋――を試みたに過ぎない。過日もM君が來た時、同じやうな話をしたら同君は大體に於て贊成してくれた。さうして次のやうな話をした。自分は生物學の智識を有たないから專門學者に聞かしたら或は一笑に附する考かも知れないと思ふのだが、丁度君がいふやうな宿命的の平均力が人間の上に働いてゐると云ふことを平生他の方面から考へてゐる。と云ふのは、人間の出產だ。恐らく人間は進步するほど胎兒の頭は大きくなるだらうと思ふが、それにつれて出產は益々困難になる筈だ。同じ人間でありながら、下等な人種ほど、やすく／＼と子を產むのは、それがためでは無いかと思ふ。いろ／＼な點で下等な人種は競爭上劣敗者の地位に置かれてゐるが、只子孫を繁殖さすと云ふ點では、一番强味を有つてゐて、上等の人種になるほど繁殖力が減退するやうだ。又同じ上等人種のなかでも、たまに偉大な人物となるべき胎兒が宿ると、その出產はなか／＼困難で、母子共に倒れて仕舞ふと云ふやうなことに爲つてゐるのでは無いか。そんな關係から、絕えず人間を一定の水準に平均させやうとする力が、生物學的に作用してゐるものでは無いかと思ふ。――M君がこんな話をして行つたが、僕は興味ある考だと思ふ。

A　追々話が本筋から外れさうだ。もう話はやめにして茶でも飮まうか？

B　それも可からう。

神の問題

柳宗悦

一

觸れよう觸れようとして、今迄觸れなかつた此問題に、遂に觸れる時が私に來たやうに思ふ。私の宗教的思索が常に豫想した所の神の存在を、單に豫想に止めずに、今問題に迄進めようとするのである。

だが劈頭に私は一つの Dilemma に逢着してゐるのを省みないわけにはゆかぬ。今神を一つの問題とすると云ふが、問題化し得ないものが神ではあるまいか。なぜなら思惟の對象となるものは凡て相對の域を越えないからである。判斷は肯定と否定との二律を要求し、思惟は思ふ主と思はるゝ客との二を豫想する。神が「一」であるならば、彼は二つに判るゝ事を許さぬであらう。二の世界に移すならば、それは既に「一」であり得ないではないか。實に神を對象として取り扱ふ時、人は神ならぬものを取り扱ひつゝある矛盾に陷つてゐるのである。

私は此の避く可からざる窮境をどう越えたらいゝのであるか。神の問題は永へに思惟の世界から放棄すべきであらうか。然しそれは不可知な彼岸に神を封じ去つた迄で、私達の生命に交る温い神の理解とはならぬであらう。私は此間に立つて如何に處置すべきかの試錬に逢ひつゝあるのである。

昔エックハルトは「考へるべき以上のことを考へたエックハルト」として、その著書を法王から封じられた。私も亦

考へる間敷き事を考へようとしつゝあるのであらうか。然し自然が吾々に活きよと命じてゐるその聲の中には、考へよと云ふ聲も交つてゐるではないか。私自身には考へぬく可き力が無いかも知れぬ。然し見知らぬ聲があつて考へよと命じてゐる。喚ばれてゐるならば何か使命があるのであらう。私は考へを前に進めなければならぬ。人類が永い間思ひ苦しんだ最後の問題、神の存在に就て私も考へる可き時機に到達した。

二

誰も神の存在を證明したく希ふ。それが證明せられる時の悦びを想ふ。然し人は神を證明する前に、かゝる事がどうして成立するかを省みたらうか。又證明せられた神とは、如何なるものであるかを想つた事があるだらうか。之を省みずして證明を企てようとするのは如何にも粗率であり不用意ではないか。人は彼の證明が無限に確實であると云ふ事をどうして保證し得たのであるか。

世の人は證明を愛し、證明せられるものを賴る。見える形を求め、示される徵を請ひ、確なる證を希ふ。幾度人は神の存在に保證をと要求したであらう。論證は種々な形に於て考へられ企てられた。若し之が成功するならば、その時こそ神は信じられねばならぬと考へられた。實に多くの人々が信仰を持ち得ないのは、滿足すべき神の證明が未だにないからである。

然し信仰が證明に依存すると考へる彼等の態度、又は論證そのものが、最後の確實さを與へると見做す彼等の信賴、是等の事それ自身は如何なる基礎に立つてゐるのであらうか。少しく思索を精密に進めるならば、彼等が賴らうとするその論證が、その本質上有限の閾域を越え得ない事を早くも知るであらう。

こゝに論證とは論理的證明との義である。それは法則に基くが故に普遍であり客觀であると云はれる。然し論理の世

界とは、種々なる世界の一つの場所を占めるに過ぎぬ。それは一個の世界であつて唯一なる世界ではあらぬ。論理的確實は只論理の世界に於てのみ確實であり普遍であると云ふ意に過ぎぬ。

扨、論理の法則は、その本質上矛盾する二個の世界を許す時にのみ効果を持つ。その三法則である同一律も矛盾律も、排中律も共にこの事を豫想する。何となれば同一と云ふ事は、二つのものがあつて後云ひ得るに過ぎぬ。矛盾と云ふ事は二つのものが對する事によつて起る矛盾である。排中といふ事も、その左右に二つのものを許してのみ云ひ得るのである。一律の世界に建ち得る論理の家はあらぬ。論理が可能となるのは、かゝる二元の世界を最初から許すからである。

かゝる論理的法則に依據する判斷も實に二の世界を出でぬ。それは眞に對して僞を擇ぶと云ふ事に過ぎぬ。否定に對して肯定すると云ふ事に過ぎぬ。判くと云ふ事は分けると云ふ事である。或一つの斷案を擇ぶとは、二つのものからその中の一つを擇ぶと云ふ意である。擇ばれた一つは擇ばれないものへの對辭である。如何にその斷案が眞であり微であらうとも、それは相對的斷案に過ぎぬ。

次にかゝる論理的思惟の對象とは何を意味するのであるか。對象の世界とは如何なる性質を持つのであるか。對象とは思ふ主體に對する客體である。主客の二を條件とせずして思惟は成立せぬ。從つて對象化せられる世界は相對の世界である。一歩此世界を越えるものは實に思惟の對象とはならぬ。

是等の性質から吾々は誤りなく次の事を云ひ得るであらう。若し論理的神が神であるなら、彼は唯一なる神ではなく、たゞ一つの神に過ぎぬ。若しも神を論理の世界に入れ得るならば、それは相對化せられた神に過ぎぬ。若しも神を論理の判斷に委ねるならば、彼は分れた二としての神に過ぎぬ。若しも神を論理的思惟の對象となすなら、神は相對の域に降つた神に過ぎぬ。人々は論證せられる神を求める。然し論證せられた神が、如何に哀れむべき貧しい神であるか

を氣附かずにゐる。人々が論證する事によつて神を確に握つたと思ふ時、神は實に神の性質を放棄してゐるのである。神に證據を求めるものは、虚空を求めるのと等しい。嘗て證明された神はなく、今も證明し得る神はなく、又永へに證明される神はあらぬ。神は肯定され得る何ものでもなく、又否定され得る何ものでもあらぬ。若し此世に神に關する知識が可能であるなら、それは論理の範疇を越えたものでなければならぬ。

人は論理の確實さに執着する。然しそれが確實なものとしての力には、極限がある事を知らねばならぬ。客觀的であると云ふ事は、論理的にのみ客觀的であると云ふ事を忘れてはならぬ。ある内容が眞に確實であるとは、客觀的なるが爲ではなく、主觀客觀の二を越えた基礎を持つが故でなければならぬ。論理の相對性に究竟なものを求める事は出來ぬ。論理的根據は、確實なるものゝ全部ではなく僅かその一部分に過ぎぬ。論理性が合理性の一切ではあらぬ。

神の存在に關する證明は、それ自身徒勞であるのみならず、恐らく無意味であらう。有限な判斷の上に神を見出したとて、それがどうして無上な神であり得よう。微る知が神を證明したと思ふ時、實は神ならぬものを證明してゐるに過ぎないではないか。神の問題は論理的認識論の携はり得るものではあらぬ。

人々よ、何故にかく迄證明を愛するのであるか。見ゆる證據を愛するとは、無限の世界が心から離れてゐる徴ではないか。證明が此の世を支配する時、神は此世から隱れるのである。

昔ユダヤ人は徴 Sign を請ひ、希臘人は知慧 Wisdom を求めた。然し今の人は證明 Proof を求める。一度は基督に於て、一度は佛陀に於て、無上なものが固く握られたに拘らず、人々は疑ふ間敷きことを尙も疑ふとしてゐる。彼等は見える形を求め、思ひ得る知識を愛する。然し形而上の世界に活き得ない者は、神の世界を見る事は出來ぬ。

吾が知識と云ふが如きものに幾許の力があらう。若し永へな知識と云ふが如きものがあり得るなら、それは神が所有

する知識でこそあらねばならぬ人々は絶對な證明をと求める。それなら何故人間がもつ有限な證明を放棄しないのであるか。此世に絶對な證明と云ふが如きものがあるなら、それは神のみが持ち得る證明ではないか。それ自身に於て完くせらるゝ證明、自律する證明、かゝるものこそ永遠の保證ではないか。若し眞に確實な證明を握らうとするなら、あの東洋に於て深く味はれた「自證」の世界に迄入らねばならぬ。自證とは自明との意である。自明なるが故に分明にせらるゝ餘地を殘さぬ。自證なるが故に分別せらるゝ必要を持たぬ。かゝる無上な證明、即ち自證せらるゝものは吾等の知の世界にはあらぬ。それは只神のみがなし能ふ保證である。

そうなら何故に人は神の存在の證明を、神自身の保證に委ねないのであるか。自證に優る證明が何處にあらう。吾が知が企てる證明と云ふが如きものは、既に權威を持たぬ。此世に眞に完き不變な神の存在への證明があるなら、それは神自身が自身の存在を證明するその證明でこそあらねばならぬ。神の存在に永遠な不動な證明を求める事が人類の希願であるなら、吾々は早くその保證が神自身によつて果されん事を希はねばならぬ。否、神のみがかゝる事をなし得るのであると信じ切らねばならぬ。

三

然し古來擇ばれた神の存在の證明のうち、最も有力であると見做されるものを一應省みる必要があるであらう。證明は三つの大きな道をとつて現はれた樣に考へられる。

第一は因果律に基いて、萬象の原因としての神を認めようとする。世界が結果であるならば、必然結果を生ずべき原因がなければならぬ。かゝる原因の究極は自らに於て原因するが如きでなければならぬ。即ち自因するかゝるものを神とこそ呼ぶのである。神は此場合宇宙の創造者として理解される。故に此論證は一般に宇宙論的立論 Cosmological

argument と呼ばれてゐる。

第二は宇宙の目的として神を追尋する。萬象は目的の許に意匠せられ建築せられたものでなければならぬ。宇宙の法則を思ひ進化の途程を見るならば、そこに何等かの目的ある意志が働いてゐるではないか。かゝる意志そのものに神の存在を認知しようとする。故に此論は、目的論的立論 Teleological argument と名づけられる。

然し是等の立論は厳密な意味の論理的證明と云ふよりも、寧ろ心情に要求せられた主張である。哲學的に見て最も深いものを求めるならば、第三の實體論的立論 Ontological argument に來なければならぬ。此立論はカントの如き有力な哲學者から反對せられてはゐるが、恐らく神に關する論證としては最も深きものであると私は思ふ。此思想は古くはプラトーの觀念論に發し、中世紀に於てアンセルムスによつて大成せられ、デカルトに於て深く哲學に入り、近くはライプニツツ及びヘーゲルによつて支へられた思想の流れである。就中その代表者はアンセルムス Anselmus と、デカルト Descartes とである。

基教を普遍的原理の上に基礎づけようとしたアンセルムスは、神の存在を又確實な論據の上に見出そうと努めた。彼の著 Proslogium に書かれたその有名な立論は眞に單純にして明晰なものであつた。此世に神の觀念がある事は否定する事が出來ぬ。何となればそれを否定する時も神の觀念を持つてゐるからである。扨、神の觀念とは如何なるものであるか。神とはより以上の優れたものを考へ得ない最高なものとの義である。もとより此觀念の中には存在すると云ふ屬性も含まれてゐる。何となれば實在しないならばそれは完全な者ではあらぬ。故にかゝる最高なものは觀念たるに止らす、存在するとの意があらねばならぬ。觀念に止るものと、實在するものとを比較するなら、後者の方が一層完全である。故に神は單に觀念に在るのみならず、實際にも在るものでなければならぬ。完全なる神との觀念には、實在する神

と云ふ事が既に約束せられてゐる。愚な者は神無しと云ふかも知れぬ。然しかく云ふ時彼は既に神なる觀念を持つてゐる。そうして神の觀念は必然神の存在を内意する。故に神無しと云ふ時、彼は實に神の存在を肯定しつゝある矛盾に陷つてゐる。

その時の僧ガウニロ Gaunilo は「愚な者」の爲に辯護してアンセルムスの思想を批評した。觀念は必ずしも實在を伴ふものではあらぬ。例へば吾々は甞てあつたが今はない世にも美しい、否、より美しいものは他にあり得ぬと思ふ程の美しい島を觀念のうちに持つことが出來る。アンセルムスによればかゝる島は今も現にあると云はねばならぬと。アンセルムスの答へはこうであつた。かゝる比喩は力を持たぬ。何となれば甞てあつたとか、島とか云ふ如き觀念は、完全と云ふ内容を必然に伴ひはしない。然し乍らひとり神の觀念に於ては、必然に完全なる者、實在する者との意が内意される。神なる觀念がある事によつて、神が存在する事は必然に立證されてゐるのである。

近世哲學に於て此立論を一層深めたのはデカルトであつた。アンセルムスが神の觀念にその立論の出發を得たのに對して、デカルトは我の有する神の觀念にその論據を進めた。吾々は思ひつゝある存在である。思ふと云ふ事は否定する事が出來ぬ。何となれば既に思ふ事なくしては、思ふことを否定する事が出來ないからである。而、思ふとは思ふ主體を豫想する。思ひつゝある我は、存在しつゝある我である。「我れ思ふ故に我あり」とは自明な事と云はねばならぬ。然し我れ思ひ疑ふと云ふ事は抑も何を意味するのであるか。若し吾々が完全であるなら、ものを疑ふと云ふ事はあり得ない。故に我れ疑ふと云ふ事は、我れ不完全なる故に疑ふと云ふ意がある。然らば不完全と云ふことは如何にして知らるゝのであるか。若し完全と云ふ事がなければ、不完全と云ふ事はあり得ないであらう。故に完全と云ふ觀念が吾々にあるのは又否定し得ないことである。

例、神の觀念とは最も完全なる者との觀念である。然も完全と云ふ觀念には實在するものと云ふ事が含まれてゐる。何となれば實在しないものは既に完全なものではないからである。丁度谷なき山を思ひ得ない如く、吾々は實在せざる完全者を思ふ事は出來ぬ。神の觀念に實在するものとの義が必然に伴ふのは、丁度三角形の內角の和が二直角に等しいと云ふ事を必然に伴ふのと同じである。或者は反駁して云ふであらう。翼ある馬と云ふ事を觀念として持つ事は出來る。然しかゝるものは決して實在しないと。然し吾々は同時に翼なき馬と云ふ觀念をも持つ事は出來るが、實在せざる神と云ふ觀念を持つ事は出來ぬ。かくして完全者と云ふ觀念には、必然に實在する者と云ふ事が約束せられてある。

例、吾々は不完全な存在であるが故に、完全なる神はその實在の度に於て、遙かに我れに優つてゐると云はねばならぬ。故に因果律によつて不完全なる我が、完全なものゝ原因となる事は出來ぬ。何となれば若し原因が結果よりも實在の度に於て少ないならば、結果に於ける剩餘は、無から生じたと云ふ不合理に陷らねばならぬ。故に我は神の觀念の原因となる事は出來ぬ。我が自ら原因となつて神を思ひ得るのではない。却つて神が在つて我に神の觀念を與へるのである。故に神の觀念は我に於ける神の啓示である。かくして我が神と云ふ觀念を持つ事によつて、神が實在する事は明かに知られるのである。我れ神を想ふと云ふ事よりして、神ありと云ふ事は必然に歸納される。神が存在しないならば吾々は神と云ふ觀念を持つ事は出來ぬ。神の存在と神の觀念を二つに分つ事は出來ぬ。

スコラ哲學者の中で最も理性を重じたアンセルムスにより、又近世合理論の祖であるデカルトによつて、是等の論證が企てられたのは必然な結果であつた。然し論證し得ざる事柄に對して、此論據が有力であるのは、恐らく之が思辨的論理に依るよりも、多く直觀的根據に依つてゐるが故ではあるまいか。デカルトに於て「我れ思ふ、故に我あり」と云ふ事が、推論ではなくして直覺であつた樣に、「我れ神を思ふ、故に神あり」と云ふ彼の立論は、同じ樣に必然な、自

から明かな根柢に依ると見做すべきものであらう。然し私は此有名な論證がどこ迄眞であるかを省みねばならぬ。」

四

アンセルムスが云つた樣に、何人も神の觀念から離れる事は出來ぬ。何となれば、既に神の觀念を持たずしては、神の觀念を否定する事が出來ないからである。何等かの内容に於て、吾々が神の觀念の保有者である事は事實である。然しかゝる觀念が、たとへ完全と云ふ觀念であつても、かゝる完全と云ふ觀念そのものが、完全であると思つてはならぬ。否、吾々は實に不完全な「完全といふ觀念」を持ち得るのみではあるまいか。嚴密に云つて、不完全なる吾々が、完全なるものを考へ盡す事は出來ぬ。それが出來得るなら、吾々自身が完全でなければならぬ。デカルトは不完全に對比して、完全なる觀念は必然に得られると云ふが、不完全に對する完全は相對的完全ではないか。完全とは單なる不完全の否定ではなく、より多く實在の度を持つと云ふ積極的理由があるとデカルトは主張する。然しより多き度に現はれる實在は比較であつて尙相對的實在ではないか。吾々が持つ完全と云ふ觀念はそれ自身不完全の域を出る事が出來ぬ。不完全なる吾々が持つ觀念と云ふ事が、直ちにそれを證してゐるではないか。實在と云ふ事を想はずして完全を想ひ得ないと云つても、吾々が持つ實在とか完全とか云ふ內容は、悉く相對的理解を越えないではないか。若し假りに完全な「完全といふ觀念」があり得るなら、實體論的主張は眞理として承認し得るであらう。然しそれは許されざる前提である。吾々は完全といふ觀念を完全に持つ事は出來ぬ。云ひ換えれば吾々には不完全な完全を想ひ得るのみである。かゝる不完全なものがそのまゝに實在するとも、吾々の求める神とはならないであらう。

完全とか不完全とかは凡て相對の意を出ない。故に吾々が持つ完全と云ふ觀念に於て、全き神の觀念を見出そうとする事は許されておらぬ。吾々の思想の中に完全といふ事があるのではない。却つて思想は完全なものを限定したものにゝ

ぎぬ。眞に神が全きものであるなら、それは吾々が云ひ得る完全とか不完全とかの言葉を越えたものでなければならぬ。（實に私がかく云ふ事に於て畫いてゐる神の觀念も、又相對の域を出てはゐないのである）。

試みに吾々が持ち得る完全と云ふ觀念、即ち最高の觀念と云ふが如きものを考へて見よう。例へば萬能とか至善とか實體とか、又は無上とか無限とか絕對とか云ふ事が思ひ起されるであらう。そして是等のものこそ神の正しい屬性であると考へてゐる。實に最高な屬性の無限の集團に於て神を心に畫くのである。然しかゝる觀念が吾々に現はれる時、果してそれ等の性質を、對辭なくして考へ得るであらうか。それ等の內容はやはり、不能とか至惡とか虛無とか又は無形とか有限とか相對とかに對してのみ考へられてゐるのである。それ等のものは對比とか比較とかの境を脫する事が出來ぬ。吾々が畫き得る凡ての屬性は相對的である。然し相對の加は究竟を產む事は出來ぬ。五十度の溫度と五十度の溫度との加は、百度の熱にはならぬ。神は屬性の總和ではあらぬ。否、究竟なものが神であるなら、神は一切の相對的な屬性を越えたものでなければならぬ。屬性に於て示さるゝ神は、有限の相を示すに過ぎぬ。私はエックハルトの有名な言葉をこゝに引用しようと思ふ。

「否、留意せよ、神は無名である。誰も神に就て知り得ず又一言をも云ふ事は出來ぬ。それに就て異敎の學者が云つた事がある。吾々が第一者に就て知り又斷定してゐる事は、第一者そのものが何であるかと云ふ事を示してゐるのではなく、寧ろ吾々自身が何であるかを示してゐるのである。何となればかゝるものは凡ての吾々の言語や知能を超越してゐる。若しも私が神は善なりと云つてもそれは眞理ではあらぬ。私は善であるが神は善ではあらぬ。私は更に尙云ひ得よう、私は神よりもよい善であると。何となれば善はより善きものに、又より善きものは最善なものになり得るからである。切、神は善ではあらぬが故に、より善きものになる事は出來ぬ。又より善きものになり得ぬ故に最善なものにもなる事

は出來ぬ。是等の三つのものは神からは遠く離れてゐる。何となれば神は善、より善、最善の凡てを超えたものだからである。又私が神は賢なりと云つても、それは眞理ではあらぬ。私は彼よりも賢くある。若しも私が神は有なりと云つても、それは眞理ではあらぬ。彼は有を超越した至上の無である、之に就て聖アウグスティヌスも云つてゐる。人が神に關して云ひ得る最上の事は、彼の内的判斷の知識を離れて沈默すると云ふ事である。故に沈默し神に就て想ひ煩つてはならぬ。何となれば神に就て思ひ煩ふ時、汝は僞りをなし罪を犯すからである。若しも汝が罪なきを欲し、全からんとするならば、汝は神に就て思ひ煩つてはならぬ。神に就て何事をも知る事は許されぬ。何となれば神は凡ての知解を越えてゐるからである。或師は告げてゐる。若しも私が理解し得る神を持つてゐるなら、私は決して彼を神とは認めまいと。」Pfeiffer : Eckhart. pp. 318—9

讀者も之を讀んで彼は考へるべき以上の事を考へてゐると思ふだらうか。此部分は法王から邪說として黒表に封じられたもの丶一つであつた。然し否定し得ない思索の深さが玆に在るではないか。人は神によき屬性を與へる事によつて彼を心に畫いてゐる。然し吾々は神に如何なる性質をも與へてはならぬ。凡ての性質は、神の性質ではなく、吾々が畫き得る不完全な性質に過ぎぬ。完全と云ふ觀念を完全に持つ事は許されてをらぬ。吾々が持ち得る不完全な完全を以て、神を判じる不敬を犯してはならぬ。神は凡ての思惟、凡ての言葉を遙かに超越する。否、かく云ふ私の言葉によつてでも、その深さを盡す事は出來ぬ。

私は神の存在と云ふ。然し神に於て存在と云ふ事は屬性ではあらぬ。「神は存在者である」と云ふ事に、賓辭「est ote を許さぬ主辭 Subject である。一般に存在は非存在の對辭と解されてゐるが、存在に究竟な意を求めようとするなら、吾々は存在に對し非存在と云ふが如き物を考へてはならぬ。神があると云ふ場合、斯る「あり」は「ない」と云ふ

對辭を反面に許さぬ究竟の「あり」である。故に神ありと云ふ事は對辭 Antithesis を許さぬ正辭 Thesis である。故に神に於て存在と云ふ事は自在と云ふ事である。「神に存在あり」ではなく「神あり」である。斯る「あり」はその理解に向つて如何なる存在の範疇をも許さぬ。神には吾々が盡く存在もなく非存在もあらぬ。只自在のみがあるのである。自在するものは自在する。吾々が神の存在を證明する事によつて、神の存在が承認されるのではない。又吾々の理知がその存在を否定し得たとしても、神の存在が否定されてゐるのではない。又吾々が神の存在に就て何事をも知り得ない事によつて、神の存在が暗黒にされてゐるのではない。自在するものは自在するのである。

五

吾々は吾々が持つあらゆる神の觀念が不完全であると云ふ事を謙譲に承認せねばならぬ。然し吾々は何も茲に止まらず、實に神に關する一つの知解も吾々に許されてゐない事を承認せねばならぬ。即ち吾々の思惟による知識が嘗に不充分であるのみならず、かゝる知識其ものが既に神の前には成立しない事を是認しなければならぬ。かゝる承認はカントによつて主張せられ、スペンサーに於てその極に達した不可知論 Agnosticism に私を導く様に見える。然し私は其暗黒な結論に止まり得たのではない。同じ道を追求し却つて全く異る世界に導かれた事を漸次に叙述してゆきたく思ふ。

私は假りにプロティヌスの言葉をかりて究竟なものを茲に「一」と呼ぼう。もとよりかゝる「一」が數理的な意味に於ける一でない事は自明である。何となれば數理的な一は多に對する一であつて、相對の意を出ないが故に一種の二である。故に宗教的「一」は分ち得ない一、どうあつても二の世界に移す事を許さぬ「一」である。嘗に二つに分ち得ないのみならず、之に對峙するものを前後に許さぬ。古人が「圓輪なき中心」と云つたその趣きがある。又は「未發なる中」と云ふが如き意味がある。

然るに吾々の思惟とか判斷とかは如何なる性質を持つであらうか。前にも書いた樣に、思惟は只對峙の世界にのみある。それならば「一」が思想の世界には、どうあつても入らない事は自明ではないか。判斷は眞僞の二、肯定否定の二彼此の二を待たねばならぬ。そうであるなら判かるゝ「一」は何處にもないであらう。「一」は僞に對する眞ではあり得ない。故に「一」は眞僞の二を超えたものであらねばならぬ。即ち吾々の知は常に相對的であるのみならず、「一」に向つては成立し得ない知である。思惟の對象たるを許す神は何處にもないのである。對象化し得ないものが「一」である。實に吾々が神に就て何事かを考へてゐる時、神でないものを考へてゐると云ふ矛盾に陷つてゐる。私は此事を尙も緻密に考へてゆこう。

私は今對象化し得ないものが神であると云つた。然し嚴密に云ふならばかゝる言葉それ自身が同じ樣に矛盾に陷つてゐる。何となれば神は對象化し得ないと云ふ時、やはり神を對象として云つてゐるのである。若し眞に對象化し得ないものなら對象化し得ないとすら云ふ事は出來ぬ。神を思ふ事は出來ぬと私は云ふ。然し既に神を思ふに非れば、かく云ふ事は出來ないではないか。故に眞に神が思ひ得ないものであるなら、思ひ得ないと云ふ事も思ひ得ない筈である。故に「神を知る」と云ふ事が自家撞着であると同じ樣に、「神は知り得ない」と云ふ言葉も自家撞着である。かくして一切の判斷は神の前に成立しない。神を肯定する事も否定する事も吾々には許されてゐない。否、實に許されてゐないとすら云ふ事は出來ぬ。吾々の判斷は常に同一線上を循環する、少しでもその域を出る事が出來ず、少しでも神そのものに觸れる事は出來ぬ。否、私のかく云ふ言葉も亦その循環の中に在るのである。

それならば神を解さうとするものは、此哀れむべき思惟の循環を斷絕しなければならないではないか。神は此でもなく彼でもない。右にもなく左にもなく、又その中間にもない。否、かゝる否定の凡てにもない。否定も亦否定されねばな

らぬ。「存在しないものは存在するものに優る」と云つたエリゲナの言葉の深さを想ふ。私は龍樹を中心として起つた空觀、無限なる否定に眞如を追つた般若の諸經、又は嘉祥に於てその極頂に達した三論の宗旨に、偉大な眞理を見出さゞるを得ないでゐる。かゝる無限の否定は遂には思惟の沈默に入らねばならぬ。何等の學說、何等の教理によらない禪宗が、かくして三論宗から更に發展して現はれた事を私は意味深く思ふ。佛教は言葉に於ては空觀であり、沈默に於ては禪定に入つた。荷澤大師の「顯宗記」に云ふ。

「無念を宗とし無作を本とす」、菩提は無得なり、般若は無知なり。こゝに知りぬ、我が法體は、空にして有無ならび泯ずることを。心はもと無作なり。道は常に無念なり。念なく思ひなく、求むる事なく、得る事もなし。彼に非ず此に非ず、去らず來らず、不二の門に入つて一乘の理を獲たり」。（景德傳燈錄卷三十。）

經は凡て眞如を如何なる言葉で說いたと思ふか。金剛經は實に單純に賢明な言葉を私達に殘した。「一法の說くなきを、說法と云ふのである」と。楞伽經にも美しい佛陀の言葉がある。

「某夜に正覺を生じてより、某夜に涅槃するに至る迄、此二つの中間に於て、吾れすべて說く所となし」。

（大乘入楞伽經無常品）

傲る知識も神を判く事は出來ぬ。聰しい言葉も神を云ひ破ることは出來ぬ。

吾々は神を知る事は出來ぬ。否。知る事は出來ぬとすら云ふ事は出來ぬ。私達が神に就て何事かを考へつゝある時、實に神ならざるものを考へつゝあるのである。考へられた神は既に對象の世界にある。對象の世界は二の世界である。二の世界であらばそこは神が在す世界ではあらぬ。吾々は神ならぬものを神として想ひつゝあるに過ぎぬ。知識に誇るものは、神の居ない世界に神を判いてゐるのである。—人は神を疑ふ、然し疑はれつゝある神は神ではあらぬ。人は神の

存在を否定する。然し否定されるものは神ではあらぬ。無神論者の主張は自己背反である。あの鳥を射ようとして空に放つた boomerang によつて、自らの心臓を射られた者と同じである。彼は思惟の世界に於ける自殺者である。

六

然し私が思惟を超越した世界に「一」を認める時、丁度カントの「物自體」に向つて加へられたと同じ様な非難を受けるかもしれぬ。「一」が若し眞に思惟の認識を超越した物であるなら、どうしてかゝる物ゝ存在を認識する事が出來るのであるか、之を許すのは夫自身矛盾である。「一」が思ひ得ない物なら「一」と云ふ考へもあり得ないではないか。のみならず、「一」と云ふ前に既に一と云ふ何等かの思惟が働いてゐるではないか。「一」と云ふ思惟があつて始めて「一」と云ふ言葉が生ずるのである。最初から無批判的に「一」を許すのは獨斷に過ぎぬ。斯る「一」は思惟されて居るが故に、斯る物を思惟を超越した「一」と云ふ事は出來ぬ。思惟してゐない「一」なら一と云ふ事も出來ぬ。之程明瞭な矛盾はないではないかと。

若しも私が「一」と云ふ時、何等かの思惟が働いてゐるなら、實に此批評は誤りなき眞理である。然し吾々が宗教的要求から「一」と云ふ時、それは決して思惟の言葉ではないのである。否、批評家の批評をそのまゝに借りて云へば、思惟しない「一」に外ならぬ。故に「一」と云ふ事を許すのは、もはや思惟ではないのである。然しかく云ふ時それが驚くべき獨斷であると思ふであらう。又批判を欠くが故に根柢なき内容であると思ふであらう。然し思惟が認識の一切の根柢であるならば、之は云ふ迄もなく獨斷である。然し思惟の立場からして獨斷的であるのみではあるまいか。此批評は認識の根據を思惟に限る所から來た批評ではあるまいか。思惟の生活が吾々の思想の唯一の生活であると思ふが故ではあるまいか。若しこゝに思惟以外の世界があるなら、思惟からしては矛盾であり獨斷であるものも、或は調和ある事實となりはしまいか。例へば詩歌の世界と云ふが如きは、科學からすれば眞實な世界ではないであらう。然し此批評は科學的

世界が唯一な確實な世界だと見做す僭越から起るのである。

實際私が「一」と云ふ時、これは啻に思惟の言葉でないのみならず、思惟によつてはどうあつても理解されない內容に外ならぬ。「一」を許す前に「一」と云ふ思惟が働いてゐると云ふが、前にも書いた様に、思惟されつゝある又思惟され得ぬ一は「一」ではなく、一種の二に過ぎぬ。「一」を思惟してゐると云ふ事こそ、自家撞着である。否、私が思惟によつて「一」を考へる事は、思惟なくして「一」を考へるよりも困難である。否、全く不可能であるとさへ云ひ切る事が出來る。故に思惟による「一」と云ふ言葉はあらぬ。「一」は言葉ではない。強ひて用ゐた假名である。佛者がかゝるものを止むなくして、「無」と呼び「空」と呼んだその理由には、必然さがあるではないか。名づけたくないが故に「無名」と云つたのではないか。無名とは實に「意路不到、言詮不及」の境である。思惟によつて云ひ得る「無名」の二字はあらぬ。

「一」と云ふ時既に思惟が働いてゐると云ふが、思惟されてゐる一は「一」ではないではないか。故に「一」と云ふ言葉はどうあつても思惟の言葉ではあり得ぬ。思惟によつて語らうとしても、語り得ないものが「一」である。「一」を思惟で語る時「一」でないものを語つてゐるに外ならないからである。

前にも書いた様に、「一あり」と云ふ事は、「一なるもの存在す」と云ふ樣な主辭と賓辭とからなり立つてゐる內容ではあらぬ。賓辭を許さぬ主辭、主辭のみにて全き文章をなす內容を意味するのである。故にそれは只の言葉ではあり得ない、否、言葉たるを許さぬ內容である。「一」は思惟が働く事によつて、後に現はれるものではあらぬ。分別未生の時にある「一」である。思惟によつても思ひ得ず、言葉によつても書き得ぬ。強ひて名づける時、思惟としても言葉としても最も至純な「一」なる字が止むなく選ばれるのである。

然し或る人は詰るであらう。思惟によらないでは何ものをも考へ得ないが故に、かゝる「一」があるとしても畢竟虛無で

あり無内容ではないかと。實際東洋の思想は屢々此様な非難を受けた。然し批評が「無内容」と云ふ性質を「一」に與へてゐる時、やはり「一」を思惟の對象として云つてゐるのである。然し對象となり得る「一」はないが故に、「一」を無内容と謗る時、「一」ならざるものを謗つてゐる愚に終つてゐる。吾々はかゝる批評をこそ無内容と呼び得るであらう。吾々はもはやかゝる批評に苦しめられる時を持たぬ。否、それは吾々を苦める僅かの力をも持つてゐないのである。

七

然し吾々は玆に於て、遙かに重要な反省を自らに加へねばならぬ。即ち思惟によらない世界が、如何にして認可せられるのであるか。吾々は神が思惟の對象とならないことを學んでゐる。然し思惟の對象たるを許さぬと云ふその事は何を意味するのであるか。神に關しては思惟の働きが停止するとは如何なる謂であるか。直接神を問題となし得ないとしても、何故問題となり得ぬかは一つの問題となるであらう。若しも神が眞に知り得ないものであるなら、なぜ神を知る事が知に許されてゐないかを考へるべきであらう。神の究竟性そのものは對象とすることは出來ぬ。然し神の前に餘儀なくせられる思惟の有限性が、何を意味するかは學の對象となるであるであらう。

神は理知にとつては封じられた神である。然しそれは神が自らを封じてゐるのではなく、理知が神の前に自らを封じてゐるが故ではあるまいか。神が暗黒なのではなく、理知に暗黒さがあるからではないか。それならば如何なる時に、理知がその力を主張する事が出來ないのであるか。何故思惟がその働きを無限に働かし得ないのであるか。一般に論理的思惟の世界に限界がある事は是認せられる。然し限界そのものは何を意味するのであるか。又相對とか有限とか云ふ概念は如何にして可能となるのであるか。先づ是等の事が明らかにされねばならぬ。若し思惟の極限性が何を意味するかゞ理解せられたら、やがて思惟が携はり得ない世界が、即ち思惟を超越した世界が、即ち知るを許されない神が何を

意味するかに就て、一つの知慧を得る事が出來るであらう。云ひ換へれば思惟を越えた一つの無邊な世界を認許するに至るであらう。

知り得ないと云ふ事は永へに吾々の理解から神を放棄しろと云ふ事にはならぬ、まして知り得ない世界が、直ちに暗黒な無內容な世界との意味にはならぬ。人は神を斷えず求める。かくも求める事を想へば、神も人に逢ふ日を心待ちしてゐるのであらう。只吾々の理知がその惠ある折を妨げてゐるのではあるまいか。理知のみが吾々の唯一の世界であるなら、神に逢ひ得る望みは薄いであらう。併し理知を遙か超越した一つの世界を此世に認め得ないであらうか。私はかゝる世界を信仰の世界と呼びたいのである。然し此事を云ふ前に、なぜかゝる世界を認めるに至るかの必然的な經路を語らねばならぬ。

私は思惟又は判斷そのものが、その本質上相對的內容を出ない事を語る必要はなからうと思ふ。且つ又思惟による認識能力が只現象界に於てのみ適應し得る事に就ても、詳く必要はないかと思ふ。それ等の事は哲學上既に確定された問題だと見ても差支へはない。然し相對性そのものは何を意味するか、思惟による認識能力の限界とは何を語るのであるか。

普通、相對と云ふ觀念を持ち得るのは、之に對して絕對と云ふ觀念を思ひ浮べ得るからであると云はれる。從つて相對と云ふ時は言下に絕對と云ふ對辭が約束され、又絕對と云ふ時は相對と云ふ事がその反面に想起される。右と云ふ觀念は左と云ふ觀念に對比してのみ考へられる。かくして相對の世界がこゝに見認されるなら、必然絕對の世界が豫想されると解されてゐる。ある人は後者を以て直ちに究竟な宗教世界と見なし、相對界があるからには、絕對界が實在すると云ふ樣な事を主張する。然しかゝる斷定は甚だ粗笨な根柢を持たないものである事は云ふ迄もない。相對に對する

絶對は、畢竟對辭的内容に過ぎないのであつて、云はゞ相對的絶對である。かくてかゝる絶對は又一種の相對に過ぎぬ。故に吾々が求める「一」の世界が、かゝる意味の絶對界とは何等の關係もない事が明かであらう。

且つ又相對に對して想ひ起される絶對は、畢竟相對的絶對であるが故に、相對成立の基礎たる事は出來ぬ、相對は絶對に依存する事によつて有り得ると云はれるかもしれぬが、然し同じ意味で絶對も相對に依存してゐるのであつて、全く相互關係を出でぬ。相對も絶對も共に相對である。故に吾々は相對が可能となる根柢を他に求めなければならぬ。相對は根柢ではなくして、依存である。相對の根柢が相對そのものゝ中にあり得ない事は自明である。こゝに根柢とは他を支持し、他に支持されず、自らが自らを支持すると云ふが如きものでなければならぬ。即ち、對峙する世界を周圍に許さぬそれ自身に立つものでなければならぬ。故にかゝるものはその本質上、相對性を超越したものであると云ふ事が知られるであらう。相對と云ふ事實に相對と云ふ意味を與へるものは、當然相對と云ふ事實を超越したものでなければならぬ。かゝる世界を私は假りに究竟の世界と名づけよう。そうならば相對性が可能であると云ふ事は、必然究竟性の存在を豫想するではないか。究竟の世界がないならば、相對の世界はあり得ないではないか。相對界が確實な世界であるなら、更にその根柢たる究竟の世界は確實ではないか。然しこゝに究竟と絶對とを混同してはならぬ。絶對は相對の對辭に過ぎぬが、究竟は如何なる對辭をも持たぬ。それ自身に立つが故の究竟である。相對的な思惟によつて知り得ない「一」が、又は思惟からしては屢々無内容であると見做される「一」が、却つて思惟よりも確實なものであると云ふ事を漸次に暗示し得たかと思ふ。「一」とは實に究竟な「一」との謂ではないか。

八

現象を超越した世界、即ち「一」とか實體とか、又は神とか呼ばれるものが、一般に思惟の對象とならぬと云ふ事は承

認される。然も多くの人はかくして不可知論に陷り、神を知り得ない彼岸に放棄する。だが「知り得ない」と云ふ事は、吾々の希望の緒を斷つ刃たり得るであらうか。私は此「知り得ない」と云ふ言葉を、不幸な且つ又不用意な言葉であると思ふ。私は「知り得ない」と云ふ代りに、「知るを許さぬ」と云ふ言葉を用ゐたい。そうして「能はぬ」世界と、「許さぬ」世界との相違を說き、「許さぬ」と云ふ事から何が內意されてゐるかを、述べようと思ふ。

單に神を知り得ぬとか、知り能はぬとか云ふ事は、思惟そのものが成立しないのではなく、思惟の働きが或度以上を越えて進む事が出來ぬと云ふ意味である。「神を知るを得ぬ」と云ふ事は「神を思ふ、然し知り能はぬ」と云ふ事である。此場合既に思惟が働き、只その働きに限りがある意である。それは最初から思惟の理解そのものを許さぬ事とは嚴密に區別されねばならぬ。

然るに上述した樣に、「一」は如何なる思惟の對象でもあらぬが故に、「一」は知り能はざるものではなくして、知るを許さぬものだと考へねばならぬ。單に能はぬ事であるなら、或は能ふ時が來るかもしれぬ。不充分な現代の人知では知り能はぬものも、いつかは知り能ふ機を得るかも知れぬ。然し眞にどうあつても知るを許されぬ事には、時間もなく方處もあらぬ。それは如何なる場合にも如何なる條件の許にも知るを許さぬと云ふ無上な意が含まれてゐる。

例へば人は明日を知り得ぬとか、月の半面は見能はぬとか云ふ事は、知るを許さぬと云ふ意ではあらぬ それはある事情の許にあるが故に知り能はぬに過ぎぬ。若しも事情が變り、人知が進むならば或は幾許なりを知り得るかも知れぬ。然し神の場合には、「若しも」とか、「或條件が變れば」とか云ふ事を許さぬ。神は思ふとも思ひ得ないと云ふが如きものではあらぬ。最初から思はるゝ事を許さぬのである。僅かの思惟の挿入をすら許さぬのである。

「能はぬ」と「許さぬ」とは別事である。不可解と不許解とは區別されねばならぬ。前者は思惟する事によつて後知ら

る丶限定である。然し後者は思惟する時をすら持たぬ制限である。前者に於ては思惟に於ける主客の二がある。後者にはかかる主客はあらぬ。

「知り能はぬ」世界は吾々に暗黒を示すであらう。不可知論者はかゝる暗黒に神を封じた人々ではないか。然し「知るを許さぬ」世界は吾々に何を語るであらうか。

「能はぬ」とは知が「能はぬ」のである。然し許さぬとは、知を越えた或力が知に「許さぬ」のである。許さぬとは既に思惟を超越した世界の存在を暗示する。許さぬとは Fiat 厳命である。カントが云つた Imperativ 命法の力がそこにゆらいでゐるではないか。神が思惟に向つて知るを許さぬと云ふ聲は、既に Decree 神命である。哲學に於て屢々用ゐられた Sollen 當爲と云ふ言葉は、かゝる世界をこそ指すのであらう。

かゝる世界は究竟の世界である。それは思惟の對象とはならぬ。然しそれは空なものではあらぬ。思惟の相對を超越するとは、實に究竟な實體の世界をこそ指摘する。それはあらゆる相對の性を離脱するが故に、自體 an sich の世界である。自體なるが故に自律し自存する。自存するとは自明であるといふ意ではないか。吾々は自存するものより、より確實なより明らかな存在者を想ふ事は出來ぬ。かゝるものをこそ神と呼ぶのではあるまいか。神の存在の證明は神自身が自身に加へる證明に於て、既に完全な證明を得てゐるのである。神の存在は疑ふとも疑ひ得ようのない事ではないか。否、實に疑ふを許さず、疑ひの對象とならず、疑ふの餘地なき、信ぜらるべき、自存する神との義ではないか。

厳命 Fiat の世界は權威の世界である。思惟は無條件にそこに於て沈默せねばならぬ。只あり得るのは無心な承認ばかりである。無心な承認をこそ信仰と呼ぶのではないか。「知り得ぬ」世界は神を吾々から棄てしめるであらう。然し「知るを許さぬ」世界は、直ちに信仰の世界をこそ暗示するではないか。「許さぬ」とは神命である。知を挿む餘地をすら持

たないとは、直ちに無上な世界が閃くからである。吾が知に沈默が來るとは、神の聲が聞えるからではないか。

曾て實體論的立論は次の樣に說いた「我れ神の觀念を有す、故に神あり」と。然し私は云はう「吾れ神を思ふを許されず、故に信ずべき神あり」と。之は實に余の知が企てる證明ではあらぬ。神の知慧が自らに加へた證明である。知り能はぬ世界は暗黑の世界である。然し「知るを許さぬ」境は自明の境である。自明なるが故に疑ひの餘地を殘さぬ。疑ひなき故に信ぜらるる世界である。信仰の世界が神の在す世界である。

宗教の世界を語るものはあの記念すべきカントの言葉をいつも想ひ起すであらう。「信仰に位置を與へる爲に、知識の不當な要求を制限せざるを得なかつたのである」。此主旨が印象深く心に觸れるのは、實に神の意志によつて保證せられてゐる事實を語るからである。神は神の攝理深き意志を以て、理知に彼自身を現はすのを許さない事に於て、信仰に確實な世界を與へつゝあるのである。

余が神を思ふ事によつて、神の存在が證明さるゝのではない。余に神を知る事が許されない事に於て、疑ふ事だに得ぬ神の存在が自證されてゐるのである。（一二、四、六）

若し讀者にして此論に興味を持たれたならば、今月（五月）號の「明星」に寄稿した私の小篇「神の存在」をも合せて讀まれん事を希望する。

人格と世界

阿部次郎

一

吾々は何故に人格の價値を求むべきであるか。それはそれ自身に於いて報いられる價値であるからである、それは吾々の本質の根本要求であるからである。故に人格主義は、吾々が吾々自身である限り、世界の如何に關らず常に妥當することをやめない。假令世界が永久に惡の巢窟であるにしても、又吾々自身の中にさへ救ふべからざる獸性の跋扈があるにしても、猶人格價値を求めることは吾々にとつて善でなければならない。併し吾々が人格價値を求めることは、これを自己及び世界に於いて實現せむとする意志を除けば固より無意味である。人格は世界を征服せむことを欲する。それが彼の味方であるにせよ又彼の敵であるにせよ、兎に角人格は世界に――自己の自然的素質をも籠めて、世界に――突當つて其處に自己實現の地を開拓して來なければならぬ。世界はその根柢に於いて人格の味方であるか敵であるか。人格主義は此處に於いて世界觀の問題に逢着せずにはゐられない。

人格價値の絶對的權威を信じてこれを世界に實現せむとする者にとつて、最初の驚きはこの世界の重苦しさである、自己の内と外とを峻別する溝渠の深さである。固より自己のうちに響く良心の權威を信ぜぬ者や、外界が自分の界をつ

まんで引廻すまゝに右に行つたり左に行つたりしてゐる者は問題外であるが、併し心の中に良心の嚴粛な命令を聽き、又外界に對して自分の方から働きかけて行かうとする理想を持つ者は、誰でも自分を取卷いてゐる大なる世界が思ひのまゝにならぬことを嘆かずにはゐられないであらう。世界には惡が多い。善く始められた事業にも惡意の妨害や不可抗の障碍がある。善を欲する意志は惡に就かむとする獸性によつて己れ自らの中でさへも裏切られる。さうして地上に於ける一切の事業は皆早晩死によつて葬られなければならないのである。「存在の不可思議」――これは明かに良心の聲を聽き、深く理想の負荷を感ずる者に對して、益々鋭く迫つて來るであらう。吾々の良心と理想との外に、この「世界」といふものが不可抗の因果律を以て流れ動きながら、良心と理想とを實現せむとする努力に向つて不斷の交渉を保つて行くのが不思議なのである。この不思議に心をかき亂されるとき、吾々はゲーテのファウストと共に、深き苦悶を以て呼び出さずにはゐられない――

俺のこの胸のうちに住んでゐる神は
俺の心の奥底まで搖り動かすことは出來るが
俺のあらゆる力の上に座を占めてゐる神は
外界の物を何一つ動かすことが出來ぬ。
それで俺には存在が重荷で、
死が願はしく、生が憎いのだ。

この苦悶は、吾々の胸のうちに住んでゐる神が本來外界に向つて働きかけずにゐられぬ者であるが故に愈々痛切である。併しファウストは、遂にこの苦悶を征服して、辛抱強く「外界の物を動かさう」とする事業に於いて、無限の努力を内容とする安立に到達することが出來た。この安立は世界を信ずるところにその基礎を据ゑる。世界の根柢が人格の味

方であることを——世界根柢の愛を——信ずるところにその基礎を据ゑる。併し吾々が依然として嚴肅な良心を持ち續けながら、世界をも自己をも明瞭に信ずることが出來ないならば、吾々の中には深刻な悲痛と絶望的な戰ひとの生活が始まらなければならぬ。自然を、世界を、人性を、歴史を、運命を、信じ得るか得ないか。これは吾々の生活に於ける大なる岐路である。それは、悲痛を基調とした生活をするか、和解と感謝とを基調とした生活をするかの岐路である。(1)私は玆に、この對照を或程度まで例證するものとして、トルストイとゲーテとの生涯を一瞥したい。

トルストイは決して自然が萬物を煦育する愛を知らぬ人ではなかつた。彼の自然に醉ひしれたゲーテ的な心持は、初期の小說「コサック」などを見ても明かであるが、稍後年に至つて「アンナ・カレニナ」の中に出て來る自然描寫——例へば草刈の場——などに於いても明瞭に看取することが出來る。併し晩年に至るに從つて、彼の思想の中には、自然と良心との矛盾が次第に著しく現れて來る。良心は、欺くべからざる神の命令として、中から嚴峻に吾々を鞭撻する。併し世界と吾々の自然的素質のうちには、神に反するものが深刻に根を卸してゐて、容易に拔け去らうとはしない。この事實は彼をして殆んど他を顧るに遑なからしめるほどに强烈にその心を捉へる。而もトルストイの思想には、この罪深き世界と吾々とを救ふために、常に働きやまぬ神の恩寵の觀念が乏しかつた。愛を命ずる良心として、愛の實行者に報いるに靈魂の淨福を以てする者として、神の姿は明瞭を極めてゐるが、自ら人類を愛する者として、神が鮮かにその姿を見せてゐるとは云ひ難からう。トルストイにとつても神は愛である。併しそれは「愛あるところに神がある」のである。吾々の同胞に對する愛が即ち神の愛なのである。この愛の外に、若くはこの愛の上に、猶一切を光被する太陽のやうな神の恩寵があるかどうか、それは恐らくトルストイ自身にとつても明瞭ではなかつたであらう。從つて彼が神に代つて同胞を愛する義務を嚴肅に感ずれば感ずるほど、世界の不調和と自己の腑甲斐なさとが益々彼を苦めずにはゐら

れない。所謂宗教時代の初期に當つて、吾々は特にこの心持をトルストイの中に發見する。さうして或時は天才的な悲痛な情熱となつて燃え、或時には說教者らしい堅苦しさとなつて現はれて來る。吾々が「復活」などに於いて稍凝結した窮屈さを感ずるのは、後の場合の一例とすべきであらう。固より所謂宗教時代に入つてからも、彼の思想と感情とには流動と變遷とがある、極めて大摑みに云へば、最後に近づくに從つて、彼の思想は宗教的の——倫理的といふことに對立するものとしての宗教的の——色彩を增して來たと云へるであらう。良心のみではなくて世界をも亦信ずる心が多くなつて來たと云へるであらう。併しこの場合にも猶、彼の生活の基調が神と自然との矛盾に對する悲痛であつたといふことは、依然として云ひ得るやうに思ふ。消えむとする火が最後の輝きを增すやうに、彼が家を出でゝ徹底的に自分の主義に從ふ生活をしようとした旅路の途中で、遂にその八十餘年の息をひきとらうとするとき、駭いてたづねて來たその家族に向つて、彼はかう云つたと傳へられてゐる——「地上には千萬の人が苦んでゐる、なぜお前達は私のことばかり考へるのだ」。これは八十餘年に亘る眞摯を極めた努力の生涯の結語として、實に千鈞の重みを持つてゐる。良心として神の崇嚴を禮拜し通した者の悲痛——吾々は此處にトルストイの生涯の言語に絕した崇高を見る。併しそれだけに、その一生には命がけの苦みが定めて多かつたことであらう。

ゲーテはこの點についてトルストイと非常に違つてゐた。彼も亦超自然の神の恩寵といふものは知らなかつたかも知れない。彼は、その自叙傳などにあらはれてゐる調子から見ても、天啓的宗教に對しては、これを尊敬しつゝ他人に任せる態度をとつてゐたらしい。併し「直に接自然を自己の創造として承認する偉大なる神」の恩寵に至つては、彼は、子供の時分からこれを知り過ぎるほど知つてゐる人であつた。彼は「自然の神」の愛に對して磐石の信を持ち續けてゐた。さうして彼自身の側からも、この神に對して熱烈な愛慕の情を寄せてゐた。六七歲の時、彼が既に「自然の偉大な

神」に、その創意から出た祭壇を築いたことは、人々に膾炙してゐる物語である。又彼が幼時よくその友達の前に繰返したといふ御伽噺「新しきパリス」の中で、彼は己れを「神々の寵兒」と名乗ることを敢てした。長じて「エルテル」や「ファウスト」を書くに當つては、彼はこの自然の神を慕つて、これと一つにならうとする願に身を焦してゐる。就中「自然」に對する彼の信仰を證明するものは、死に對するエルテルやファウストの態度である。エルテルは嵐の後の凄じき月下に立つて、暴風と共に雲を撈き洪水を吹きまくることを得んがために、喜んで牢獄の如きこの生を捨てることを願つた。さうしてファウストにとつては、死とは「新たる日が新たなる岸に俺を呼ぶ」ことである。自殺によつて未知の生に飛び込むことは、人間の威嚴と價値とを證明する一つの積極的行動である。故に死も亦彼を「自然」とひき離すことは出來ないのである。固より彼の思想が成熟するに從つて、彼は「人間の限界」を意識して來る。人間の限界を超えて無限に自己を擴大せむとするロマンティシズムを脫却して來る。併し彼が人間の限界を自覺するのは、諦めにして同時に集中であつた。謙讓にして同時に勇猛心であつた。自然の神に對する彼の愛慕は、寧ろ愈々明確な突進の力を加へた。さうしてこの心持は彼の一生を通して衰へることがなかつたと云つていゝであらう。[2]「ファウスト」第二部の最後の齣は。あらゆる方面から見たこの神への讚歌である。其處に集ふ色々の靈魂は、その神の恩寵を讚美して飽くことを知らない。努力してやまぬ者を天使達は救はうとする。自ら育たむとする意志に對して萬物を育てむとする愛が慈雨のやうに働きかける。世界には到るところに善の實現を助けむとする力が充ち滿ちてゐる。私は、これ等の美しい詩句の中に、ゲーテの一生の結論を聽くと云つても大過がないことを信ずる者である。

吾々はゲーテに從ふべきか、トルストイに從ふべきか。それは固より先天的傾向の問題であつて自由選擇の問題ではない。併しこの兩者に何事を學ぶべきかは自ら別問題である。吾々は、叡智に從つて二人の人から、それぐ〜學ぶべ

きところを選擇することを許されるであらう。この點に於いて、私は、世界との關係の問題に就いてはゲーテから學ぶべきところが一層多いことを思はざるを得ない。トルストイに從つて生きるのは勇ましい。併し苦しい。吾々はたゞその苦みの意味を悟り、この苦みの中に含まれる恩寵を知ることによつて、始めて限無き良心と理想との負荷を、感謝を以て堪へ忍ぶことが出來るであらう。この意味に於いて、吾々の良心と理想とがトルストイ的に緊張して來れば來るほど益々ゲーテに學ぶことが必要になつて來る。良心の苦を捨てゝ現前の世界と妥協する氣樂さを擇ぶことは固より深き恥辱であるが、理想を負ふの十字架と共に、世界根柢(エルトグルンド)の愛を感得する智慧が益ゝその深さを加へて行くことは、吾々の切なる祈願でなければならない。

この意味に於いて、人格主義は、世界觀としての宗教を要求する。

二

併し世界は果してその根柢に於いて善であるか。吾々は果して世界根柢の愛を信ずることが出來るか。この問題については、人は特にその單純な希望を投影してこれを實在化する甘さを謹まなければならぬ。固より吾々は此場合に於いても亦――若くは此場合に於いて特に――主觀がさう考へずにはゐられぬといふことを外にしては、換言すれば、主觀の思惟必然(デンクノートエンディヒカイト)を外にしては、究竟の眞理の標準を持つてゐないであらう。それは猶、直觀形式や悟性の範疇が自然認識の基礎となること――從つて「悟性は自然の立法者である」こと――と同樣であるであらう。併しそれは決して氣まぐれな直觀の要求や、センチメンタルな心の願が、直ちに眞理であるといふ意味ではあり得ない。世界は吾々の衷心の願望に反して、悪魔の詭計によつて畫き出された幻影であるかも知れない。あらゆる存在は結局朽敗と沒落とに定めら

れたものであるかも知れない。吾々は、如何なる權利によつて、此の如き反對豫想を否定して世界根柢の善を信ずることが出來るか。この問題は吾々に向つて特に冷靜な思索を命ずる。

この點に於いて、世界根柢の善を信ずる障碍となるものは、前にも云つたやうに、世界には　が多いといふ事實である。若しこれを直ちに倫理的の意味に於いて「惡」と名けることが早計であるならば、少くとも其處には根柢の深い矛盾缺陷があるといふ動かすべからざる事實である。吾々は此深刻な事實を前にして、如何にして世界根柢の善を信ずることが出來るか。凡そ此の如き信仰は眞實を直視するに堪へぬ自欺によつてのみ可能なのではあるまいか。寧ろ吾々は、ショーペンハワーと共に、世界根柢は惡である、存在はそれ自身に於いて罪であると主張するのが正當なのではないであらうか。

吾々は今、世界秩序に於ける惡の意義如何といふ困難な問題の前に立つてゐる。この問題に對して徹底した解釋を與へることは、私の力を超えてゐることは云ふまでもなく、恐らく何人の力をも超えてゐるであらう。例へば、ゲーテの「ファウスト」に出て來る「主」のやうに、小成に安んぜんとする人間を刺戟してこれを不斷の活動に驅るために惡が必要であると答へるにしても、人間は何故に、かばかりの闇黑と汚穢と悲哀と不幸とによつて刺戟されることを必要とするやうな、憐むべき生物として造られたか、その理由を領會することは依然として困難である。又造物者と被造物と云ふやうな人間的關係を世界と生物との間に推定する考へ方は迷妄として排斥されなければならないにしても、持勝世界の觀念によつてこの混沌たる人性の不調和を說明し難いことには變りがないであらう。併し吾々が事實と離れて勝手に自分の願望を投影する甘さに滿足することが出來ないとき、吾々は、世界根柢の善を信ずるためには、兎に角この問題に對して何等かの立場を持たなければならぬ。私の考へるところによれば、人間が浮虛に陷らずにこの問題に接近するこ

とを許さるゝ唯一の途は、恐らく、吾々の智慧を以て神若くは世界秩序の設計を窺かむとする立場を捨てゝ、與へられた事實から謙遜な出發を試みることである。何故とは知らず人性の弱小にして矛盾や缺陷に滿ちてゐるといふ事實、それにも關らず人性には此等の下らなさに安んずることを得ぬ「永遠の不安」があるといふ事實――この二つの事實を出發點として、惡の存在が吾々の向上の努力に如何なる意義を持つかを省思するとき、換言すれば、現實の悲哀と解脫の欲望との方面から世界に於ける惡の意義を考察するとき、吾々は始めてこの問題に對して或程度の解釋を與へることが出來るであらう。惡の存在が結局吾々の精神を滅ぼし盡すことが出來るものならば、吾々は此の如き世界が根柢に於いて善であることを信ずることは出來ない。併し惡の存在は、結局人間を刺戟して人生の深みに沈潜させるための使命を持つてゐるもので、凡ての存在は惡の試鍊によつて鍊り上げられて、悉く救はるべき運命(デスティニー)の下にあると考へ得るならば、吾々は、惡の存在にも關らず猶世界の善と愛とを信ずることが出來るであらう。問題をかく限定することによつて、「フアウスト」の答へは吾々にとつて始めて甚深の意義を以て響いて來る。

この問題を考へるために、私は一般的に云はるゝ「惡」の中に三種を區別する。第一のものは罪惡(Böse)である。善に反する意志である、ダンテに從へば惡意(マリチア)及び放縱(インコンティネンチア)である、彼の神曲に於いては地獄の中に責罰せらるゝ性質の惡である。第二のものは罪過(Irrtum)である。善に從はむとする意志が、その自然的素質と限界とに累されて、自ら裏切るところの不義である。ダンテの神曲で云へば、煉獄で淨められつゝある者の罪はその類に屬するであらう。普通第一種の中に加へらるゝ罪過を、私はその場合の目的に適合せしめるために、特に第二種の惡として抽き出して來た。さうして第三は害惡若くは禍害(Uebel)である、人格を不幸にする一切の外部的事情である。貧困別離災厄惡運等は、皆その種の害惡中に加へらるべきである。一體、此等種々の形に於ける「惡」は、善の成長に對して如何なる意義を有す

るか。私は先づ特に第二種の罪過についてこの問題の考察を試みたい。

三

人間の視野は限られてゐる、人間の意志は弛みがちである、人間の中にはその善意を裏切る根柢の深い獸性がある——此等の事實を根本假定とするとき、吾々は罪過又は過失が人間にとつて必然であることを認識せずにはゐられない。吾々は如何なる場合にも、その當時の自分に許された全力を盡して罪過を避けなければならぬことは云ふまでもないが、(8)絶對的の無過失を最大の關心事とする生活態度は、個々の場合に於ける多少の罪過よりも、より多く人生の全體を毒する。この間の消息を明かにするところに、罪過の意義に關する吾々の智慧は始つて來る。

この點に於いて第一に覺悟しなければならないのは、人生の遭遇は、充分の豫告を以て來り、充分の處理を待つて去るものではないといふことである。日毎に吾々の前に現れて、吾々に何等かの處理を要求する事件のうち、十中の八九は卒然として不用意な吾々の心を襲ひ、吾々が狐疑逡巡してゐる間に、永久に再びすべからざるものとして去つてしまふ。吾々はその際に於ける心の準備を基礎として、善にせよ惡にせよ敏活にそれに應接して行かなければならない。この事實は一面に於いて、不時の事件に逢つて見苦しい過失に陷らぬやうに、平生の準備を忽せにすべからざることを吾々に要求する。併し吾々が、人間にとつて或程度までは到底脫れ難い不完全な準備を以て、此等の問題に對して絶對に無過失な態度をとらうとするとき、吾々は結局手を拱じて、何もせずに、種々の問題が自分の眼前を通り過ぎて行くのを眺めてゐるより外に途がないであらう。故にこのやうな心掛を以て生活する者は、個々の場合に於ける罪過が割合に少い代りに、その生活全體を蒼白な活氣の乏しいものとすることを脫れないであらう。吾々は、多少の冒險を敢てして

も人生に對して生氣ある反應を見せて行くべきか、それとて生活の機關を全體として停止しても無過失を求むべきか、二つに一つを擇ぶことを餘儀なくされる。さうして後者の方が前者よりも、より大なる惡であることは云ふまでもないであらう。而も此の如き態度が絕對に吾々を無過失にすることが出來るならばまだしもであるが、それは要するにあらゆる問題に對して否定を以て答へることに過ぎないから、肯定が正當な場合には、吾々はこの態度によつて極めて重大な罪過に陷ることも亦あり得る。溺れむとする小兒を見て、これを救ふべきか否かの決定に迷ふとき、さうして明瞭に決定に到着することが出來ないからと云つてこれを傍觀してゐるとき、問題の子供はその決定を待たずに溺死してしまふであらう。溺死したあとになつて、自分は彼を救ふべきであると決定しても、それはあとの祭である。吾々はこの無決定によつて、誤れる決定と同樣の罪過を犯した者とならなければならぬ。故に多少の罪過を覺悟しても潑剌として生きて行く方が、無過失を求めて萎縮した生を營むよりも、より多くの意義を持つてゐる。過失も怯懦に較べればより多くの善である。

併し過失の免れ難いのは單に卒然として吾々の前に出現する事件にのみ限られるのではない。充分に熟慮の餘地ある場合と雖も、吾々が全然これを脫れることは六づかしい。それは、人が一つの問題に對して無過失な決定をすることが出來るためには、現在の自分の立場から見てその視野に入つて來る範圍の全體を見廻すことだけではまだ足りないからである。吾々の視野が何かの點に於いて限られてゐるとき、その限界外にある視野がこの事件の決定に重大な意義を持つ場合も決して少くないからである。さうして吾々の視野があらゆる必要な範圍を包括することは、原則として不可能であるとすれば、如何に熟慮に熟慮を重ねるにしても、吾々は自分の決定の絕對的無過失を保證するわけには行かない。罪過を少くするには、單に細心に見廻すだけではなくて、その立場を全體として高めて行くことが必要である。さ

うして永遠の立場に到達することによつて、吾々は始めて絶對の無過失を信ずることが出來るであらう。併し吾々が永遠の立場に到達するまでその處理を待つことが出來るやうな悠長な事件は、如何なる世界に於いても固よりありやうがない。故に吾々は、最良の智慧と良心とに從つて過失の海に乘り出して行くか、絶對の無過失を求めて生活全體の機關をや止するか、兩者の一を選擇しなければならない。さうして吾々が後者を擇ぶ限り、吾々の立場は何時までたつても高められることはないであらう。故に絶對の無過失に到達せむとする目的のためにも、純粹にして熱のある生活態度は屢々として現在の無過失を最大事とする生活態度に較べて、遙かに多くの價値を持つてゐるのである。生きることは、過たぬことよりも尊ばれなければならぬ。

かくて罪過は人間にとつて必然である。「人は努めてゐる間は、過つにきまつたものである」。然らば罪過は善の成長に對して如何なる積極的意義を有するか。吾々は、それが罪過である限り、換言すれば、人がこれを悔い、恥ぢ、改めむとする善良な意志を持ち續けてゐる限り、罪過は常に人格を刺戟して、これを淨く深くする効果を持つ、と答へることが出來るであらう。人が善良な意志を失はぬ限り、罪過が彼に與へるものは當然に痛みでなければならぬ。この痛みは彼の體驗を深めて、新しき人生の視野を開展する。從來の生活態度の誤謬を悟るとき、彼の立場は一段の高みに攀ぢ登つてゐる。さうして彼が「いゝ子」であつたあひだ、容易に脫却することが出來なかつた名聞の心、世間に顧慮する心、本當に孤獨になりハンブルになり一本氣になれなかつた心が打碎かれる。彼はより多くの眞實を以て人生の深みに生きることが出來るやうにされる。かくて、踏み外すことが高みに推し進める力となるのは、人生の深き不思議の一つである。罪過は人を滅ぼすことが出來ない。善を愛する者は、あらゆるものを向上の機緣とすることが出來る。敬虔なこゝろを以てこの事實を熟思するとき、吾々は、人間が過ち易く生れてゐるといふ理由によつて、必ずしも世界を呪ふことをしないであらう。

固より吾々がかく云ふことが出來るのは、罪過が罪過である限りに於いてゞある。吾々が罪過を否定してその上に出でむとする善良な意志を持續する限りに於いてゞある。この意志が失はれて、吾々が、罪過も積極的意義を有するが故

に恥ぢるに及ばないといふ空論を弄するとき、さうして無良心な實驗主義が吾々の誠實な良心を喚まし始めるとき、その淨化作用も亦消失する。人格が罪過によつて成長するためには、内省を弛めぬこゝろ、自己を責むるこゝろ、結果の苦みを甘受するこゝろが必要である。生の勇氣を喪失せずに益々これを振起する努力が必要である。約言すれば煉獄の「呵責」を「慰め」と感ずる精神の純潔が、罪過の積極的意義を構成する根本條件となるのである。

故に吾々は、上述の考察によつては、未だ罪惡の存在理由を理解することが出來ない。罪惡は善に反する意志である。それは善を滅ぼすもの、世界を暗黒にせむとする力である。吾々はこの罪惡を如何にして世界の善と調和させることが出來るか。思ふに吾々は、それが罪惡のまゝに止る限り、どんなにしてもこれに積極的意義を賦與することが出來ないであらう。攝取不捨の他力宗と雖も、魂の清めと切り離して罪障をそのまゝに是認するとき、それは救濟を人格の狀態以外に置く享樂主義に墮落することを免れないであらう。若し魂の清めを受くることなしに、この汚穢な靈魂をそのまゝにして、七寶の樓臺に坐し、迦陵頻迦の歌を耳にすることを許されるにしても、此の如き幸福は人格主義者にとつて唾棄に價するのみである。世界に對する吾々の信は、たゞ善の勝利を——惡の脱却を保證されるときにのみ可能である。故に罪惡の積極的意義は、意志の方向轉換が行はれることによつて始めて生じて來る。この方向轉換が行はれぬ限り、罪惡に固執する者の生活はそのまゝに「地獄」である。

然らば罪人の意志がその方向を轉換するとき、罪惡は彼の生活に如何に作用するか。云ふまでもなく、それは重き罪過として彼の心を苦め、彼の心を苦めることによつてこれを淨める力を發揮するであらう。罪惡は彼に與へるに、深く人生に觸れる機會を以てし、彼の悔恨と彼の不幸との痛さは、彼の人格に成長の機縁を提供する。故に吾々が罪過について考へて來たことは、そのまゝにこの場合に適用し得る。悔恨せる罪人は高慢な「善人」よりも、自ら恥づる收税吏は自足せるパリサイ人よりも、遙かに救ひに近い所以は、此處にあると考へることが出來るのである。

固より人の罪惡には他の一面がある。それは他人にとつて禍害となるといふことである。殺人者の罪惡は殺さるゝ者にとつて甚しき禍害となる。暴行者の罪惡はその暴行を受くる者の痛哭すべき災厄である。故に若し罪惡のみが人格成

長の機緣となつて、これによつて生ずる禍害は成長の機緣となることが出來ないならば、吾々は此の如くにして犠牲とされた者のために、世界秩序に對する抗議を申出さずにはゐられないであらう。特に罪過に伴ふ不名譽や孤立等の禍害は、これを受くる者が善良な意志を持てば持つほど、彼の當然に價ひしてゐる報償と見做さなければならぬものであつたが、この場合には、當事者の道徳的責任が明かでないために、それは一層不公正として吾々の感情を刺戟する。罪なき者の不幸には如何なる意義があるか。自己に直接の責任なくして、虐げられ惱まされ殺さるゝ者の運命に如何なる意義があるか。吾々はこの古くして新しい問題の前に立たなければならない。

併し世界には實際、全然罪なしと稱せらるべき者があるか。洗ひ淨めらるべき汚れを持たぬ者があるか。吾々は先づこれから問はなければならないであらう。前の場合に於いては、特定の禍害が特定の罪惡若くは罪過によつて說明せらるべき性質のものではないが、禍害を受ける人が他の意味に於いて罪過を持つてゐないとは、如何なる場合にも云ひきることが出來ない。故に吾々が單純な禍福を離れて、靈魂の淨化を主要の着眼點とするとき、それが直接の責任によるにせよよらぬにせよ、兎に角禍害が人格を淸める機緣となることが出來さへすれば、吾々は猶これが存在の理由を發見し得るであらう。人生の深さが貧困や別離や災厄によつて增され得るかどうか、問題の重心は懸つてこの一點にある。

さうして吾々はこの問題に對して、實際、吾々の意志が惡に染着せぬ限り、禍害は單に人格を破滅に導く力がないばかりではなく、それは吾々の生活內容を複雜にし豐富にし、これに底から動き出す機會を與へることが出來ると答へて差支ないであらう。他より吾々に加へられるものは、吾々の所有を奪ひ、吾々の肉體を殺す力を持つてゐるが、それは吾々の精神を殺すことは出來ない。この意味に於いて、プラトンの描いたソクラテスが、「善人に對しては生前も死後も惡事が起り得ない」といふのは正當である。さうしてそれは單に「惡事が起り得ない」のみではなくて、善は此の如き障碍に面することによつて、益々その光輝を發揮する。凡ての宗教や凡ての信念が迫害の中にゐて——多くの場合に於いては、それが迫害される場合に於いてのみ——特殊の高揚と緊張とを示してゐるのも亦この例に洩れない。吾々が人生の「幸福」を單純な享樂に求めずに、これを深く充實した人格の生活に求めれば求めるほど、吾々は禍福を超越して

與へられた運命を愛するこゝろに――ニイチエの所謂運命の愛（Amor Fati）に――接近することが出來るやうになるであらう。故に吾々が善き意志を保持するといふことを條件とすれば、禍害が人格の成長を助成し得ることを、吾々は信じてもいゝ。淨めらるゝことを求める者にとつては、縦令それが自己の罪過に基くにせよ、又他人の罪惡若くは運命の戯れに起因するにせよ、禍害の存在が世界を呪咀させる所以とはならないであらう。禍福をしてその欲するがまゝに吾に來らしめよ、私は一切を利用して靈魂の成長を遂げることが出來る、一切は私に對する攝理の恩寵である――かう叫ぶのは決して世界を信ぜむと欲する者の自欺ではないのである。

併し上來の考察は、たゞ、惡の存在が必ずしも世界の善と矛盾せぬことゝ、吾々の態度如何によつて罪惡も罪過も禍害も恐く恩寵となり得ることとを證明したに過ぎない。惡は必ず善を催進する機關であるか、攝取不捨の慈悲は吾々の態度如何に關らず終に一切を救濟するために活動しつゝあるか、あらゆる者の救濟はこの慈悲によつて永久に保證されてゐるか。現在の私は、この問題に對して明瞭な答を與へる力を持つてゐない。さうして若し現世に於ける地上の生活が吾々の生活の一切であるならば、事實は寧ろその反對を證明すると云はなければならないであらう。或者は善に反する意志を固執したまゝにその最後の日を迎へつゝある。或者はその罪過の故に生の勇氣を喪ひ、或者はその過失に遊んで歸ることを知らない。さうして禍害に打のめされた弱い靈魂は、再び立上る力を失つて、その不幸から罪惡の中に轉落しつゝある。汚された女は「染められた糸の再び白くならぬ」嘆きのために自棄して、荒廢の生に沈淪して行く。貧しき者はその貧しさに堪へずして狂暴と自殺との淵に驅られる。吾々はこの事實を世界根柢の善と如何にして兩立せしむべきであるか。問題の解決を現世のみに求めるならば、恐らく其處には兩立の餘地は存在しない。思ふにこの眼前の事實に面して猶自然の愛を信ずることは、たゞ此等一切の現象も淨化の一過程に過ぎぬことを信ずることによつてのみ可能である。換言すれば死後の生活と永生とを信じ、死後に於ける淨化の繼續を信ずることによつてのみ可能である。

四

死は害惡の最大なるものである。貧困や別離は吾々の生活の一部を否定するに過ぎないが、死は、吾々の生活が現世に屬してゐる限り、その全部を破壞する。人格價値の發展と實現とが現世に於てのみ可能であるとすれば、それは死によつてその終局に達する。固より死はあらゆる生活を奪ふが故に、又死の恐怖、苦痛の可能性、墮落の機會をも滅ぼし盡すものとすれば、吾々は永續する不幸としてこれを嫌忌する理由はないであらう。永遠の虛無に於いては虛無を厭ふ感覺も亦虛無に歸してしまふであらう。併し人格價値の發展といふ無窮の目的を追ふ者にとつては、これを可能にするために、無窮の生活が必要である。人格主義者は永遠に人生に倦むことを知らない。如何に同情すべき理由があつても、人生を退屈と感ずるのは、遂に荒廢弛緩した靈魂のことである。無限のものを求める生活が、五十年、六十年、精精法螺を吹いても百二十五年に限定されるならば、その間に實現される九牛の一毛にも比すべき價値の如きは、到底吾吾を慰めることが出來ない。固より死によつて終局する故に、人格價値の實現を求める生活が無意義になるといふのではない。吾々が吾々である限り、人格として生きることは、五年の生を持つ者には五年間の、十年間の生を持つ者には十年間の意義を構成する根本條件である。併し凡ての生活は暫く輝いて永遠の闇に歸する燭火のやうなものに過ぎないならば、少くともそれは甚だ果敢ない生活である。善も惡も幸も不幸も要するに百年足らずの年月に限られた問題として、それは充分な重さを持つことが出來ない。さうしてその百年足らずの生活が前に立つたやうに墮落や顚倒や悲慘や不公平に充ちてゐるとすれば、吾々は遂に此の如き世界と和解する所以を知り得ないであらう。

吾々にはほゞ三つの意味に於いて不滅を考へることが出來る。第一は、個人は且つ消え且つ結ぶ泡沫に過ぎないが、宇宙の生命は永遠である、吾々はこの生命を靜觀することによつて不滅に參しなければならぬといふのである。併しこの不滅觀は人格價値發展の保證として要求される不滅ではない。宇宙の生命は個人の善と惡と幸と不幸とに煩されずに、その永遠の流轉とその永遠なる自觀の喜びとを續けて行くでもあらう。個人も亦、この生命を靜觀することによつて、或る惠まれた瞬間に、若くはその惠まれた一生に、この歡喜を受け味ふことが出來るでもあらう。併しそれは例へば美酒の醉のやうに、早晚死によつて醒まされなければならぬ。この靜觀の生活には無限に連續する發展がない。故に宇宙生命の

不滅を觀ずることは、それだけでは、人格生活の要求を充すことが出來ない。

第二の不滅觀は、吾々の生命が子孫によつて繼續すること、若くは吾々の事業が社會的影響を持續することを考へて自ら慰めようとするものである。併し遺傳物質の生物學的繼續が、人格生活の無限を求める者に對して何の滿足をも與へ得ぬことは云ふまでもなく、而もこの生物學的繼續さへ子孫を持たぬ者には明かに拒まれてゐるのである。さうして吾々の人格の繼承者として見れば、子孫も社會も共に甚だ信頼し難い。名門には不肖の子が多く、作品は破損し文書は煙滅に歸し易い。二千餘年前の希臘の美術や文學さへその大部分は既に散佚してしまつてゐるのである。さうして假にその業績は幸ひに後世に傳はるにしても、これを正當に理解する能力は必ずしもこれに伴つて傳はると云ひ難いことは、今日の所謂「基督教國」を見ても思半ばに過ぎるものがあるであらう。而も若し太陽の冷却その他の理由によつて、地上に人類の跡をたつやうになれば、吾々の子孫に傳へた遺傳物質も、吾々の社會に殘した事業も、共に虚無に歸してしまはねばならぬ。故にこの意味の不滅觀を以て自ら慰めむとするのは結局吾々の自欺に過ぎない。吾々が要求するのは第三の不滅觀である、人格の不滅、個體としての靈魂の不滅である。この不滅を信ずることによつて、吾々は始めて無限の淨化と發展との保證を握ることが出來るであらう。

併し吾々は自ら欺くことなしに此意味の不滅を信ずることが出來るか。靈魂不滅の信仰こそは、今日の科學的智識を無視して、自ら甘やかし自ら媚びることの甚しいものではないか。多くの人は斷然として、それはさうに違ひないと主張するであらう。併し少しく靜かに考へれば、それは必ずしもさうではないことを、吾々には發見する。一體、科學は靈魂の消滅を證明する力を持つてゐるであらうか、吾々は先づこの事を問はなければならない。この問題に對して、カントはそれは不可能であると答へた、私も亦さう答へたい、さうして自己の限界を認識するだけの明を持つ科學者も亦さう答へるであらう。科學は靈魂と外界との交通の物質的條件を研究することは出來る。從つてそれは靈魂の——私は此處に、リツプスの心理學で云つてゐる意味で靈魂といふ言葉を用ゐる、それは吾々の意識現象の基礎として想定されなければならぬ實體（ゼスシテーレ）である——この意味に於ける靈魂の作用に伴ふ生理的變化を記述說明し、又生理的條件がこの靈魂

と外界との交通を左右する働きを記述說明することは出來るであらう。生理的病變が如何に靈魂の發表を制約するか、靈魂が外界との交通によつて發達する限りに於いて、この交通の阻害が如何に靈魂の發達を歪ましめるか、さうして肉體の死が如何にこの肉體を通ずる靈魂の發表を不可能にするか、科學はこれ等の問題に對して或程度の決定を與へることは出來るであらう。併しそれは、肉體の死と共に靈魂そのものが存在しなくなることを證明することは出來ない。寧ろその逆に、吾々が若し死者の靈魂が他の肉體を通して生者と交通し得ることを、あらゆる疑問を越えて明かにすることが出來るならば、さうしてそれがその媒介能力者の潜存意識によつても、生者のテレパシーによつても說明し得ぬことを發見するならば、吾々はヒスロップの言葉を用ゐれば「現象的に」——換言すれば他人の生活を見聞することによつてその經驗的實在を信ずると同樣の意味に於いて——死後の生存を證明することも亦出來るであらう。これは「心靈研究」の運動が實際擧證せんと試みつゝあるところで、又その中の有力な代表者等が事實擧證し得たと信ずるところのものである。私は固よりこの問題について、明瞭な斷定を下し得る者ではないが、吾々は最初からこれを否定せむとする科學的偏見を去つて、彼等が提供する事實と擧證とを、靜思して見る必要はあるであらう。

さうして吾々の純粹理性がこの問題について然りとも否とも答へ得ないならば、この場合こそ吾々は吾々の思惟必然に從つて——寧ろ信仰必然に從つて、靈魂不滅の信仰は吾々の生活を可能にするために必要であるが故に眞理であると云ひ得ないであらうか。吾々は、カントと共に、これを實踐理性の要請として定立しないであらうか。私は今この證明を擬すに見る反對理由を發見することが出來ない。靈魂の不滅は、ありさうなことであり、あり得べきことである。「永遠の不安」をその胸に懷いて永遠の目標を追ふ人間の靈魂は、自己の運命についてかく信ずることを許されるであらう。「靈魂は不滅である、何となれば人はこの觀念を缺くことを得ざるが故に」とゲーテは云つた。「貴女の隣人を、能動的に、飽きずに愛するやうに努力なさい。貴女の愛が進めば進むほど、貴女は神の實在と貴女の靈魂の不滅とを確信することが增して來るでせう。若し貴女が隣人の愛に於いて完全に自分を忘れるやうになつたら、貴女は疑惑なしに信ずるでせう、どんな疑惑も貴女の魂に還入つて來ることが出來ないでせう。これはやつて見たことである。これは確かで

す」――ドストイエフスキーはその長老ゾシマにかう云はせてゐる。吾々が靈魂不滅の信仰に到達する最も確實な途は、恐らく、滅ぶことが出來ないものを自己の中に體驗するところにあるであらう。

さうしてこれを信ずることによつて――それが不可能でないと信ずることによつてさへも――吾々のパースペクテイヴは無限に開けて來る。吾々の生活は此世にのみ限られてゐるのではない。それは永遠の生の一部であるが故に益々多く、而も亦永遠の生の一部であるが故に焦急な總勘定を要求しない。此世に於いて果されなかつたのも、永遠の生に於いてはこれを果す機會が豐かに準備されてゐるであらう。愛する者が此世に於いて吾々から奪ひ去られるのは、永遠に亘つて吾々から離れ去つたのではない。向上と親愛との一路は無限に吾々の前に展べられてゐる。此の如き世界に生きることによつて、人格の生活は始めて希望多き實現を保證されるであらう。（一一、四、一一）

一　私は去年の「新人」クリスマス號に書いた小論に多少の訂正を加へて此處に再錄する。あれは本來この論文の序論となるべきものをきり離したのである。

二　「ファウスト」に就いての詳しいことは、拙著（近刊）「文藝評論」第一輯中「ファウストとメフイスト」を參照していたゞきたい。以下倣之。

三　拙著（近刊）「人格主義」中「人格主義、戒律主義、主觀主義、」參照。

サンヂカリズムの復活

——最近のC・G・T・——

山川均

一

一八八九年の巴里大會以來、各國の社會黨と勞働黨とは、二年每に萬國大會を開き、平素の聯絡機關としては、國際社會黨事務局を設けてゐた。之が開戰當時に至るまで、萬國無產階級の團結を代表して立つた第二インタナショナルであつた。

第二インタナショナルは一九〇七年のスツットガルト大會以來、資本主義の結果として起る國際戰爭に反對し、各國の無產階級は有ゆる手段によつて、戰爭を防止する責任のあることを力說した決議を繰返したばかりでなく、實際に於ても、無產階級の國際的團結の威力は、よく國際戰爭を阻止し得るかの如く思はれてゐた。ところが一九一四年に愈々歐洲戰爭が勃發して見ると、第二インタナショナルの決議は、嵐の前の木の葉のように一と溜りもなく吹き飛ばされ、各國の社會黨の大部分は、ブルジョアと協力して戰爭の遂行に努力した。

社會黨の政治的運動と勞働組合の產業上の運動とを、無產階級運動の分つことの出來ない二つの方面と見て、之を唯だ一つの戰列に結束することは、マルクス等によつて創められた無產階級の最初の國際運動たる、第一インタナショナル以來の傳統的の政策であつた。そこで一八八九年以來の第二インタナショナルでも、同じく此の傳統的の政策を取り、國際社會黨大會には、勞働團體をも加入を許して居つたに拘らず、第二インタナショナルは終に此精神を實現することが出來ないで、單に無產階級の政治運動のみを代表するに止どまつてゐた。そこで第二インタナショナルと相並んで、各國の組合運動は別に獨立の國際機關を造り、兩者の間には有機的の結束が欠けて居るばかりでなく、時としては双方の政策が、互に相扞格することすらもあつた。即ち第二インタナショナルには、國際無產階級の一致の戰列を維持する力が無かつた譯である。

斯ように第二インタナショナルと相並んで、組合運動の方では、一九〇一年以來、隔年に國際大會を開き、伯林に國際勞働組合書記局を設けて聯絡の機關として居つたが、一九一三年には、之が國際勞働組合同盟となつた。この國際同盟の中堅は、當時二百五十萬の組合員を擁した獨逸の組合運動であつて、英、米、佛、を初めとして、總て十一箇國の組合が加盟し、七百五十萬の組合勞働者の國際的團結を代表して居つた。

然し一朝開戰が布告せられると、この國際同盟も、何等の力の無いことが明かになつた。現に日頃は社會黨の議會運動を排斥して革命的經濟行動を主張し、總同盟罷工の宣言を以て開戰の布告に答へよと豪語して居つた佛蘭西のC・G・T・の如きも、先づ第一に自國のブルジョアと手を取つて、最も熱心に戰爭の遂行に加擔した。

斯くて戰爭の前まで輝やいてゐた無產階級の國際的團結の幻影は、一片の宣戰の布告と共に、一と溜りもなく破滅したのである。

二

インタナショナルの破滅！。比較的に戰爭の渦中を離れて居る國々の社會主義運動と組合運動の內部では固より、この運動に興味を持つてゐる人々の間には、勢ひ此問題が注意を集中した。そこで戰後に於ける無產階級の、國內及び國際の運動は、如何なる方向を取る可きかといふことが、一時は盛んに論議せられることになつた。

或人は之を以て、マルクスの階級鬪爭說の破產と見た。或人は之を見て、國家思想の勝利を祝賀した。社會主義者の間にすらも、從來の運動が、國民的の利害と國民的の觀念とを輕視して、餘りに國際的の空想に走つてゐた過誤を承認し、インタナショナルの破滅はこの過誤の結果であると主張したものが少くない。我國では福田德三博士の如きも、公平な學者の立場から此問題に言及して、戰後の世界には『インタナショナル拔きの（國際主義ぬきの意？）マルクス主義若くばロイド・ヂョルヂズムが勢を得るかと思ふ』と云はれたことがある。

そこで當時私も、此問題に就いて、盲が象を撫でる程度の豫測を試みたことがある（大正四年十月、十一月『新社會』）。この豫想のうちには、今日から見ると、隨分見當ちがひがある。殊に戰爭中に、ロシアに無產階級革命が起つたといふ、最も重要な出來事を夢想だもしてゐなかつた。しかし其中には、幾らか紛ぐれ當りに當つた點もある。

豫想の第一點は、先づ獨逸の社會民主黨、續いて各國の社會黨が分裂して、其の右翼は、從來よりも一層改良主義に退却す

るといふことであつた。

各國の社會黨は、其後明白に二分され、其の右翼は戰爭の終了と共に、第二インタナショナルを復興した。第二インタナショナルの中堅が獨逸の多數派社會黨、英國の勞働黨などであつて、ルノーデル、ヘンダアソン、アルベール・トマの如き人物が其の前列に立つて居るので、略ぼ其性質を知ることが出來る。組合運動の方でも、右翼はアムステルダムに國際勞働組合同盟を再興したが、同盟は二十二箇國、二千四百萬の組合勞働者を代表する尨大な國際團體ではあるが、當初はアプルトンを會長に、ゴムパアスとジュオーとを副會長に頂き、現今は英國のトマスを會長とし、獨逸のフイムメン、ウデゲーストを幹事として居るのを見れば、之れ亦た其性質を知るに充分である。現にアムステルダムの國際組合同盟は、資本家政府の國際聯盟勞働局と協力して居るものである。

第二の豫想は、戰爭の爲に破滅したインタナショナルが復活し、若くは分裂して新しいインタナショナルが生まれることであつた。そしてこの新しいインタナショナルは、最早や從來のそれのように、單に乘合馬車的決議を通過するか、さもなくば單に國際聯絡機關たるに止まらないで、『萬國無產階級の共同動作の組織』となるといふことであつた。そして之は第三インタナショナルによつて實現せられて居る。

第三には、分裂した社會黨の右翼が、一層改良的となると同時に、左翼は『純勞働者の階級的革命的運動に接近し』、之によつて『多年の宿題たる社會黨とサンヂカリズムとの新關係が設定せられる』といふことであつた。そして此の豫想は、第三インタナショナルに策應する赤色勞働組合インタナショナルの組織によつて實現せられた譯である。

勿論この第三點は、今尚ほ充分に實現せられては居らぬ。此の作用は今現に進化して居るものであつて、之がやがて各國の組合運動の間に、或は大なる渦卷きを起し、或は大なる波紋を描いて居る。そして佛蘭西のC・G・Tの大動搖の如きは、其最も著しい實例である。

三

一九一九年三月二日を以て、モスコーに第三インタナショナルの最初の大會が開かれると、こゝに社會主義の國際運動は、明白に二つの陣營に分裂した。そして其れと同時に、各國の社會黨も明白に二つに分裂した。

勿論戰前にも、第二インタナショナルの内部にも、また各國の社會黨の内部にも色々の分派と意見の相異とがあつた。例へばアムステルダム大會（一九〇四年）では、社會黨はブルショ

アの政府に入閣すべきか否かといふ問題で、意見は左右兩翼に分れてゐた。またスツットガルトの大會（一九〇七年）では、國際戰爭を防止する爲には、總同盟罷工に訴ふ可しと主張するヴアイヤン及びケヤ・ハーディーの決議案とに分れ、結局ジョーレス等の折衷案が大會を通過した。そして之に照應した分派と意見の相異とは、各國の社會黨の内部にも均しく存してゐた。然るに戰爭後になると、此種の意見の相異は最早や重要でなくなつて、斯ような意見の相異を來たす、もつと根本的の問題に逢着した。そして此の問題を各國社會主義運動の前に突きつけたものは、露西亞の革命と第三インタナショナルとであつて、第三インタナショナルの出現は、全く新しい境界線を以て、全世界の社會主義運動を左右兩翼に兩分した。即ち國際と國内との社會主義運動は、今日では入閣非入閣とか、總同盟罷工の可否とかいふ問題ではなくて、第二インタナショナルか第三インタナショナルかといふ、極めて明確な太い線で、二つに分かたれて居るのである。

之と同じく組合運動の方でも、今日まで組合運動を左右兩翼に分つてゐた政策上の問題は、最早や重要を失つて來た。例へば組合運動は、一切の政治運動に對して中立を守るといふ、C・G・T・の傳統的政策がよいか、それとも組合運動は、社會黨の議會運動に協力すべきかといふような、過去に於ける重大な問題も、今では昔日の意義を失つて來た。そして社會黨の場合と同じように、アムステルダムかモスコーか（國際勞働組合同盟か、赤色組合インタナショナルか）といふ唯だ一本の太い黑線が、全世界の組合運動を左右兩翼に分けることゝなつた。唯だ漠然と左右兩翼に分つたといふばかりでなく、戰後の形勢は、各國の組合運動として、必ず此線の左右どちらかに明確に、且つ積極的に、立場を定めねばならぬようにした。今日では、此線の左に立たぬものは勢ひ其右に立つことであり、此線の右に立たぬものは、勢ひ其の左に立たなければならぬ。其間には、中間の立場がない。そして此線の左右いづれの側に立つかといふことが、直ちに階級の鬪爭か階級の協力かを意味し、□□か改良かを意味することゝなつた。そこで最近に於ける佛國のC・G・T・の内部でも、左翼と右翼、革命派と保守派、少數派と多數派といふことは、唯だ一つの問題――モスコーかアムステルダムかといふ唯だ一つの問題――に對する意見の相異を意味することゝなつたのである。

四

サンヂカリズムは純粹に階級的革命的の理論であるが、この理論を信奉して居るものは極めて小數者であつて、C・G・T、

そのものは、決して此理論を其儘に寫し出したものではない。現に戰爭の久しい以前から、C・G・T・の一般の態度が右傾しつゝあつたことは事實であつて、一九〇四年のブウルジユ大會では、改良派の三六一票に對して、革命派は八一二票を得たが、一九〇八年のマルセイユ大會では、革命派の非軍國主義の決議は、四二一票に對する六八一票の多數で勝利を得たに過ぎなかつた。一九〇九年には、革命派のジユオーが改良派のニールを一蹴して、幹事長となつたにも拘らず、ジユオーの實際の政策は極めて溫和堅實なものであつた。

　此間にもサンヂカリズムは依然として革命的の理論であつたが、歐洲戰爭の勃發と共に、C・G・Tは忽ち年來の主張であつた非軍國主義も、一切の妥協を排する階級鬪爭說を放擲して、擧國一致論に早替りをし、政治的中立の主張から、社會黨との協力をも拒んでゐたものがブルジョア政府と協力するようになつた。ジユオーを初め、C・G・Tの幹部は、政府の代表者と特別列車に同乘して國事に奔走したり、大工業主と宴會を共にして、戰爭の遂行に努力した。

　そこで開戰後間もなく、C・G・Tの內部には、金屬工組合の幹事メレエムの率ゐる幹部反對の少數派が現はれたが、開戰以來初めて開かれた一九一八年七月の巴里大會では、多數派の九九八票に對して、少數派は僅かに二五〇票を得たに過ぎなかつた。殊に當時の多數派と少數派の爭ひは、主として戰爭に對する態度の爭ひであつて、從來からC・G・T・の內部に行はれてゐた、改良派と革命派との爭ひと性質の同じいものであつて、少數派は依然として、正統的な「革命的サンヂカリズム」の上に立つて幹部の軟化を攻擊し、再び革命的サンヂカリズムの傳統に復へることを要求して居つたに過ぎぬ。即ち、當時C・G・Tの內部に於ける論爭は、未だモスコーかアムステルダムかといふ、明確な性質を持つてはゐなかつたのである。

　然るに兩派の爭ひが益々烈しくなり、其間には露國革命の影響が現はれて來るにつれて、少數革命派の性質は漸次に變つて來た。そしてそれと同時に、從來少數派の先登に立つてゐたメレエムの如き舊人物は、少數派の運動から落伍した。斯くてC・G・T・の多數派と少數派の爭ひが、初めてモスコーかアムステルダムかといふ明確な形を取つて現はれたのは、一九一九年九月のリヨン大會であつたが、此大會では、第三インタナショナル加盟を主張する少數派は、一六三五票に對する三二四票を以つて慘敗した。

五

　けれども左翼少數派の勢力は、此間にも漸次に加はつて來て、

翌一九二〇年の春には、鐵道從業員聯合會は全く左翼の勢力に歸した。そこで五月一日を期して、全國鐵道の一般的罷工を宣言した。C・G・Tの幹部は躊躇の末、遂に一切の産業の總同盟罷工を命令したが、此の命令は殆んど實現を見ないで、罷工は大失敗に終つたばかりか、政府は之を理由として、C・G・T・の解散を要求し、其年の十二月、裁判はC・G・T・の解散を命令した。斯ような形勢は右翼をして益々右傾させ、左翼をして益々左傾せしめてゐた。そして此形勢の下に、七月を以てオルレアンに臨時大會が開かれ、少數派は正式の大會に先つて左翼大會を開いて結束を固めたが、大會の結果は依然として左翼に不利であつた。けれどもそれにも拘らず、この十ケ月間に左翼の勢力は著しく増進し、一、四八二票に對する六九一票となつた。

オルレアン大會を期して、左翼少數派は、C・G・Tのうちに革命的サンヂカリスト委員會（C・S・R）なるものを組織した。之はC・G・T・內の革命派を結束して、內部がこの赤化に努めると同時に、赤色組合インタナショナル加盟に一步を進める爲であつた。ところがオルレアンの大會後、有力な組合が續々C・S・Rに加盟する形勢となつたので、總同盟全國委員會（即ちC・G・Tの中央委員會）は同年の十一月に、C・S・Rに加盟した組合は、組合運動の一致を破り、C・G・Tの規律を亂すものであるから、組合聯合團體は宜しく斯かる組合を除名すべしといふ決議をした。尤も此の決議は、C・G・Tの幹部が直ちに是等の組合を除名した譯ではなく、幹部は此權限は各組合聯合團體にあるものとして、その實行を慫慂したものであつた。しかし或る聯合團體では、此決議に從つて除名を行つた場合のものもあるが、多くは實行を見なかつた。

此の決議が兩派の爭を一層切迫させたことは云ふまでもない。そして形勢は必ずしも幹部に有利でなく、左翼は益々、一般組合員の間に勢力を占めて來た。そこで幹部は、左翼が此上勢力を得ぬうちに、C・G・Tの分裂によつて、禍根を絶たうといふ作戰から、オルレアン大會によつて、次の大會は一九二一年九月と定まつて居るにも拘らず、急に七月に繰上げた。左翼は固より、之に對して極力反對を試みたが、大會は總同盟委員會の決定の通り、七月に開かれることゝなつた。之が喧ましい昨年のリール大會である。

六

一九二一年七月のリール大會では、左翼は作戰上、モスコー加入は暫らく保留して、先づアムステルダムから脫退すること、並びにモスコーに加入することは、アミアンの決議に違反

するものでないことを聲明した決議を提出したが、此大會では左翼は一躍して一、三二七票となり、幹部派は二百四十五票の多數で僅かに勝利を得た。之を前年の投票數に較べると、左翼の活動によつて、形勢が一變したことが分かる。そして今では左翼の勝利は唯だ時間の問題であつて、次の大會では多數派と少數派とが所を替へることは、最早や疑ひの餘地なき有樣となつたのである。

この形勢に驚いた幹部は、九月の總同盟委員會の決議によるC・S・Rに加盟する組合の除名を宣言した。前年の決議は、C・S・Rに加盟することはC・G・Tの規律に反することを指摘して、之が除名を各聯合團體に慫慂したものであつたが、今度は特定の組合又は聯合團體の名を指示して、除名を決議したものである。此決議の結果、有力な組合聯合團體にして、根こそぎ、C・G・T・から放逐せられたものもある。そこで面白いことは、幹部多數派の方では、赤色組合インタナショナルは、革命主義の組合のみを結束しようとするのである、即ち政治的意見によつて結束しようとするものである、從つて其結果は、勞働者の全階級的一致を破るものであるといふ理由から、モスコー加入に反對して居るのであるが、そう云ふ口の下から、却つて組合運動中の革命的分子をC・G・Tから除外して、佛國の無產階級運動の一致を破らうとして居るのである。ところが左翼少數派の方でも、同じく組合運動の一致を主張して、どこまでもC・G・Tを離れまいと云ふ、頗る皮肉なことゝなつた。

右の決議に對して、C・S・R・の方では、C・G・Tの一致を保つ最後の努力として、幹部をして約十萬人を包容する組合の除名を取消さしめ、斯くて資本家階級の攻勢に對して應戰する目的を以て、十二月（二十二日より二十四日）に巴里に全國左翼大會を召集した。此の大會は組合界から非常な熱心を以て迎へられ、之に代議員を送つた組合は、千五百六十四組合であつた。リール大會に參加した組合は、多數派千五百七十二組合、少數派千三百二十七組合、中立（棄權）六十六組合、總計二千九百六十五組合であるから、左翼大會に千五百六十四組合が代表されたとすれば、少數派は最早や多數派となつた譯である。尤も、C・G・T・の幹部の方では、此數字に異論を唱へて居る。

左翼大會は、總同盟委員會の除名決議の撤回と、翌年（一九二二年）早々、C・G・Tの分裂防止の目的を以て臨時大會を召集すべき決議し、大會から代議員を選んで、C・G・Tの幹部と交渉せしめることゝなつた。之と同時に、C・S・Rは、分裂防止の障害となることを恐れて、之に加盟した組合を一先づ脫退させることにした。

然るにC・G・Tの幹部では、左翼大會を以て正規の大會と認めぬといふ理由の下に、其交渉を受附けないばかりか、十二月二十六日を以て、重ねて左翼組合の除名を聲明した。C・G・Tの幹部が交渉を拒絶したので、左翼大會では、止むを得ず臨時委員會を組織し、問題の解決まで、舊幹部と對峙することゝなつた。斯くて事實上C・G・Tは二つに分裂して、二つのC・G・Tが出來た譯であつて、左翼C・G・Tは『統一』C・G・T・と呼び、巴里組合聯合會に本部を置いて、ラファエット街のC・G・T・舊幹部と對立し、双方のC・G・T・からは日刊の通報を出して居る。

勿論、舊幹部の方では、今尙ほ自派の多數を主張して居るが、此多數は極めて疑はしい。そこで、C・G・Tの分裂は、改良主義の少數派か、革命主義の多數派を除名した形である。サンヂカリズムを主張する學者のうちには、英雄主義を高調して多數決に反對する人もあると云ふことだから、是等の學者から見れは、今度のC・G・T・幹部の處置などは、傳統的サンヂカリズムの理想通りの行動かも知れぬ。

七

要するにC・G・Tの分裂は、傳統的のサンヂカリズムと、新しい意味での革命的サンヂカリズムとの間の爭である。現に幹部派の方で唯一の論據として居るのは、一九〇六年の謂ゆる「アミアン憲章」(卽ちアミアン大會の決議)である。そしてこの『アミアン憲章』によつて、佛蘭西の組合運動は、全たく社會黨の運動と絶縁したものである。當時佛國の社會主義運動は、ブルードンよりマルクスに至る種々なる思想の分派に別れて居つたので、組合運動の一致を計る爲には、全ての政治的團體と手を切る必要があつた。また當年のマルクス派の社會黨は、理論の上では革命主義であつたが、實際の行動としては、議會政策以外に出でなかつたので、組合運動が社會黨と提携することは、畢竟、選擧の道具となることに過ぎなかつたので、組合は社會黨の指導的勢力から獨立する必要があつた。そこで「アミアン憲章」は、斯ような形勢の必要に應ずる爲め、組合運動は一切の政黨政派と關係せず、一切の政治上の意見を離れて、純粹に賃銀勞働者としての經濟上の利害をのみ基礎として、全勞働階級を團結せしめるといふ、佛國組合主義の原則を確立したのである。

そこでC・G・T・の舊幹部派は、この傳統的の『革命的サンヂカリズム』の上に立ち、『アミアン憲章』を金條玉科として、モスコー加入に反對する。卽ち赤色組合インタナショナルに加入することは、同時に第三インタナショナルと提携協力すること

とを意味するものであつて、取りも直さず、無産階級の政治的運動との間に、一定の關係を作ることによる。そして之は明かに『アミアン憲章』の命ずる『政治中立』の違反であるとして反對する。

ところが此同じ幹部は、戰爭中には、『神聖なる擧國一致』を高唱してブルジョア政府と提携して、明らかにサンヂカリズム謂ゆる經濟的行動の範圍に屬せぬ『國防』運動に熱中し、之が爲には工業主同盟と策應することとすらも辭しなかつた。そして戰後に至つても、彼等は大會の訓令をも待たずして、國際聯盟の勞働會議に參加して、ブルジョア政府の代表者と共に、戰後の勞働問題の解決に當つてゐる。之は明らかに、リール大會に於ける左翼少數派の決議案が指摘したように、『勞働者と資本家との代表者が、經濟問題の共同の研究の爲に、常設的團體に參加する』『階級協調』であつて、斯くして得られた經濟問題の解決は、『現在の制度の存在を長からしめるに過ぎない』ものであるそこで若し、赤色組合インタナショナルに對する彼等の主張を以て、『アミアン憲章』の命ずる『政治的中立』の神聖な傳統に忠實な所以であると解しても、『アミアン憲章』の一層重大な原則――階級鬪爭の原則――に至つては、彼等によつて全く忘れられて居ることだけは疑ひの餘地がない。

ところが玆にも興味あることは、之に反對する左翼の方でも、同じく『アミアン憲章』を楯に取つて居ることである。卽ち此派の人々は、舊幹部が『アミアン憲章』によつて確立せられてゐる階級鬪爭の立場を離れ、階級の利害よりも『一般的の利害』を重しとする階級協調主義に墮落したことを非難し、赤色組合インタナショナルに加入することは、決して組合運動の自治を傷づけるものではなく、却つて『アミアン憲章』の精神によつて行はれるものであると主張するのである。

成るほど赤色組合インタナショナルに加入することは、同時に第三インタナショナルと提携協力することを意味して居る。然るに第三インタナショナルは無產階級の革命的政黨の國際的團結であるから、やがて之は組合運動が、政治的運動と提携し協力することを意味するには相違ない。然しながら斯ような意味では、C・G・Tは本來から『政治的』だつたのである。C・G・T・は其規約の劈頭に、賃銀制度の撤廢を目的として、階級鬪爭の自覺ある勞働者を結束することを規定して居る。これは明かに、右の如き意味での『政治的』の目的であつて、現に先年、裁判所がC・G・Tの解散命令を發したのも、其理由は、C・G・Tの運動は、一八八四年の組合法の認めて居る職業的利害といふ範圍を超へて、政治的目的を有する行動に亘つた

といふことであつた。然しながら斯ような意味では、C・G・T・は元々政治上の目的の爲にあるものであつて、若しC・G・T・が眞に賃銀制度の廢止を目的として行動するものならば、此の行動は、必ず或る點から先きは、政治的の目的を有する行動となることを免れぬ。

けれどもC・G・T・の追求する斯ような政治的目的と、『アミアン憲章』の排斥した政治運動とは、全く性質が違つて居ることを忘れてはならぬ。アミアン大會の決議の云ふ政治運動とは、日常普通の意味に於ける政治運動、政黨運動であつて、ブルジョアの政治に參加することを意味する運動であつて、若し其の實例を求めるならC・G・Tの幹部が戰爭中から戰後に取つた行動――謂ゆる國事に奔走したり、資本家階級の政治的代表者と協力したりすること――こそ、恰かも『アミアン憲章』の排斥した政治運動に該當するものであつて、それは決して無產階級の×××黨派と、その運動とを指したものではないのである。そこで『アミアン憲章』が排斥した普通の意味、狹い意味での政治運動と、C・G・T・の幹部――傳統的サンヂカリスト――の固執してゐる純經濟的行動との一段上に、もつと廣い意味、もつと高い意味での政治的行動があるといふことを考へることが出來る。そして『アミアン憲章』の精神は、決して此意味での政治的行動に反對したものではない。之に反して傳統的のサンヂカリストは、日常普通の意味での――アミアン決議の排斥したような――政治的行動に墮して居りながら、右の如き廣い意味、高い意味での政治的行動には極力反對して居る譯である。

そこで冷靜に考へて見ると、C・G・Tの分裂を引起した眞の問題は、組合運動は、一般に政治運動と協力すべきか否かといふ、抽象的な原則の問題ではなくて、特にブルジョアの政治に協力するか、×××無產階級の政治的行動に協力するかと云ふ、差迫つた當面の實際問題である。そして階級の鬪爭が、明かに政治的目的をもつた鬪爭となつた今日の形勢は、最早や此二つの勢力の間に、『政治的中立』の牧歌を歌つて居ることを許るさないで、必ず其の何れかに就かなければならなくなつたのである。そして此二つの途を代表して居るものが、即ちモスコーとアムステルダムとに外ならぬ。

そこでC・G・T・の動搖と分裂とは、『アミアン憲章』を放棄するか否かの爭ひではなくて、『アミアン憲章』の精神をも包容する一層高い、そして一層廣い、新しい立場の上に、無產階級の產業的運動と政治的運動とが、新たなる協力の基礎を見出して、眞に有力な『一致の陣列』を組織しようとする大なる作用の現はれに外ならぬ。そして其れはよし、『アミアン憲章』に歸

へれといふ標語によつて行はれようとも、決して戰爭前の、傳統的サンヂカリズムへの單なる復歸ではなくて、開戰以來の新しい經驗と、新しい形勢とによつて促がされた、新しいサンヂカリズムへの復活でなければならぬ。

そして此問題が解決せられた時、「多年の宿題たる社會黨とサンヂカリズムとの新關係の設定」といふ、豫想の第三點が實現され、無產階級の政治的行動をも、產業的行動をも、唯だ一つの國際的團結に包容して、一致の陣列を形造るといふ、第一インタナショナルの傳統的政策が復活するのである。

八

勿論この問題は、既に解決の方向は示されて居り、既に其の曙光が見へては居るが、尙ほ完全に解決せられては居らぬ。殊に左翼に取つての最大の問題は、C・G・Tの分裂を防止して、能く佛國勞働運動の一致を保つといふことである。舊多數派の幹部は、有ゆる方法によつて分裂を計つて居るが、左翼は之に對して、飽くまで分裂の防止に努めて居る。若し左翼の志が、單に革命的の一團體を造るといふことに止まるなら、彼等はリール大會に於いて少數の差で敗れた時、勇ましく退場して、直ちに、左翼C・G・Tの旗揚げをすることが出來た。更に、C・G・Tの過半數を糾合した巴里の左翼大會後に、勝利の分裂をすることも出來た。けれども若し彼等が、C・G・Tから分裂したならば、一方には異分子を含まぬ純粹な革命的團體を造ることは出來るが、其の代り佛國には、米國のA・F・Lのような、純粹に保守的反動的な組合團體が殘ることを忘れてはならぬ。それにしても、左翼の勝利には相違ない。唯だ其の勝利は、半分の勝利である。彼等は半分の勝利の爲に、佛國の勞働階級の一半に對しては全く接觸を失ひ、感化と指導の力とを失つてしまふ。革命派の志は、半分の勝利ではなくて、全たく勝利である。彼等の志は、佛國の全勞働階級を動かすことである。

そして之はまた、赤色組合インタナショナルの一般政策にも一致したものである。赤色組合インタナショナルの政策は、一般の大衆から離れた、別の革命主義の組合を造ることではなくて、從來の組合に喰ひ込んで、內部から大衆を動かすことである。そして、C・G・Tの少數派が、終に多數派となつたのは、正に此の政策を實行したものに外ならぬ。

そこで、C・G・Tの分裂の危機が迫ると、赤色組合インタナショナルの幹事長ロソウスキーは十二月十六日（一九二一年）を以て、無線電信でアムステルダムの國際組合聯合會の本部にC・G・Tの分裂防止の目的で、協議會を開かうといふ提議をした。之に對して聯合會の幹事ウデゲーストは、一應、C・G・T

の幹部の意向を聴いた上、赤色組合インタナショナルが、當時巴里に開かれんとしてゐた左翼大會を延期せしめるなら、ロソウスキーの提議を聯合會の事務局に附議しようといふ答をした。殊にロソウスキーの提議は、兩インタナショナルとC・G・Tの左右兩派の代表者の會議を開くことであつたが、ウデゲストは之に對して、協議會は兩インタナショナルの代表者に限り、左翼の代表者を加へぬといふ條件を附加へた。

是より先き、ロソウスキーは極力、左翼大會の延期に努めて居つたが、十二月二十一日、愈々大會の開かれた朝になつて、ウデゲストの右の返電がモスコーに着いた。そして十二月三十日を以て、アムステルダムの事務局は更に電報を以て、少數派は既に大會を開いたので、分裂は少數派の責任である。そして分裂が既成の事實となつた以上、最早や協議會を開く餘地がないといふ回答をした。

巴里の左翼大會後、舊C・G・Tの幹部は、二月十二日（本年）に臨時大會を召集する旨を決したので、『統一』C・G・Tの方では、先きに舊C・G・Tの幹部に送つた最後通牒の回答期限が、一月三十日と定めてあつたのを、二月十五日に延期し、同時に其條件として、二月の大會には、前大會即ちリール大會に參加した全ての組合を參加せしめることを要求した。

この大會の結果に就ては、尙ほ知ることが出來ぬが、舊C・G・T側が、リール大會當時の現狀を基礎としてC・G・Tの一致を計らうといふ、左翼の道理ある主張を容れたかどうかも明かでない。C・G・Tの分裂を既成の事實と見做して、飽くまで左翼と別れようと努めて居る幹部從來の態度から見ると、二月の大會は、或は右翼のみで開かれたかも知らぬ。若しそうだとすれば、C・G・Tの分裂は愈々既成の事實であつて、此點では、左翼の努力は一應失敗に歸した譯である。そうして佛蘭西の資本主義は、少くとも當分の間、枕を高ふして可なりである。（三月三十日）

（附記）其後の報道によると、左翼C・G・Tは舊C・G・Tに對する最後の交涉として、除名の取消、今年三月中に臨時大會を開くこと、大會に先つて兩C・G・T委員會の協議會も開くことを要求して居つたが、舊C・G・Tは二月十四日の總同盟會全國委員會に於て、八十對八十七票（棄權二票）を以て右の提議を斥けたので、C・G・Tの分裂は差當り事實となつた譯である。之に對し左翼C・G・Tの方では十六日を以て宣言を發し、七月一日までに大會を開き形式にC・G・Tの兩組織をすることとした。左翼C・G・Tは既に舊C・G・Tの四分の三を代表すると主張して居る。

未開國に於ける社會主義

バートランド・ラッセル



『社會主義』といふことによつて吾々は何を意味するか。此言葉は屢々甚だ漠然と用ゐられるが、これに精確な意味を與へることは困難でない。社會主義の定義は二つの部分から成つて居る。其一方は經濟的で他方は政治的、一方は貨物の生産と分配とに關し、他方は權力の分配に關聯して居る。

生産に關しては、總ての土地と資本とは國家の財産でなければならぬ——但し國家が時として勞働組合若くは協同組合の如き、生産者は又消費者の大團體にその財産を委任することはあり得べきことであるが。分配の方面では、各種の仕事に對する報酬は、絶對の必需品を求めるに必要な程度を最少限度とし、仕事の能率を擧げる上に最大の刺戟となる點を最大限度として、公共的權力に依て決定せられねばならぬ。萬人平等の所得といふことは、必ずしも社會主義の定

義の一部分なることを要せぬ。シャリアピンが芝居の道具方よりも餘計給料を受けてゐるといふ事は、露西亞がなほブルジョア國であるといふことを證明するには足らぬ。最も本質的なのは、土地にせよ、資本にせよ、人がその生產手段を所有することに依て利潤を搾取し得ぬようにする點である。けれども社會主義は、理想としては確かに、種々の階級の勞働者の特殊の必要に應ずるために課せられるより以外の相異のない、所得の平等を期して居るのである。

政治的方面に於ては、社會主義は專制政治又は寡頭政治と兩立せず、總ての健全な成人は基本的な政治的權力に對して、平等の分前に與かることを要求して居る。過渡期に於てはデモクラシーに反對するボリセヰキでさへもこれを以て彼等の理想の一部分と看做し、社會主義は、普通選擧、言論及び出版の自由の如き、自由主義的、民主的な制度を回復し得た後でなければ十分に實現し難いものだといふことを認めて居る。(これは彼等の書いた物にも見え、吾々がカメネフと露西亞で會談した時、彼の確認した處でもある。)社會主義の異る形式―國家社會主義、ギルト社會主義等も此點には異存がない、たゞ其等は民主的國家に集中せられ、又は種々の聯邦自治體に撒布せられる直接の政治的權力の程度について異論があるにすぎぬ。

既に上に述べた理由によつて、工業主義は社會主義的にならぬ限り、今後久しく能率を擧げることは不可能である。これは私人的利潤の制度は勞働者の不平を煽り、彼等に不正の感を與へるためと、土地及び資本の私有は、個人としての國民に對しても國家に對しても、或程度の統制權を與へ、これが社會の利益のためでなく、個人の權力と利潤とを增加するために使用せられるの結果、危險となるがためである。けれども現行制度より社會主義への推移は困難に滿ちて、その企てが成功するか、野蠻時代への復歸となつて終るかは疑問である。

豫言者的洞察に於ては驚くべきものであつたが、必ずしも完全無瑕ではないマルクスは、全然實現されそうもない、

机上の計畫通りの單純さを以て此變革が遂行せられるように考へた。彼は——十九世紀前半の英國の經驗に照らして尤も至極であつたように——資本家の存在する限り、資本家と無產者との間の分界線は飽まで明確に留まり、無產者は自己と家族とが辛うじて生活し得るだけの、食ふや食はずの賃銀しか得られぬものと考へてゐた。資本の集中によつて資本家は次第に少數となり、無產者はその悲慘な生活の經驗や、それに對する鬪爭の結果、一層不滿を强められ、一層よく組織せられるようになり、その鬪爭は最初は地方的、次には全國的、そして次には國際的となり、國際的になつた時に彼等は、無產者の非常な數的優越によつて勝利を占める。それから突然、革命によつて全經濟組織が變更せられ、國際的社會主義が確立せられる、といふのである。

是等すべての點を通じて、マルクスは多少誤まつてゐたことが證明せられた。資本家と無產者との間の分界線は明白でない。相當な收入のある勞働組合の指導者連は、ブルジョア的慰安を樂しみ、資本家と對等の立場で交際し、資本家的心質を獲得することが珍しくない。勞働組合をして意氣沮喪せしむるために正統派の經濟學者が發明し、革命を鼓吹するためにマルクスの承認した賃銀の鐵則は、經濟學上の誤謬であつた。米國の賃銀、及び英國の賃銀ですらも、今日は賃銀勞働者の大多數に對して、喰ふや食はずの賃銀より以上のものを支給してゐる。少數の大企業に於ける資本の集中は、合資會社の發達によつて、資本家の數を減少することはなかつた。無產者は一層不平を抱くようにはならなかつた。今日の英國の勞働者が、百年以前のそれより革命的になつて居ることは事實である。彼等が全國的に一層よく組織せられて來たのも事實である。けれども戰爭は——今までの處では——國際的團結の全然無効であつたことを示した。そして若し明日、日米の間に戰端が開かれたならば、兩國の無產者は、熱誠と愛國心を資本家と競ひ合ひ、或はそれを凌駕するに相違ない。最後に、無產者の數的優越は極く少數の國（英國は共一つである）にしか實現せられてゐない。その

他の所に於ては、通例資本家の味方である自作農の方が、借地者よりも多數を制して居る。けれども此最後の點については、時の進行次第で、マルクスはまだ間違つて居らぬことになるかも知れぬ。レーニンの電氣化の計畫は、農業を工業化し、斯くして農民に無産者の心的傾向を賦與しようといふ目論見である。農業方法の技術的改善が—それほど思ひ切つたものでないまでも—他國に於てもこれに類した變化を來すことはあり得べきである。これは極めて重要な考へであつて、社會主義の將來全體を左右するものである、けれども不幸にして是に就ては何等かの豫言をすることは極度に困難である。

露西亞に於ける共産黨政府の確立は、一面に於てマルクス說の當れることを承認し、他面に於てこれを打破するような、新しい思想の體系を喚起した。ボリセヰキは、資本主義的工業主義が殆ど手を觸れて居らぬ國に共産主義を確立しようと企てゝ居る。この事は、マルクスの信じてゐたように、資本主義は果して社會主義への必然の段階であるかどうか、又工業は、今まで發達してゐなかつた國に、最初から社會主義的に發達し得るかどうかといふ疑問を起させる。露西亞と亞細亞との將來については、これは最も重大な問題である。

ボリセヰキは、能ふ限り近い時機に、共産主義を確立する企圖を抱いて政權を握つた。彼等は今日も猶ほ此企圖を抱いて居ることには違ひない。けれども總ての對外的困難を措いても、國内の障害が彼等の豫期したより遙かに大きかつたことが證明された。これは『レーボア・モンスリー』の創刊號（一九二一年七月）に英語で出たレーニンの『農業稅の意義』といふ極めて率直な論文によつて窺ふことが出來る。露西亞について彼の云つて居ることは、社會主義的支那、若くは——印度にして英國の羈絆を脫してボリセヰキになるとしたなら——印度にも等しくあてはまる所である。レーニンは現下の露西亞には、五種の異る經濟的發達の段階に在る要素のあることを識別して居る。即ち、

一、父家長的、即ちかなりの程度まで原始的な農民の生産。
二、小仕掛けの貨物の生産、(これには穀物を賣る大多數農民がはいつて居る。)
三、私有資本主義。
四、國家資本主義。
五、社會主義。」

『國家資本主義』といふ用語は、レーニンの他の文章にもよく出て來るが、此論文にも屢々現れる。これは國家が私人的資本と同じように、利潤のために企業を經營することを意味するらしい。此言葉は、ソヴイエット露西亞にせよ、戰前の獨逸にせよ、國家が鐵道を經營することをも意味することが、文中に窺はれる。此用語は文中に明白に定義せられてゐないので、吾々は其的確な意味を知つてゐるとは稱し難い。けれども國家資本主義といふことの本質は、その下に於ては、國家が、一定の貨物や助力を、その要求者に對して無料で供給する代りに、賣ることを意味するらしい。

レーニンは無料で支給する方を以て賣るよりも經濟的に高級な時代と看做し、後者より前者への發達を以て進歩と考へて居る。彼は亦——これはボリセヰキの政策と兩立しそうに思はれぬが——いかなる時代をも跳び越すことは出來ず、その當然の順序を踏まねばならぬと考へてゐるらしい。彼は小仕掛の貨物の生産は、父家長的農民の生産よりも一段の進歩であるが故に奬勵せられねばならず、小仕掛の生産よりも、大仕掛の私人的資本主義の方が優れて居り、(彼は自分の政府がそれを奬勵すべきだとは流石に云ひ兼ねて居るが)、國家資本主義は、私人的資本主義より優つて居るが故に、社會主義者は是に反對してはならず、社會主義は、その全力を此事業に傾倒してゐる政府によつてさへも、急速に實現することは出來ぬものである、といふ意見を抱いてゐるらしい。彼は一九一八年に書いた自分のパンフレットの中から、次のような文章を引用して居る。

『……國家資本主義は、わがソヴイエット露西亞の現狀に於ては、進歩の第一歩である。例へば、若し來るべき六ケ月の間、國家資本主義が茲に確立せられるとすれば、それは誠に結構な事で、一年以内に社會主義が確立せられ、且つ確固不拔のものとなる保障とならう。』

後に、例の論文の中に彼はかう云つて居る。

『上に引用した一九一八年の議論の中には、時期の問題に關して多くの誤謬がある。その時期は、當時假定せられたよりも、遙かに長いことが明らかとなつた。』

けれども速力の問題は、今吾々の關係する所でない。吾々の探究したいと思ふのは、未發達の國々に於ける社會主義への運動の性質と方向との點である。

レーニンの議論を仔細に點檢するならば、人はその結果が（もし吾々にして間違つてゐなければ）かうなることを見出すであらう。即ち、確信ある共産主義者の政府は、國家資本主義を以て、大仕掛けの私人的資本主義に代へることにより、私人的資本主義の時期を比較的小事業に限定することが出來る。また彼等は宣傳や、工業的進歩を敎へることによつて、どの時期からでも次の時期への進歩を著しく促進することが出來る。けれども彼等は其中のどの時期をも全然省略することは出來ず、經濟的進化の法則を左右することは出來ぬ、といふのである。

もう少し（レーニンの言葉）を引用すれば、此極めて重要な斷言の中に現はれてゐる立場を明らかにする助けとなる。

『國家資本主義は、吾々の現在の經濟組織（一九二一年の露西亞）とは比較にならぬほど、經濟的に高級なものである。』

『社會主義は、大仕掛けの資本主義的技術なくしては不可能である。』

『社會主義は、……………………。』

『私は第一に國家資本主義の具體的な例を引くとしよう。何人も此例を知つてゐる、即ち獨逸である。』

『獨逸に於ける無産階級革命の勝利は、即時に、そして極めて容易に、帝國主義の殼全體を粉碎し、……………………。』

『若し獨逸に於ける革命が遲延するとすれば、吾々の爲すべき仕事は明白となる。即ち獨逸人から國家資本主義を學び、全力を盡してそれを獲得することである。吾々は野蠻な露西亞の西歐化を速めるためにはいかなる獨裁的方法をも辭せず、且つ蠻風と戰ふために何等の野蠻な方法をも固持してはならぬ。』

『權力の問題は一切の革命の根本問題である。』

『吾國の窮乏と破産とは實に慘澹たるもので、吾々が即時に大仕掛けの國家社會主義的工場生産を確立することが出來ぬ程である。』

『機械を必要とせぬ小工業の復活を或程度まで助けることは必要である。』

『是等一切のことはいかなる結果を齎らすか。(根本的な點では、吾々は(たとへ地方的にもせよ)或程度の自由貿易と、小ブルジョア階級と資本主義の復活を得ることゝなる。これは疑ひもない事實で、これに對して目を閉ぢることは滑稽である。』

一切の私人的賣買を防止しようとする企ての愚を説明した後、此政策が在來熱心に支持されて來たことを半ば告白しながら、レーニンは今彼の主張してゐる新政策を説明する。曰く

『又は(是が唯一の可能なそして賢い政策である)吾々は資本主義の發達を禁止し防止することを控えて、それをして國家資本主義の方向へ向はしめるように努めることが出來る。是は經濟的に可能である。何故ならば、國家資本主義

は、一般に自由貿易及び資本主義の要素の在る所では、何等かの形に於て、何處にでもどれ程かの程度に存在するからである。』

彼は此政策の例として利權讓與や、協同組合を擧げてゐる。

農民を社會主義的制度に適合させる問題については、彼はかう述べて居る、

『露西亞に行はれてゐるような資本主義前の關係の狀態から、社會主義への直接の推移を實現するとは可能であるか。然り、それは或程度まで可能である。けれども非常な科學的努力の經驗のお蔭で知り得た或一つの條件つきでだけ可能なのである。その條件とは電氣化である。けれども此『一つ』の條件には少くとも十年間の勞作を要する。吾々はたゞ英國、獨逸、及亞米利加のような國々の無產階級革命の勝利によるの外、この期間を短縮するとは出來ぬのである。』

『資本主義は社會主義に比すれば惡である。けれども資本主義は、中世主義に比すれば天惠である。』

『いかに小規模なものにもせよ、地方的產業に田舍の郡なり村なりで十分に能力を發揮するようにさせることを、總ての眞の勞働者は目的とせねばならぬ。國家の經濟政策は此點に集中せられねばならぬ。地方的產業のあらゆる發展は、大規模の產業建設の、堅固な基礎であり、確實な一步である。』

吾々が斯樣に多くの章句を引用したのは、此中に、歐洲及び亞細亞のボリセヰキに對する社會主義批評家が徒らに論議してゐた多くの事項が、經驗を基礎として承認せられて居るからである。未發達若くは部分的にしか發達して居らぬ國々に於ける社會主義の實現促進に對して、爲し得べきことゝ爲し得べからざることゝの問題が、レーニンがその困難を說明したことによつて大に明白となつた。此問題の最も重要な點は、先進諸國に於ては、技術的及び經濟的條件が社會主義にとつて有利であるに反し、政治的條件は後進國にとつて有利だといふ點である。其理由は直き後に說くことゝ

する。故に若し技術的困難がボリセヰキによつて打克たれ得るものであつたなら、彼等は即時に、世界的社會主義の實現を容易にしたに相異ない。けれどもボリセヰキの方法には、レーニンの認めた困難だけが伴ふのではない。それには、吾々が示さうとするやうに、少くともそれと同じ位恐ろしい他の困難が伴ふのである。そこで、政治上の困難にも拘らず、在來資本主義的工業主義の大なる發達を免れて來た國々よりも、先進國の方が社會主義成功の望みが多いといふことになる。」

未發達の國に於ける工業主義（吾々が前の章で述べたやうに）は貴族的でなければならず、外國資本によりて確立せられぬ限り、最初は多數の民衆に對して非常な貧困を齎らすものである。ボリセヰキはあらゆるトラスト王と等しく專制的に工業を經營することを餘儀なくされ、その使用人には辛ふじて生活し得る程度より以上のものを與へることが出來ずに居る。のみならず、商業の復活と利權政策の採用以來、外國資本家の助力を斥けようとする企ては放棄せられねばならなかつた。外國の助力なしで工業主義を發達させる政策には、どんな場合にでも避け難い困難より遙かに甚しい、いかなる國民でも、ソヴイエット露西亞でさへも當面し得ぬ程の、言語に絕した困難が伴ふのである。英國に於ては、外國資本の力を藉りずに工業主義が建設せられたのは事實であるが、其時の事情は極めて特殊的なもので、今後再び反覆することの出來ぬ底のものである。石炭と鐵とは豐富で、互に隣接した地方から出た。總て英國人によつて爲され、且つ奈翁戰爭のために英國に局限せられて居つた新發明は、生産を甚しく低廉にし、特に他に競爭すべき工業國といふものが絕無であつた。是等總ての便宜にも拘らず、勞働者の貧困と勞働過度とは恐るべきもので、それは貴族的專政に服してゐる國民に對しての外、課せられぬ程のものであつた。故に吾々は、近代の未發達な國民が、何等特殊の便宜もなしで、外國資本の力を藉らずに工業國になり得るといふことは望み難いのである。」

是等の事情の下に於て、露西亞や支那のような國が、大仕掛の私人的資本主義の段階を通らずに、いきなりレーニンの所謂國家資本主義に移ることが可能であらうか。具體的に云へば、一部分は借りた資本で國家が鐵道や船渠等を建設し且つ所有し、鑛山も國家が採掘しながら、貸主に經營上の發言權を許さぬことが出來得ようか。強大な國家は普通の目的、例へば戰時公債の所有者が、戰爭が高額の配當をし得るかどうかを見るために、代表者を大本營に參加させることを許されなかつたようなことは、することが出來る。ツアーの政府に金を貸した佛蘭西の投資者とても、革命が外債破棄を意味することどは知つてゐた處で、秘密警察の運行に發言權を要求しはしなかつた。かういふ問題の場合には、政府とその投資者との利害は一致するものと假定せられ、隨つて政府は私人的資本家の干渉を要せぬものとされて居る。けれども新しい工業的資源の發展に對しては、これと異る見地から觀察が下されるのが常で、政府が國家的獨立の或部分を賣渡すことなしに借款に成功することは覺束ない。例へば支那に於ては、外國の投資者は、政府に貸與する前に、先づ――鐵道、鑛山等の――獨占權の讓與を期待する。この事は、問題が外國人に讓與せられた權利に關する限り、國家資本主義を不可能にする。彼等が政府に貸す金は、生産的企業でなく、賄賂や、軍隊への支拂のために費され、生産的企業は外國の私人的資本家の手に留まるのである。

露西亞に於ては、ボリセヰキは此利權讓與の政策を狹い範圍に局限し、國民の資源の根幹を國家の手に留めて置からとして居る。彼等にして決定的に成功し得るならば、露西亞の國家若くは寧ろ共產黨は、結局支那の搾取者の如き外國資本家に取つて代り、外國の國民が到底瓦解させることの出來ぬ鞏固な地歩をそこに築くであらう。露西亞の成功と失敗とは、大仕掛の私人的資本主義よりも、國家資本主義の方が、社會主義へ推移し易いかどうかを決定するであらう。若しボリセヰキが成功したならば、亞細亞は進歩した私人的資本主義の形式を免れることが出來、若し彼等にして失敗

したならば、全世界は先進工業國が現に達して居るような狀態に到達することゝならう。

ボリセヰキの成功と失敗とは、軍事的、經濟的、及び精神的の三要素に係つて存する。容易に起りがちな一切の攻擊を擊退するに足るだけ强固な軍隊がなくては、成功の不可能なことは明白である。ボリセヰキが締結する總ての通商條約は、コルチャックやデニキンを敗り、波蘭軍を近づかしめぬ彼等の成功の賜物である。若しいつ何時なりとも、(例へば)日本、波蘭、及び羅馬尼の同盟がボリセヰキを敗る好機を得たならば、さういふ同盟は勿論彼等に對して神聖戰爭を宣するに相異ない。かような氣分を早く變へることの出來る唯一の事は、白色政府が破棄するような利權の形式に於て、新しい外國資本を多量に投資させることである。露西亞が他の未發達な國々に對して特に優越なのは、主としてその軍隊の力による。

經濟的要素の方はこれよりも面倒な問題である。ボリセヰキは農業を復活し、工業を戰前の水準に引戻すに必要な最初外國から機械、車輪等の最少量を輸入せねばならなかつた。これが出來たなら—、農民には紙幣の代りに貨物を供給することによつて、彼等から、食物を買ひ取ることが出來るようになつた——食物や原料品の戰前の輸出を復活し、同時に露西亞の工業を大に發達させることが出來るようにならう。最も困難で危險なのは此過程の初期である。第一に必要なのは輸入であるが、飢饉や運輸機關の壞滅してゐる現在に在ては輸出は不可能なので、どうでも無くてならぬ物の中少しの物は金で支拂ふことが出來る、然し大部分は利權によつて支拂ふ外ない。露西亞側の必要は焦眉の急を告げて居るので、利權の漁り手は極めて苛酷な條件を課するに相異ない。各々の利權は私人的商業の中心となり、對外貿易の大部分を國家の手に留めることを益々困難にしよう。そこで官吏腐敗の隙が出來、經濟的復活の後期が果してどれだけ國家資本主義の方に向つて進むかは疑問である。是等全ての困難は決して露西亞に限つたことではなく、外國資本家の

悪む發達の方法を企圖する總ての未發達の國が、必ずや遭遇せねばならぬ所である。けれどもその困難は多大であるにせよ、決して打克ち難いものではない。支配者の側の十分な誠意と決斷力と精力とによつて、恐らく其等は相當の時期に打克たれるであらう。」

そこで吾々は、成功の精神的要素の問題を論ずることゝなる。ボリセヰキの綱領が、最大の困難に遭遇するのは此點である。……………………………………。けれども彼等にしても猶ほ、その本來の企圖を遂行するに足るだけ十分の誠意や決斷力や精力をもつて居るか否かは疑問である。若し一九一八年にレーニンが信じたやうに、其時期が六ケ月乃至一年、若くは數年間にでも留まるならば、此運動に着手した人々が、其間に自己の社會觀なり性向なりに多大の變化を蒙ることなく、勝利を以てその局を結ぶであらう。けれども今や十月革命以來四年を經て居り、然もレーニンの告白によれば事業はやつと始まつた許りだといふ。彼等は獨裁の繼續する期間を、少くとも一世代位と見當をつけてゐるらしい。其間に多くの最初の首領は死んでしまひ、跡に殘つて其代りを務める者は、專制的權力の習慣を獲得するであらう。資本家及びその政府と談判をしつける結果は、恰度勞働組合の首領達によく起るやうに、相手の說を受容れるやうな事になる。資本家はその利權を擴張せんと欲し、さういふ擴張を促すために腐敗した取引を申出る。總ての官吏が常に腐敗の恐れなきものとは假定することが出來ぬ。

感激と希望とのために、暫くの間、極めて高い道德的水準を持することは勿論可能である。…………………………、驚嘆すべきことを行ふことが出來る、けれどもそれは永久に續くものではない。工業以前の生產狀態より、よく發達した國家資本主義（共產主義のことは一言も云はぬとして）への道は、革命的熱情の勃發してゐる間に、通りすぎることの出來ぬほど長いものである。そしてさういふ勃發の後には、平素の時代よりも一層墮落と腐敗とが起る時期が

常に伴ふものである。既に發達した國々が資本主義に留まる間に、未發達の國に社會主義を確立しようとする企ては、二つの時期を通過せねばならぬ。第一は純然たる軍國時代で、これは國の内外に於ける資本主義の勢力に抵抗する時代。第二は建設時代で、國家の管理の下に産業發達の事業が行はれ、人民が（多分他國の援助を藉りて）産業的過程のより困難な部分を教へられる時代である。露西亞は恐らく軍國時代の末期にあり、戰爭の點に於ては成功を遂げて來たのである。けれども建設時代はより困難な試練である。軍國時代には、男子の鬪爭本能と共にその國民主義が、新しい經濟制度に對する感激を援ける。けれども一旦平和が恢復せられた曉には安易な生活を欲し、總ての骨の折れる、苦しいことに倦怠の情を生ずるのは自然である。目下、外國資本家はその利權によつて、普通の勞働者に對しては賃銀のよい仕事を、專門技師に對しては財産をといふ工合に、あらゆる種類の便宜を提供しようとしてゐる。單なる法律の力で彼等に對抗することは極めて困難である。恰も小仕掛けの私人的取引を防止しようとする企て——これはレーニンが率直に誤つてゐたことを公言してゐる——と等しく困難である。共産主義を、必要な感激の高度に留めておく道としては唯一つしかないと思はれる。そしてその一つとは、外國の侵入軍を擊破してゐる間に帝國主義に發展した所の國民主義である。さもない限り、革命的熱情を生かしておくとの出來る期間は、軍國時代と建設時代とを通じてそれが必要な期間程、長くは續かぬ。萬一帝國主義にして一朝優勢を占むるに至るや否や、もはや純粹な共産主義の實現を希むことは勿論徒勞である。經濟力のみが政治上に働くものと信ずるマルクス主義者は、今吾々が考察して來たような困難は、經濟的なものでなく、心理的なものであるために、是を無視して居る。けれども彼等が無視したからとて、その困難が實在する點に變りはない。またボリセヰキ流に、自分達は人間の弱點を有せず、心理的法則に支配されず、困難な力の續く多年の間を、其本來の目的に何等の變化をも蒙らずに濟むものと決めてかゝることは、支配者として安全なことでな

い。」

是等總ての障害にも拘らず、ボリセヰキは成功するかも知れぬ。そして若し彼等にして成功するならば、彼等が支那及び印度の模範となることは、ありそうに思はれる。彼等は極めて重要な一事を明かにした、それは未發達の國に於ける社會主義は貴族的でなければならず、「階級意識ある無產者」を構成する人口中の一少部分を指導する、少數の精勵な知識分子の仕事でなければならぬといふ一事である。革命を指導するだけの能力ある人々が、最新の西歐思想を吸收し、英國や佛蘭西で時代後れと認められたことには一切滿足せぬので、是等の國々が、西歐諸國が遂げたような進步の仕方をすることは不可能である。ミリウコフはクロムウエルのような革命で滿足したかも知れぬ。ケレンスキーはダントンのような革命に滿足したかも知れぬ。けれども只獨り成功するの必要なだけの精力をもつたボリセヰキは、まだ起つたことが無い許りに西方革命家の間に今猶ほ信ぜられてゐるマルクス主義の革命を欲した。然し西方に於ては、マルクスの考へた通り、彼の革命は常に民主的なものだと考へられてゐた。今なほデモクラシーの不可能な露西亞に於ては、教育が一層廣く普及し得るに至るまで、何等かの形における寡頭政治が必要であり、此種の寡頭政治は共產黨の獨裁の中に見出されたのである。同じ理由、即ち今なほ露西亞ではデモクラシーが不可能だといふことのために、資本主義はデモクラシーの名を藉りてボリセヰキを批評し攻擊したのである。かようにして双方とも眞理の重要な部分を見逃してしまつた。即ちボリセヰキは、理論的には左樣でなくとも、實際的には、デモクラシーが社會主義の目的の一つだといふ事實を忘れ、その敵手は、デモクラシーは無教育な國民に突然施すことは出來ぬといふ事實を忘れたのである。」

けれどもボリセヰキは、血統にも依らず、富にもよらず、たゞ或經濟的及び政治的信條の信奉者の寡頭政治を發見することによつて、東方の政治問題の解決に、極めて重要な貢獻をした。此信條が、共產主義者のそれの如く、進步的な

建設的なものである場合には、それは外國の敵意を挑發するといふ只だ一つの理由によるの外、政治的に實行し得べき他のいかなる寡頭政治よりも優れてゐよう。けれども是は到底割に合はぬほど、非常な不便不都合を伴ふ。若し西方列强の政府が社會主義的であるか、又は多少中立的ですらもあつたならば、かような不便は起るまい。けれども英米の賃銀勞働者が、賃銀勞働者の利益を擁護する總ての者を壓迫し、飢えさせ、且つ投獄することを喜ぶような人々をその代表者に選擧し續ける間は、より未發達な國々は、社會主義への捷徑を執るために拂はねばならぬ代價として、吾々の敵意か、又は誠意のない、墮落を促すような友情を豫期せねばならぬ。彼等がその代價を拂ひ得るや否やは、これから分ることとである。

斯ようにして吾々は、未發達の國々に於ける社會主義の問題を支配する國際問題に立ち返つて來た。若し露西亞にして十分に强く且つ決斷力に富み、若し支那にして（これは決して不可能でない）遠からず共產主義者に支配せらるゝことゝなつたなら——農民を滿足させるレーニンの新しい方法が成功するものと假定して——亞細亞と露西亞とが歐羅巴と亞米利加との氣に入らぬ方向に發達し、社會主義の基礎の上にその經濟的獨立を確立するようなことに終るのも不可能でない。けれどもこの議論には餘りに『若しも』といふ假定が多すぎるので、よもやさうはなり得まいといふことゝなる。支那が現在のまゝに留まり、露西亞は西方列强の經濟的支配の下に、その工業が資本主義的方法によつて發達されるまで勢を潛めることの方が、ありさうに思はれる。その場合には、社會主義の最後の勝利——若しそれが來るとすれば——露國革命以前に一般に假定せられてゐたように、先進國から來るであらう。その場合には果して社會主義が來るかどうか、そしてどういふ風に來るか、については、吾々は次章に是を考察しよう。

insincere and corrupting friendship, as the price they have to pay for attempting any short cut to Socialism. It remains to be seen whether they can afford to pay the price.

We are thus brought back to international questions as dominating the problem of of socialism in undeveloped countries. If Russia proves sufficiently strong and determined, if (what is by no means impossible) China also comes in time to be dominated by communists, then—assuming Lenin's new methods successful in keeping the peasants contented—it is quite possible that Asia and Russia may be strong enough to succeed in a line of development displeasing to Europe and America and ending in the establishment of their economic independence on a basis of socialism. But there are so many *ifs* in this argument that probability is against it. It is more probable that China will remain, and Russia will relapse, under the economic dominion of the Western Powers, until such time as their industry shall have been developed by capitalistic methods. In that case, the ultimate victory of Socialism, if it comes, will have to come from the advanced countries, as was universally assumed before the Russian Revolution. Whether and how socialism may be expected to come about in that case, we shall consider in the next chapter.

munism can result. Marxians, who believe that economic causes alone operate in politics, ignore such difficulties as we have been considering, because they are psychological, not economic. But the difficulties are none the less real on that account. Nor is it safe for rulers to treat themselves, in the Bolshevik manner, as exempt from human weaknesses, not subject to psychological laws, and certain to retain their original purposes unchanged throughout any number of years of difficult power.

In spite of all these obstacles, the Bolsheviks may succeed; and if they do, they may quite possibly become a model for China and India. There is one very important thing that they have made clear, and that is, that Socialism in undeveloped countries must be aristocratic, an affair of a few energetic intellectuals leading that small percentage of the population which consists of "class-conscious proletarians." It is impossible for progress in these countries to come as it has come in the West, because the men who are capable of leading revolutions have absorbed the latest Western thought, and will not be content with anything acknowledged to be out-of-date in England or France. Miliukov might have been content with a revolution like Cromwell's, Kerensky with one like Danton's; but the Bolsheviks, who alone had the energy required for success, wanted Marx's revolution, which Western revolutionaries still believed in because it had not yet happened. In the West, however, as in Marx's thought, his revolution had always been conceived as democratic. In Russia, where democracy is as yet impossible, some form of oligarchy had to be found until education could become more wide-spread, and this form of oligarchy was found in the dictatorship of the communist party. For the same reason, namely that democracy is not yet possible in Russia, it was in the name of democracy that capitalism criticized and attacked the Bolsheviks. Thus both sides lost sight of an important part of the truth: the Bolsheviks, practically if not theoretically, of the fact that democracy is part of the aim of socialism; their opponents, of the fact that democracy cannot be achieved all at once in an uneducated nation.

The Bolsheviks have, however, made a very important contribution to the solution of Eastern political problems by discovering an oligarchy which is neither that of birth nor that of wealth, but that of believers in a certain economic and political creed. When this creed is progressive and constructive, like that of the communists, it is likely to produce a better oligarchy than any other that is politically feasible, except for the one reason that it rouses the hostility of the outside world. This is, however, such a very large disadvantage that it is scarcely possible to strike the balance. If the governments of the Western Powers were socialistic, or even more or less neutral, there would be no such disadvantage. But while the wage-earners of England and America continue to elect as their chosen representatives men whose delight it is to oppress, starve and imprison all who advocate the interests of the wage-earners, less developed nations must reckon with our hostility, or with our

as Lenin believed in 1918, six months or a year, or even a few years, the men who initiated the movement could have themselves carried it to a triumphant conclusion without any great change meanwhile in their own outlook and disposition. But it is now four years since the October revolution, and by Lenin's confession the work is scarcely begun. When the Bolsheviks speak of the period during which the dictatorship will have to continue, they seem to contemplate at least a generation. Meanwhile many of the original leaders will have died, while those who remain and those who replace them will have acquired the habit of arbitrary power. The practice of negotiating with capitalists and their governments will tend to produce an acceptance of their assumptions, as it often does in trade union leaders. Capitalists will endeavour to extend their concessions, and will offer corrupt bargains to induce such extensions. It is hardly to be assumed that all officials will be always incorruptible.

It is of course possible, for a time, to secure a very high moral level through enthusiasm and hope. ...., but it does not last forever. The road from pre-industrial production to well-developed State Capitalism (to say nothing of Communism) is so long that it cannot be traversed during an outbreak of revolutionary ardour; and after such an outbreak there is usually a period during which democratization and corruption are even more rampant than in normal times. An attempt to establish socialism in an undeveloped country, while the developed countries remain capitalistic, must pass through two phases, the first purely militant, in which the forces of internal and external capitalism are resisted, the second constructive, when the work of industrial development is undertaken under State management, and the population (probably with foreign help) is taught the more difficult parts of industrial processes. Russia is perhaps at the end of the militant phase, and has been successful so far as fighting is concerned; but the constructive phase is a more difficult test. During the militant period, men's combative instincts as well as their nationalism assist the enthusiasm for a new economic order. But when peace is restored it becomes natural to want an easier life and to grow tired of everything strenuous and tense. At this moment the foreign capitalists, in their concessions, begin to offer all kinds of advantages, from well-paid work for the ordinary wage-earner up to a fortune for the technical expert. To resist them by means of mere laws will be very difficult, as difficult as it has been found to prevent trading — an attempt which Lenin frankly declares to have been a mistake. There is, it would seem, only one force which could keep communism up to the necessary pitch of enthusiasm, and that is nationalism, developing into imperialism, as foreign aggressions are defeated. Otherwise the period during which revolutionary ardour can be kept alive will not be so long as the period required for the militant and constructive stages together. And if imperialism once gets the upper hand, it is of course vain to hope that any genuine com-

than through large-scale private capitalism. If the Bolsheviks succeed, Asia may escape the advanced forms of private capitalism; if they fail, the whole world will probably have to arrive at the stage at which the advanced industrial countries are now.

The success or failure of the Bolsheviks turns on three kinds of factors, military, economic, and moral.

It is of course obvious that success is impossible without an army sufficiently strong to repel all attacks that can be easily provoked. Any trade agreements the Bolsheviks conclude are the fruit of their success in defeating Kolchak and Denikin and holding the Poles at bay. If at any moment a combination of (say) Japanese, Poles and Rumanians had a good chance of defeating them, such a combination would of course at once declare a holy war against them. The only thing that may in time alter this state of feeling will be the investment of large amounts of new foreign capital in the form of concessions which a White government might repudiate. It is chiefly the military strength of Russia that gives it pre-eminence above other undeveloped countries.

The economic factors introduce more difficult considerations. It is necessary for the Bolsheviks first to import from abroad the minimum of machinery, rolling-stock, etc. required for reviving agriculture and restoring industry to its pre-war level. When this has been done, and it has become possible to purchase food from the peasants by supplying them with goods instead of paper, it will become possible to revive and increase the pre-war export of food and raw materials, and at the same time to develop Russian industry enormously. It is the early steps in this process that are the most difficult and dangerous. Import are needed first of all, and although a few of the most indispensable can be paid for in gold, the bulk will have to be paid for in concessions, since exports are impossible in these days of famine and collapse of transport. Russia's need being desperate, the concession-hunters will exact very severe terms. Each concession will become a centre of private trading, and will make it more difficult to keep the bulk of foreign commerce in the hands of the State. There will be loopholes for corruption, and it may well be doubted how much of the later phases in the economic recovery will take place on the lines of State capitalism. All these difficulties are in no way peculiar to Russia, but are bound to occur in any undeveloped country which attempts a method of development disliked by foreign capitalists. But though the difficulties are great, they are not economically insuperable; by sufficient honesty, determination, and energy of the part of the rulers they could probably all be overcome in time.

This brings us to the moral factors of success. It is here that the difficulties of the Bolshevik programme are greatest.

....

....

....; yet it may well be doubted whether even they, in the end, will be found to have enough for the carrying out of their original intentions. If the periods of time involved had been,

assistance of foreign capitalists has had to be abandoned since the resumption of trade and the adoption of the policy of concessions. The policy of developing industrialism without outside help entails such terrible hardships, over and above those that are in any case inevitable, that no nation, not even Soviet Russia, can face them. It is true that in England industrialism was built up without foreign capital, but the circumstances were very special, and not such as can be repeated. Coal and iron were plentiful and in close proximity to each other; new inventions, all English and confined to England by the Napoleonic wars, were cheapening production enormously; and above all, there were no other industrial nations to compete. In spite of all these advantages, the poverty and overwork of the operatives were appalling, and such as can only be imposed upon a nation subject to an aristocratic tyranny. We cannot hope, therefore, that a modern undeveloped nation, without special advantages, can become industrial without the help of foreign capital.

Under these circumstances, is it possible for a country like Russia or China to pass straight to what Lenin calls State Capitalism, without passing through the stage of large-scale private capitalism? To make the matter concrete, is it possible to have railways, docks, etc. built and owned by the State, and mines worked by the State, by means, partly, of borrowed capital, but without allowing the lenders any voice in the management? A strong State can do analogous things for ordinary purposes; for example, the holders of war loan were not allowed a representative at G.H.Q. to see that the war yielded good dividends. Nor did the French investors who lent to the Tsarist government demand a voice in the management of the secret police, although they knew that revolution might mean repudiation. In such matters, it is assumed that the interests of governments and their creditors are identical, and that therefore governments need not be interfered with by private capitalists. But in the development of new industrial resources a different point of view is customary, and a government can seldom effect a loan without selling some part of the national independence. In China, for example, foreign investors expect the concession of monopoly rights—railways, mines, etc.—before they will lend to a government. This makes State capitalism impossible in so far as the rights granted to foreigners are concerned. The money that they lend to the government is spent in bribery, paying troops, etc., not in productive enterprises; the productive enterprisers remain in the hands of foreign private capitalists.

In Russia, the Bolsheviks hope to restrain this policy of concessions within narrow limits, and to retain the bulk of the nation's resources in the hands of the State. If they could succeed decisively, the Russian State, or perhaps the communist party, could in the end replace the foreign capitalist as the exploiter of China, and could acquire a hold there which foreign nations would find very hard to loosen. The success or failure of Russia will probably decide whether it is possible to pass to Socialism through State Capitalism rather

of Capitalism and strive to direct it in the path of *State* Capitalism. This is economically possible, for State Capitalism exists in one or another form and to one or another extent everywhere where there are elements of Free Trade and Capitalism in general."

He proceeds to mention concessions and cooperative societies as examples of this policy.

On the subject of fitting the peasantry into a socialist system, he says:

"Is it possible to realize the direct transition of the state of pre-capitalist relations prevailing in Russia to Socialism? Yes, it is possible to a certain degree, but only on one condition, which we know, thanks to the completion of a tremendous scientific labour. That condition is: electrification. But we know very well that this 'one' condition demands at least ten years of work, and we can only reduce this period by a victory of the proletarian revolution in such countries as England, Germany and America."

"Capitalism is an evil in comparison with Socialism, but Capitalism is a blessing in comparison with medievalism."

"It must be the aim of all true workers to get local industry thoroughly going in the country districts, hamlets and villages; no matter on how small a scale. The economic policy of the State must concentrate on this. Any development in local industry is a firm foundation, and a sure step, in the building up of a large-scale industry."

We have thought it necessary to make these numerous quotations, because they contain admissions, based on experience, of many things which scientific critics have vainly urged upon the Bolsheviks both in Europe and Asia. The problem of what can and what cannot be done towards the hastening of the advent of socialism in undeveloped or partially developed countries, is made much clearer by Lenin's exposition of his difficulties. The great importance of the problem lies in the fact that, while technical and economic conditions are more favourable to socialism in advanced countries, the political conditions are more favourable in backward countries, for reasons which we shall discuss presently. If, therefore, the technical difficulties could be overcome by the Bolsheviks, they would have immensely facilitated the introduction of world Socialism. But the Bolshevik method has not only the difficulties recognized by Lenin. It has also others at least as formidable, as we shall now try to show. The result seems to be that, in spite of the political difficulties, there is more hope of the inauguration of successful socialism in the advanced countries than in those which have hitherto escaped any large development of capitalistic industrialism.

Industrialism in an undeveloped country (as we saw in an earlier chapter) must be aristocratic, and must at first entail great poverty for the bulk of the population unless it is inaugurated by foreign capital. The Bolsheviks are obliged to manage industry as autocratically as any Trust magnate, and are unable to afford more than a bare subsistence to their employees. Moreover the attempt to dispense with the

our Soviet Republic. If, for example, State Capitalism could establish itself here during the next six months, it would be an excellent thing and a sure guarantee that within a year Socialism will have established itself and become invincible."

Later on in the article he says:

"In the above-quoted arguments of 1918, there are a number of errors in connection with periods. Periods prove to be much longer than was then assumed."

But the question of speed need not concern us at present; it is the nature and direction of the movement towards socialism in undeveloped countries that we wish to investigate.

If one investigates Lenin's argument closely, one finds (if we are not mistaken) that its upshot is this: A government of convinced communists can limit the phase of private capitalism to rather small businesses, replacing large-scale private capitalism by State capitalism; also they can, by propaganda and by initiating industrial advances, enormously accelerate the movement from any one phase to the next; but they cannot enable a community to skip any of the phases altogether, or overcome the laws of economic evolution.

A few further quotations will help to elucidate the position taken up in this very important pronouncement.

"State Capitalism is incomparably higher *economically* than our present economic system," (i.e., that of Russia in 1921).

"Socialism is impossible without large capitalist technique."

"Socialism..
...."

"I will, first of all, quote a concrete example of State Capitalism. Everybody will know this example: Germany." "A victorious proletarian revolution in Germany would immediately and with tremendous ease smash the whole shell of imperialism
....
.................................."

"If the revolution in Germany is delayed our task becomes clear, to learn State Capitalism from the Germans, and to exert all our efforts to acquire it. We must not spare any dictatorial methods in hastening the Westernization of barbarous Russia, and stick at no barbarous methods to combat barbarism."

"The problem of power is the root problem of all revolutions."

"Our poverty and ruin is such that we cannot *immediately* establish large State Socialist Factory Production."

"It is necessary to a certain extent to assist the re-establishment of *small industry* which does not require machinery."

"What is the result of all this? Fundamentally, we get a certain amount (if only local) of Free Trade, a revival of the petty bourgeoisie and Capitalism. This is undoubted, and to close one's eyes to it would be ridiculous."

After explaining the folly of attempting to prevent all private trading, with a half confession of the fact that this policy has been vigorously pursued hitherto, he explains the new policy which he now advocates:

"Or (and this is the only *possible* and sensible policy) we can refrain from prohibiting and preventing the development

government in Russia has brought to the fore a new set of considerations, which partly confirm and partly confute Marx. The Bolsheviks are attempting to establish communism in a country almost untouched by capitalistic industrialism. This raises the question whether capitalism is, as Marx believed, a necessary stage on the road to socialism, or whether industry can be developed socialistically from the outset in a hitherto undeveloped country. For the future of Russia and Asia this question is of the most vital importance.

The Bolsheviks came into power with the intention of establishing communism at the earliest possible moment, and this intention they no doubt still entertain. But apart from all external difficulties, the internal obstacles have proved greater than they expected. This may be gathered from a very candid article on "The meaning of the agricultural tax" by Lenin, published in English in the first number of "The Labour Monthly" (July, 1921). What he says of Russia would be equally applicable to a socialistic China, or to India if it threw off the British yoke and became Bolsheviks. Lenin distinguishes in present-day Russia elements at five different levels of economic developement, namely:

"1. Patriarchal, i.e., to a large degree primitive, peasant production.

"2. Small commodity production. (This includes the majority of peasant who sell corn.)

"3. Primitive Capitalism.

"4. State Capitalism.

"5. Socialism."

The term "State Capitalism" occurs frequently in this article, as well as in others of his writings. It seems to mean the running of enterprises by the State for profit, i.e., in the same way as they would be run by private capitalists. It appears in the course of the article that it includes the running of railways by the State, whether in Soviet Russia or in pre-war Germany. The term is not defined in the article, and we do not profess to know its exact meaning. But the essence of the matter seems to be that under State Capitalism the State *sells* the goods or services concerned, instead of supplying them gratis to those who have a claim to them.

Lenin regards the later stages as higher in the economic scale than the earlier ones, and considers any developement from one of them to the next as an advance. He also *seems* to hold—though this is scarcely reconcilable with Bolshevik policy—that no stage can be skipped, but all must be passed through in their proper order. He argues that small commodity production must be encouraged because it is an advance on patriarchal peasant production; that large-scale private capitalism is better than small production (though he hardly ventures to say this government should encourage it); that State capitalism should not be opposed by socialists, because it is so much better than private capitalism; and that socialism cannot be brought about quickly even by a government which bends its whole energies to this task. He quotes the following passage from a pamphlet of his written in 1918:

"...... State Capitalism would be a step in advance in the present state of affairs of

transition from the present system to socialism is full of difficulty, and it is doubtful whether the attempt will succeed or will result in a return to barbarism.

Marx, whose prophetic insight was remarkable but not impeccable, conceived the transition with a schematic simplicity which does not appear at all likely to be realized. He thought—as was natural from the experience of England in the first half of the 19th century—that the line between capitalist and proletarian would always remain quite sharp so long as capitalism survived, and that the proletarian could never obtain more than starvation wages, i.e just enough to keep himself and his family alive. Gradually the capitalists would grow fewer through the concentration of capital, and the proletariat would grow more discontented and more organized through experience of their misfortunes and struggles against them. Their struggles would be first local, then national, then international; when they became international they would be victorious, owing to the immense numerical preponderance of the proletariat. Then, suddenly, by a revolution, the whole economic system would be changed, and international socialism would be established.

In all these respects Marx has proved to be partly mistaken. The line between capitalist and proletarian is not sharp: trade union leaders with comfortable incomes enjoy bourgeois comfort, associate with capitalists on equal terms, and often acquire much of the capitalist mentality. The iron law of wages, invented by orthodox economists to discourage trade unions, and accepted by Marx to encourage revolution, was an economic fallacy: wages in America, and even in England, now afford far more than a bare subsistence to the majority of wage-earners. The concentration of capital in few large enterprises has not meant a diminution in the number of capitalists, owing to the growth of joint-stock companies. The proletariat have not grown more discontented; they were certainly more revolutionary in England a hundred years ago than they are now. It is true that they have grown more organized nationally, but the war showed the complete futility, up to the present, of international organization. And if to-morrow a war were to break out between America and Japan, the proletariat of both countries would equal the capitalists in enthusiasm and surpass them in patriotism. Finally, the numerical preponderance of the proletariat has only been realized in a very few countries (of which Great Britain is one). Elsewhere they are outnumbered by the peasant proprietors, who as a rule side with the capitalists. In this last respect, however, time may yet justify Marx. Lenin's scheme of electrification is designed to industrialize agriculture, and thus give to the peasant the mentality of the proletarian. It is possible that technical improvement in agricultural methods may produce a similar change, less intentionally, in other countries. This is a very important consideration, and one which may decide the whole future of socialism; but unfortunately it is a matter as to which prophecy is exceedingly difficult.

The establishment of a communist

Socialism in Undeveloped Countries.

By Bertrand Russell.

What do we mean by "socialism"? The word is often used very vaguely, but it is not difficult to give it a precise meaning. The definition of socialism consists of two parts, one economic and one political, one concerned with the production and distribution of goods, the other with the distribution of power.

As regards production, all land and capital must be the property of the State—though perhaps the State might sometimes delegate possession to some large body of producers or consumers, such as a trade union or a cooperative society. As regards distribution, what is paid for each kind of work must be fixed by a public authority, with a minimum of what is required for bare necessaries, and a maximum of what will give the greatest incentive to efficient work. There is no need of equality of income for all as part of the definition of socialism; the fact that Chaliapin is paid more than a scene-shifter does not suffice to prove that Russia is still bourgeois. What is essential is that a man should not be able to extort profit by his possession of means of production whether land or capital. But socialism certainly has as its ideal equality of income, subject only to such modification as may be imposed by the special needs of various classes of workers.

On the political side, socialism is not compatible with autocracy or oligarchy, but demands that all sane adults should have an equal share of ultimate political power. Even the Bolsheviks, who oppose democracy during the time of transition, regard it as part of their ideal, and admit that socialism will not be fully realized until it is possible to restore liberal democratic institutions such as universal suffrage, free speech and free press. (This appears in their writings, and was confirmed by Kamenev in a conversation we had with him while in Russia). The different forms of socialism—State socialism, guild socialism, etc.—do not differ on this point, but only on the extent to which proximate political power is concentrated in the democratic State or diffused through various federated bodies.

For reasons which we have already given, it seems impossible that industrialism should continue efficient much longer unless it becomes socialistic. This is partly because the system of private profit rouses the discontent of the workers and gives them a sense of injustice, partly because the private ownership of land and capital confers upon the owners a degree of control both over private citizens and over the State which is dangerous, since it is used to increase private power and profit and not for the benefit of the community. But the

政友會の三頭政治

◆過激法案や、昇格案でサン〳〵パラ味噌をつけた達磨内閣は、まだ〳〵政權に未練澤山で、野狐を總務に廻はしたり、千坊を幹事長にすえたりして目先きを換へやうと焦る。

◆達磨は敵に比べて、薮袋は大きいが、經綸もなく、黨の内情も皆目解らぬ、そこで邦輔や竹二郎、雄などに馬鹿にされる、それに黨内で一番勢力のある邦輔、千坊一派が排達磨排竹二郎熱を漲らす、圭介と千坊とがいがみ合ふ、達磨からは狸も、友公も、千坊も離れ叛く、達雄と達磨とは昔からの犬と猿、忠造は毛が一本足らず、聰明は不聰明、源治は處々に釘の拔けた細工をやる、何処を見ても夜店の代物サ。

◆一寸した勇氣こそあれ、近代的思想に色盲の千坊がナンボふん張つた所でそれは丁度直江兼續が今日生れた位のところだ、矢張り北越の番頭位が落ちだろう、野狐は政友會ばかりでの野狐で、外交も解らず、近代的の素養もなく、眞逆に出せる品ぢやなし、邦輔もその通りだ。しかし何といつても現内閣ぢや友公の手腕が第一で、第二が野狐サ。

◆それだのに、政友會は野狐と邦輔と千坊の三人で車を動かし居る、少くとも今議會閉會間際からはそうした情勢だ、達磨なぞはホンの床の置物だ、ア、見えても野心家の達磨が心中平でないのは當然サ。

◆それにこの頃では千坊、邦輔等一味は達磨を蹴て友公を首長にする計畫を立てておる噂、野狐や宇一郎なぞは勿論その方に傾く、ナル程友公は華盛頓ではいくらか男を上げよつた、デコ達、喜重、スモールハニー等の間に立つて二寸ばかり頭角を現はした。がしかし竹二郎、狸、圭翁なぞが默つておるか、イヤハヤ面白いことが御座る。

◆所が、犬解村では不高明が煮切らぬので地方の黨員が騒ぎ立てる、アダ譯、忠治も何だこの頃の顔色ツタラない、モウ、犬解村は滅燈前のやうだ、殊に不高明の金離れの悪いと來ては全くお話しにならぬ、此點では矢つ張り達磨と遼吉が第一だ、しかし遼吉は今では金はなし、僚々は背く、足疾で歩行も自由にならぬ片輪ものだ。

◆それから、犬窮會もいろんな醜問題から、領袖の威光がなくなる、不利定も、不信光も彼の命を聽かず、それゆえデコ達までが上院で五光が剣落する、ドノ道一派に偏すればかくなるのは當然だ、所が不高明の上院に於ける勢力はまだ、まだ見じめなもので平東でも思切らなくてはとても天下はとれそうにない、そんな懐で天下が取れたらそれこそ大變だ。

◆蛮吾のヨボ振りは天下一品だ、楓相がノコ〳〵總理の所にお百度を踏む、そんなヨボ楓相なんかが娑婆氣を出すより、犬の糞でも喫いだがましだ、衆議院の梅干婆の毅や三郎なぞも尼寺落ちでもしたらどうぢや。

新興及び反動社會運動批判

オルガニザチヨーン・エシエリッヒ

室伏高信

一

赤いテロリズムと共に、白いテロリズムが世界を支配する。勿論、テロリズムは今に始まつたのではなくて、國家の歷史、權力の歷史は、同時にテロリズムの歷史である。何となれば、今日までの世界に、多數者が支配したといふ記錄はまだ一回も存在したことがない。そして少數者が支配する場合には、腐敗とテロリズムとが、不可避の統治方法であるからである。

テロリズムが支配階級から行はれると、それを白いテロリズムといふ。その武器は死刑、禁獄、追放、撿束その他。その執行者は警察、軍隊、裁判官、若しくば民間の志士例へば國粹會博徒その他。テロリズムが被支配階級の側から行はれる時に、それは赤いテロリズムといはれる。その武器は暗殺、暴動、朝鮮紊亂その他。その執行者はレニン、トロツキー、「不逞鮮人」「主義者」その他。

……「……」…………、…………、………………、…………、……………、………、…………、………、「…」……、「…」……、「……」…………、…………、………………。………………………（……………）……、…………………、……………………。

二

私が伯林に滞在してゐたのは、昨年の初夏から晩秋へかけて

の間であつた。この時は、獨逸の革命があつてから三年、經濟上の危機とともに政治上の危機が、短い間の旅行者にも、迫るような感じを、與へないではゐなかつた。先きにリープクネヒトの騷動があり、カップ・プッシがあり、メルツ・アクチヨーンがあり、そして昨年の夏は、第二のカップ・プッシが近づきつゝあるといふ感じを、多くの鋭敏な人々の心に印象しつゝあつた。外には、賠償金の壓迫が、獨逸の財界を、沈淪のどん底へと抑えつけてゐた。佛蘭西の反動政治は、獨逸の殘された富を、オーベル・シンジエンから奪いとつた。マークは底知れずに落ちて行く。人心がこれとともに底知れずに落ちて行く。伯林の街頭を華やかに横行するのは、猶太人と、日本人と、ヤンキーである。ライン地方に銃劍を提げてこの國の咽喉を扼してゐるのは聯合軍である。國步艱難であつて、人々は在りし日の祖國を憶ふ。私は一日コミシエ・オーペルに行つたことがあつた。「故　國(ヘイマートランド)」よ、オゝ、愛する故國(トイエレスヘイマートランド)よ―」舞臺の隅で老人の歌手が歌ふ。

獨逸の反動運動は、外敵の無慈悲な壓迫と相俟つて、昨年の夏に、その最高潮へと進められた。ドイッチユラント、ドイッチユラント、ユーベル、アレスー！どこの酒場でも、こうした歌が聞えてきた。人々は大びらに帝政を語る。時の政府は、「猶太(ユーデン)內閣(カビネット)」だと人々が罵しる。獨立社會黨の名士カール・ガーライスが暗殺される。革命當時には、どこかの下宿屋の隅に隱れてゐたヒンデルブルヒやルーデンドルフが、反動獨逸の神として全獨逸に跳梁する。選擧毎に、最右翼反動黨としてのドイッチエ・ナチヨナーレの勢力が加はつてくる。哲人カントの名によつて知られるケーニヒスベルヒの大學では、ルーデンドルフ將軍に感謝狀を添へてドクトル・メヂチーネの學位を贈る。タンネンベルヒの紀念祭が計劃される。勞働者と前士官との爭鬪から血が流れる。八月二十四日、伯林で催された戰爭紀念日には、約五萬の人々が集まつて、舊獨逸の軍國主義への合唱が始まる。ヒンデンブルヒとルーデンドルフとが音頭をとつて、前皇帝のヴヰルヘルム伯が、遠くアメロンゲンから「祖國のために」といつて祝電を寄せる。獨逸共和國の首都で、廢帝からの祝電に五萬の「赤子」が法悅の淚をこぼす。獨逸共和國は、この時、累卵の危うきに見えた。社會黨の諸新聞は、筆を揃えて共和國の危機を叫びつゝあつた。共產黨の側からさへも、協同運動の聲が起りつゝあつた。その翌日、エルツベルゲルが暗殺された暗殺の報が、初めてベルリーナー・ターゲブラットの夕刊で報道された時に、伯林の人心はいふべからさる混亂に陷つた。どこの下宿でも、どこのカフエーでも、人々はさわついてゐる。

流言浮説が傳はる。ヴヰルト首相と、ラーテノウとの暗殺計劃が傳はる。正に第二のカップ・プッシが來りつゝあつたのである。

三

獨逸の反動運動を政治上の最極に代表するものは「獨逸國(ドイッチエ)民的人民黨(ナチョナーレフオルクスパルタイ)」であるが、しかしそれよりももつと恐るべき團體はオルガニザチョーン・エシエリッヒである。この團體はドイッチエ・ナチョナーレ の姉妹團體であることは勿論であるが、しかし後者は兎も角も公けの政黨であつて、選擧場裡に投票を爭ひ、議會に七十餘名の代議士を送つてゐるから、エシエリッヒ團と全然同一だといふことはできない。エシエリッヒ團は秘密結社であるエルツベルゲルの殺戮者は、ドイッチエ・ナチョナーレに屬してゐるとともにまたこの團體に屬してゐたのである。カール・ガーライスを殺したのも、クルト・アイスナアを殺したのもこの一團の仕事である。それだけにこの一團は暗殺團(Mörder or ganization) として知られてゐるのである。暗殺は實にこの團體の最高の手段である。その目的とするところは無論反動革命にあるから、革命政府を仆して王政を復活することを期する。昨年九月エルツベルゲルの死後に、バーデン・バーデンでこの一團に屬する同地の暗殺團の規約が發見され、同州大統領がそれを州議會で朗讀してゐるが、それによると、この秘密結社の目的は一、凡ての反國民主義または國際主義、猶太閥、社會民主主義、左翼急進主義と戰ふこと、二反國民的ワイマール憲法と戰ふこと三、獨逸獨特の憲法のために戰ふこと、そして且つ一、凡ての革命化を妨げ二、愛國的内閣を確立して現狀の轉覆を不可能ならしめること三、ヴエルサイユ條約を無效にして國民の武力を回復する目的のために覺悟した國民的男子を集めることであると書かれてゐる。(Vorwärts, 24 Sept., 1921) 即ち共和政治を轉覆し、過激思想及運動(社會民主主義も)を排擊して、獨逸をカイゼルとユンケルとの昔に歸し、從つて彼等自身がもとの特權に復歸することが目的なのである。そしてこの目的のためには、暗殺、陰謀、煽動、如何なる手段も辭するところではないのである。

四

オルガニザチョーン・エシエリッヒの本部はバイエルンの首都ムンシエンにある。ムンシエンは一九一八年に、バイエルンのリープクネヒトといはれたクルト・アイスナアが共產共和國を建てたところであるが、アイスナアが殺され、第二のアイスナアといはれた青年社會主義者ガーライスが殺され、そして既に久しく獨逸反動運動の根據地である。そこは新獨逸の「新ボ

ツダム」だといはれてゐる。反動派の勢力は動かすべからざる根據をもつてゐて、人々は廢帝を呼ぶに、今も尙ほ「われ等の帝王」といひ、書店の店頭には、廢帝ルドヴヰツヒや、前皇儲ルツプレヒトなぞの寫眞が、倫敦で見るプリンス・オブ・ウエールスのそれよりも多く飾つてある。去年の八月十四日、この町で「聯隊日」が催された時には、廢帝も前皇儲もともにその祝祭に列し、人々は「帝王萬歲」を連呼した。嘗つてはバイエルンは、普魯西王に對する一敵國であつたが、また從つて普魯西主義の一敵國の觀を呈してきたのであるが、今日では、こゝが、「獨逸魂」の祖國である。獨逸における君主主義、封建主義、軍國主義のあらゆる古るき傳統が、バイエルンの地に復活してゐるのである。この地の一有力新聞の題字側には、その新聞の主張を明らかにするために、次のやうな標語が掲げられてゐる、「國王を戴く祖國」と。バイエルンこそかくして、新普魯西である。

五

オルガニザチヨーン・エシエリツヒの勢力は、獨り「バイエルンにおいてだけではない。東普魯西もまた Orgeschprovinz といはれてゐるほどに、バイエルンに次いでの、反革命の根據地である。否、バーデン・バーデンでも、ザクセンでも、ブランデンブルヒでも、チロールでも、獨逸あらゆる地方にはこの團體または提携團體の存在しない地方はないといつてもいゝであらう、前士官團體としての「獨逸士官國民同盟及「愛國兵士團」はみなこの一團であると見ることができる。その勢力は全獨逸を通じて百五十萬を超えてゐるといはれてゐる。しかもこの運動は富豪中の王黨によつて財的に援助されてゐるので資金も豐かで、運動方法も華々しく行はれる。昨年十一月初め、ザクセンで發見されたところによると、こゝにも有力な軍事的秘密結社があつて、バイエルンと堅く提携してゐるものであるが、それは取調の結果陸軍少佐シユナイダアなるもの其他を首領とし、ドレスデン及びライプチツヒの實業家から資金を集めてゐるものであることが分つた。そして沒收された金貨だけでも七十萬マークに達してゐた。また昨年十月初めには、チロールに矢張りこの一團としての「チロール防衛團」によつて計劃された革命政府轉覆の陰謀が發見された。(Freibeit, 6. Okt, 1921)

六

しかしエルツベルゲルの暗殺は、獨逸における反動運動の、最高頂點であつたかのように思はれる。その以後においても、例へば昨年十月十四日の伯林の市會選擧のやうに、反動政治の勝利に終つたような場合がないことはないが、エルツベルゲル

の殺戮は、却つて革命運動に對する大刺激となつた。彼の殺戮とともに、ヴヰルト内閣は反革命運動に對する從來の傍觀政策を一變して、高壓手段をとり始めた。昨年八月二十九日の大統領令がこれであつて、この命令の結果は反革命團を禁じ前士官連の制服運動を禁じ、凡ての反革命的宣傳を禁止した。この命令のために、共產主義の諸新聞例へば、伯林の「ローテ・フアーネ」、ハルレの「トリビユーネ」、フランクフルト・アム・の「コムムニスト」、ハノウバアの「アルバイタア・ツアイツング」なぞが發賣禁止の厄にあつたことも事實であるが、しかし最先きに犧牲になつたのは何れもドイツチエ・ナチョナーレ、オルガニザチヨーン・エシエリツヒ若しくはスチンネスの諸新聞である。例へば伯林の「ドイツチエ・ツアイツング」、「ドイツチエス・アーベントブラツト」、「ドイツチエス・ターゲブラツト」、「ズード・ドイツチエ・ツアイング」、それからバイエルンの有名な反動新聞「ミースバツヘル・ツアイツング」、ハンブルヒの「ヴルテ」、ゲラの「ハイマートボーテ」などがそれであり、伯林のスチンネスの機關「ロカール・アンツアイゲル」のような、比較的穩和な大新聞までこの厄に會つたのである。そして「ドイツチエ・ターゲスツアイツング」のような反動派の新聞紙が却て「言論の自由」を叫ぶような奇觀を呈するに至つた。

宰相ヴヰルトは飽くまで反動派と戰ふの決心をもつて、九月四日、中央黨會議の席上で述べて曰く、「今日の政府の職分は反動の根源を絕つことである」と。たゞに政府ばかりではなしに獨逸の無產者階級は、この革命の危機に佇んで、期せずしてその革命的情熱を燃やさずにはゐなかつた。その情熱は颱風のように起つた。そは無產者階級の間におけるあらゆる黨派的感情を排して、對反動運動のために、無產者階級の一大共同運動を導いたのである。私は共產黨の示威運動を見るためにポツダムへも行つて見た。また社會黨三派の共同示威運動を見るために八月三十一日、伯林のルストガルテンにも行つて見た。特にルストガルテンの示威運動は伯林始まつて以來の大示威運動であり、否、恐らく世界始まつて以來の大示威運動であり、政府の報告によると、五十萬の勞働者が一公園に集まつたのである。

……………………………………、……………………………………、

……………、………………、………………、……………、………………、

……、………………、…………、……………、…………、……………、

…、……………、……………、…………………………………………

……。……………………………、…………………………………………

…………………。……………………………………………………………

……、……………………………………………………………、

……………………………。

この示威運動は、眞に示威運動としての効果を擧げた。これによつてヴヰルト首相の所謂「反動の根源（クエレン、デア、レアクチヨーン）」は絶だれないにしても、少くとも、獨逸の反動運動は慥に一大打撃をうけたのである。

七

今日の世界は、白いテロリズムの横行する世界である。伊太利のフアシッチ、匈牙利のホルテイ、米國のレヂヨン、英國のダイハード、露西亞のウランゲル、コルチヤク其他、日本の國粹會と其支持者、佛蘭西のミルラン・ポアンカレ、獨逸のオルゲツシ、何れもみな反動革命運動の錚々たるものである。階級鬪爭が一定の時期に達した時に、かくのごとき現象が世界に例外なしに現はれてくる。昔は暗殺と無政府主義とは離すべからざるものだと考へられた。暴動と革命黨とは分つべからざるものと考へられた。しかし今日では、世界を通じて、支配階級と暗殺、支配階級と暴動とが、不可分的の觀念となりつゝある。然り、社會主義者が「暗殺」されて、王黨の機關新聞が發賣禁止となる！世の中は正に逆さまになつてきた。

……………、……………。

クー・クラックス・クラン

——（米國に於ける反動運動）——

新居格

一

アメリカに於ける反動運動として我等は K・K・K（Ku Klux Klan）運動を指摘することが出來ると思ふ。尤もその運動は伊太利に於けるフアスチスチー運動のそれのやうに左傾的諸運動を唯一の對敵とするものではない。しかし少くとも一部とするものでありその上、K・K・K 全體の意圖は一つとして反

動的でないものはない。取分け、武俠的精神や國粹的偏執を基調とする點に於いて反動運動的色彩を濃厚に持つて居ると云へる。

K・K・Kの運動は決して最近の發生ではない。それは半世紀以前に既に存在してゐた。それが最近數年前から再び新しく且つ力強く復活して來たのである。

わたくしはそれの最近事情を記叙する前に簡單にその起源と若干の歷史的推移とを述べる必要がありはしないかと思ふ。

先づクー・クラックス・クランの字義を解說すると Ku Klux は希臘語の kuklos から來てゐて circle の意味だ相である。而して Klan はたゞ反復韻として附け加へたに過ぎないので特に意味はない。この運動が起生した譯は黑人種が民族的連帶をなすべく秘密結社 Union league を千八百六十二年頃に作つたのに對しそれは公けの秩序なり安全たりに有害なるものとして米人の間に對抗組織を必要とするに至つたからであつた。その當時組織された數種の團體例へば「白椿の騎士團」「立憲協和防衛團」「蒼白い顏」「白色同胞」「安全團」「七十六の協會」(それが所謂正當のクランだつたが）等があつて略、同樣の目的、手段乃至組織を有してゐたのである。そして最後のものは千八百六十六年、パラスキーに發生したのであり、それが翌年再組織をすること なつて、四月ナシュヴイルの秘密會議から從來の絕對秘密、服從、忠誠の要求中、特に服從が軍隊的服從の嚴格さを加へると共に「目に見えぬ××」(Invisible Empire)を建設する意圖を決定した。千八百六十九年、首領は「目に見えぬ××」を解體するべく命令したが効果はなかつた。七十年の五月、議會は黑人種から權利を奪はうとするK・K・Kの陰謀に反對するために強行法 (enforcement Act) を通過させて干涉しやうとしたが直ちに不十分な事を發見して翌年四月峻嚴な規定の Ku Klux Act を通過させたがそれでも猶目的を達することが出來ず、更に千八百七十五年に Supplementary civil right act を出し芝居、ホテル其他に於いて社會的平等を與えたのであつた、其等の法律によつて何と云つてもK・K・Kの勢力は幾分弱はめられたのは事實であるがそれと共にK・K・K運動が對ネグロ問題より一轉して漸次に「如何にして白人の未來を支配すべきか」の志向に推移して來たのであつた。

二

最近復活したクー・クラックス・クランは過去卅年を醞釀期としてゐたにせよ所謂「目に見えない××」の主權者シンモンズ(William Joseph Simmons)の力と熱烈とのためであると云へやう。

共には一個のドラマチックな挿話がある。彼は十數年クー・クラックス・クランの復活を着手すべく考え、研究し且つ準備した。

時は千九百十五年の秋、感謝祭の夜、ゼオルジアアトランタの近くの山の頂きに三十四人の果決な人々を引具して登攀したがその夜更けの山顛、そこには身を切るやうな荒らい風が怒濤のやうに疾驅して鳴り、氷點下の寒さになつたがその壯絶な夜彼は血火十字の神聖なる熱情を感激し目に見えぬ帝國を半世紀の昏睡から呼び起そうと決心したのである。その感激は次ぎの年の四月に布告となつて投げ出された。それは斯る感銘的な記錄で人生の光の煌々と黒い死の影の中に寛容なる救濟、柔かな同情、同胞愛を規定する崇高にして愉快な義務に捧げる、資格あるすべての者は我等の祝福された領土の入口に近づくべく招かれてあり、而して婦人愛護の聖なる義務、すべてのものにまさりて白色優越を永久に保持し、人類を祝福し、至純なるアメリカ主義のために熱烈なる獻身の聖火を燃え立たす。要は騎士の魂だと云ふのである。

クー・クラックス・クランの精神を一層明劃にする爲にシムソンの書いた小冊子「クー・クラックス・クラン、過去、現在並に將來」(The Ku Klux Klan, yesterday' to-day and forever)の言葉を引用して檢してみやう。彼は次ぎの如く記敍する「各時代の歴史を通じて我等はまさにクー・クラックスの精神=××に反抗し××そのものさえをも蔑視する精神=と名づくべき表徴を見るのである。(中略)波斯の大帝國が未だならざる前に正義を强要するために作られた組織があつた。而してそれは秘密に働いた。云はゞ、それ自身の手××を納め取つたのだ。幾百年後に暴君に對する反逆は神の服從だとトーマス・ゼファソンは叫び權力によつて是認された。」

更に彼はユニヴァサル・サアヴイスのシカゴ代表者に向つて云つた。

「我々は基督教を信じない理由で猶太人を排斥する。合衆國政府とは別異である制度に忠誠であるために加特力を排斥する。英國教會若くは他の外國教會の一員である土地生れの米人には隔障あるものである。

白色人種の優越を確保するために我等は黄色人種の排斥と黒人種の公民權剝奪を信ずる。上帝の計畫によれば黒人種は奴隷として造くられたものなのだ。

しかし我々は人種的偏見を懷くものではない。黒人は過去に於いても今日に於いてもクー・クラックス・クラン以上のよき友を持たない。

その地位を知る所の法律を守る所の黒人は我々から恐るべき何物をも持つては居ない。我々は呼び出されるまで行動はしないが、必要なれば法を破ぶるものの胸に恐怖を敲きつけるであらう。我々は偉大な目に見えない不思議な力を持つものだ。

此等の意味を綜合し要約するとクー・クラックス・クランは秘密結社である事は昔ながらである。而してその中心思想は先づ白人優越の觀念から異色人種を排斥して彼等に對抗せんとするのである。白人優越の觀念とは云ひ條狂信的なアメリカニズムである。國粹主義者である。故にプロテスタントでない猶太人とカソリツクであるものを喜ばない。宗教的理由か又他の理由かは分からぬが、クー・クラックス・クランはアンチ・シンフエーンをも宣言するに至つた。ネグロの人種的協同に對抗したのを發生的理由とするものとしてはその排斥の範圍は隨分擴まつて行つたものである。この團體はかくの如くにして人種の不平等觀宗教の差別觀――それは近代的思想からみれば反動運動である事に間違はないが――を持つのみならず組織された勞働並に社會主義運動に對しても等しく反動的であるのである。

その點は後に書くであらう。

三

千九百十五年に前述した如く宣言をしたのだがその後數年間クー・クラックス・クランに就いて人々は少しも耳にする所はなかつた。

所が千九百二十年の秋ごろになつて、その呼稱が不穩の色調を以つてアメリカの新聞にあらはれるに至つた。その加盟人員も五十萬以上にのぼつたと云ふ事である。

千九百二十年十月廿一日の紐育トリビユーンにはピータアマクマホンが死んだ近親の土地分配事件に就いて未亡人のために南方旅行をしてゐたが南カロリナのトレントンでクー・クラツクス・クランの服裝をした一隊に襲はれ、列車から引づり出されてリンチをされ其上訴訟依頼人である未亡人の要求に反對する宣言にサインをさせられた。又それから十日程經た夜五百のクランスメンは選擧日の投票に際して違法のない事を黒人に警告するのだと云つて例の服裝をしてフロリダのシヤクソン街を示威した。その他白い假面の男が旅館から黒人の給仕をつれ出して前額に酸でK・K・Kの文字を烙き付けたり、若い白人の女を或るホテルの入口から捕え去つて數哩距たつた田舍にかつぎ出し裸體にしてタールを塗つて羽毛を植付けた後に街に歸したやうな例は多數に發生した。一昨年の十月から去年の九月廿五日迄の約一ヶ年間に各種の新聞紙を通じて報道された正確な件數は百五十二件であつてそれを分類すると殺人四、回復の出來な

い不具にしたもの一、鞭で打つたもの四十一件、タールを塗つて羽毛を植付ける事二十七件、誘拐五件、町を去るやうな警告其他の方法で脅やかされた個人四十三件、ポスタアや廣告で脅迫された團體十四件、貼札でクランスマンの行動を表示されたもの十六件になるのである。

(千九百廿一年九月廿五日のウオールド紙に據る)

その初めは幽靈のやうに思はせてネグロを嚇かしてゐただけに彼等の服裝はクリスマス・カロロに出て來るお化けのやうな格好をしてゐる。云はば傳奇的服裝である。白い帽子白い服裝そして目ばかりを出して馬の蹄を音のしないやうに布で蔽ふやうにする。探偵小說めいた又活動寫眞のやうな所が大にある。

彼等は秘密に音なく且つ神速に風のやうに行動する事を心掛けてゐるらしい。それは昔あつた如く復活したK・K・Kも同様である。首領シムソンは大なる魔法使ひの名で呼ばれて居り、其他發募鬼だの、妖魔だの、一つ目の大入道のやうな名があるのを見ても分かる。

去年の十月五日米國國會はクー・クラックス・クランの秘密結社の行動調査を決議し敢然としてこの「目に見えざる××」を非難した。そのために同結社員は立法保安當局に對抗すべく猛烈に活動を開始した。兩院議員の机上には日々十數通宛の狂暴なる脅威狀が送られた事がある。テキサスの判事ホーモンド氏は同洲に於けるクラン結社の支部員全部を殺人犯として告發すべき公訴狀を要求して「彼等を糾彈するなら自分に危害を加へるであらうと脅迫したものがあつたが予は彼等が若しも法廷で不穩の擧に出るなら峻嚴に處罰する」と言明した位である。

兎にも角にもアメリカに取つては困つた現象であつて或人はアメリカ合衆國を廣ろくポンチ畫にさせる狂的行爲であると云ひ、シルヴエル氏はネーション誌上で「過去の無法の傳統に胚胎し現在の偏見に坐す法外なる蒙昧主義であり、生きるに値ひしない。死んだ方がいゝ」と結論してある。又テキサスに起つた反K・K・K運動は「狂犬のやうに見つけ次第にクー・クラックス・クランの連中を打殺せ」と叫びこの上彼等が暴動をするならば我等黑人團體はテキサスの全市を燒き拂つてやると宣言するに至つた位である。以上は勞働運動以上にあらはれた事相に主義として筆を進めたが最後に社會運動とK・K・K運動に就いて若干を附け加へねばならぬ。

四

彼等K・K・Kが國粹主義の上に立つ以上勞働運動や社會主義運動に反對の地位に出るのは明らかであらう。カンサスシチーポスト紙はK・K・Kがノン、パーチザン、リーグに反對である事

の記事を掲げたがそれも當然の事である。

わたくしはクー・クラックス・クランの一團がハズリット夫人をアイオワ州のメーソン町で社會主義講演の演壇から引きずり降ろした事件を知る事が出來た。サミユウル・ゴンパース氏はウオールド紙に意見を掲げて云ふ「クー・クラックス・クランの如き團體の組織や存在はすべての人民の自由にたいする脅威である。それは民主主義的政府と原理とを轉覆しすべての心正しい人々に恐怖をなすものである。かくの如きものは明らかに輿論の力で壓下すべきでなければならぬ」と云つた亞米利加勞働聯合の一頭目として又勞働政策決定に就いてゴンパアース氏を扶けつゝあるマッシユウ・ウオール氏もクー・クラックス・クランと其行動を徹底的に調査をすべく聯邦政府に訪ねた彼も亦云ふ。「クー・クラックスは自稱帝王を僭しその信奉者によつて實行されてゐて亞米利加の自由を威嚇する。首領の稱號其物は既に非亞米利加主義を示して居る。亞米利加には帝王を入れる餘地はないのである。

自分はクー・クラックス・クランに屬する勞働組合員を發見することの出來ないことを喜びとする。勞働組合は民主主義を表示する。然るにクー・クラックス・クランは暗中で行動し、覆面で攻撃し、こゝかしこを僞欺する拔足差足の怯懦なる獨裁制を意味する。西北部地方に於いてはクー・クラックス・クランの動行は勞働者達にクラン主義の擴張が何を意味するかに就いて十分の警告があるべきだが大部分の地方ではクランは勞働組合に對しては激しい反對にあつた。自分も明かに機會さへ與えられば激しい敵對に立つであらう。南部地方ではクランは賃銀や勞働條件を顧りみずして黑人を勞働に追ひ遣つた。クランはあらゆる亞米利加の原則を脅威する狂暴なる制度である。クランの最も大なる魅力は輕信するもの、迷信するもの、下らぬもの、愚かなものに對してである。合衆國政府はよろしく正式に委員を設けてクー・クラックスの動作を徹底的に調査すべきである。民主主義のうちには目に見えざる帝國の餘地はない、而して自分の滿足する所は勞働組合全體の聲はクランの撲滅を要求することである」

全國郵便局書記聯合のトーマス・フラヘルチー氏の如きも全然ウオール氏の言說に裏書きしてゐる。

かくの如きクー・クラックス・クランが勞働組合のそれに對立して進行すべきものと何人も肯定しないが、程度の差はあれ目的の深淺はあれ、大概の國に略相同じき性質の反動運動が存在しつゝある事に我々は比較の興味を持たさるを得ない。人類進化の過程と反動の原則は相關的關係を持つものであらうか。

クラルテ運動の將來

小牧近江

クラルテ運動はアンリ・バルビユスがその中心になつてゐる間、例へバルビユスがその運動が政治運動でないことを宣言しても、結局共産主義運動化するであらう。そのことは最近バルビユスとロマン・ロオランの間に取かはされた公開書の中に明かにうかがはれる。アンリ・バルビユスは彼の主宰する「クラルテ」誌第二號の「ロランデイスムに就いて」といふ記事の中で、いはゆるロランデイストのあまりに現實からかけ離れてゐる主張と態度を批難した。といつて、バルビユスは決してロマン・ロオラン個人にあたり散らした理由ではなかつたけれど、ロオランは「一度は自個の立場を明かにしたかつたが、幸この機會に於て述べやう」といふ意味で、今年一月の「自由藝術」でバルビユスに對する公開書を發表した。さうすると、「クラルテ」誌の第六號は更にロマン・ロオランの公開書に對するアンリ・バルビユスの公開書を載せた。

彼は玆でその公開書の内容にわたつて、詳しく説明するものではないが、それを讀むことによつて、兩者の立場、兩者の思想がはつきり區別されることになる。また、それを讀むことによつて、均しく眞理を追求する仲間にも純然たる二潮流のあることが明瞭になる。兩者は玆にいふまでもなく同一のことを目的としてゐる。あらゆる過去の暴虐に對する反抗。しかも、その手段に於て兩者の間に、約言すれば實現主義者と精神主義者との間に、全く相容れぬものがある。ロマン・ロオランから言はしむれば、「クレラムボー」の中でも已に強く主張してゐる通り「窮極が手段を辯明するといふことは成　たない。手段こそ眞の意味の進歩といふ點で窮極そのものよりずつと貴重なものである」と斷言してゐる。その意味から言つても、ロオランは暴力には全然反對である。現在の暴力が如何に過去の暴力に對するための暴力として用ひられても、人間いマニタリテイとして、暴力の慣習が未來に於て更らに根強き暴力に化する杞憂があるからであると言ふので、ロマン・ロオランは過去の暴虐に對して

はアンリ・バルビユスと、また、凡の革命主義者と手を握ることがあつても、それは暴虐そのものに對する精神の反抗であつて、今日の暴虐、また、未來の暴虐、言はゞ凡ての暴主（ロtyrannos）の敵であると主張するのである。

　しからば、直接問題としてロマン・ロオランは今日のロシアをどう見るか。ロマン・ロオランから見れば、理論としての新共產主義は（今日の如き專制的形式では）人類のほんとうの進歩に適合しないと認めざるを得ない。そして、新秩序なるものが、人道と自由、それから、あらゆるものの中で最も貴重なるもの――眞理が無視さるるならば、例へ無政府主義またはセンチメンタリズムの誹を受けても、良心の自由を要求するものとしてロオランはそれらの革命運動に立入る理由に行かぬと主張するのである。

　さて、アンリ・バルビユスに言はしむれば、社會の動搖が、ロ先き許りで穩かになるものならば至極都合がいい。人類の幸福が、調和と理智で漸次革新さるるものならばこの上の希はない。しかし、バルビユスはそれを無期限に期待することが出來ない。人生は限りあるものである。そして革新は無限である。そこで、その無限に望を屬することの能はざるものは實行に依らなければならない。法律を修改するために更に法律をもつて强制しなければならない。かくして、クラリストは建設的正義と理性のためにプロレタリアと步行をともにしやうとする。從つて、アンリ・バルビユスから見れば、暴力の參加は一時的の過程に過ぎない。本問題ではない。今日の狀態を他の狀態に代へ今日の組織を他の組織に代へるためには今日の社會に於て見る人工的疵あとを消滅せしむるより他に手段がない。…………………………………………………。それ共產主義に到つてはロマン・ロオランの想像してゐるやうな、必ずしも一人の人間の頭から割出した procédé fantaisiste de gouverner ではない。共產主義は何人の發明でもない。カール・マルクスすらの發明でもない。マルクスは社會革命の幾何學的明確を我々に明示したに過ぎない。眞理はそれを釋明してくれる人を求めてゐるが、眞理は何人の獨占物ではない。マルクスは哲學的 speculation に對抗して現實に對する眞理を正直に、科學的に繼承して來たので、マルクスの主張する、また、ネオ・マルキストの主張する共產主義なるものは、社會生活の經濟觀念に立脚點を置いてゐる良心、及び理性の永遠の眞理であり、バルビユスの言ふ Magnifique et Vaillante Sincérité de la révolte のである。

……………………………………、…………

……………、……………………。「……………、…………
……、……、……、……。……、……
……………………………。」そして、

これから先き個人的 fantazies を捨てよ、君たちの思想、それがどんな思想でも、生活と切り離れたものならば、盡く誤りであると知れ。アルトルイズムは君たちの前に懸けられてゐる鏡ではないのだ。君たちの個性は金輪に過ぎない。そして、君たちは人間と人間との鎖でなければならぬのだ。(匕首を加へて)

アンリ・バルビユスとロマン・ロオランとの間に取交はされた公開書は單にこの二人の思想家の思想とのみ見るわけには行かない。これによつて均しく世界主義の中にも、二つの傾向のあることが、明瞭になつた。現實主義と精神の獨立主義と。そして、インターナショナルの思想を抱持する者に取つてこの際、その何れを採る可きかをはつきり定めなければならぬ時が來た

………………………………
……。」ロマン・ロオランはバルビユスに與へた書の終りで、「我々の二つの運動は相反するものでない。二つがあつて始めて完全になるのだ」とかう言つてゐるが、僕はそこが疑問だと思ふ二つの主張は窮極に於て合致するものであるかも知れないけれど、その手段が異ふのである。そして、その手段それが如何に大切なものであるかはロオラン自身が主張してゐる通りである。……●……………………
……………、…………、……………
…………………、……………
……………、……………………
…………………………。……
……●……………………。
……………、…………、……
……………、……………
……………………………。

ではクラルテの運動は將來どう進むだらうか。それは解つてゐる。益々具體化してくるであらう。頭の中の思想許りでは當然滿足が出來なくなるだらう。更に進んで言へば、主義を同うするインターナショナルの精神主義と徹底的に對抗しなければならぬ日が來るであらう。遠慮のない戰端が開かるることも架空ではあるまい。

僕は、また、前にも述べた通り、クラルテの運動は、バルビユスがその中心になつてゐる以上事實に於て、共產主義的色彩がもつと、濃厚になるだらうと思ふ。バルビウス自身は、クラル

テへの加盟者はクラリストとしては不羈不黨だと言つてゐるが、もしも、萬國共產主義が、社會的妄想として、理想に近いものであるならば、現實と社會生活根據として思想の自由を高唱するクラルテ運動として、理想世界の出現を早めるためにもつと具體的にその運動——萬國共產黨——と提携して行つてもいゝものだと思ふ。理想世界の實現のために。

……………………………といつた革命のアポロジイで滿足し、幷行近道を忘却するならば、いかに全世界に波及しようとするクラルテの運動でも、思想の權威も何にもあつたものではない。僕はそう思ふ。

ファシスチー

(伊國の反動運動)

瀧山四郎

一 ファシスチーの近情

三月三日羅馬發の電報がフユーメに於けるファスシスチー團の騷擾を傳へた事は人々の記憶に新たであらう。その內容はファスシスチー派の議員ギンダガファスシスチー團の義勇軍を率いて總督ザネラの政廳を襲擊し爆彈投下、機關銃射擊、一齊射擊を以つて猛烈なる戰鬪を開始し遂に政廳を占領してザネラの辭職を餘儀なくさせたと云ふ事である。

ザネラは警察隊の武裝解除をすると共に三月四日の午後「革命軍に降伏し市民國防委員會に一切の權能を引渡たす」旨の宣言を發してフユーメを撤退した。そこで假政府を組織した國防委員會は直ちに政府の全權を把握して秩序の維持を伊國近衞軍に委任し伊國政府に對してはフユーメの秩序維持を保障するに足りる代表者を任命すべく要求した。

もう一つはゼノア會議に對するファスシスチーの態度である。

ファスシスチーは聲明して『我等ファスシスチー團は社會主義者をしてゼノア會議を利用して親露會議にする事を許容しない。些さかたりとも過激派的な意見を表明するならば容易ならぬ事端を激成する事を注意しなければならぬ』と云つた。」

ゼノア會議に露國の参加は多少の問題の後決定して露國外相チチエリン等は遂に出席する事となつた。ファスシスチーの威嚇的宣言もあつたので伊國政府は露國全權を保護すべく特別に厳重な警戒手段を執らねばならなくなつた。即ち二百の騎馬軍警はチチエリン等の止宿するラパロの宿舎を警衛することになり、更に伊國政府は第一回の檢擧をして百餘名の危險人物を拘引した。伊國共産黨は自ら露國勞農委員を護衛しやうと申込むに至つた相だ。ファスシスチー派は挑發さえされなければ自發的には暴行はしないと言つて居るにせよ、過激派露國の全權が却つて護衛されねばならなくなつて危險人物の地位が所を代えたのは何たる皮肉であらう。

この點から見れば曾つては勞働者の工場占領や社會黨の勢力や共産黨の飛躍に仍つて悩まされてたる伊太利政府が一轉して反動運動に煩累を感ずる破目になつて居る譯である。

二　ファスシスチーと社會黨との平和協定

去年八月三日に（アヴァンチー紙に據れば）ファスシスチー團と伊國社會黨（Partito Socialista Italiano）勞働總同盟（Confederazione Generale del Lavoro）の代表者が羅馬に集會して平和的商議をした。

重なる案件は次ぎのやうであつた。

一、社會黨と共産黨との關係に就いてファスシスチーが提起した七月廿八日の通知を解決する事。

二、選ばれた五名の代表者は遲疑することなく脅喝、暴行、報復、懲罰、强奪、其他あらゆる種類の個人的暴力を終熄せしめる手段を執る事。

三、各派の徽章、記號、及び旗は尊敬さるべき事。

四、各派は相互にその經濟組織を尊敬し合ふ事。

五、現在（八月三日）の保障及び協定の侵犯をなさんとする凡ゆる行動は爾今、代表者によつて否認されべきこと。

社會黨は斷じて民衆運動の組織及び行動に關係しないことを宣言する事。

六、是等の條件の違反は直ちに（その責任を決定し、その判斷が公開さるゝ所の）裁決者の判斷に委任する事。

七、この目的のために各派の政治的並に經濟的團體は共通の協定に仍つて選ばれた社會主義代表二名、ファスシスチー代表二名からなる各地の仲裁裁判所を組織することに協力する事。

若し、今日以後十五日間内に各派が仲裁者を選ばなければ指名者は署名代表者によつて作られる事。

八、現盟約の精神に合致しない凡べての地方的協定は絕滅さる

べき事。

九、署名代表者は目的を一層容易に達成するために盟約の精神に就いて相互の政黨の確證を要求する事。

右の他に尙ほ二項あつたが、それは特に掲げるまでもないと思ふて省略したが右は羅馬のモンテシトリオに於ける議長官邸に於いてした協議の要點である。

これより前、七月廿四日の文書によつてファスシスチー團は（一）モチグリアニーに依つて通知して來た『社會黨とその目的が和睦と到底一致すべきでないと宣言する共產黨員との合同の意義及び範圍に就いて』、（二）『社會黨の諸機關によつて日々廓大しつゝある民衆運動を組織する團體と社會黨との關係に就いて』（三）『日刊新聞を含む社會黨の諸機關が片手落の記事や論說を書く事に就いて』、の三問題に關して說明を要求する必要のある事をデ・ニコラに對して述べた。デ・ニコラは右揭のうち第二、第三は會議の席上、討論で決せらるべきものとして差し措き第一の點に就いてのみ社會黨側の回答を要求したが社會黨のバッシイは直ちに返答して云つた。「社會黨はモチグリアニー氏の陳述と合致する。その意味は次ぎの如くに外ならない。若しも、ファスシスチー運動が共產黨員の意見が自由に發表される事に反對して制壓し或は暴力を用ゆるならば、（他の如何なるものの意見に就いても同樣だが）我が社會黨はファスシスチー運動に對して蹶起するだらう」。

デ・ニコラはバッシイの聲明をファスシスチーの議員團に傳へた所、ギウリアチーがファスシスチーの議員團委員はバッシイの宣言を承諾したと報告したので、萬事は滯りなく解決したのであつた。アバンチー紙（八月四日）報道によればファスシスチーと社會黨とは兎にあれ、一時は和睦を協定したやうである。しかし、前敍した如くフューメの騷擾と云ひ、ゼノア會議に於ける露國全權に對する聲明と云ひ、ファスシスチーは果して伊國共產黨員に對しては無論の事社會黨とも何時迄も和睦を守りうべきものであらうか。は疑問とされる。何故かならば傾向を著しく異にする二個の團體が協定する事は協定でなくして妥協であるからである。しかも、いやしむべき妥協其物である。何故に、伊國社會黨はファスシスチーと無用の協定を結んだのであらうか。結ばねばならなかつたのか。伊國の社會黨は近年實に無氣力の感が深かくなつた。それにしても八月の盟約の如きは我等をして解するに苦しむ仕儀であると考へられるのである。

三　ファスシスチーとは如何なるものか

わたくしは兎にあれ伊太利に於いて相當の勢力を持する、こ

の反動運動に就いて記敍の筆を集注させやうと思ふ。今更改めて說くまでもなくフアスシスチーは伊國の國粹會とも云ふべきものである。

その名稱であるフアスシスチー（Fasicsti）はフアスシエス（Fasces）と云ふ古羅馬の時代、王、執政官其他大法官等が列をなして行く時、リスタアと呼ばれた官吏が列の先頭に立つて捺ひ持つ所の束桿から來て居る。束桿が威力法權の象徵である事から推測しても、フアスシスチーの依立の理由も分かる。而してこの運動が起生したのは、休戰後、例の工場占領から伊國全土が革命的色調を帶びんとした時、の前後からである。フアスシスチー運動はかの革命的擾亂に反動する秩序維持と愛國主義とを抱合して生れたものである。更に約言すれば、社會主義の暴力政治に對する反動に外ならない。彼等の呼號する所はフアスシスチーの名目の下に國家を救濟し、世界に向つて王の特權を維持せんとする愛國的市民の一團であるとする點である。

去年の春頃、會員既に三百五十萬人を數へてゐると稱した。所謂中產階級の各方面を悉く網羅してゐるとも北伊に起つて今ではその勢力は全伊太利に擴大したとも云ふてゐた。加之、フアスシスチーの一指導者コンスタンチーニの如きは「フアスシスチー運動は流るゝ炎となつて全伊太利を燃やしつゝあるが、この炎は早かれ遲かれ、他の諸國にも傳播すべきものである」とさえ豪語した位である。

フアスシスチー團の主要人物としてはその創設者とも云ふべきベニート・ムツソニーや同派に取つてチピカルな情熱家たるフエルナンド・アグノレツチーを初めとして運動の指導者としてのトマーソ・トリチヤニー等が擧げられてゐる。先程總辭職したボノミ內閣の陸相ガスパロツトは共產黨嫌いのためフアスシスチーに好意を持ち、改革社會黨のスウシーもフアスシスチーの支持者である。また、愛國的情熱の詩人ガブリエル・ダヌンチオ其人も共鳴してゐると云はれた。而して確かに事實らしい所もあつた。

フアスシスチーに面白い事は創設者とも云ふ可きムツソリニーの如きが元は激烈なる社會主義者であると云ふ事である。彼はミランにある社會主義の機關紙アバンチーの主事であつたこともあり、更に、その少壯時代ホマグナに居た時分には極端な社會主義の主張者であり、マキシマリストの領袖セラチーと共に瑞西に逃れたり、墺國から追放されたことさえある位である。ビソラチーやボノミ（前內閣の首相）の如きを微溫な改革的意見の所有者である理由で激烈に攻擊したものである。かく

の如き極端なる社會主義者から一轉して千九百十四年の對獨戰爭を肯定する許りか、社會主義の同志にもその事を勸說した。然るにその努力の空しかつたのを見て遂に社會黨と社會黨の機關紙アバンチーを退き、戰爭謳歌の新聞「ポポロ・ヂタリア」を創立して辛辣極まる社會主義の反對者となつて仕舞つたのである。この事は我が國粹會なぞの成り立ちとは大に趣きを異にする。アグノレッチーは冒險好きの實行家である。フロレンスの學校で博言學の教授をして居たが希土戰爭が初まると、教授の靜かな生活を棄てゝ義勇兵として戰爭に參加した。後、英國に赴いてエヂンバラ大學に教鞭を執つたが、そこでも貧しき伊太利人の不合理的苦痛を救解するためにとて「相互扶助同盟」を組織して働いた。彼は常に何もしずには居られない性質を持つてゐた。そして色々の生活をして行つた。

故國フロレンスに歸つてからは土地を耕作したり、土地を借したり、牛乳屋にもなり、古本屋にもなり、劇場の監督にもなつた。美術品の蒐集家でもあり詩も作つた。對獨戰爭が開始されたとき、フロレンスの少年少女が歌つた軍歌は彼の作だと云はれて居る。それ丈で滿足せず又もや從軍志願をして砲兵として出戰したが休戰後はダヌンチオを援けて「豫備役同盟」のために努力した。彼の生活を検討しても分かる如く彼は戰爭の好きな愛國的熱情家である。

ファスチーは此等の人々の發想から生れたと思はれて居る。前記の事を考へても分る如くそれは理知的產物ではなくして感情の産んだものである。—而してその感情熾烈なとは愛國主義的情熱と深刻なる社會主義憎惡の反感である。從つて思想的根據は理論的には見出されない。云はゞ左傾運動に對する反動であつて一時の變態的異象である。伊國の或る都市でファスシスチーと共產黨員との激烈な爭鬪があつたときカールトン、ビールスは評して「暴力に對する暴力、死に酬ゆるに死と云ふ恐怖時代の無政府無法律の大洪水」云つたがファスシスチーは全く暴力に信係を置いたものと云はれても仕方がない。

四

ファスシスチーに就いてはわたくしは去年九月の某誌に稍詳細に書いた事がある。今再びそれを繰返したくはないと思ふがたゞファスシスチーが如何なる暴行を敢てするかに就いて簡單に記敍して置くであらう。最近の事は本稿の最初の所に書いたがファスシスチーは同盟罷工破り、勞働契約の蹂躙私有財產の保護、現存制度の防衛等に熱心である、そうしてその遣方は果斷で、二者その一つを選らべと云ふ方法を用ゐる。フロレンスに電氣工夫の罷業があつた時ファスシスチー團員は發電所の主任を

訪問して一時間内に點火するか、でなければお前自身やお前の家族の死か二者その一を擇ばなければならぬと脅迫した事があるが萬事そうした方法である。又ムセローであつた例だが、農民が罷業して收獲をしない時ファスシスチーは運送自動車を驅つて小作人の代りに刈入れをした事があつた。その際も小作人に宣言して云ふ「若し地主に復讐するものがあるならば共者及びその家族は報復を覺悟してゐなければならぬ」と。

右の如くであるから工場都市では工場經營者たる資本家により又、農業地では地主によつて好意を持たれるのは當然である。ファスシスチーの社會主義憎惡は既叙の通りであるがそれは單に社會主義運動に限らず一切の左傾的急進運動を嫌厭する。その結果として急進團體の壓迫急進主義者の集會妨害、急進新聞の破壞等を數次行ふた。ミランの社會黨本部や勞働組合本部は燬かれたり或は掠奪されたりした。チウリンや、トリエストでは勞働會館が燒かれヴイア●デルグレコに行はれた社會主義の集會には爆彈が投下された。社會黨の機關紙「アバンチー」は印刷工場を破壞され無政府主義の機關紙「ルマニタ●ノヴア」は襲擊された。去年三月の上旬ファスシスチーの狂暴なる突擊がトリエスト、フロレンス、ルグリアの工場勞働者に對してなされその爭鬪には共產黨員も蹶起したが共產黨の一首領ラヴアギニーは遂に暗殺された。其他チョッチヤの市長は社會主義者の[illegible]を以て二十四時間の猶豫を以つて辭職を餘儀なくされた。街上で社會主義者に出會ふたような場合にはファスチスチー團員は拳銃を以つて脅威した。かくて社會主義者は危險なしには路上を歩くるとも出來ない位であつた。平素に於ては左傾運動の壓迫に鋭意である所のファスシスチーは總選擧でもあらうものなら極力社會黨の氣勢を削ぐことに努めた。取分け、社會黨と政府黨との競爭が激甚で形勢の混亂を來たしてゐるやうな場合にはファスシスチーの青年團は棍棒携帶で選擧區に乘込み、秩序維持の名の各下に必ず社會黨の妨害と壓迫とをしたようである。

然るにファスシスチーの狂暴に對して社會黨は餘りに無氣力の感があつた。それに反して共產黨員は少數ながら常に勇敢に抗爭した。莫斯科政府が伊國の社會黨を見くびり、共產黨のみを唯一の革命團體として承認したのも無理からぬ所である。昨年四月中旬タスカニーに於つて共產黨員は大にファスシスチーと交戰したが勇敢なるファスシスチーのために擊破された。プラトーでもフロレンスから來援したファスシスチー團員四百名のために同領され占地の共產派吏員は脅迫されて止むなく三色旗を揭揚したが、ファススチーが次の村落に進擊するのを邀擊して共產黨員は猛烈に爭鬪した事がある。ゼノア會議でもフ

アスシスチー」團の脅威から身を挺して共産黨員が露國全權チ、エリン等を擁護する事を宣明したのは既記の通りである。

八月の商議に際しフアスシスチーが社會黨と共産黨との關係に就いて質問を發し常々共産黨員を目の前の瘤としてゐるが如く想像されるのも譯があると思ふ。

五

わたくしは倒叙的に伊國の反動運動である所のフアスシスチーに就いて概說した。

思ふに動反動の物理的法則は人間進化の徑路にも免がるべからざるものであり、動のそれが強い程反動も亦強く、その逆に云つて、反動の氣勢の昂まることは又動の勢力を促進せしむる機緣を示すのである。」フアスシスチーはその運動を誇稱して「秩序ある反逆」であるとした。

しかし事實が證左してゐるやうにそは決して來秩序のあるものではなかつた。狂暴にして不當なる暴力への逆轉に過ぎなかつた。それは害惡の害惡とも云ふべきであると思ふが、それにしても伊國に於いて相當の勢力を有し、時としては民衆は勿論政府をも手古摺しつゝ存在を續けてゐるのは何の譯であらう。近頃歐洲より歸來した友人の話に仍ると伊太利では在鄕軍人團が更にフアスシスチーに反抗して立つに至つたと云ふ事である。わたしの手許にはまだ那邊の消息に關する材料はないがそれが眞であるとすればこれ亦當然あるべきの現象と云つていゝ。わたくしは伊國の將來に就いて、社會黨殊に共産黨とフアスシスチーとの相關關係は相當興味ある題目であると信ずるものである。

サチアグラハ運動

饒平名智太郎

一

人類の歷史は、自由の展開若くは自由の獲得に對する鬪爭史であるとは、よく聞かされる言である。自由に向つての獲得運動があるところには、必ず相對的に傳統固執の頑迷な運動があ

のだ。印度に於て、英國の統治が確立され傳統化して以旣に百六十年の歳月を閲し、その官僚政治は、根底深く植え込まれた。かくて印度人は、政治に於て、發言を許されず、行政、軍事其他の各方面に於ける役人の登庸も狹く限定され、尙ほ言論集會の自由をすら與へられてない。經濟に於ても、その資源は悉く、英國より搾取され、苛税のため農民は、充分農耕をなす餘裕がなく、年々七千萬人近く饑餓に瀕する人口を出す痛ましい狀態に放擲されて居る。

そこには、印度人のための政治はなく、英人のための政治があるのみだ。印度は面積より云へば、英帝國の大部分を占めながら、未だに責任政治でないからたゞに一單位として承認される能力をも、認められて居ないのである。

世界文化の思潮は、日に進み月に進む、ひとり印度をのみ訪れないことはなかつた。殊に印度は、クラシカルな國で、幾多の誇るべきそれ自身の文化を持ち、嘗て一度も外國の支配を受けたことのない印度と印度人である。彼等に大なる自負心があるのは、寧ろ當然ではあるまいか。

歐洲大戰後、民族自決の標語をモツトーとして、印度人が蹶起して、英國に挑戰しその侵略されたる自由を、一擧に挽回せんとしたのは、余りに見えすいた歷史的必然であつた。

その必然の勢を、代表して居るものが、非暴力的非協同運動の名を以て知られつゝある「サチアグラハ」の運動である。

二

此運動は、その創始者たるマハトマ・ガンヂイが過去三十年間宣傳し且つ實行し來つたもので、最近の非暴力的非協同運動にまで發展するには、幾多の進化を經たものだ。

その原則とするところは、もとより終始一貫して絕體的宗敎的のものである。即ち眞理（サチア）の把持（グラハ）隨つて「眞理の「力」、「愛の力」若くは「魂の力」を意味し、そのためには、敵に暴力を加ふるを非とし、忍耐と同情によつて、敵を誤謬より引き離すべきである、忍耐とは自ら惱むことであるから、敵に苦惱を與ふるにあらずして、むしろ我自らに忍ぶことに依つて、眞理を確立すべきであるといふのである。だからそれは眞理を何處までも把持して行くためには、困難迫害は無論のこと、死そのものをも厭はないといふ意味で、隨つて本質的に一種の宗敎運動で、內心の洗淸と贖罪との手段に相當するものである。

けれどその適用即ち運動の種類に至つては、その置かれたる環境によつて種々あるべきである。ガンヂイが、その二十有餘年の南亞生活に於て、目擊したるものは、人種的偏見より胚胎

した白英人の印度人に對する屈辱、苛政、惡法であつた。だから彼の「サチアグラハ」運動は、この白人の眞理を無視したる誤謬に對つての戰鬪であつた。

そのためには、彼自身は幾度かの投獄と危害を忍ばねばならず、又、其運動に參加したる數千の印度人の男女は、同じく投獄されねばならなかつた。それでも彼等は、該運動の精神のために、暴力を揮はず壓制者をも呪咀せず、靜かに各自の身に苦役を耐え忍んだ。

此運動は、又ガンヂイの歸國によつて、一九一四年以來、印度に推し廣められた。

當時彼は、英國の自由主義を大體から承認して居たから、英國を支持して印度の自由を齎らさんと考へた。即ち彼の「サチアグラハ」は、英帝國内に於ける不平等及惡法を矯正することと勞資間に横たはる爭議に向つて、適用される運動であつた。彼はアーメダバッドに「サチアグラハ」協會を設立し、各地に支部を置いて、その教義を宣傳し、そしてそれは主にプロレタリアと青年間に迎へられた。彼の淸教徒的禁慾獻身の生活態度は、宗教的平和的民衆の崇敬を受けて、該運動の傳播を一層容易にする力があつた。

三

然るにかのロウラット法案とパンジャブ大虐殺事件とカリフエーと問題とは、全くガンヂイをして、信を英國に絶たしめた。かくて彼は英人に向つて、『諸君が、この大國を統治して居ると、吾々は、日一日と奴隷化して行かねばならぬことを知りながら、如何にして諸君と協同して行けやうか』と云つて、それ以來（一九一九年）彼自らも、從來政府に協同を與へて支持して居た態度を、撤回すると同時に彼の國人にも又、政府との非協同を勸說するに至つた。然かもこの場合「サチアグラハ」運動者たるものゝ態度は、徹頭徹尾非暴力的でなければならないから、愛蘭に於けるシンフエン黨の如き暴力に依らざる他の方法を見出さねばならなかつた。

これ非暴力的非協同運動のプログラムの案出されたる理由で、外形に於て、それは印度の獨立運動であつて、英國政府の崩壞を策するものであるけれど、決して印度の民心を頽廢せしめず、英國をも憎惡せず、却つて英人を教導すると同時に、印度人自らも眞に人となることに依つて目的に到達せんと考へるものである。それでこの運動は、政治運動であると共に宗教運動であり、否、より多く宗教運動であると云へる。

從來の政治運動としては、種々の分派があつた。極左派とも云はるべき虛無主義者若くは宗教的反感より一朝にして英國政

治の絶滅を謀るもの、組織的革命を企つるもの所謂、テロリスト、建設的國民主義者、溫和派（議會派）又は受動的抵抗主義者等の如きそれであつた。

「サチアグラハ」運動は、先づ受動的抵抗主義者に容れられ、後には印度に於て、最大の政治勢力たる國民議會の綱領となつた。暴力を可とする革命主義者の中からも、多くの信奉者を出した。現にテロリストとして有力な役目を、印度革命に於て演じた某氏の如きは、私に語るに、『今まで自分等の教へられたことは、全く忘れてガンヂイの「サチアグラハ」を學び直さねばならない』と興味ある物語を以てした。

此運動の發生により、印度の政治運動は悉く、淨化され統一され、今日では恰も燎原の火の如き勢となつた。

四

非協同のプログラムには種々あるが、大體から云つて四つの階梯を經て實現された。……………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

……

右のプロセスは既に試みられつゝあるが、たゞ最後の納税に關する階梯のみは、未だ完全に行ひ得るの雰圍氣に到つて居ない。納税に對する場合もさうであるが、全く市民的不服には、個人的と集團的とがあつて、去年十一月四日デーリーに開かれた全印度議會委員會の決定に依ると、個人的市民的不服の場合には、その個人は、手紡ぎが出來ること、內國產の手織り木綿を着て居ること、宗教の如何に係はらず相一致すること、絶對的に非暴力的であること及印度教徒に於ては、特殊階級（日本の穢多に相當する）の制度は自治主義者にとつての恥辱であることを、實證的に信ずること等を以て條件とし、又、集團的市民的不服の場合には、その一區域が一體となつて實行し、そこではスワデシを遵奉して多數が其地方製の手紡織綿衣を着て、そして他の全ての非協同の個條を實行して居ることを條件とする。隨つて、そはよほど「サチアグラハ」の精神が、一般に徹底して居なければ、實施されないものである。

即ち「サチアグラハ」運動は破壞的なところは少しもなく、どこまでも用意周到で建設的である。スワラジ（完全の自治）の前にはスワデシ（國產品使用）を先要條件として確立せねばならないといふので、外貨をボイコツトし、農業と土產工業、即ち手紡織綿布の生產及び使用を奨勵し強調しつゝある。そして新印度の國旗までが、紡績車をシンボルとして居る。

五

……………………………………「……
…」…一…………、………………………、………
……。……、…………………………。……
…………、………、……………………
……………………………………。…
…………………………、「…」
……………………。
……、……、……………………
……、………………………………。……
………、……………………………
……。…………………………、……
…、…………………………………
……………、……、…………、
パンジャブの不名譽、アムリツサーの虐殺及回教徒に對する背信とに對して責任ある政府の謳歌に過ぎないものであつて見れば、彼等に加へられる侮辱であるとしか考へられなかつたのだ。

その最近の活躍は「サチアグラヒ」即ちこの運動の宣傳者とも云ふべき義勇軍の募集であつた。そは全國に白熱的に行はれ、そして義勇軍のスワデシ宣傳及ピケチングは、最も官憲の忌諱に觸れ、言論、集會及出版は大にその自由を剝奪された。公會若くは示威行列は禁ぜられ、五人以上の集合は公會と見られ、ピケチッング及宣傳も壓迫干涉され、新聞の發行禁止は相次いで至つた。そこで、この三大自由の獲得が、焦眉の問題となつて論ぜられねばならなくなつた。

その抗議として、去る一月二十九日バルドル地方にて、集團的市民的不服を宣したのであつたが、他の地方に於けるチョウリチョウラといふ村に勃發した暴動は、ガンヂイをして、未だそを實行し得る雰圍氣にあらずと思はしめ、國民議會の實行委員會はその宣言を、撤回するの決議をして、更に綱領を新にして、この驗的「サチアグラハ」運動の陣容を立て直す必要に迫まられた。

上述の如くこの運動は、政治運動の形をとるけれど、その實理想主義的宗教運動であるから、……の對策たる壓迫、投獄其他の官僚式非文化的手段によつて、到底剿滅し得るものでないことは、明かである。

支那に於ける非宗教運動

柳瀬　清

北京大學は近代支那文化史の上に、重要な位置を占めた。所謂北大系統の新人達は、孫文氏一派の社會革命派とは別途の使命の下に、思想、藝術、教育の方面に、華々しい黎明運動を試みた。此運動の根幹となつたものは、校長蔡元培氏であつて、彼の腹心となつて、其枝葉となるべき新人の羅致に努めたものは、教授沈尹默氏であつた。

かくして北京大學には、陳獨秀、胡適、周作人、王撫、劉半儂、羅家倫、錢玄洞、康白情、陳大齊、陳啓修、李大釗の諸氏が集つた。さうしてそれ／＼專門的立場にあつて、思ひ／＼に、新らしい主張、運動を起したが、これを總括すると彼等は、孔子教反對、文學革命を提唱し、舊道德の排斥、家族制度の破壞を主張し、更に社會主義乃至無政府主義に走るものもあつたけれども、尚多分に人道主義的傾向を有し、文化の普及及び宣傳の爲めにも眞面目に努力した。

此運動は本來全然思想的方面に限られてゐたけれども、他方に於ける實際派とも目すべき社會革命派の運動と相待つて、支那各地の青年學生の間に燎原の火の如く擴つたが、しかし最近に到つてから、漸く下火になつたものと一般には解せられた。其樣な見方は勿論表面的には間違つてはゐない。云はゞ彼等は或點まで蓄積せるものを吐き盡し、云ふべきを云ひ盡したのだ。尠くとも最早宣傳の役目を終つた所であると云ふ事が出來る。そこで此運動は新しい目標を見出して、それに向つて進まなければならなくなつたのであつて、其目標こそ最近の非宗教運動であると云はれてゐる。

四月四日から九日に亘つて、第十一回世界基督教青年大會が、北京の清華學校で開かれ、米國のモツト―博士其他、三十四ケ國に亘る各國の名士學生等が集つたが、此大會の計畫に刺戟せられて、北京の學生等の間に早くから反基督教の風潮が彌漫し開會間際となつてからは、北京大學教授李大釗氏等を中心とする北京大學、女子師範、法制大學、交通大學等の教授學生

の一團が、反基督教同盟を結び、公然基督教抹殺を叫んで、世界基督教青年大會と對抗したのであつた。三月十七日、彼等の發表した宣言書によると、基督教及び基督教會を猛烈に非難し、罪惡の巣窟、資本主義の手先、科學を無視する邪教であると痛撃を加へてゐる。四月九日の午後から、北京大學講堂に於て開かれた講演會には、蔡元培氏も出席し、科學と宗教の矛盾を說き、基督教傳道の弊害と、支那に於ける基督教の資本主義的色彩等を指摘して、熱辯を振つたと云ふ。

此運動は勿論に眞先に上海に飛火した。上海では陳獨秀氏の如きは、やはり主導的地位に立ち、非宗教學生同盟會の如きものが組織せられたが、それが廣東に波及すると政治的意味をも加味して、廣東政府の有力者等が後援者となり、特に汪兆銘氏は、宗教毒民論を發表して、廣東に於ける非宗教同盟の主旨に賛成したゝめ、俄かに氣勢を揚げた觀があつた。た

更に他方に於ける代表的團體である南京非宗教同盟の檄文によると、

一、基督教は思想の自由を拘束する。

一、奇蹟を信しなければならぬ非科學的宗教は、科學智識の普及を急務とする支那のためには排斥すべきである。

一、基督教は自由の名に隱れて白人萬能の思想を普及せしめるものである。

一、基督教の拘束の下にある教育及び青年を解放しなければならぬ。

と云ふのであつて、總體として見る時は、單に基督教に對して反感を抱いてゐるもの、基督教主義の教育を非難せんとするもの、總て宗教を否定せんとするもの、更に此風潮を利用し、又は之に雷同するに過ぎないもの等、必ずしも一致せぬが、其主導者が、主として北京大學系統其他の新人達である所から見ても、其運動の基調となつてゐる所のものは、依然として、新文化運動の大潮流であると思ふ。非宗教運動は新文化運動の流れより見て、本來決して、反動的思想の運動ではないと信ぜられる。

勿論非宗教運動は今に初つた事ではない。非宗教主義は、既に北京大學系文化運動初期よりの一要素をなして居たのであつて、其中核と目せられたものは、北京大學週刊に據て居た顧盤白、黃兼生氏等の眞理教運動であつた。彼等は一方に於ては北京大學系統文化運動に於ける無政府主義的傾向の代表者であるが、其眞理教宣言にはかく云つて居る。

我等の新しき宗教は、即ち我等の信じて疑ふべからざる『眞理』である。凡ての政治、學術、制度等我等の認めて完全な

りとするものは、理性に合し、世界の潮流に適應して、以つて我等の生活を改善するに足るものである。是れ即ち我等の『眞理教』の信條である。と

眞理教宣言は非宗教主義に就て述べた所のものではないが其傾向は明かに含まれてゐる。そればかりでなく、孔子教反對と云ひ舊道德の排斥と云ひ、家族制度の破壞と云ひ、北京大學系統の新人達が主張し來つた所のものは、決して生ぬるい已成宗教と道連れにはなれないものであつた。であるから、非宗教運動が最近に至つて、基督教青年大會に對抗するために、急に氣勢を揚げるやうになつたからとて、單純に反基督教運動、又は排外運動と早合點してはならないと思ふ。彼等としては、已に主張し來つた所であるばかりでなく、眞理を尊び、科學を重んずる結果、一つの過程として宗教を排斥するに至るのは、免れ難い事であると、彼等の運動に對する外人方面の非難に對する辯解の中にも、これを述べて居る。

彼等は所謂『自由への道』を驀地に進みつゝあるのだ。只、最近までは傍系に過ぎなかつた所のものが、本流に進んで來たと云ふに過ぎないのであらふ。

けれども全々別個の觀察點よりして、最近に於ける盛んなる古學の復興を閑却する事は出來まい。又五四運動以來の學生運動が、主に基督教主義教育系統に屬する學生等の手に依つてなされた事に對する反動的現象をも、忘れてはならないであらふ。更に支那に於ける數年來の想思界の動搖も、世界大戰が濟した一つの現象であると見る時には、最近に到つて、支那の思想界も亦、漸く冷靜に歸らんとしつゝある事は、充分に認められる。

其樣な立場から見ると、非宗教運動も亦、場合によつては反動的色彩を增す事になるであらふと、思はないではない。と云ふのは、新文化運動は、已に排日運動と好い道連れになつた。非宗教運動を利用する背後の魔の手が、或は非宗教運動に參加する衆愚の跋扈が、排外熱、復古熱を多分に加味する事にならないと、誰か保證する事が出來よう。

三宅雪嶺序　武藤貞一著

最新刊

廿一世紀への道

定價一圓五十錢　送料十五錢

日本と英米の興亡豫斷？

◇讀賣新聞評　最近時國際變局の跡を皮肉に細叙しつゝ新世記へのこれが轉回を豫言す首尾一貫した警拔な論策で獨逸の軍國主義を白人國家自爆の道火線であると說き英米これに續いて今日最早國家資本主義の十字架上にある斯くて世界全人類の黎明期が近づいた新しい廿一世紀には白人の銀夜去つて黃人金日輝くと斷ずる筆觸快達然も例證を國史の興味ある部分より自存に抽出し來る所など讀書子をして思はず拍案せしめる妙味がある。

山崎今朝彌著作

辯護士大安賣

定價一、八〇　送料一五

世の中には眞理と思ふ中にも矛盾撞着がある、山崎氏は人も知る如く米國伯爵と銘打つて俠氣のある奇言奇行家で、之等の縱斷面、横斷面の八面觀を皮肉的に滑稽的に諷刺した世にも珍しき大論述である。讀みかけたら成る程と思はず笑せしむると同時に首肯せしめるであらう。

エミール・ゾラ原著　井上勇譯

呪われたる抱擁

定價一、九〇　送料一七

上司小劍著

生存を拒絕する人

定價一、四〇　送料一三

東京牛込橫寺町四三
振替東京四七八六九
聚英閣

圖書目錄無代進呈
但し二錢郵券送れ

臨川著

世界觀の長篇を收む、詩より科學に入り美文を以つて理學を說きたるは本書以つて嚆矢とす、量子說、相對性、原子、電子論、熱、エネルギー、X光線、飛動說、等が何人にも了解さるる樣に說きたる有益な書、本書は「新社會の基礎」が一ケ年半も品切であつたのを改訂したものだ。

◇定價金壹圓八拾錢◇送料金拾五錢◇

中澤臨川著◇四六版上製函入◇定價金貳圓 送料金拾五錢◇

小說 嵐の前

拾參版

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニイチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小說、著者も我國論壇の麒麟兒として情熱に生れ、情熱に斃れたる理想生活の持主として、青年の憧憬を一身に集めた人である。

東京市芝愛宕下町一
改造社
振替東京八四〇二

長編小說

赭土に芽ぐむもの

好

堺利彦氏より著者へ

「赭土を讀んでゐる、何しろ舞臺が珍らしいので先づ興味をそゝられる。今「一六」の中の、褪びるが如

である自由思想以上のものを持つた日本の若い一青年が朝鮮といふ新領土の或る悲慘な空氣に育て上げられて行く異常な記錄である局面の變化の多い題材と着想が異常

萬朝報批評

朝鮮の或小新聞社に勤めるべく運命づけられた一青年の奮闘と敗殘との兩面の生活を描いたもので

評八版

中西伊之助著

く降る柳絮を浴びて、猩々緋の紐を胸高に結んだ、靴靺の女のところを讀んでゐる、植嶋といふ主人公の出る前に數回の客觀的記事がある事も大變いゝ、讀んでしまつたら又何か申上げる

兎にかく之なら文壇に對する新らしい一寄與たるは確實だ。

讀賣新聞批評

著者が文壇に新らしい名である爲めに此一部を採上げるに躊躇する人々は同時に新らしい名が新らしい時代に新らしい心熱をも吹き込む熱烈と公憤のふいごそのものである許りでなく描かれた現實と技巧がぴつたり適合して如何なる讀者にも多大の興味か意味かを與へるに止まない最も時代的で深刻骨を抉る長篇小説である。

時事新報批評

無智で遊惰な新附の土人部落の中で家柄も可なりで人間らしい分別もあり土地に對する執着から反抗の心を知らずく\に抱くに至る一鮮人の心理描寫に筆を起して中心には作者その人の傷けられた體驗よりにじみ出た悲痛な叫び聲が放たれて居る。

ある。まことを愛し。平等を愛する熱烈な感じ易い青年が醜惡な環境、蠱惑的な植民地の遊び場、又さまぐ\の女たちと交渉し苦闘し惑溺し、ひきづられてゆくありさまがかなり力あり精神ある筆で描かれてゐる。資本主義に對する難詰も資本家に對する呪咀も土人に對する愛も相當に出てゐる、もとより純藝術的立場に立つて見るべきものではないかも知れぬが特異の取材と表現によつてなかく\興味深く讀まされる。監獄内の描寫なども鮮やかだ。

◇四六版布裝上製函入◇

定價金三圓

◇書留送料金廿錢◇

◇東京芝區愛宕下町壹◇

改造社

◇振替東京八四〇二番◇

勝利を前にして

嶋田清次郎著

◇四六版羽二重裝天金函入◇

◇定價 金貳圓四拾錢◇

◇書留送料金拾九錢◇

新刊小説

彗星のやうに新らしく光る一星、彼は本篇を殘して萬里の旅に上る。彼の熱烈の意氣、澁み深まる創作慾は凝つて本書となつた。本書は熱烈の一青年が社會の第一線に立ち官憲の厭迫社會の誘惑を排し、敢然として純正藝術の道程に上る聖なる戰の記録である。著者が全國の兄姉に「擲げつけて行く」故國への置土産である。見よ魅力の底に潛む作者の力强き信と力の、表現を。

◆東京芝區愛宕下町一ノ一◆
◆振替口座東京八四〇二一番◆

改造社

賀川豊彦著

死線を越えて

前編

定價金參圓
書留送料拾九錢

幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけた本書の價値は、本書を中心として世論の囂々たることを以て明瞭だ。人類愛に燃え立ち、又は今後の世相と我身の將來を思念する幾多の人々よ、一讀して本書使命を諒解せよ。

中巻　太陽を射るもの

定價貳圓八拾錢
書留送料拾九錢

前編は我國に前例なき賣行を示した。本書も前編に劣らず出版後四ケ月に百八拾版の賣行きを齎らしたのは、百萬讀者の心と心とがピタリと本書と一致したからではあるまいか、敢て天下の青年士女に本書を薦む。

東京芝愛宕下町一ノ一
◇改造社◇
振替東京八四〇二

英國の社會の左右系

杉森孝次郎

英國民の心理的特徴は、大約して五種だ。毅强はその一だ。獨立を愛する熱情はその二だ。實際的はその三だ。一味の人間的洒脱性すなはちヒューマーはその四だ。そして發明質はその五だ。

社會的特徴は心理的特徴を反映する。英國の社會的特徴は、英國民の心理的特徴にその過半の說明を見いだす。ヒューマーが高度に賦與されてゐる人と民は、革命には最も緣遠い。ウエルズ氏がレーニン氏を夢みる人と呼び、ラスセル氏がボルシエヴイスムを宗教的だといつてうるさがるところにも、英國民のヒューマーはにほふ。

毅强に於いて絕倫である英國民は、革命を信ずる內的必要を缺く。ひまをかけて革命する自信があるのだから、いはゆる革命する必要はないのだ。ロシヤ人は、ずぼらのやうでゐて、同時に絕對癖の捕虜だ。英國民は、きまじめだが、絕對をば微笑して遠望する。英國民は、禁酒令ほどの絕對癖をも有しない。米國民に比してあぶなげがすくない點だ。「世界革命」、「世界を通じてのプロリテリアンスの支配」、こういふ概念は、英人には稚氣滿々に感ぜられる。毅强、ヒューマー、實際的、これらの三心素を背景とする英國の社會に、革命は芽組まない。芽組んでも伸暢繁茂しない。

けれども、英國民は獨立を愛する熱情に於いて、天下恐らくは無上だ。加ふるに、かれには發明本能が比較的に强い。獨立欲と發明力とが結婚したをり〳〵に、革命はその產兒だ。

一見本としてのコール氏を見よ。かれが書くすべての論說主張を通じて、革命の意氣沸々だ。そして、獨立を愛する熱情と發明力とは、その革命の意氣を構成する。デリール・バーンス氏にも革命調はある。やはり干涉を受くる能はざる衝動と、發明的傾向とが、その調子を激成する。

英國に於けるソヴイエツト露の勢力浸潤はいちじるしい。共產主義の信者が簇々として出來た。また、それほど反射的でな

くても、勞働ぐみのほとんど全部を通じて、「十一月」以來のロシヤには痛いほど刺戟された。穩やかなヘンダーソン氏なども躍起となつて立ちなほしたつた。其、英の勞働分子間に、意識的呼應はいふに足る程度には存しなかつたが、無意識的及び半意識的呼應はいふに足る程に存度した。一八年末の總選擧に於いて、勞働黨が、ともかくも自由黨を押しのけて反對黨の正位にはじめてゐすわつたこと、最近の補缺選擧に勞働黨が奏功を重ねたこと、組合主義、ギルド社會主義等の反議會的、超議會的運動や主張が昌えて來たこと、組合主義、ギルド主義のコール氏にも、『ヘラルド』のランズベリ氏にも、莫斯科政府の心熱と行實があきらかに感化影響を新たにして來たこと、算へ立てれば露の暗示は頗る深く廣く英の生命に作用した。三角同盟といへども、その作用の全然向ふ岸の事象ではなかつた。

けれども、北海にいくつもの世紀をへぬいて成長し來たつた巨大なる貝としての英國は、同時にまた海賊の成功者としての英國は、保守に於いては、五大洋の全歴をもつてしてもあけることの出來ない堅蓋を具備してゐる。論理に燃える赤い血の持ちぬしでもない。それでゐて、欲望の發展には海賊の大膽さをいまもなほ保有する。英國は、改良と改革で社會保存、社會進步をすます本能と習性の動物だ。

現在では、組合主義が英國に於ける比較的極左だ。けれどもこの極左は、ストライキを直接行動の關の山とする。ホイットリ案が生まれて軋轢を多少滑除し、國民的ギルドが一部の人人に高唱されて、實行は米のプラム案見當でも我慢する。

英國の革命は、社會的よりもむしろ帝國組織の方に伏在する愛蘭、埃及、印度、南阿、キヤナダ、南洋等が、獨立を企てる時期が、プロリテリアンスの蜂起よりも恐らくは早速だ。

帝國組織の分裂運動とこれに對する反動運動とは、英國に於いて、他のいかなる一國に於けるよりも高度だが、資本と勞働とは、雄大なる正々の陣をば張つてゐるが、格鬪、リンチ、死刑、爆彈といつた風の小劇をば、英國では、まだ當分演じさうもない。永久に演じないかも知れん。

非公式勸說力

『ウソの哲學』や『赤十字哲學』

堺　利　彦

警察、裁判所、監獄、軍隊。××××の威壓力はこれらのものに依つて表現され、行使されてゐる。

然し、××××は威壓力と共に勸說力を有して、盛んにそれを行使してゐる。學校、新聞、寺院教會、浪花節の類が即ちそれである。

威壓力と勸說力、それでもまだウソをマコトと信ぜしめる程の力はない。支配階級はそこで多少の砂糖を嘗めさせる。諸種の社會政策が即ちそれだ。砂糖は如何に少量でも舌の先に甘く感じられる。ナグられるよりは心持がいいに極まつてゐる。それに兎にかく實質的で、空言よりは幾らかマシに相違ない。けれども、砂糖で腹はふくれない。空腹の者は矢張り滿足しないで騷ぎ立てる。

此に於いて、更に他の威壓力が現はれる。公式の威壓に力は、文明國、法治國、デモクラシー國の體裁上、幾分の遠慮が生ずる。無遠慮に行使し得る威壓力は非公式でなければならぬ。そこで『クリユー・クラクス・クラン』とか、『レジオン』とか『フアスチスチ』とか、『國粹會』とかいふものが生じてゐる。

所が、一面に斯ういふ非公式の威壓力が無遠慮に發揮されると同時に、一面には又、極めて高尚な、幽玄な、微妙な、婉曲な勸說力が出現してゐる。文化主義、新理想主義などいふ流行哲學が即ちそれである。それは固より學校、新聞教會などの分野に屬するものではあるが、それらの公式な宣傳形式に比べると、餘ほど非公式である。無遠慮な威壓力と正反對な立場にはあるが、其の非公式な點に類似がある。殊に其の二つが近來の流行的新現象たる所に互ひに類似した社會的意義が見られる。

生田長江君は先頃の「讀賣」で、「辯明の爲の思索」と題した文中に斯う書いてゐる。

『某銀行の頭取か支配人かであるところの法學博士某氏が、曾つて文化主義なるものの提唱に就して、資本主義經濟組合の崩壞がブルヂヨア文化の崩壞であり、ブルヂヨア文化の崩壞が結局人類の野蠻化であることな

のを所謂經濟學上その他の著書を傾けて論じてゐるのを見た時、私は勿論それが苦んで考へた人の議論であることを直に思つた。けれども彼が何の爲めにそんな事を、さうまで苦んで考へたのであるか、考へないでゐられなくなつたのであるかを問題にして見た時、私共は彼と、自分の職業を體裁よく理屈つけようとしてゐる女郎屋の息子との間に、あまり大きな距りのあり得ないことを遺憾に思つたのである。』

『次ぎに、今日のところまだ階級闘爭の是認といふやうなことを見逃がしてくれさうにもない、或る學校に或る講座をもつてゐる一批評家は階級闘爭が純粋に正邪の爭ひであり得ない限り、自分はさうした戰場に戰闘員たることを避けて、寧ろ專ら赤十字旗の下に博愛の奉仕をするつもりであると宣言した。そしてその宣言のインクの未だ十分に乾き切らない中に、自分は哲學者として原理の研鑽に沒頭專心しなければならぬ故、社會運動勞働運動などにたづさはるわけに行かないとも言ひ出した。』

この生田君の指摘は、私の謂ゆる『非公式勸說力』と少なからぬ因緣があると思ふから、特にこゝに引用しておく。但し生田君は、此の『赤十字哲學者』と『銀行文化主義者』とに對し、其の主觀を批評し、其の心理作用を解剖したのだが、私は其の現象に對する社會的意義を見るのである。

又、佐野學君は『解放』の四月號で、過激運動取締法の事について、斯う書いてある。

『この法律によりて學問界では社會や歴史の自然主義的解釋が益々影を潜め、文化とか價値とか言ふやうな、論理的には如何にも立派な哲學らしい、その實は現實の社會とカケ離れたウソの哲學の諸概念が高唱されるやうになるかも知れぬ。………或る高名な文化價値の首唱者の一人が「文化の極限概念は自由といふことであるかも知れない」と言つたが、「かも知れない」は心細いのである。まだマルクスの所謂る民衆を陶醉せしめる阿片であるところの宗教的精神が益々唱道されるかも知れぬ。……』

之も私の云ふ『非公式勸說力』と間接の關係がある。佐野君は生田君の心理批評と違ひ、『ウソの哲學』や『心細い文化價値』や『阿片的宗教』の社會的意義を指摘したのである。然し佐野君はそれを、政府の鎭壓的態度の反射作用として、受動的現象に見てゐるが、私はそれを一種の積極的御用運動と見るのである。

勿論、それらの哲學者達が、總て意識的に御用運動をやつてゐるのだと云ふのではない。諸君の自負と自尊は御勝手である。同時に我々の批評と認定も亦た自由である。

寫實の缺除の考察

岸田劉生

一つの美術品の持つてゐるいろ〳〵な美的効果の中に、寫實の缺除の美といふ様なものがあると思ふ。つまりその作品の中寫實的な要素が缺除する事によつて生じる處の一つの美的効果である。

無論それは、一つの定まつた形ではない。色々の作品に色々に表はれる。又一つの作品の中にもいろ〳〵な種類や階級で表はれてゐるのがある。

例へば、一作品の中、その最も深い超現實的な嚴肅味とか、または神秘感とか、とも角もその作品の最も深い最も大切な余の所謂美術上の唯心的領域と云ふ様なものは、やはりこの寫實の缺が最も深く表はれたところのものである。

何となれば、美術製作にあたつては、かういふ、最深の感銘を出すためには、どうしても或る程度から以上には寫實を喰ひ止めなくてはならぬからである。これはかゝる經驗を、その製作に當つてした事のない人には尤々肯づく事は出來ない事であるかもしれない。寫實一點張の人、自然過重の人はこの余の言に反對である事と思ふが、美術製作の中寫實一點張であるといふ事は、惡い事ではないが最も深い域ではない。寫意を寫實の中に加へて言ふ寫實であればまだよろしいが、しかし、本當の深い意味で寫意をしやうといふのには、やはり、私の言ふ、寫實の缺除、を必要と感じて來るにちがひない。つまり、或る處で、實物の相の美の追求を打ち切り、それの誘惑を斥ける必要を感じる筈である。がこれ等

の事については、後でくわしく考へるとして、扨て、この美術の最も深い域も寫實の缺除の一つであるが、寫實の缺除はまたいろ〳〵な形に於て、美の出る要素となる。

或る云ひ方をすれば、純粋の、寫實的美の要素をのぞいた一切の美的要素は皆或る寫實の缺除であるといふ事も云ひ得るかもしれない。即ち、美術にあつては、その畫面の如何なる部分でも、すべて美を表出するために描かれ又は造られてある。この事は即ち、描かれたる現實の相を或る處まで藝術的にかへて表はしてしまふといふ事であつて、即ち余の云ふ美化（劉生畫集及藝術觀所載「美化」の項参照）が即ちこれである。かくてこれも一つの寫實の缺除と見れば見得る。かくて一切の美術の美は、純粋、寫實的要素をのぞいては寫實の缺除の美であると見る事も出來る。

しかし、これはさう考へる事も出來ると云ふに止まる、余の言ふ寫實の缺除といふのは、作品の中一見して、寫實が缺除した時に生じてゐる美の感じを指して云ふのであつて、つまり作品の中、何等かの意味で超現實感を持つてゐる感銘を總てさう稱へて考へたいのである。他の要素は、たとへ、それが或る意味で現實の美の擯斥であるにしても、それは只「美化」と稱へておくのが至當だと思ふ。

又、美術上の稚拙感の美などもこの寫實の缺除の顯著なる一例であると思ふ。（中央美術本年度一月號製作餘談中所載参照）これは明らかに現實感の美的拒否であつて、つまり、現實の相の持つてゐる、所謂現實的な感じを、一見愚かしい様な、間のぬけた、幼稚な美を以て拒否するのであつて、大抵の深い美術にはこれが深い意義に於て表はされてゐる。

又稚拙感でもなく、唯心的領域でも無い處の、裝飾的美の要素をも、寫實の缺除を稱へる事も出來るけれど、しかし、それは寫實の缺除の美として感じられるよりも、むしろ裝飾的美感として吾々の眼に訴へられるものだから、やはり裝

飾的要素と云ふ方が至當であらう。其他、神秘感、或る裝飾感、現實感の單化的犧牲、强張、其他まだいろ〳〵にこの寫實の缺除の美を感じる事が出來る。

かくて結局寫實の缺除は、現實相の美的擯斥といふ事に歸する。只それがいろ〳〵な種類や、等級、深淺高下に於て表はれるのである。

が、何故に、美術に於ては、美が出るために如實といふ事を或る處から先きは拒否するのであらうか。この事は、美術の目的や美術の根本的な精髓が、裝飾に基立してゐるからである。(藝術觀中「美術」の項及裝飾の項參照)人類が美を識り、美を生み出し美を獲得した、初まりは、その裝飾の本能にある。美術は又一面この世界を美を以て裝飾しようとする意志の表はれであるとも云へる。美術における最も深い域は卽ち唯心的な域で裝飾といふ事をも絕してゐるが、しかし、その最も深い一點透徹な美の觀念も結局この裝飾の法則の歸決であり彼岸である。かくて美術の目的は結局現實を如實に寫すといふ事にはなくて、深い意味での裝飾にある。だからもしその本來の目的と、如實といふ事とが衝突する場合には、本來の目的のために、如實といふ事を、押へなくてはならない。而も造形上にありては、この二つは或る所迄では極めてよく調和し、兩々相助けて、美術の世界をより一層複雜にし、深くしてゐるけれどそれからもし一步深い域に入る時は、美術の本來の目的であるところのものにとつて、如實は邪魔になり勝である。

つまり純粹の寫實の道は、美術として無論本道であるが、もし、そこに寫實以上の一域を加へないまゝであるならば、美術として、最も深い域に至つたものであると云ふ事は出來ない。

こゝで間違へてはならぬのは、余がこゝで云ふ、寫實的要素の美とか、如實の美とかいふ事を、只單なる自然の外觀の摸寫といふ意味にとつてはならぬ事である。美と寫實とが衝突する等の余の言は稍ともすると寫實といふ事を一層卑近

な意味を以て言つてゐる樣にとられやすいがしかし、こゝで言つてゐる「寫實」又は如實といふのは、さういふ卑近な所謂「寫實」を指したものではなく、藝術として立派な道であるところの、寫實、即ち、現實の形に即して、美を感じ、その美を追求するためには、その美の即したる形を追求し、形を追求すれば即ち美を追求する事となる底の藝術的な一境を指したものである。

即ち余が云ふ美術に於ける純粹の寫實的要素といふのはそれであつて、その域にありては、物象の現實觀が即ち美と觀ぜられるのである、この一域の事については又項をあらためて考察する事としやうが、とも角も美術には、寫實の缺除によつて美が生かされる一方に、又如實感といふ美の一境がある事を云ひそへておかう。

かくて余がこゝに云ふ、寫實の缺除に於ける「寫實」とは、只物象の表面を寫すといふ意味ではなく、形象の眞、即、形象に即して畫家が見得るところの美を形象に即して寫すといふ意味である。無論かういふ寫實の一域はそれだけで立派に藝術的な事なのであつて、或る寫實主義の人には、これが藝術上の最後のものである樣にも思はれてゐると云ふものである。

しかし寫實の道は本當はそれ丈けでつきるものではない。

要するに寫實は「道」であつて目的ではない、目的は寫實以上の處にある。言ふ迄もなく、「深き美」にある。

只こゝに記憶す可きは、この寫實の道といふものが、美を生み出す道として最も深く、又最も複雜なものであると云ふ事である。元來、美術の起元なり、根本なりが、生物の裝飾の本能にあるといふ事は事實であるけれどもし、只それがそれだけであつたなら、恐らく藝術は今日の如く發達はしなかつたであらう。人類又は生物には、摸倣の本能といふものが、又別にあつて、見るもの聞くものに同化し摸倣する。これは、直接に美（又は醜）とは交渉なく、只何事でも摸

倣する本能だから、美の問題とは直接には交渉はない。しかし、この本能にも自然の進化の意志は表はれるのであつて、即ち、情として、感心したものゝ眞似をする。又は自己にとつて有益なものゝ眞似をする。動物などの保護色などはこれが自然的に表はれた法則の一つかもしれない。とも角もこの摸倣の本能が物に似せて圖を描き、形を造るといふ事の起因となる事はうたがへない様に思ふ。がしかし、只それだけであるならば、それはまだ、美術ではない。實用、又は遊戯の一つであつて、象形文字等はその一例と見る事が出來る。しかし、これが先述の装飾の本能と一致し、物を美くしく形どるといふ事になつて來た時、はじめて、こゝに寫實が發端した譯である。

ここに於て人間は、物を美くしと見、美くしと見たものを、美くしく表現する事となつた。ここに於て、人間は至るところに、自己の内なる美を誘出するものを見た。かくて、装飾は、只の線や形や色でなくなり、物の象に宿り、物の象を借りてあらはれるそれとなる。かくて、美は一層複雜になる。表現も一層複雜になる。表現が複雜になれば即ち觀照が更に進む、かくて、美は完全に深さに到達する事が出來たのである。もし、この摸倣の本能がなかつたなら、美術は今日の發達を得てゐず、恐らく、美もかくの如き深さに於て人類が獲得してはゐないであらうと思はれる。

事實寫實の道は、藝術に於ける最も本源の道である。今日畫を描くと云ふ事は即ち、物の象を寫すといふ意味を感じる位に、この寫實の道は美術の中堅の道である。勿論美術の根本は装飾にあるが、それは直接であり根本である丈けに單純であり、種々なる美的衝動を包含するには狹まく乏しい。もしそこに寫實の道が來り加はらなかつたら、恐らく美術はその根本のまゝ枯れるか單純なる装飾美術に終つたであらう。

かくの如く、寫實の道は、美術に於て樞要な大道であるけれど、又結局それは要するに最も深いものへの「道」であつ

て、根本のものはその道を通つた後に控へてゐる。寫實も要するにそこに至らんがために寫實するのであつて、その究極に於て、もし寫實がその究極のものを得る邪魔になるならば甘んじてその身を引いていゝ譯である。

或寫實論者は、その究極に於て、寫實が、最も深い美をもたらす邪魔になるといふ考へに不服かもしれない。しかし、それは、先にも云つた樣にその人の藝術的經驗の未熟を示すものであつて、本當にこの域を經驗するならば、恐らく余のこの言に肯く事と思ふ。

畫事は、要するに人間の手でやる仕事である。神來ではない。單純なる理想的な考へ通りに行かない。寫實をどこ迄もやりぬいてしかも氣韻べうぼうたる神品が生れゝば又面白いかもしれない。しかし、限りある手と限りある物資によつて造形は營まれるのだ、氣韻を出すためには氣韻を出す樣な法をとらなければならない。そんな外部的な方法は本來ある可きでないと理想論者は考へさうだが、無論外的な方法が規範的に定まつてゐる譯ではない、しかし或る形のない約束はある。それは無形の埒であり、限りである。その限り以内でならどんなにでも自由にやる事が出來る。しかしその限りを超へてはならぬさういふ埒があるのを感じる。

又其處が人間の力の面白味である。深い經驗を知らぬ簡單な理想主義者は稍ともするとすぐ理想的な事を云ふが、只云ふだけならいくらでも云ひ得る。しかし、事實はまげる事は出來ない。寫實を少しも犧牲にする事なしにも餘韻を生かし、無形の域をたゞよわす事が出來るといふ事は云ふだけならいとやすいが、この世界の相對的法則がさう理想的な事はゆるしてくれないので困る。

或る反對のものを出すためにはそれと反對のものは或る處まで縮少させなくてはならない寫實と、無形の域とは、その美に於て相通ずる一路にあるのだから理想的に考へたら相反しないものと思へるかもしれないが、畫面の上に於て

は、一方どこ迄も有形界の美で一方はどこ迄も無形の域である。一方を追へば其處に純粹に寫實的な美の世界が展開し、追求されて行くけれど、そしてその力によつて其處に無論一種の崇嚴一種の深さ一種の神秘さも來りはするけれど、しかし、もし一歩先きの美術に於ける最深の唯心的一域は、その一域を特に追ふのでなくては畫面の上に來り加はる事は出來ない。

事實、寫實の道が只それに終止するといふ事は、最も深いものに至る道ではない。此處には多少とも唯物的な觀念さへともなつて、作全體の氣韻とか「露骨なる美」といふ樣なものに乏しくなる。これは要するに、一面、寫實以上の域を拒否してゐる事になるからの事で、つまり反對に、唯心的領域の缺除を來たしてゐる事になるのである。

かくて、作に美術上の最も深い域を出すためには、或る處で寫實を缺除させ、その缺を寫實以上の深い美によつてうづめればいゝのである。こゝに美術上の最も深い、超現實觀が生れるのであつて、クラシックの美は大抵この域に至つてゐる。モナクサ等は、この寫實と、寫實の缺除とが各〻極み迄行つてゐる。よき一例であると思ふ。

更に又技巧上からこの事を考へても、あまりに寫實に終始する時は、技巧は只に、即形即美の追求に追はれ、技巧自身の藝術的魅力といふ樣なものを生かすゆとりがなくなつてしまふ。簡單な内容主義の人や、寫實至上主義者からは、この言は末技を尊ぶ言の樣にとられるかもしれないが、しかし、藝術の事は、さう、鹿爪らしく考へなくともよいものである。

即ち藝術は、寫實のための藝術でもなく又、藝術の深い内容は必ずしも技巧の持ち味の藝術味と相容れないものではない。否、もしその技巧のもち味がその客たる本分をつくす時は主なる藝術本來の内容は一層複雜に、一層魅惑を加へ深さを増すものである。要するに、畫面は「一つの畫面」であつて、内容と技巧とが、バラ〳〵に感じられるものではな

いのだから、內容的な深い美が生まれると同時に、同じ美に對する愛と親切を以て部分の技巧を、美くしく生かしたならば一層畫面は愛さる可き素質を加ふる事となる。只それが客たる本分を忘れて、主となる時、即ち「作者が技巧の味に溺れて、それを弄ぶ時忽ち藝術の墮落が始まる。しかし、それは本元の內容的な美に乏しいからさうなるのであつて、もしその深い美が豐富な作家であるならば決してさうはならない。と同時に又さういふ深い美を持つ作家は又技巧にまけるといふ不安がないから、技巧を惡魔の様には思ふ必要がない。そして技巧そのものゝ面白味、美的効果についても本當の智慧と愛を持つて、それ等をより深く生かす術を知つてゐる。かくて、技巧の持ち味といふものは、藝術の世界を一層複雑にし、從つて深くするものであるから、偉れたる作品には必ずこれをみとめるものである。

これを作品の上にもたらすにはやはり寫實的追求を或る處で切りあげなくてはならぬ。寫實の道にあつても　その量面が一層の魅惑を持つためには。

しかし、この事は、それを爲し得るだけの深い觀照がなくてはならぬ、淺い觀照のものがそれをするならば、その作はなくなり、技巧の興味だけが目について、一層その作を安價にするだらう。

がこれ等技巧上の寫實の缺除といふのは、只意味に於てさうであるからここにつけ加へたのであつて、それが必ずしも吾々に特に寫實の缺除といふ感銘を與へはしない。だから殊にさういふ感じのする技巧の外はこれを必ずしも寫實の缺除と呼ばなくともよい、又技巧に於いて特にさういふ感じのするものは即ち、稚拙感又は强調、單化等　技巧がそれである。

次にこの寫實の缺除を二つの方面から觀察していろ〱に分析してみやう。

先づ、この寫實の缺除を、內容上と、表現上との二つに分ける事が出來る。

無論、内容と表現は表と裏、内と外の樣なもので互に深い處で結びついてゐるから、二つに分けてもつまりは同體になる樣なものであるけれど、とも角或る便宜上これをこの二つに分けて考察してみる。即ち、内容上の寫實の缺除とは、畫因（モティフ）に於て又は更にもう一段その作家の主觀なり人格なりに於て既に一種の超現實があるものであつて、これは主に、布局に、構圖に、又人物畫なればその表情等に表はれる。即ち既に描かない前からあるところの寫實の缺除であつて、即ち[illegible]る現實感の缺除、又は拒否を指すものである。

これに對して、表現上の寫實の缺除と云ふのは、その表現法の上に於ける寫實的要素の缺除であつて、技巧の本當の稚拙、又は技巧上に生かした稚拙感、單純化、線の非寫實的描方、輪廓線の非自然的表現、色の強調又は單化、淡彩其他いろ〳〵あらうが要するに、その内容の美を生かすために用ひられる技巧上の又は表現上に於ける現實感の拒否である。

これ等はもとより、先述の内容上の寫實の缺除の美がなくては、要するに只寫實の缺除といふ事だけに止まるので、美に迄は至らないものであらうけれど。そして、内容のそれがあればそれ等の中の或るものがその内容に應じて自然に行はれるのであるが、要するに技巧上には表現上の寫實の缺除は内容上のそれではなく、内容上のそれは技巧上のそれではなくこの二つは明らかに分析し得るものである。何となれば、技巧上では何の寫實の缺除を感じない作でもその内容的なところにそれを感じる作もあるし、その内容的なところにそれを感じないで、技巧ばかりにそれを見る作もある。但し、後者の場合は大體に於てその作品の價値は零のものである。即ち衒氣と惡い野心を感じる場合が多い。

次にこの寫實の缺除を、意識的な寫實の缺除と無意識的な寫實の缺除の二つに分ける事が出來る。又その無意識的な寫實の缺除を更に二つに分けて、必然的無意識の寫實の缺除と、偶然的無意識の寫實の缺除の二つに分ける。

即ち、意識的な寫實の缺除とは、寫實を拒否する場合を意識して、拒否する場合で、或る深い美を描くために畫家はこれを必要として行つていゝのである。

又無意識的な寫實の缺除とは、作者が知らず、匠まずして、おのづと加はつた寫實の缺除の味であつて、これを、必然的なのと全く偶然なのとの二つに分けたのは、即ち、その作者にそういふ味の出る丈けの內容があつて、それが不知の間におのづと滲み出したのと、さうでなく全くまぐれあたりか、又は、その作者の技巧が全く寫實をするに耐へない程幼稚な爲めにひとり出の結果として消極的に寫實を缺除してゐるのかの二つを指したものである。

かくてこの二者の中後者即ち偶然の寫實の缺除は、その美的價値は、只單に面白いといふ程度のものに止まり、それ以上に藝術的な深い味などはない。つまり其處には、個性の深い即照が示されないから、從つてその感銘は、「美」に迄至らないものである。これに反して必然的な寫實の缺除と名づけた方は、その作家の氣凛なり、主觀なりの深さからおのづと、滲み出した、超現實の感銘であるから、其處には、深い美の餘韻が生じ、深い藝術的感銘に人を誘ふ力がある。

かくてこの三つの場合、即ち、意識的な寫實の缺除と、無意識に於ける必然と偶然の二つの場合の寫實の缺除とはどれが最も尊いか、最後のものは、云ふをまたないが、必然に出る無意識の超現實感と、意識して生み出した超現實觀とにどつちが尊まる可きか、深さから云ふと、意識しないで出た方の感じが一段と含蓄と餘韻に富んでゐて尊い樣ではあるが又、一面、かういふ深さはすなはち、その作家がさういふ超現實を意識して、其處に心がかたむくが故に滲み出て來る味なのだから、そしてさういふ人の作には必ずこの無意識の味が深い味でくははるものなのだから、要するにこの二つは切離してその價値を問ふ必要もない事であらう。しかし、作を見た上で最も深い餘韻を感じさすものは何と云つてもその作の無意識の一境であると云ひ得る

又この全く偶然に生る無意識の寫實の缺除について特に注意したいのは、人がこれを往々にして、立派な藝術的な効果として認める誤りについてゞある。

凡て藝術に於て尊いのは、意識の力である。美に對する意識が深ければ深いだけ其處に、深い美が表現され、深い美が表現されたところには必ずその作家の確實なる美への認識が讀まれるものである。

即ち、「心」がその作の面に深く生きてゐる。その作家の製作的の心の經驗が、藝術的微妙さと深さに於て讀まれる。

無意識な偶然な味にはこの意識の力がない。又「心」が生きて居ない。野蠻時代の藝術の味や小兒の畫などの稚拙感がそれであるが、其處にはなゝ程或る種の美感があるけれど、それは、藝術としてみる事はあまりに意識が無さ過ぎる。從つて、美として味ふにしてはあまりに粗雜で幼稚である。とてもそれを見て、深い感情や恍惚に誘はれる事は出來ないのは云ふ迄もない。

或る人に云はせると、其處には、子供の心なり、野蠻人の單純な心なりの美しさが生きてゐると云ふかもしれないが、しかしそれは決して「心」そのものが直に形に變つて美になつてゐるとはいふのではない。それは、只簡單なる表現が、簡單なる幼い心を語るといふ消極に止まるので、藝術の境に於ける、「心」の具象とは全く異るものである。

事實兒童や野蠻人が自己の認識をすぐ形に化へる力を持つといふ事は不自然である。認識と表現の間には大きな溝がある。認識を直ちに形に表はすには、その認識が或る程度以上に進んでからでないと駄目だ。普通の人の認識でもこれを表現するだけの力はないまして、兒童や野蠻人の認識にその力がないのは當然である。兒童や野蠻人だからこそ卒直にその心を表現出來るのだと云ふ人があれば、その人は「心の表現」といふ事を安價にしか解釋出來ない人である。

かくてこの無意識の偶然な寫實の缺除は、それだけでは美術ではないけれど、その畫面的効果は、進んだ作家にとつ

ては一つのヒントとなり得る。卽ちその稚拙なる、一種の大膽さと、荒唐無稽さと、强さとによつて味はれる現實の擯斥は進んだ作家にとつては可なり面白い暗示である。これが意識的に生かされる時、その味は立派に美術的要素となり得るのである。

次に考察したいのは、寫實が缺除すると、必ずしも美を其處に加へないでも、寫實が缺除したといふ事だけで、それが一種の美的要素となる場合の事である。

これは勿論、さうでない場合もある。が多くの場合、寫實の缺除といふ事は、それだけで或る美的感銘を暗示してゐる。

これは何故であらうか。これはつまり、物象の寫實的要素が缺除して來ると、そこに表はれる造形的法則がひとりでに、裝飾的樣式を暗示する法則に從つて來るからだと思ふ。それなら何故寫實的要素が缺除して來ると、その事が裝飾的法則を暗示する樣式をとつて來るのか、これは、つまり、寫實が缺除すると、その樣式は自然的に、單化とか、强調とか。稚拙感とかいふ形式になるからでこれ等の形式は又裝飾的又は超現實的な感じをあらはす樣式にも相當するのでさてこそ、其處に兩者の一致が生ずる譯である。

が、兩者はどうしてその造形的法則が一致して來るのであらうか、これはつまり、造形上の法則といふものが一よりないといふ事を證據立てゝゐる樣に思ふ。

つまり、造形の法則にとつては寫實の缺除も、超現實もないので、只或る種の一つの法則がとも角も一種現實を超へた感じや、或る裝飾的感銘を人に與へるのであつて、それは又、寫實が缺除した時の法則にもしばしば見られるところの法則なのであるに過ぎない。

これは寫實の缺除と、裝飾又は超現實の感銘とは前者は消極的に、後者は積極的に、ともに同じく現實といふものを拒否してゐる點で一致するからであるが、その樣式の法則が、その各の積極消極といふ內容的又は價値的な處には無頓着に、その形式的な一致といふ事によつて、一致して來てゐるところに、余は或る面白味を感じるものである。卽ち、造形上の法則といふものは、全く、美醜善惡と交渉ない、只の自然の一法則なのであつて、そこに、美醜善惡を感じるのは人間の「精神」である。

美術といふものは、どこ迄も、人類の精神上の仕事であるけれど、又一面どこ迄も、この世での仕事である。其處に咲き出づる「美」の華はどこ迄、人類の精神の精華であるけれど、その華は、物質によりて咲く。

更に又この無形な造形上の法則は、資料とか、手工上の制限とか、さういふ藝術の唯物的なところに於てはじめて表はれるものである。何となれば、その法則には形はないがその法則には形の上にのみ表はれるのであつて、その形とは卽ち、描かれた時、造られた時にはじめて表はれるものであるから。そして、描かれ、造られるといふのは、つまり、資料と手工といふ藝術上の物質境に至る事だからである。

かくてこの造形上の法則といふものが、それ自身美でも醜でもない只の自然の法則の一つである事を思ひ合はす時、藝術といふものは結局、美と物質との相對である事を見出す。

美は絕對のものであらう。しかし、人間はその絕對を、相對によつてゞなくては見る事も、摑む事も出來ない。又或る見方をすれば相對界があるからこそ絕對境といふ觀念が生じるのであつて、はじめから一切の差別がなければ絕對は絕對ではない譯である。要する。この世界は相對の世界、差別の世界。物質の束縛の世界であつて、美も、絕對も、ネハンも、それであるからそこのものである。

かくて余は、藝術が、これ等いろ〳〵の物質的な意味の制限や束縛や法則によつて成される事を面白い事に思ふ。

藝術は、それ等を生かす。造形はあらゆる物質界の淨化である。藝術はそれ等の束縛を生かす、束縛される事によつて其處に本當に自由な無限を生かす、その束縛は、かへつて美を誘出する用材となることに藝術の本當の面白味があると思ふ。

美術と云ふものはつまり、それ等の造形上の法則といふ道具で、いろ〳〵の美の殿堂の建築や裝飾を組み立てる仕事である。そしてその道具の適不適、深淺高下は人間の「内なる美」が揀美する。

寫實の缺除の話から引いて、藝術の相對性の方へ話がのびたが、寫實の缺除といふ一境はとも角面白いいろ〳〵の事を暗示してゐると思ふ。　一九二二、四、一三、

世界の市民

―デブスの出獄―

デヴィド・カルスナア

忘れもせぬ、一九二一年のクリスマスの日に、ユーヂンヴヰクトル・デブスは、その三年に近い幽閉を脱した。そして、インヂアナ州のテルオート――人口六萬ばかりの、海を離れた小さな町――で靜に牢獄生活の疲れを癒ひ、また彼の出獄によつて捲き起された物凄い緊張と興奮との靜まるのを待つてゐる。

ヂョレヂア州アトランタの聯邦監獄からデブスが出た時に、彼を迎へた群衆の――あの大歡呼――あれ程の大歡呼は未だ嘗て如何なる亞米利加人に對しても、與へられたとがないのである。

大戰の酣なる日に彼は演說した。そして人間を徒に砲彈の餌食とすることの、如何に惜しむべきかを說いた。また米國及世界の他の諸國を渦中に投ぜしめたこの大戰亂は、元來資本家の戰爭であるが故に、全世界の勞働者は、一人たりとても參加してはならないと叫んだ。その演說のために彼に課せられた懲役十年のうちの三十二ケ月を、このアトランタの監獄で服役したのであつた。この演說は一九一八年六月十六日、オハイオ州カントンに於ける、社會黨大會の時になされたものであつたが、この爲にデブスは十年間の苦役を宣告せられた。最初二ケ月を、ウエスト・ヴアーヂニア州のマウンズヴヰユ監獄で服役した後に、アトランタの聯邦監獄にうつされたのである。

合衆國政府はデブスを放免することを非常に澁つた。あらゆる職業の平民が、富めると貧しきとを問はず、幾千となく、或は委員として、或は代表として白館(ホワイトハウス)に來て、ハーヂング大統領に對して、デブスを釋放すべきことを抗辯した。

さうでなかつたならば、彼は今猶、獄中に居たであらう。デ

ブスは今、合衆國に於て、最も愛せられてゐる人間である。彼の個人的の友達は萬を以て數ふべく、彼が一度點頭し、一度手を擧げれば、一團の叛徒をも忽ちに嘯集することが出來るであらう。大統領リンコルンを除いては、如何なる米國人も、未だ嘗てデブスの如き個人的の力を持つてゐる者は無かつた。

三年の間、政府はデブス釋放のための歎願を受け續けた。しかし大統領ウイルソンは、頑として動かなかつた。デブスが牢獄に下つたのは、ウイルソン(民主黨)の統治時代であり、彼が囚人として取扱はれてゐたのは、彼の後を襲うたハーヂング(共和黨)の時代であつた。一九二〇年のクリスマスの數日前、檢事總長は、大統領ウイルソンに向つて、デブスの放免を勸告した。勸告書を讀んだ後に、ウイルソンは彼の秘書官にかう言つた。「私はこの男を免すことに決して同意すまい。わが國の或地方では、一般の人が、デブスを赦すことを求めてゐることは、私も知つてゐる。しかし私はどうしても、それに同意することは出來ない。若し私がそれに同意を與へるならば、私は、自分たちの子供を海の彼方へ送つた、この國の母親たちに、顏を合せることが出來なくなる。アメリカの青年の精華が、文明を擁護するために、血を流してゐた間に、このデブスといふ男は、戰線にも立たずに、彼等を狙擊し、攻擊し、罵倒してゐたのだ。この赦免を拒絕すれば、私に多くの非難が浴せられるのも私には分つてゐる。」と

デブスが戰爭中にとつた道德的、知的の立場が正しい事を論するのは、この文章の目的ではない。私が玆に於て爲さんとするのは、――若し私に出來得るならば、――彼が米國政府の囚人政治犯人であつた間の彼の姿を描き、また、彼が今、六十六歲の頽齡で、どんな樣子であるかを描くことである。しかし私は、デブスが、大戰のために徵集せられ、派遣されたアメリカの兵隊を、攻擊し罵倒したといふウイルソンの言葉を、默過することは出來ない。前大統領の推測も、彼の考へも、事實の曲解であることは、公平な心を以て、デブスが入獄前になした演說を一瞥する人には、誰にでも直にわかることである。(此の演說は私の著書、『デブス評傳及書翰集』の中に收められてゐる。)

デブスが出獄すると 直に司法省は國民に長い宣言書を出して、デブスを投獄した處置を細かに辯疏するに努めた。彼の判

決は換へられて、大統領の特別の處置のない限り、彼の市民權は永久に剝奪せられるといふことになつた。大統領がかういふ處置をとることは、ありさうにも思はれず、デブスも彼の市民としての權利、特權、優先權の回復を願ふことは、決して無いであらう。加之、最近の戰爭は、米國內に於ける限りでは、アメリカの市民であるといふことの、如何に無價値なものであるかを證明した。それは唯、人々が自分の人格を否定して、國家の危急存亡の際に統治を行ふ人々の意のまゝに、自己の良心を屈從せしめるといふ場合にのみ、價値を認められるのである。デブスがその自由と引換へになつた演說をした時に、彼は市民としての權利を行使したのだ。

デブスが囚人として死なゝかつたのは、ちつとも政府の過ちではない、何故ならば百萬のアメリカ人が、彼の自由のために叫びを擧げてゐた間に、彼は一再ならず、アトランタ監獄で死に瀕してゐたから。

デブスが囚人であつた間に、幾度も彼を訪問するのは私の特權であつた。そして彼が赦免せられた時にも、私はアトランタに居た。デブスが入獄中に、同輩の囚人に對して抱いた親切や愛、彼等が彼に對して抱いた尊敬、敬服、提攜の念について語るべき出來事は百にも餘るほどである。合衆國には、今まで獄中のデブスの如き立派な囚人はゐなかつた。

彼の赦免の朝、二千三百人の囚人を代表する委員が、典獄を訪うて、監獄全體の者が、此大監獄の兩翼の格子窓に立つて、デブスの出發を見送るのを許されることを願つた。彼等の願は聞入れられた。その日はクリスマスであつたので、囚人たちは自分の家族や、愛人からの贈物や、箱包を受取つたが　彼等は自分の樂しみはすつかり忘れてしまつて、三時間もの間、窓に立つて、三年近くの間、彼等の友達であり、相談相手であつた一人の懷しい友を最後に一目見ようとした。

到頭デブスが監獄を去つた時に、二千三百の人は鬨の聲をあげて別れを告げ、彼が再び這入つて行かうとする社會で、彼が幸福であるようにと希つた。この喜びの雄叫びは十分間以上も歇むことなく續いた。そしてデブスは幾度も、幾度もふり返つて、その懷しい人々に挨拶した。蒼ざめ果てた囚人たちの顏

は、アメリカ最大の監獄の灰色の壁に固めつけられた鐵棒に、ぴつたりとおしつけられてゐた。その日、監獄の人々は泣いた。何故ならば、囚人たちは、一人の本當の人間が、彼等から離れて行つたこと、彼が去ると共に、そこは再び暗い牢獄となつてしまつたことを思つたからである。囚人の一人は私に向つて、デブスは監獄に魂を與へてくれたと云つた。また一人は、デブスが一緒にゐて慰めて呉れさへしたらこれから死ぬまで、格子窓の中で暮したいと云つた。

典獄の妻はデブスに、囚人としての最後の夜を、彼女と典獄との特別の賓客として、その家庭で明かして呉れと云つた。デブスはいとも叮嚀にこれを謝絶して、「私は寧ろ私の仲間である囚人達の心臟の響きに耳を傾けてゐたい。」と云つた。

最も興味あり、同時にまた、最も驚くべき事の一つが、デブスが出獄すると直に起つた。合衆國の大統領が、彼がインヂアナの家に戻る前に、親しく訪問して呉れるように招いたのだ。ハーヂング氏は一年程前に、檢事總長を通じて、デブスが出獄する時にはぜひ會ひたいといふ希望を述べてゐた。デブスはその仲好しの忠實な弟、シオドア・デブス、私、それから數人の新聞記者たちと共にアトランタから直に華盛頓へ行つた。クリスマスは十二月二十六日の月曜日に公に祝されて、すべての官省は一般人には閉ぢられてあつたけれど、デブスはその一行と共に、大統領の政廳に歩いて行つて、三十分足らずの間ハーヂング氏と心ゆくばかり歡談した。

この會合を機として、デブスは親しく大統領に對して、總ての政治犯人の釋放を請ひ、彼がアトランタに殘して來た人々について、幾度か特に辯疏する所があつた。

デブスは、監獄を去つた時に、肉體的には慘ましい姿をしてゐた。先づ彼は、囚人として受けた恐ろしい精神の苦しみの跡を、まざまざと表はしてゐた。數日の後に彼はかう言つた。「精神的に私は何時も自由であつた。何となれば、自由な心を持つ人は決して羈絆せられるものではないから。しかし何と云つても、人間が監獄の飯を食ひ、監獄の規則に從はねばな、ない時に、この事は彼の性質にまで喰ひ入つて來るものである。私の心を一番傷ましめたものは、私が毎日他の人々に加へられる暴

虐を見なければならなかつたことである。殘酷な心を持つ看守達は、その手にするところの棍棒を揮つて、彼等の野蠻な意志を力ない人々、本當に彼等の餌食なる人々に向つて執行した。そして誰一人として、一言も抗辯する者は無かつたのだ。」

彼は續けさまにいふ。「私は人々に力をつけようとして多くの時間を費した。人が、絶望的な苦しみの中にある人の爲めに終日盡してやらなければならない時、それは彼の魂にまで影響するものだ。終日絶えない呻り聲や、悲鳴、夜つぴて續く呪ひの聲やすゝりなき―私は獄にゐる人々のみぢめな家庭から來る手紙を、幾千といふほど讀まなければならなかつた。家族の全部が餓死しかかつてゐることや、家賃を拂へないので町中へ追出されようとしてゐることや、或は彼の妻が病氣になつたことや、娘が淫賣になつたことを知らせる手紙を受けとる時、人の心は引き裂かれる程の苦しみを嘗めるのだ。そしてこんな苦境にある人を一度どころか、一日に幾度も慰めなければならない時、そのために精神が消耗されるのは、恐ろしい環境によつて肉體が疲らされるのと同様である。」と。

デブスが出獄する時に與へられた着物ほどボロボロな着物を私は見たことがない。全く彼が云つた通り、雨が降り出したら、ズボンは半ズボンになつてしまつただらう。デブスは背の高い瘦せた男だ。六呎より少し高い。彼が監獄を出る時、着てゐたオーバコートは、四呎以上の人の着るものではなかつた。政府が彼に呉れた靴は紙製であつた。それから、擧句の果てに、五弗の金を呉れて、「新しい生活」を始めさせた。デブスには監獄の金を私に呉れて、それをボストンに送るように、そしてサツコとヴアンツエチイといふ二人の伊太利勞働者の辯護の爲めに募集されてゐた資金に加へて呉れるようにと頼んだ。この人々は靴製造會社の會計方を殺したといふ寃罪を蒙つてゐたのであつた。この不幸な人々のための辯護人は、彼等が傭はれてゐた諸都市でやつた過激な運動のために、殺人の訴へは、彼等の不利益なように「捏造」されてゐると云つて爭つた。デブスが出獄して最初の仕事は、死の陰に立つてゐる二人の人――サツコとヴアンツエチイとを助けることであつた。

大統領との會見についてデブスはかう言つた「大統領は今こ

そ完全に、私の立場を了解してゐる。そして私は彼の所を辭去する時にも、少しも彼に對して債を感じてゐなかつた。私の舌は封ぜられてはゐない、私の運動は拘束されはしない。若しさうでなかつたならば、私が決して監獄を出やしなかつただらうといふ事は私の友達が知つてゐる。」と。

大統領との面會の日に、華盛頓の附近で、一隊の新聞通信員や、寫眞師が、デブスにつきまとつた。活動寫眞師は殊に一生懸命に彼を寫さうとしたが、彼は愛嬌よく、云ふまゝになつた。通信員との面會の時に、彼は自分を「世界の市民」と呼んだ。そして歐洲や、亞細亞に旅行したいと云つた。が、彼がこの願ひを實現する日はありさうにも思はれない。何故ならば、合衆國の過激な團體や、勞働團體が彼の時間と、精力とを求めてゐる仕事は幾千となく、この要求を滿たすためには、彼に殘されてゐる壽命では不充分であらうから。

私は、彼が大統領と話をしてから數時間の後に聞いた彼の簡單な語を記して、日本の讀者にデブスの本當の性格を傳へたいといふ願ひを禁じ得ない。私は、私たちがホテルの一室に坐つてゐたことを思ひ出す、デブスは新聞記者と數人の友達とに圍まれてゐた。

私は合衆國の市民ではないけれども、世界の市民である。自分の主義のために罪を蒙り、獄に投ぜられる人間は、市民として立派な資格のあるものである。彼は神より與へられた固有の主權によつて市民たるものである。市民の權利を失ふ者は、唯、自己の主義を放棄し、自己の人格を踏みにじつて、自分自身の魂に對する變節漢となるもののみである。」デブスはアトランタ監獄を、三年前に見たよりも、「もう少し人間らしく」して去りたかつたと云つた。

外の政治犯人たち――州や聯邦の監獄には五百人以上も居て、I・W・Wの黨員や、社會主義者や共產主義者であるが――の辯護は私が引受けなければならぬ、そして彼等の自由のために働かうと彼は云ふ。「私は彼等と同等に有罪であるし、彼等は私と同樣に無罪なのだ。」「或る意見を發表したるが故に投獄せられてゐる男女が一人でもある限り、合衆國政府もその自稱民主主義も共に、文明世界の非難の前に立たなければならぬ。」

「私の自由はほんの部分的のものだ。私の友達までも監獄を出ないうちは、完全にはならない。彼等が入獄してゐるのは、まあいろいろ理由はあるけれど、皆勞働者階級と關係があるためなのだ。勞働者階級が、彼等の自由が回復せられねば竭まないことを誓ひ、彼等の勞働者階級に對する忠誠が無意味でないことを證據だてるのは、當然の義務である。」

白館（ホワイトハウス）から歩いて來る間に、デブスは此の政廳に來たことがあるかといふ質問をうけたことがあつた。

彼は笑ひながらから答へた。「私は白館（ホワイトハウス）に向つて出發したことは五度もあるけれど、そこへは行かずに政府の監獄へ入り込んでしまつた。」

デブスは社會黨に推されて、五度大統領候補に立つた。將來如何に活動するかを問はれた時に、彼は答へた。「それは私が監獄に入らずにどの位居られるかといふ事になりますね。」

それから眞面目に、言ひ續けた。「私は、私の時間も精力も、何でも私にあるかぎりの力は總て、社會組織の惡を除くために費しませう。社會惡の一誘因は、人間を石の壁の蔭に置いて、萎ませ、死なせて、人類を獸化させるといふことに在る。金誡（ゴールデンルール）（譯者註。聖書にいふ。すべて人に爲られんと欲することは爾曹また人にもその如くせよ。）を實際に行つたならば、遂に改善されるのだ。」と。

華盛頓から西に出發せんとする時に、彼は停車場に集つた新聞記者の求に從つて、彼の周圍に集つた少しの人々に簡單な演説をした。それがデブスの、出獄後になした最初の演説であつた。

彼は云つた。「この世の中に於て、私には人間の命より神聖なものは何も無い。我々が生活の重荷をおろして、永遠の眠に入らうとする時に、清らかな良心と、暖かい心とを持ち得るように、我々は皆、同胞に對して振舞はなければならぬ。愛は世界に於ける最も大いなる力である。愛を通じてのみ我々は皆救はれるのである。」――こゝの所で鐵道會社に雇はれてゐる刑事が群衆の中から飛び出してデブスが人々に演説することを止めるように命じた。デブスは善良さうに微笑して、吃驚してゐる聽衆に向つて手を振つて別れを告げた。數分の後、千哩近くも離れ

てゐる彼の故郷に行く列車の中に坐つた時、彼は私に向つて、この出來事が始めて、彼の再び「文明の中に」あることを思ひ出させたと云つた。彼が愛は世界に於ける最大の力であると云つた時に、演說が中止せられたといふ事には、多少の意味がありさうである。

三十年の間、合衆國には雄辯家として彼に匹敵するものは無かつた。彼の政敵さへも彼がロバート・チ・インガソル以來、演說者として最も雄辯であり、最も魅力あるものであることを認める。インガソルは、死ぬまで長い間、彼の友達であつた自由思想家である。

しかし、デブスがあの演說をするのを聽いてゐる間に、私は牢獄生活が彼の力を非常に傷つたことを感じないわけにゆかなかつた。彼の聲は墓穴の中の反響の如く、空虛な響を持つてゐた。その聲は、彼の胸にあることを言ひ表はす力を與へよと惱むが如く、また、直覺を以て言外の意味を知り得る聽衆に訴ふるが如くに響いた。デブスは生きてゐる間に、彼の言葉を理解し得るだけに知慧のある聽衆に向つて演說することはないであらう。彼の聽衆は、彼の雄辯に魅了され、彼の熱を籠めた結尾に感動して淚を流すのであらう。しかし、ユーヂン・ヴイクトル・デブスの身うちには、神の光の輝いてゐること、彼の言葉は、政治團體の一黨一派や、その信條に特に關聯してゐるものではないことを理解し得る人間を、今の時代に、アメリカに於て、充分によせ集めることは出來ないであらう。デブス自らも、彼が數時代恐らく一周紀も、現代に先だつてゐることを知つてゐる。彼は幾度も、彼が同時代の人々に決して理解されることが出來ないのを知つてゐると云つた。ホレス・トラウベルについても彼は丁度同じように云つた、トラウベルは、長い間の彼の友達であつて、彼が常に、「アメリカの最大の民主々義者、豫言者」と呼んでゐる人である。

デブスがアメリカ人に知られたのは社會主義者としてではない。彼の知られてゐるのは一個の人間としてである。――微笑してゲッセマネの路を進み、眼を蔽ふこともなく、自己の主義、信念を悔ゆる心もなく、十字架に上り得る人間としてである。アメリカ人は、漸々デブスの愛せられる理由を知るようになつ

て來た。

華盛頓には前大統領ウイルソンがゐる、病弱のさびしい男が。政治的には聲名を墮し、精神的には失望され、打撃のために氣むづかしくなつてゐる、このウイルソンは、わづか數年前には、世界人類の四分の三から、救世主として、どうかして、彼等を光明と、愛と、自由の高峯に導く人として、呼びかけられてゐたのである。

デルオートにはユージン・ヴイクトル・デブスがゐる、彼もまた健康ではないが、あらゆる職業の友達にとり圍まれてゐる。彼の眼はすべての政治的黨派、信條を超越し、彼の心は慈母の胸に抱かるゝ嬰兒の如く若々しい。彼は未だ嘗て敗衂といふことを知り得なかつた。何となれば彼の求むる所のものは人より與へられるものではなく、寧ろ彼と共に存するものである、——淸き心と汚れなき良心と、而して同胞への勤めのために自己の一生を捧げたといふ意識とである。或る人が同胞を愛したといふ事に對する報ひとして、よしや死が與へられようとも、それは決して彼が敗れたといふ意味ではないのである。デブスに、同胞の肉體を救ひ、精神を濟はんとしたが爲めに、旣に牢獄の苦を嘗めた。アメリカに於ける反動の力は、なほ彼を殺すかも知れない。——彼が死を以て脅かされたことは一度や二度ではない——しかし猶且つ彼は勝利を謳ひ、凱歌をあげるであらう。

彼がデルオートの故鄕に着いた時、富めるも貧しきも彼を迎へたが、その數は三萬に及んだ。資本家も無產者も、肘を張つてデブスを讃めるのを競つた。それは夜であつたが、暗い街は數千の炬火の赤い焰で照らされ、人々は皆、上衣の折返しに、「チーン・デブスお歸りなさい。」と眞赤に印刷した小さな札をピンで留めてゐた。幾組もの樂隊が、×××の歌を奏したり、彼の質素な家の眞正面で、素晴らしい「世界の市民」の夜曲(セレナード)を歌つたりした。その家の中では、彼が三年ぶりで始めて、彼の妻——どんな激しい非難が彼に浴びせられてもかまはず、總ての艱苦を共にして來た彼の妻に會つたのであつた。

デブスの列車を迎へて彼が弟と一所に乘つた自動車の後について、街を行列して來た大群衆は、彼が家の玄關に立つて簡單に挨拶した時に、謹み深く沈默した。

街中に百人も人が集れば、誰かしら喧嘩せずにはゐないものだ。しかし、あの壯大なデブスの示威運動は、何だか宗教の行列のようであつた。戰爭の英雄も、平和の勝利者も、この國に於て、これほど熱誠な歡迎をうけた者はまだ一人もなかつた。私はニューヨークで、歐洲の著名な人々が渡來するのを見た。中には數人の將軍たちもあつた。彼等を迎へる群衆の態度は、見世物の行列が街中を通る時の騷ぎと變らなかつた。デブスが歸つて來た時、テルオートではちつとも粗暴なことをする者は無かつた。

彼の歸鄕の時の演説の中から、私は唯一節だけ拔書きしよう。

「私の心には少しの苦しみもない。唯、屈することなく、自分の正直な信念と、理想とに忠實であらうといふ決心がある許りだ。私はさうするより外に、仕方がなかつたのである。私は私が、信賴に忠實であつたことを、少しも悔いない。何といふ心地よい思ひ出であらう。貴方がたも、私も、時々に變化はあるであらう。しかし友愛の手を握り合ふであらう。この感慨深き時に、私は萬感胸に迫つて、言葉に盡し難い。私は今晩貴方がたの顏を心に刻みつけた。あなた方の心臟の響きを感じた。出來るならば、私は貴方がたを抱擁して、私の諸君に對する愛を表はしたい。この光景は永遠に私の記憶の壁に殘るであらう。決して忘れることは出來ないであらう。」

デブスが歸鄕した時に、數百の手紙や電報が彼を待ちかまへてゐた。その後も幾千といふ程の手紙が、同胞市民や、世界の隅々の人々から、愛と忠誠の誓を齎して來た。

デブスの獄中生活

デブスが最初アトランタ監獄に送られた時に、彼は他の五人の囚人と共に監房に入れられた。彼の同監者は外國人であつた。或時そのことについて話をしながら、彼は言つた。「そして私は世界人だ。だから私たちは一緒に仲好く暮せる。」と。デブスの獄中での最初の仕事は、裁縫部の書記としてであつた。彼は朝八時から午後四時まで働いた。それから二十分間他の罪人と共に庭で運動することを許された。夕飯のために三十分間を與へられてゐた。その夕飯は他の時と同樣に、非常に粗末なも

のではあつたが、充分であつた。五時になると、監房に入れられ、翌朝の七時まで鍵をかけられた。五週間、デブスは一つの監房に暮して、極普通の囚人のように働いた。彼の、世の中に於ける地位のために、彼に顧慮される所は何もなかつた。デブスに對して、尊敬と敬服とを表した者は、政府でも、監獄吏でもなくて、囚人自身であつた。殆んど例外なく彼等は皆、出來るだけのことをして、彼の生活を樂にしようとした。デブスのような年齢と性質の人にとつて、鐵の獄舍に生活することは、肉體的に不可能であつた。殆んど彼の命も奪はれさうになつたことが幾度もあつた。監獄のあるのは南方の町である。そしてアトランタは海拔千百呎であるけれど、夏には北部の町より暑い。デブスが監房に暮したのは夏の最中である。一婦人が彼を訪問してその有樣を見て、華盛頓の司法省に注意を促したので、始めて彼は病院に移され、自分の小さな室を與へられ、仕事を免ぜられたのであつた。この後、彼の刑期中、彼は監獄の仕事は何もしなかつたが、しかし、彼は一日中、しばしば夜おそくまで多忙であつた。彼は監獄醫を助けつつ病氣の囚人を看護した。彼等の傷を洗つたり、熱を計つたり、藥を與へたり、書物を讀んでやつたりして、それは親切な看護婦のようにいたはつてやつた。かういふ點では、デブスの病囚人に對する愛情を籠めた奉仕は、あの南北戰爭の時に、華盛頓の病院で、ワルト・ホイットマンが病傷の兵士に對してした行屆いた看護を偲ばしめる。

彼がアトランタ監獄に到着してから少し經て、彼は二人の監獄の僧侶の訪問をうけた。一人はプロテスタントの牧師で、も一人はローマンカソリツクの僧侶であつた。

さてデブスは僧侶とか、説教師とかいふものと共通な點は何もなかつた。彼は彼等の神學とか、彼等めいめいの宗派の信條とは何の關係もなかつた。しかし彼は最も廣い意味に於て宗教的なる人間である。彼は靈魂の不滅を信じ、何か神祕的な方法で人間の事を支配する神の力を信じてゐる。この點に就ては、デブス自らに説明させた方がよいであらう。彼は獄中で私に、僧侶の訪問の話をしながら左の如く言つた。

「私は彼等の教會も、神學も私に無關係だ、私には何の役にも立たないと云つた。彼等は仕へようとするのでなくて、奴隷に

ならうとするのである。山上の垂訓の本當の意味を表はさうとするより寧ろ隱さうとするのである。私は友達の僧侶にかう話した。私は基督が穩やかな人であつたとも、遠慮深い人であつたとも思はない、彼は實在の、生きてゐる、赤い血潮の波うつてゐる遊說者だ、笞を持つて社の中に飛び込んで貧民を虐げる者を叩き出し、彼等の膏血を絞つて得た銀を、床の上に撒き散らしてしまつた人である。奪はれ、虐げられ、掠奪せられた人々に對して、彼は掠奪者に反抗せよと云つた。彼は暴利を貪る者の非を鳴らした。彼が生きてゐるまゝ、カルヴアリ山の十字架にかけられ、エルサレムの門に曝されたのもその爲めである。基督が磔にせられたのは愛の宗敎を說いたためではなくして、貧民より搾取する暴利を得る者を罵つたためである。

私は同じ事を異つた方法でやつたのだ。彼は十字架にはりつけられ、私は此所に投り込まれた。基督がその主義のためには、十字架にもかゝることが出來たとすれば、私は私の主義のために勿論獄に入る事が出來る。私が當然の理由から此所にゐるのは、立派な××だ。そして或る意味では、よい神の御代には、總て正さるべきことを明に示すわけにもなるのである」

この崇高な精神と、自分の魂や良心の完全な平靜を抱いて、彼は殆んど三年の月日を獄中に暮したのである。

ローマンカソリツクの僧侶は、最初は、何の宗敎を信じてゐるかとデブスに尋ねたが、やがて彼の親友になつてしまつた。そしてこのバーンス老師は、デブスが出獄して數日の後に死んだが、幾度も私に向つて、デブスは彼自身よりもよく聖書を知つてゐて、彼よりも容易にその文句を引用することが出來ると話した。

バーンス師は出來るだけのことをして、デブスを出獄させようとした、或時、彼はデブスについて云つた「彼は私が今まで會つた人間のうちで、一番キリストに近い人だ。どんなに短い時間でも彼と話をすれば、彼の絕對的な正直さと、信實さとを信じてしまふ。私は何時間でも彼の話をきいてゐられる。この大きな國の人民が、デブス君のような人を投獄する政府を、默つて見てゐるといふことが、私には了解できない、彼は積極的に善を助ける力だ。」

バーンス師はデブスを熱愛するあまりに、昔から人間がその中の最も偉大な人々を迫害したといふ悲しい跡を忘れてしまつたのであらう。チョルダノ・ブルノを見よ。チアン・フスを。アツシジのセント・フランシスを、サボナロラを。血に染められた歴史の頁に燦然と輝いてゐる名のうちで極僅かを拾ひ出してもかうだ。私がこの頁を書いてゐる時にも、世界戰爭中に歐洲に渡つたアメリカの軍團の將校は、その部下を激勵して、テルオートに行つてデブスの家の前で「裏切者」と叫ばせた。インヂアナ州の知事は、デブスが自分と同じ州に住んでゐることを恥ぢると云つて、この軍團のデブスを惱ますのを煽動した。かう話しただけではあまり酷すぎるようだから、此團員の大多數に非常に無智で、感情が强いといふことを附加へてやらなければならない。そして無智と激情とは、アメリカ人の集團にはよくある性質だ。外の國の群衆でもさうだらうとは思ふけれど、アメリカに於て特に明かなのは、アメリカ人が政治的に自由であるためである。長年の義務教育が行はれ、――色々な派の教會が何萬もあるのは別としても――中等學校も、專門學校も、大學もより多くある國では、無智も、盲目的な群衆心理も、教育と自由との敎化薫陶の温かい手で和らげられることであらう。

一九一九年の間には、デブスとその仲間の政治犯人――當時千人近くもゐたが――の釋放について、社會主義や勞働者の新聞の外には運動するものはなかつた。この種のアメリカの雜誌は特に强い印象を殘すことはなかつた。無數の社會主義新聞や、勞働新聞は國中の經濟的工業的の理由から存在し得られさうな色々な所に勃興したが、勞働者自身からの支持のない爲めに倒れるばかりであつた。一般の大赦の運動を導いたのは、アメリカ中で一番有力な社會主義新聞のニューヨーク・コールであつた。デブスは政治犯人中の最も偉大な図抜けた人格者であるから、この運動は自然、彼に集中した。

しかし一九二〇年の三月に至るまでアメリカ人の大多數は、ヴイクトル・ユーヂン・デブスが合衆國政府の囚人であることを痛感しなかつた。この事が彼等の注意を惹いたのは、この月に、デブスが私と面會した時、社會黨の大統領候補たる推薦を受けることに同意した事によつてであつた。これが國中に知れた時に、

過激な勞働運動社會主義の運動に加る者に衝動を與へた。この國の歴史あつて以來、大統領候補が政府の囚人であつたことは未だ嘗つてない。デブスが候補たることを承諾したのは、唯、資本主義との鬪爭の戰術の問題について隔離を來した、社會主義運動の左右兩翼を、結合するに役立つことが出來るであらうと信じたからである。當時は社會黨の少くとも半數が脫黨して共產黨を組織し、第三インタアナショナルを裏書きし、ロシア無產階級の戰鬪的なプログラムを全然踏襲してゐた。

デブスはロシア革命の進行に、理智的な興味は持つてゐたが、ボルシェヴイキによつて用ゐられ、後にソヴイエット政府によつて用ゐられた戰術は、アメリカ人の心理には適しないだらうと感じてゐた。この點に於て彼の立場は正しくあつた、また今でも正しくあると思はれる。

彼は獄に下る前にも××××に深い同情を表し、獄中で私が幾度も會つた時にも猶、世界歴史上で最初の、勞働階級の××に、好意ある言葉を述べた。

彼が候補となる意志を表示してから一ケ月後に、私はまた彼をアトランタに訪問した。これ等の面會の時に、彼は私に彼を代表して、社會主義新聞で全社會主義運動の合同を唱へるように賴んだ。彼は、社會黨と共產黨との間には何等の根本的な差異はなくて、彼等の爭は單に戰術の問題であること、彼等は徒にお互に攻擊し合つたり、反對したりして、力を費してはならないことを主張した。私がニューヨーク・コールに、彼との面會の記事を掲げて、合同を唱へた時に、彼の立場は、社會黨からも共產黨からも、有力な人々に攻擊された。或る社會主義者は、デブスが內心、寧ろ共產主義的な意見に近いと思つた。一方、共產黨の仲間では、デブスは單に社會黨の頹勢を救はんがために、彼等の再び合同することを申出たに過ぎないのだと考へた。

一九二〇年五月、國家社會主義大會は、全會一致で、彼を大統領候補に推薦した。しかし、この大會に出席した代表者の數は共產主義者の背反によつて、非常に減じた。デブスの合同の主張は役に立たなかつたのである。或る地方では共產主義者はその新聞によつて、――その中には「地下室式（アンダアグラウンドメソド）」で印刷さ

れたものもあつた。共產黨は政府によつて法律の保護外に置かれたからである。――彼等の同志がデブスに投票しないやうにと切言した。彼等は公然、社會黨を酷評して「反革命的」といひ、その指導者たちを「獵官政治家」と攻擊した。

デブスは白館（ワイトハウス）に對する選擧運動を監房から指揮した。政府も彼が國中の投票者に每週宣言書を出すことを許した。これ等の宣言書は皆、革命的な調子を帶びたもので、反革命運動者や、獵官者に安心を與へるやうなものは何もなかつた。

實際の選擧運動は、前に大統領候補であつた、また長い間偉大な社會主義者であつた、シカゴの辯護士シイモア・ステッドマンによつて行はれた。監房の中でデブスは、少くとも三百萬の投票を受けるだらうと信じてゐた。彼はウイルソン大統領の政策に對する反動を多少賴りにしてゐた。ウイルソンは再選のために打つて出はしなかつたけれど、民主黨の候補は若し當選すれば、ウイルソンの政策を踏襲する筈であつた。一方共和黨の公認候補、ウオレン・ヂ・ハーヂングは國際聯盟の考へを破棄しようとしてゐた。アメリカの投票者の大部分は國際聯盟につい

て、新聞で讀む以外何等の知る所もなかつた。しかしこれらの新聞雜誌で彼等は、その觀念を輕蔑することを教へられ、選擧の時に、それを排斥することを教へられた。國中はまた、ウイルソンのヴェルサイユでの失敗に不滿を抱いてゐた。彼は總てのことを約束しておきながら、何事をも爲し遂げなかつたのである。國民は、ロイド・ヂョーヂ、ヂョーヂ・クレマンソー、オルランドオ或は牧野男のやうな敏捷な政治家によつて、世界の人間が與へられさうな或るものを、ウイルソンが與へなかつたので反抗の聲をあげてゐた。選擧に當つて、アメリカの有權者は、ハアヂングに投票したのでなくて、ウイルソン派に反對の投票をしたのである。その結果、大統領選擧で未曾有の多數な投票の海嘯が、ハアヂンクを政廳にまで押しあげた。

デブスの投票は、ウイルソンに對する一般的な反對によつて損害を蒙つた。大統領ハーヂングは、合衆國の上院議員として、實際にアメリカの投票者には知られてゐなかつた。彼の人望と威信とは上院と彼の故鄕の町とに限られてゐた。共和黨大會が誰でも手當り次第の市民を街に見つけて推擧して共和黨の指札

をしてウイルソン派と國際聯盟に反對すると國中に吹聽したら、此偶然な市民は素晴らしい合衆國大統領になつただらう。

三百萬どころか、デブスの得票は百萬にも足らなかつた。一九一二年に彼の候補として得た投票は、一九二〇年のよりも多かつた。

アトランタの囚人達は、大統領の候補と仲間になつてゐることを誇りとした。そして彼等の多數は單純な心から、デブスは「勞働者の候補」だから當選するに違ひないと信じてゐた。彼等はかういふ風に、如何にも論理的に推論した。金持よりも勞働者の方が大勢投票する。だからデブスは當選するだらう。彼は監獄から白館に行くだらう。それから彼は監獄の戸を開いて彼等を自由にするだらう、と。合衆國中で、デブスの落選に驚き憤慨したものが、少くも二千三百人はあつた。それは彼の仲間である囚人たちである。

しかし、デブスが默つて參加してゐた選擧戰は、このアトランタ監獄の囚人に關する限りに於ては、公衆の心に印象を與へた。それは一人の偉人が獄に繫がれてゐることを國民に注意せしめた。そして勞働階級以外の人々が、議會や大統領に彼の釋放を歎願した。この運動は彼の釋放されるその時まで、不撓の忍耐を以て續けられた。私が既に云つた通り大統領ハーヂングは、輿論の力によつて已むを得なくなつて始めて、デブスを釋放したのであつた。

何等かの方法によつて、アメリカの勞働階級の過激な分子を再び合一させたいといふことは、デブスの熱心な願ひである。この國で、一個人がこの功業を成し遂げ得るとするならば、それはデブスに出來る。若し彼が失敗すれば、それは不可能である。彼は總ての分子によつて愛されてゐる。彼がこの國の過激運動のどれかの黨派に對して積極的な態度をとつても、彼は、彼の援助を得られなかつた側からの愛と尊敬とを少しも失はないであらう。

デブスはこれから暫くの間、隱退してゐなければならないであらう。寄る年波は無殘にも彼の活力を削り始めてゐる。彼は現代の思想や行動よりも數周紀(サークル)進んでゐる。そしてテルオートの小さな家から彼の灰碧色の眼は、地球中をかけめぐり、一人でも苦しんでゐる人があれば、この純な人の心は其所へ動いて行き。彼の兩腕は愛情をこめて差し出されるであらう。(ニユーヨークにて雜誌「改造」の爲めに、一九二二・二・一九)

ロマン・ロラン訪問記

室伏高信

巴里からの歸途に、私はヂュネーブへと廻つた。この町に私は三日の樂しい思出をもつてゐる。その時のことであつた、私の旅の手帳に次のようなことを書きつけたのは。

十一月三日、

ヂュネーブの朝は冷めたい淺霧に包まれてゐた。高原の町は流石に朝の落付きがあつた。モンブランの高峯が巨人のように聳えてゐるもとに、秋のヂュネーブは、半ば眠るように横はつてゐた。もう八時になつてゐるのに、人通りも至つて稀であつた。私はだら〱坂を停車場の方へと歩るいて行つた。

歐羅巴はどこへ行つて見ても、死にかゝつてゐる。沈鬱な歐羅巴は、世界の遊園地としての瑞西の空氣をも、沈鬱に導いた。停車場に集まる人影も寂しかつた。汽車は時間表通りには出なかつた。私はヂュネーブからヴヰレニユーブへと旅立つた。

ヂュネーブからヴヰレニユーブへの道は、湖畔に添ふての四時間の車行である。ヂュネーブ湖の風光は、無論長い間私の想像の樓閣のうちに畫かれてゐた。私は汽車の窓から、貪るような心持ちで、山の姿、水の色、湖邊のうねりと、自然の懷のうちに、柔らかい抱擁を求めた。そは決して壯嚴な、若しくは雄大な自然であるとは思へなかつた。四周の山は割合に淺く、湛るる水は思つたよりも白く、嚴肅な心持ちよりも、夢のような感じを誘つた。それにそここの湖邊に散見する家の色彩が、湖水の色との見事な階調を保つて、一面の風光を、一枚の水彩畫に仕上げてゐた。

ヴヰレニユーブの村は、ヂュネーブ湖の東の端に立つて、數十里の水面を隔てゝヂュネーブの町と相對してゐた。ヂュネーブが華手な都であるのに比べると、こゝは如何にも田舍らしいそして瑞西の大抵の地圖には出てゐないほどの小さい山村であつた。私と一所にこの停車場に下車したものはたつた一人の老人だけであつた。驛前に小學校があつて、私が丁度下車した時に、學校が退けて、二人の老女教師が、二、三十人の生徒に列

まれながら、校門を出てくるところであつた。學校の窓下に、チユネーブ湖の小さい波が、靜かに岸に戯れた。この村にロマン、ロランの假住居があつた。

驛前には一臺の自働車も無かつた。私は郵便配達にロランの家への道を尋ねた。彼はロランの名を知つてはゐなかつた。しかしロランの家はビヨン・ホテルの庭内にあつたので、そのホテルへの道を數へてくれた。電車に乘つて三、四丁ばかりするとホテルの前に出た。ホテルの玄關口には丁度一人の紳士がボーイと何か話し合つてゐたが、私がロランの家のことを尋ねるとこの紳士が「君はロランに會ふのか」と横合ひから私に話しかけた。私がさうと答へると、この紳士は如何にも輕蔑したように、「君はとても會へるものか」と言ひ放つた。そしてロランに會ひにくる人は非常に澤山あるが、一人だつて會つて歸つたものはない、と附け加へた。話の樣子で、この男はアメリカ邊りの新聞記者らしかつた。そして彼自身もロマンを訪ねて會えずに歸る一人であるらしかつた。私は大分この男から脅迫された。事によつたら私も會えないで歸る一人であるかしら、なぞとも思つて見た。しかし私には確信があつた。バートランド・ラツセルの紹介狀があり、そしてロラン自身からも、私が巴里にゐた間は、何時でも會ふからといつてきてゐたたら。

ロランの家の門を入つてから、名刺を差出すと取次の女が直ぐに二階へもつていつた。女が降りてくると、私を玄關の右側の室へ通した。そして主人は少し病氣だからちよつとこゝで待つてゐてくれといふた。年の頃七十ばかりの品のいゝ老人が室の隅の方で手紙を書いてゐた。私が室に入つて行くと、この老人は、ペンを握つたまゝ私の顔を不思議そうに眺めてゐたが、やがて君は佛蘭西語が話せるかと問ふた。ヂユ、ヌ、パール、パフランセーと私が答へると、それでは獨逸語は、英語は、と問ひ重ねた。私がどちらも少しは話せると答へると、老人は安心したような顔付きでまた手紙を書きつゞけた。待つこと二分間とたゝないうちに、ロランが二階から降りてきて、扉を開けると直ぐと「ムシウ、ムロプセ」といひながら長い手を差し出した。私はロランの後をついて二階へ上つて行つた。彼の家は小高い所にあつて、チユネーブ湖は一望のもとに收まつてゐるのであるが、彼の室は山の側に向つてゐた。湖水の側は彼の妹の室となつてゐた。彼は、妻をもたない彼は、彼の一人の妹とともに、このヴヰレニユーブに住むでゐた。彼等の生活は、親しい樂しい、愛に滿ちた共同生活であつた。チヤン・クリストフの巴里におけるオリヴヰエとの共同生活のように、若しくはオリヴヰエとアントアネツトとの共同生活のように。

ロランと、彼の妹と、私とは、背面の山に面して坐を占めた。彼の友ツワイグがその「ロラン傳」で書いてゐるとほり、彼は瘠せて脊の高い、顔の青白い、老紳士であつた。私が會つた著名な佛蘭西人としては、彼とベルグソンの二人であるが、ベルグソンのせか〱しい擧動に比べると、彼は落付いた、氣品の高い、物優しい、それでゐて力強いところのある佛蘭西人であつた。全體の恣態振舞が、英國のウエルスに似てゐるように思はれた。年の頃もウエルスと略同年位ひかと思はれた。彼は僧服のようなものを着て、牧師流のカラとネクタイとを着けてゐた。それが彼の面長であるが線の圓るい額と、星のやうに輝く眼の色とに、しつくりした調和を見せてゐるのであつた。彼の妹は、理知に過ぎてゐるようではあつたが、矢張り感んじの惡い方ではなかつた。

その室は疊敷にして十疊敷位ひの一室であつた。卓子の上には書きかけの原稿紙が萬年筆とともに横はつてゐるのみであつた。ツワイワによると、彼の巴里の住居は、書物の積み重ねで所狭きばかりになつてゐるとのことであるが、この室には、壁に添ふて小さい一つの本箱の中に、彼の自著が數十冊ばかり並べてあるに過ぎなかつた。片隅には寫眞も見えてゐた。

佛蘭西では誰れに會つたかと、彼は先づ私に尋ねた。私はベルグソンに會つたと話した。ベルグソンは相對性原理について著述をやつてゐるとの噂があるか、どうかと彼は重ねて私に問ふた。私はベルグソンから聽いたやうにベルグソンは今や倫理學上の著述に沒頭してゐるそうだと答へた。すると彼はまた、君はベルグソンについてどう感じたか、と問ふた、私は私の思つたまゝに、ベルグソンのような反動的な人と、私たちとの間には、大きな隔りがあるとしか思はれなかつた、と答へた。彼は如何にも我意を得たといはんばかりに微笑を堪えて妹の方へ視線を向けた。そして今度は、誰れか佛蘭西の社會主義者に會つたか、と話しかけた。私は實際いろ〱の都合で佛蘭西では誰れにも目ぼしい人には會つてゐなかつたので、ありの儘に話すと、佛蘭西の社會主義は今はすつかり信望を失つた。彼等が戰爭に反對しえなかつたので：：戰爭前までの信用は地に墮した、と彼は感慨に堪えないように話し始めた。「ロンデーもルノウデルもそしてゲードは全く忘れられてしまつたと、追ひかけるように言葉を綴いだ。

佛蘭西に再び革命がくるでしようか？、私はこの偉大な豫言者――チヤン・クリストフは世界戰爭の的確な豫言であつた――が佛蘭西の將來をどう考へてゐるかを聞いて見たかつた。「佛蘭西にくるものは、革命じやなくて、反動だ」彼は無造作にこう

いひ放つた。

戰爭の結果、却つて南佛蘭西は豐かになつた。農民たちはその富を何倍にした。戰爭で多數の壯丁の死んだことは、生き殘つた人たちに多くの富を分配する結果となつたので、それを喜んでゐる佛蘭西人は決して少けなくはない……一般の佛蘭西人がもつと悲慘の生活のどん底へ落ちなくちや、革命は生まれてくる力がない。」

「佛蘭西人は、今ま何ものを信んじてはゐないのです。彼等は自由、民主主義、こうした美しい名のもとに戰爭に死を誓つたのです。しかしその結果は見事に裏切られてしまひました。懷疑的であるといふのが今の佛蘭西人なのです」

「合理主義は國民の力とはなれないのです。ほんとうの國民的信仰は、もつと神秘的なものの中からでなくては生れてはこないのです。」

ロランは佛蘭西の將來に望を繋いではゐなかつた。彼は歐羅巴の將來は獨逸と伊太利のうへにあると考へてゐた。彼曰く、「生命、活力、爭鬪?こうした力は伊太利と獨逸の國民のうちに流れてゐる。歐羅巴を救ふものは、伊太利と獨逸とであらう」と。

彼が伊太利の將來に望を繋いでゐることは、彼が伊太利の社會主義に望を繋いでゐることであつた。彼は伊太利の社會主義はその本流がボルシエヴヰズムだと考へてゐた。戰爭に……：伊太利の社會主義の闘ふ力こそ伊太利を復活し、そして再び歐羅巴を燃やすべき巨火の一つであると彼は信んじてゐるのであつた。

私たちは伊太利の社會黨や、その指導者やいろ〳〵の雜談を進めた。そして伊太利の社會黨とモスコーとの間のごた〳〵事件についても話し合つた。この事件についてはロランは伊太利の側に從つてゼラチイの側に同情をもつてゐた。

「第三インタナショナルが伊太利社會黨を逸したのはジノヴヰエフの失敗です」ロランはこういふ見方をして居つた。

獨逸の社會主義は分裂の惱みに惱まされておつた。そして反動の力が、この國にも侮るべからさる勢ひにあることを、ロランはよく知つてゐた。それにもかゝわらず秩序的に、そして全體的に統一的な大きな力となりつゝある獨逸の無產者階級のうちに、彼はやがて歐羅巴を指導するの力が築かれつゝあると考へてゐた。彼曰く、「政治的にも、經濟的にも獨逸は大きな改造への道を歩るいてゐる」

今日の歐羅巴の要の一つは、それを指導する偉大なる人物のゐないことであると、彼は考へてゐた。彼は今の歐羅巴人のう

ちで獨逸のラーテノウの優れた人物を認めてはゐたが、その人が戰爭に反對しなかつたといふ一點で攻撃を加へた。

　彼はロシア革命に異常の興味をもつてゐた。特にその指導者の人物に興味をもつてゐた。

「私はボルシエヴヰキの指導者のことだけは特別に研究して見たいと思つてゐる。あゝした少數の人が、あの大ロシアを革命に指導してゐることは實に不思議なことです」

「私はレニンにも、トロツキーにも會つたことはない、ゴルキーのように親しい友にもまだ會つたことはないのです。私の會つたのはルナチャルスキーだけです。彼には戰爭前この瑞西で會ひました。私はソヴヰエット・ロシアで行はれてゐる最大の仕事はその教育にあると考へてゐます」

　彼はソヴヰエット・ロシアの熱烈な同情者の一人であつた。

「ソヴヰエット・ロシアは、巴里コムミューンとともに、永久に忘れられないであらう」彼はこういふこともいつた。

　しかし彼がソヴヰエット・ロシアへの同情者であることは、彼がレニンやトロツキーの、凡ての、原理や政策やを受け容れるといふことでは無論無かつた。彼のように、自由と人道とを常に、見つめてゐるものにとつては、ロシアの獨裁政治には、勿論多くの批評すべきものを含めてゐた。そしてこの獨裁政治さへも既に大に動搖を始めたといふこと、この儘では維持されないであらうといふことを、彼は既に見ぬいてゐた。彼曰く「ロシアはやがて獨逸のようになるだらう、ロシアのボルシエヴヰズムが獨逸の社會民主主義のように」――彼はこうした大膽な豫言を試みた。この偉大な歐羅巴の豫言者は、今のロシアが、右へ右への苦悶を、しつかり彼の心に把握してゐるのであつた。しかし彼がこの時に附け加へて言つたことは一層意味深い言葉であつた。彼は曰く、「ロシアは獨逸の後を襲ふであらう、しかしそれは矢張りレニン・トロツキーの指導のもとに」と。

　彼はロシアの右傾を信んじてゐた。しかしそのロシアの右傾とは彼に從へば、それは決してレニン政府の滅亡を意味することではなかつた。それはレニン、トロツキーを「獨裁」の高きから民衆の低きへともち來たすことであつた。

　私たちはロシアの農民問題についても、または外債承認の問題についても話した。そしてロランはロシアの實況特に知識階級の態度などについて、彼がナンゼン博士から聞き知つてゐることを、いろ〳〵と私に話してくれた。蓋しロシア飢饉救濟問題で大奮鬪もし、深い同情をもつてロシアに往復し、レニンやトロツキーや、カリニンや、ゴルキーや、その他の人たちと交はつてナンゼン博士が、この時日前に、ロマン・ロランをこゝ

の山村に訪ねたからである。

ロシアの知識階級はどうしてもボルシエヴヰキとは一所に行けないようです、と彼は彼の言葉を結んだ。そしてゴルキーのことについては、彼が決してボルシユヴヰズムを奉ずる者ではないといふた。彼曰く、「ゴルキーは自分を犧牲にしてゐるのです。彼はボルシエヴヰキにやないのです。彼はロシアを愛してゐるからです。愛するロシアを救ふために、彼は彼自身を捨てゝゐるのです」

それから私たちは國際聯盟のことやら、英國の政情のことやら、若しくは日本のことやら。種々雜多のことに話を移した。彼は國際聯盟には何んの望みをももつてはゐなかつたが、たゞ英國のロバート・セシルの誠實だけは信んじてゐるように見えた。

私たちの會話は二時間あまりに亘つた。ロラン兄妹に別れを告げておもてへ出た時には、チユネーブ湖は一面に霧に包まれてゐた。私はもと來た をチユネーブの町へと歸つた。私は今日こそほんとうの「人間」に會つた、といふ感じで心に深い喜びを感じながら。

私はチユネーブにその夜一晩宿つて翌朝マルセーユへと立つた。その朝の新聞は、日本の首相原敬氏の凶變を報じてゐた。

文藝管見（四）

里見弴

第三章　文藝概論

第二節　内容と表現

一　種々な「内容」の解釋

作品の「内容と表現（或は技巧）」と云ふ言葉は、文藝に限らず、他の姉妹藝術にも應用ゐられる。が、この章からは、主に文藝に就いて考へて行かうと思ふから、引例、用語など、總てそこに採ることゝするけれども、主意に於てこれを他藝術にあてはめて考へて頂いても少しも差支はない。

そこで、まづ、文藝の内容とは何を指すか、と云ふところから考へてみよう。

この問題に就いては、以前から、折ある毎に、雜誌に、講演に、また對談に、たび／＼私は愚見を述べて來た。それらの經驗から云ふと、自分ではごく當り前なことを云つてゐるつもりなのだけれど、一般の世間とは勿論のこと、同じく文藝に與る人々とでさへも、往々にして私の意見に相違があることを感じる。例へば、立派に教養のある人士が、或る作品の内容に就いて論じてゐるやうな場合でも、私に云はせれば、それは眞の内容でもなんでもないところのもので、馬鹿々々しさに返事の出來ないやうなことが度々あつた。また文藝の批評に用ゐられてゐる場合の「内容」と云ふ言葉の意味や、或る作品のなかで、こゝぞと重く考へられてゐるらしい「所謂」内容が、往々、私としては腑に落ちかねるものに出會つて來た。それどころではない、私自身の作品の多くが、私の考へてゐるやうな眞の内容を内容としないで、或るそ

れにまぎれ易いものに席を讓つてゐるのと見逃すことが出來ないのだ。では、私のは、云ふべくして行はれない一箇の理想論に止るのだらうか。それとも大多數の人々の考へ方が、あまりに間違つてゐるのだらうか。いづれが正しく、いづれが誤つてゐるか、これは遽に斷じられない問題と思ふが、こうして今私が、自分の、「內容論」とも呼ばるべきものを說かうとしてゐる限り、己を正しいと信じないで出來る筈はない。もしそれがくだらない理想論に終るとすれば、小說家である私の一生が空しく費されることとなのだ。私としては一生懸命だ。隨つてまた論調が、「眞理を說く」形をとつて進められるだらうことも、當然の歸結とみて頂きたい。そこで、手初めに、以上の事實を、「眞理を說く形」で云はふならば、「文藝の內容と表現の問題ほど、多くの人々に誤り考へられてゐるものも稀だ」と、まづから斷じ去りたい。實際、私には、「この人までが！」と驚かれるやうなことが幾度となくあつた。さう云ふ機會があまり多すぎた。

で、私が何をもつて文藝の內容とするかを說くに先だつて、まづ、世間普通に、それがどんな風に考へられてゐるかを吟味してかゝらうと思ふ。いろ〳〵の考へ方があるが、馬鹿々々しい方から、順に擧げて行くことにしよう。

謂ふところの「筋」――例へば、高師直の侮辱に堪えかねて、鹽冶判官が殿中で彼に切りかけたがために切腹を仰せつかる、國家老大星由良之助その場に馳せつけ、遺志を覺つて復讐の決心を定めるが、事を共にすべからざる腰拔侍を除外する手段として、ことさらに安きに就くが如く裝ひ……と云つたやうな、一篇の筋道、――事件の運びを以つて、內容と心得てゐるものがある。

「馬琴の小說なぞは、ちゃんと初から仕舞まで筋がとほつてゐるから面白いが、今の小說と云ふものを見ると、誰がどうしたのやらかうしたのやら、初にゐた人間が、中途でどこかへ消へて了ふかと思ふと一つことをいつまでも縷々と繰り返してゐたりして、からもう內容が稀薄なんだから、まるで讀む氣がしやアしない」

これくらゐの言葉は、交詢社の圖書室あたりで、立派な紳士の口からでも聞かれること受合だ。つまり、事件の運びだけが、辛くもこの程度の讀者の興味となり得るのだ。まつたく、連續提供の活動寫眞を、替目ごとに見に行く氣持だから、千變萬化、波瀾重疊と云つた「風」筋が仕組まれてさへすれば、それが何よりも內容豐富な作品と云ふわけになる

ので、それを、讀者の心理から云へば、豫期（エキスペクテエシヨン）とか好奇心（キウユリオシテイ）とかゞ興味の中心に立つのだ。

人間が、誰でもさう云ふ興味をもつてゐることは事實で、それを滿足させるやうな書物が、必しも惡いと云ふのではない。筋のある小說がいけないと云ふのではない。たゞ茲には、一篇の「筋」を、「內容」と心得てゐる人たちが、世間には可なり多く、さうしてそれが、幼稚な淺薄な好みであることを云へば足りる。何故と云ふに、その豫期とか好奇心とか云ふ氣持は、元來人間の靈性にあまり近い關係をもつものではなく、且その目的を、もつと適當に、十分に滿してくれる娛樂もほかに澤山あることだから、作者の側から云へば、決して有難い讀者ではない。更に、さう云ふ人たちによつて、文藝の內容が云々されたりするのを聞くことは、堪え難い心地がする。

この程度の讀書子に限つて、「筋」に、めいめい思ひ思ひの好みをもつてゐる。或る者は、讀んでヒヤヒヤするやうな――つまり煽情的なるものを好むし、或者は、悲哀の感快を喜んで、なんでも悲しい物語ばかりを撰む。或は勇壯活潑を愛し、或は荒唐無稽を採るなど人さまざまだが、要するに「筋」の興味以外には作品の「內容」を感じられない低級な點で共通してゐる。同じ程度のあたまで、文壇の半可通と來ると、「筋」のなかから、實際の事實を嗅ぎ出さうとする興味が、馬鹿々々しく强くなる。作品に書かれたことは、一々作品自身の直接に經驗でゝもあるかのやうに、何某はこんなことをしたとかあんな行爲があるとか、相手は何某と云ふ女をモデルにしたものだとか、そんな要らざる詮索ばかりして喜んでゐる。

次には、作者の主觀がはつきりと現れてゐないと承知しない讀書子の一群が位置する。云ふまでもなく、作品の內容とは、その材料に對する作者の考へだ、と思つてゐるものだ。惡人を出さば、その男を憎んでゐると云ふ作者の主觀が、露骨に現はれてゐればゐるほど、作の內容が充實したものとして、尊び喜ぶ人々だ。ごく幼稚な例を擧げれば、女子供が芝居を見ると、よく「どつちがいゝ人なの」とか「どつちが强いの」とか云ふ質問を發するが、人物より事件なりを、まづ第一に善惡とか强弱とか云ふ範疇のいづれかに片づけて了はないでは、どうも氣持が落ちつかないのだ。さうして、惡いやつに、手ひどい報ゐが來ることを待ち、いゝ人に、目出度い、結末或は悲壯な最期が來ないと納らない

のだ。夏目漱石氏の「坊つちやん」にしても、赤シャツと野幇間とが頭から卵だらけにされる代りに、益々僞善を逞うして、目出度く榮え行くやうに書かれてゐたならば、決してあれだけの人氣を博してはゐない。わかり易く、安値に云つて了へば、人物が善玉惡玉式に、——概念的に、所屬を明かにしてゐ、事件の運びが、時代の道德に並行して進められる作品が、この階梯の、——最も數多い讀書子に喜ばれるのだ。豫期や好奇心が、道義の念まで進んで來たわけだ。勿論そこには、少しでも非難さるべき何ものもないのだが、たゞ、文藝の內容と呼ばるべきものは、もう少し深いところへ潜まなければならないのだ。

こゝからまた進み出た讀書子の種類は、同じく作者の主觀を尊ぶには違ひないが、それが時代の思想や道德に一致しようとしまいと、そこにばかり拘泥してゐるほど幼稚ではない人々だ。一體、どんなに立派な道德でも思想でも、それが世を覆ひ、一般に行はれる頃には、必ず生氣が失はれ歪まされ、色あせて、殆ど骨ぬきの形式ばかりに墮したがるものだ。つまりそのなかに躍動してゐなければならない筈の「心」が、あたかも揮發生のものでもあるかのやうに、雲散霧發して了つたあとには、たゞ「言葉」の綱が一本、腐れかゝつて、落ち散つてゐるやうな態になり易い。で、さう云ふ古　けた道德に飽きたりない人々から云はせれば、前に擧げたやうな作品は、謂ふところの「通俗小說」として、輕　されるのは當然のことだ。隨つて、新しい思想、新しい道德を、作者に聽かうとし、さう云ふ智欲を滿足させてくれるやうな作に趣くことになる。イブセンやトルストイの諸作が、よくかう云ふ露骨な目的のために讀まれる。このへんの讀書子になると、あながち作者が、その作の終りできつぱりと問題の解決をつけてゐないでも、たゞ問題として提出してくれただけでもよしとするくらゐの度量を示すやうになつて來る。要するに、作品の內容を、そこに盛られた思想、主題と云ふやうなものに視るのだ。隨つて、思想それ自身として進んでゐ、然もはつきりと述べられ、または主題が新鮮であり、その持ち出し方が露骨であればあるほど、內容の豐富な作品と云はれるのだ。思想や主題が食べものなら表現はそれを盛つて出す皿、と云つた風に、きつぱり二つに分けられゝ上にも、主從の關係さへつけられる。隨つて、食ひものが滋味に富んでゐさへすれば、容器などはどうでもいゝと云つた考へ方にもなる。

これとても非難することの出來ない讀書の態度だ。その上、露骨すぎるほどに時代精神がそこに現はれてゐる。と云ふのは、科學の勃興以來物質的文明の長足の進歩に伴つて、當然の結果として、人心が物質化され、目的をもたない一擧手一投足でもが惜まれて、あらゆる行爲が、必ず何物かを己に持ち來たすことに役立たなければ承知しない、と云つた氣持の功利主義が、深くも根を張つた。昔は風流韻事として、世俗の圏外に立つてゐた文藝に、この時代精神が烈しく働きかけると、作る方では、何か實際の功用を目的としてかゝるし、讀む方では、「讀む」と云ふ努力が、有利に報はれないと滿足しない、と云つた傾向を現はして來たのだから、自然のなり行には違ひない。この時代氣質で云へば、文藝の內容とは、明にそこに述べられてゐる思想なり、そこに提出されてゐる主題なりでなければならない。この考へ方は、今日では所謂智識階級の讀書子の大多數に行はれてゐると云つてもいゝだらう。

そこで、私は「內容」と云ふものを、どう考へてゐるかを述べようと思ふ。

二　內容卽表現

內容と表現とは元來二つのものではあり得ないのだ。作品それ自體が、一語もあまさず、內容であり、同時に表現なのだ。これに就いては、假令百萬言を費しても、その實感をもたない人々には、一時言葉としては肯へても、終にその眞意は呑み込めないのだから、實感を得るまでは、どうしても、前に云つた食べものと皿とのやうに、はつきり二つに分けられる別々なものとしての考へ方から、脫け出ることは出來ないだらう。が、少し說明してみよう。これは、文藝で云ふより美術の例をとる方が、解りいゝかも知れない。繪畫の內容を、そこに描かれてゐる事象だと思つてゐる人々がある。楠正成が正行に敎訓してゐる處とか、基督が十字架からおろされてゐるところとか、つまりさう云ふ畫題と內容とを混同して了つて、畫題が氣に入りさへすれば、それがすぐいゝ繪、立派な藝術品になつて了ふ。歪んだ瓶や林檎の繪は、かう云ふ鑑賞眼にあつては、少しも面白味のないものになる。この程度の人は美術の方だとまるで素人だと云ふ風に輕蔑されるのだが、これと全く同じ意味の間違ひを、文藝の方でやつてゐても、殆ど人が怪まない、まづ或る內容、──思想とか主題とか云ふものがあつて、扨てこれを言葉で現はす、(文章に綴る、と云つても同じこと。)と云

ふ風に二段に觀るからどうしても二つ別々なものとしか考へられないのだが、實際に、言葉から遊離して、思想だけポカリと浮いてゐられるものではない言葉が思想で、思想が言葉だ。極端な例は單語だ。「水」なら「水」と云ふ一言は、表現であり、同時に內容で、どこへ刄を入れて割りやうもない一つのものだ。それが實相であることは、誰でも少し考へたらすぐ解るだらう。然し、いろ／＼の都合上、思想と言葉とを、別々に離して述べた方が便利が多い。實例は一つだけれども、それが言葉にも、文字にも、繪にも、彫刻にも音樂にも、形をとれるから假に別々なものでゝもあるやうに、いろ／＼の呼び名が與へられてゐるのだ。その假の名にだまされて別々なものゝやうに考へたが最期、どこまで行つても、內容卽表現の實感などは得られない。

で、この切り離すことの出來ない一つのものを、私も姑く二つの呼名を使つて說かうと思ふ。それによつて間違ひも起りかねないがさうした方が話を進めるのに便利が多いからだ。

三　表　現

私は「人」の條で、「己」と「他」と云ふものに就いて述べた。云ふまでもなく、この二つのものは、どこからどこまでが「己」で、そのあとは「他」だ、と云つた風に、人の裡に儼然たる境をたてゝ對應してゐるのではない。二重人格と云ふやうな變態はこの限りでないが、健全な一角人は、卽一箇人で、自體一箇に違ひないが、不可思議自在な天の創造である「己」に對して、生れたばかりの嬰兒の裡にも見出すことの出來る傳統、約束の類を他と名づけて假に二つに分けて述べたまでゞ身體一ついものがあることはさきにも述べた通りだ。

で、文藝の內容と表現とを、說明の手段として姑く二つのものゝやうに說くとすれば、丁度この「己」と「他」にあてはまる。云ふまでもなく「內容」とは、人の裡の「己」にあたるもの、「表現」とは、同じく、「他」に相當するものだ。夫の不可思議自由な創造である「己」には、不可思議目在な創造力が潛んでゐなければならない。それが總ての藝術の內容だ。そして、傳統、約束から來る「他」が表現となる。かう云ふ風に私は述べたいのだてく云ふやうだが、說明の便利のためにだ。

内容に就いては、後に詳しく述べる。文藝の表現とは、要するに「言葉」といふ傳統、約束の謂だ。言葉の記號である文字を連ねるより他に、文藝の表現は成り立たない。

演劇は言葉と動作を主として、これはいろ〳〵補助となる傳統、約束を加へて表現されるし、繪畫は色、音樂は音、と云ふ具合に、表現はすべて傳統、約束、――私の謂ふ「他」による。

既に傳統、約束によるとすれば、決して絶對に自由ではあり得ない。人の耳に感じられない空氣の震動、――音をなさない音は、どんな天才の音樂家でも表現のしようがない。色にしても言葉にしてもさうだ。どうしても、或る限られた範圍をもつ。

（この條未完）

治警解禁まで

奥むめお

一

今期四十五議會で、治安警察法第五條の解禁法律案が貴衆兩院を通過した。いま迄其の自由の殆んど全てを奪はれてゐた婦人の政治上の地位が、これで半人分ばかり認められたわけである。新婦人協會がこの運動の主唱者として活動を始めてから丁度四年目にあたる。眼に見えぬ大小幾多の犠牲の憶出は、たつたこれつぱかしの成功を收めるのも容易なことではなかつた事を思はせるに充分である。

『婦人が政談集會に會同し、其の發起人となるの自由』を今度新しく取り返し得た事が、それが直ちに現在の婦人界に非常に大きい自由を與へた事になり、素晴しい變化を齎すものと考へる事は早計である。現在の一般の婦人にとつては、治警第五條の存在は、或る特定の人の特定の場合を除いては、寧ろ多くの場合問題ではないとゐつた方が妥當ではないだらうか。長い間この不合理な惡法にもかゝはらず、婦人達の間に殆んど問題にされずに放任されて來たことは、此の法文あるために不利と不便に遭遇しなければならなかつた婦人が皆無であつた事を、少く共その解禁運動を思ひ起たせる程痛切に動かされる機會を持つた婦人が曾てなかつた事を示すものではないだらうかと私は思ふ。もしさうでなかつたとしたならば、曾て此法文のために苦しんで是非何とかしなければならぬとあせつた婦人が一人でもあつたとしたならば、私はそれにも係らず泣き寢入りを餘儀なくされたに違ひない、其の同性の自由のない制肘と拘束多き境遇に悲憤するばかりである。そして今日なほどれ程の變化が彼女達を自由にしたであらうか。見よ、多くの女の生活が絶えざる過勞と倦怠と盲從そのものとで、何の希望もなく、勿論新しい生活への精進のあらう筈がない。今度の治警五條の修正は、それ自身決してさう大したことではない。この變化が漸くに動きかけつゝある婦人界にとつて何等かの刺戟劑となつて、

更に婦人達をして活氣づける事が出來　ら何よりである。私は新しく得たこの自由を最もよく活かす事に依つて、可なり大きい社會的變化を婦人の力で促進し、よりいゝ社會實現の氣運を早め得ることを信ずるのである。

二

治警運動は新婦人協會の人々に依つて始めて手を着けられたものではない。もう既に十數年以前第二十一議會當時に今井歌子、遠藤淸子氏等一派の請願運動があつた。丁度其頃は恰も日露戰役が終結してわが國民は戰捷の余榮に醉つてゐた時であつた。歷史が常に語る如く斯る大きい國民的興奮のあつた時代には必ず精神的動搖の隨伴するもので、我國の思想界はこの機運に促されて急激に變轉した。そして凡ゆる方面に——文藝、政治、法律、制度の各方面に改造が叫ばれ出した。堺利彦氏一派の人々が社會主義の立場から普通選擧を高唱した頃であり、文藝界では田山花袋氏などが自然主義的新人生觀を唱道して所謂自然主義小說に依つて、舊道德の破壞を叫んだ頃である。又イプセン、ハウプトマン等の泰西文學が盛んに飜譯されて、婦人解放問題が論議せられた頃である。

然し一般の常識は未だ婦人の政治上に於ける解放を認める迄に至らず、氏等の運動は常に贊否兩說の場中に立つ惡戰であつた。遠藤氏が當年の形勢を記して「輿論は贊否相半ばしてゐましたが、私達の請願が前年に比して著しく眞面目に取扱はれ、新聞界の論壇も眞面目にこの運動に對する贊否の文を揭げるやうになつた」と語つてゐるのを見ても當時の輿論がどんなものであつたかゞ窺ひ知る事が出來やうと思ふ。

請願第一年は、衆議院に於ては望月某氏の反對演說があつたにも係はらず採擇になつたが、貴族院で少數否決に會つた。第二年も衆議院で可決されて貴族院で葬られた。第三年には貴族院へも同樣な請願を提出し、なほ、衆議院では更に改正法律案として上程される事になつた。その結果政府は委員の意見を徵する事になり、政府側の代表者としては當時の警保局長古賀廉造氏がそれに對する答辯をした。その大要は、婦人をして政治に關與せしめ、或ひは政談集會に會同せしめる時は、日本婦人の美德である淑德を傷け、不幸にして良人と政見を異にするやうな場合があれば、延いて家庭の平和を亂し、我國の國是たる家族制度の基礎を危うするものである故に、政府の意見としては此の請願並びに法律案は不採擇とする事に決定してゐる、と云ふのであつた。第四年目の運動も例に依つて衆議院で採擇され乍ら、貴族院では極めて少數の贊成者しか得られなかつた。

斯くして氏等の努力は四ケ年續けられたにも係らず、當の遠藤氏一個人の事由に依つて中絶するのやむなきに至つたのは惜しむべき事である。殊に漸くにして政府側も氏等有志の倦まない熱心と社會の輿論とに動かされる處があつたらしく、請願有志の個人々々の身分や教育等に就ての調査を始め、又新思想に對する政府の方針も隨分進歩的に自由主義的になりかけた頃であつたので、主張の貫徹も近きにある事を誰しも豫想してゐた、といふから更に返す〲も惜しかつたと思ふ。

順序として消般の新婦人協會の運動の經過をあらまし書き添へるならば、云ふ迄もなくこれは平塚明氏、市川房枝氏等の發起にかゝるもので、氏等は治警案と一緒に請願した花柳病男子結婚制限法の方に特に力を注ぎ度い意嚮であつたらしく、當初はその方に多くの努力を費し、治警案は常に第二位に置かれてあつたものであるが、後れて參加した人々の間に花柳病男子の結婚法案運動に賛意を表しない者が少くなかつた事と、一般の人氣が治警運動の方に集つて賑々しく巷間の噂に上せられたに反して、他の一方は寧ろ識者の反對論にさへ出會つて案外不人氣であつた事等が不知不識の間に協會の運動を傾けたのが、年一年と花柳病男子の結婚法案の方は粗略に取扱はれるやうになつて、本年の如きはつひに中絶する事に決めて治警運動だけに傾倒した。

治警第五條の修正を要求する理由として擧げた六項をこゝに採錄して參考に供する。

一、單に婦人であるといふ理由から、政治結社に加入する自由、及び政談集會に會同し、若しくは其の發起人となる自由を禁ずるのは不合理である。

二、婦人が、その女として、母としての思想や感情を通じて健全なる文化の發展にあづからうとする時、政事的知識を缺いてはそれを全うする事が出來ない。

三、社會生活乃至は職業生活に從事する婦人は、殊に政事的知識を必要とする。これを缺く時は多大の不利不便に遭遇しなければならない。

四、今日の尙早論者の理由とするところは現在の日本婦人はあまりに政事的に無知だといふ事であり乍ら、その能力を養ふに必要な機會を拒む如きは甚しい矛盾である。

五、婦人參政權問題は世界大戰の結果として既に世界的承認を得、今やわが日本に於ても男女をとはざる普通選擧要求の聲さへ起つてゐる時に於て、斯る法律をいつ迄もそのまゝに存置する事は、時代の趨勢に反する。

六、新聞雜誌の政治記事や政治論を自由に讀み且つ、貴衆兩院の傍聽をも許されてゐる婦人に、他方政談集會に集ることのみを禁じてゐるのは無意義である。

第一年は貴衆兩院に請願書を提出し、稍おくれて法律改正案

提出の運びも出來たのであつたが、（請願は示威運動として價値あるにすぎず法律案として提出して可決した時のみ、効力を生ずるものである事を聞いてから、常にその方に努力した）議會解散の厄に會つて立消えとなつた。卽第四十二議會の時である。丁度解散された日の夜の十一時頃であつた。婦人團體聯合の示威大講演會を開催する計劃にて、四五名の者がそれ〴〵手分けをして講師の交渉にあたりその返事を齎して田端の事務所に落合つた時、初めて號外の出てる事を知つて呆然自失したのは。第四十三議會は臨時議會で會期も短く、さきを急ぐ重要法案も多いとかで、法律改正案の提出には到底間にあふまいとの意見も多かつたが、その準備を急いで贊成者三十名の調印をえて提出、田淵、中野三代議士が、提出者となつてとう〳〵提出する事が出來た。が然し委員附托になつたまゝ一度も委員會の開かれる事なく葬られ終つたのである。つまり握りつぶしに會つたわけである。運動の第三年卽ち第四十四議會より治警運動に對する政友會の態度は一變した。これ迄個人として贊成の者は多いが、黨としては贊成する事が出來ないとて、毎もあいまいな返事で逃げてゐた政友會の幹部が、急にこの運動の斡旋役になつたばかりでなく、前年迄特にこのために盡力した憲政會や國民黨・無所屬等の諸氏を出し抜いて、法律改正案をさへ提出してしまつた。新婦人協會の役員と其他の有志婦人十數名が、政友會の幹事諸氏に招待されて富士見軒に晩餐を共にし乍ら、所謂『相協議』する光榮に浴したのはこの頃の事である。

私達の方でも少しづゝ政黨各間に觸る機會や、策略に見慣れ聞き慣れて興味を持出した頃であるから、漸く運動が成功に近づいた事を思つて内心微笑を禁じ得なかつた。何故ならば政友會は内閣を組織し、議會に絶對多數を占めてゐるのであるから、そして政友會の贊成を得てゐるものならば大抵のものは誤算なしに可決されて通過するものと見ていゝのであるから。果して衆議院本會議では可決された。（但し、婦人が政談集會に會同し、又その發起人となるの自由を得る項だけに限られた政友會案の通過である。政治結社にも加入し得る事を加へた他の憲政會案、國民黨案、無所屬案は全て否決）そして運動の前途を樂觀して、貴族院も輿論滿場一致にて、可決するものと決め込んでゐた處が、意外にも多數の反對者があつて否決されてしまつた。貴族院の委員會でさへ可決されたのであつたが、最後の本會議々上で否決となるなどとは、全く意外であつた。當日反對演説をした藤村義朗氏は婦人傍聽者の折から恨まれ罵られた。或る者は、「藤村男が憎い、引張り出して擲つてやりたい』と云つて顏色を變へて口惜しがつた。或者は盛んに新婦人協會に書面を飛ば

して、運動の妨害者藤村氏に、何故相當な復讐を講じないかと詰つて來たりした。その時の男の演説の要旨は、「……貴族院は模範的の集會であるから婦人がこれに臨むで傍聽する事に何等差支へないが、婦人自らが政治運動をするといふ如きは甚だ面白くない。第一それは生理的に、又心理的に見ても自然の理法に反してゐる。婦人の本分は家庭にある。のみならず婦人が社會の表面に出て政治上の運動をする事は、甚だ惡い結果を齎すもので、古の平政子、則天武后、エリザベス女王の如き、悉く政治に關與して惡い結果を來してゐる。是は我國固有の傳說、習慣及び歷史に背いてゐると思ふ。今日貴族院が之を許す事は我國體に關する事と思ふ……」といふやうなものであつた。これは保守的な人々の誰でも考へさうな事であつて、敢て藤村氏一人を嗤ふべきではない。唯、氏は貴族院議員中では新思想家であり、有力な人であるために、氏の說が當日の議場を左右したのであらうといふ事であつた。(但し、氏はこれ迄の誤解を解いて、今期議會ではわれ〲の運動のために多大の便宜を與へられるに至つた。)

三

斯ういふ風にして第四十五議會は來た。長い間先頭に起つて畫策し、奮鬪して來た平塚氏は病んで佐久山にかくれ、市川氏も既に渡米して今は專心共働にあたるだけの餘裕を持つ人もない程、あとに殘つた人々は忙しい境遇にあつた。私は今度は成だけ無駄な骨折を省いて手輕な方法を執らなければならぬと思つた。今日では議會運動の勝敗なんか全くなるやうにしか成らぬのだから、とも想つた。そして餘裕のある限り婦人界の輿論を高めて氣勢を添へる事に努力しやうと決心した。例年のやうに叩頭して頼みまはる迄もなく、各代議士の方から治安警察法第條五に關する法律改正案は提出された。そして衆議院では難なく政友會案が可決した。政友會の議員諸氏は機會ある每に、『今年はきつと大丈夫ですよ、請合つて通過させてあげますよ』と恰も祖父さんが孫娘をあやすやうな口吻で私達を嬉しがらせた。私達も大抵大丈夫らしい事を確かめる事が出來て元氣であつた。然し政友會の威力が貴族院にまで及ぶのかどうか、頗る不安でならなかつた。殊に貴族院の風雲はだん〲險惡になつて、內閣の壽命さへ云々されるやうになつては不安の度に加速度を加へて、募る許りであつた。それでも無理に無理を重ねて續けた貴族院議員諸氏との交渉が意外に好都合に運んで、この分では大した反對者はあるまいと勝算を立てる事さへ出來るやうになつた。遂に當日になつた。三月二十五日である。即ち第四十五議會の最終日、貴族院の議事は深更に及んでなほ續けら

れた。午後十一時二十分新婦人協會の人々の努力は、遂ひにこゝに酬ひられて可決したのである。

私はこの治警運動のために盡力せられた貴衆兩院の議員諸氏、並びに直接その衝にあたつて苦鬪した人々の勞の並々ならぬ事を思ふて、深い感謝と敬意とを表するものであるが、然し何よりも、今日政友會を動かし、貴族院をも動かして婦人の政治上の自由を保証させるに至つた其の力が、實に時代の趨勢の而らしむるものであつた事を信ずる者である。時代の要求の向ふ所、婦人の參政權も近い將來に可能となるであらうし、更には現代の政界に雄飛する政治家諸氏等の夢想だにしなかつたやうな驚くべき新社會の實現される事も、必らずしも想像し得べからざる事ではない、と私は思ふ。國際上の立場に、常に特殊國としての存在を力說してゐるわが國も、汎ゆる方面に於て世界的進歩の飛沫を拒む事が出來ず、次第に其の城砦を切り崩されてゆくことは興味ある問題である。

四

扨、自分達のこの運動が、現在の代議士諸氏にどんな風に取扱はれたであらうか。政友會の有力者諸氏は頻りに『何にも運動なんかするに及びません。貴女方が手をつかねて遊んでゐたつて通過する事は請合ですよ、私達が通過させてあげますよ』と云つてゐた。貴族院に送附されたのが終會に間近い頃であつたにもかゝはらず、奇蹟のやうな成功をかち得た半面には、或ひはそれ等の言の如き好意ある手續が取交はされてあつたのかも知れない、と後になつて思ひ出しては謝意を表してゐるところであるが、とにかく『國技館の角力さへ、勝負は初めから解つてゐはしない』とか云つたといふ某氏の皮肉は一寸面白い。又ある席上で某代議士は、

『貴女方は政治道徳に就て何にも知つてゐない。どこに行つてもその中に入れば、そのグループ特有の習慣か駈引といふものがあるものでいろ〳〵と手を換へてやつてみて、一番いゝ方法か見出さなければならない。例へば、治警案といふもの唯一つを振りかざして責めかけて來ないで、多くの要求を同時に提出した方がいゝ。女の要求だから直ぐ承諾を與へたと云はれては工合の惡いものだが、澤山出した要求の内の一つ位はどうせ通ふものだから、さうして續けてゐる内には遂には目的のものをも獲得されるわけだ。それが人情といふものではないだろうか』

こんなに正直に打明けた忠言を與へて吳れたりした事もあつた。富士見軒での會見の夜、

『勿論自分達は是非婦人參政權にまで到達しやうと思つてゐ

る。然しそれは決して單に男子と伍して政權を得たいといふやうな理由からではない。自分達は現在の政治に、あきたらない多くのものを持つてゐる。そして政治といふものは、こんな物であつてはならない事を知つた。自分達は、救ひやうのない迄に墮落した今日の政治に代る新しい政治のために、自分達の力がなくてならないものである事を思ふやうになつた。云ひ換へれば、貴方方が・——現在の代議士諸氏にそこを退いて貰つて新しい要求の上に立つわれ〳〵自身がそれに代らなければならないのだ」といふ風な事を私が云つた時、世の中は常に理想論と實際論との爭ひであると、一笑に附してうけ流した事があつた。この一場の會談が、自分をして、現在の政治や、政治家といふものが、自分達の考へてゐたものとは非常に大きい隔りのある事を明確に考へさせずにはおかなかつた。そして政治に對する今後の婦人運動が、在來のそれとは自ら違つた立場にあらねばならぬ事を、認めなければならなくなつた。

五

歐米に於ては、婦人の參政權運動はもう一段落をつげてゐる。婦人參政權の問題は既に解決されてしまつて過去に屬するものとなつたと云つてゐゝ。英國では一九一八年以來成年婦人の半數が參政權を獲得してゐるし、北米合衆國をはじめ、オーストリアでも、ホンガリアでも、オランダでも、ポーランド共他の國々が皆既に婦人の參政權を認めてゐる。勿論戰後のドイツ、ロシアの如き新興國では政治上に男は女同等の權利を得てゐる。それに比較し、わが日本に於ては婦人の參政權運動が未だ起つて居ないばかりでなく、つい五六日前迄婦人は政治上に全く認められず、一人格者としての取扱ひを拒まれてゐたのである。いつ迄經つても日本婦人の參政權問題は時機尚早の言葉の下になをざりにされてゐるにも係らず、政治的自覺を喚起し、その教養を積むために必要なあらゆる機會を、單に婦人であるといふ理由の下に拒んでゐた事は大きい矛盾であつたと云はなければならない。然し、非常に遲ればせ乍ら、とにかく治警第五條は修正された。次に來るべきものは、婦人參政權の運動である。即ち治警の修正運動は當然婦人參政權運動の前提をなすものである。然し乍ら、云ふまでもなく婦人參政權運動は婦人運動の全部でもなければ、婦人解放運動の最後のものでもない。歐米に於ける諸先進國で既に婦人は參政權を獲得して、政治運動としての婦人運動は成功に近い結末を告げてゐるにもかゝはらず、婦人の地位は、その始めに夢想されたやうに奴隷的な存在からは、決して完全に救はれてゐない事、そし

て、それは勞働運動と結びつく事に依つて、今や一新轉機を劃さうとしつゝある事に注意すべきである。

翻つて現在の日本の婦人の生活を考へたときに、政治上に全く無權無能であるばかりでなく、當然過ぎる程の要求である政治的自由の獲得にさへ、自分自身の問題として考へる事の少ない婦人の現狀に自分たちは眼蔽ふ事が出來ない。勞働運動に對して最後の賽を投ずる者が、勞働者自身でなければならぬと同じやうに、婦人運動に於てもその根本に於ては、婦人自身の自覺と要求に俟たなければならない、曾つて某氏が、婦人參政權の可否如何の問に答へて、わが國婦人の參政權を認むべきや否やは、婦人が如何に痛切にこれを要求するかに由て決せん—と書かれたのは、自分達に考へるべき多くのものを暗示する言葉として思ひ出されるものである。

私は今度の治警五條の解禁がもつと大きい反響を、社會に、とりわけ一般婦人の間に起すべきであると思つてゐる。治警運動も參政權運動も、婦人の啓蒙運動としてみる時に、はじめて存在の必要と價値とが判然として來る。もし一部の急進論者が說くやうな急激な變化が當分來ないと假定すれば、普選運動に伴つて、わが國の婦人の間にも、參政權獲得の新しい運動が起つて來るに違ひない、と私は信ずる。唯今後に起つて來るべき婦人參政權の運動は、決して、從來歐米に於て見たそれらのやうに單なる政權獲得のための運動であつてはならないと思ふ。現在の社會は、如何なる方面に於てもその根本的な組織の改造に促されてゐる。そして婦人運動も、必然的にそれに結びつかなければならない。

云ふ迄もなく社會の改造は、男女協同の努力の上に築き上げられるべきものである。もし婦人がこの大きな使命に觸れる事なしに過すのであつたならば、其の大きな仕事の大半は、徒勞に終つたと云はれても仕方がないであらう。そしてその大變化が、必然的に伴ふ犧牲を負はなければならない者は、無自覺でゐたところの婦人自身であらなければならない。自分達は現在の政治が、又社會組織が何故に、又如何に改造されなければならないかを、長い間その眼を蔽はれてゐた婦人自身の瞳を以て、明確に見定めなければならない。さうして、單に參政權をいふやうな問題だけに婦人の力を集注させる事の代りに、もつと根本的な、現在の社會組織の改造に婦人解放の運動を結びつける事に、より多くの期待をかけなければならないと思ふ。單に中産階級、智識階級の婦人が現在の政治をその儘承認して、政權を獲得するといふよりも、今後の婦人參政權運動は、もつと廣い立場に立つて、現在の政治組織を改造してゆくための一つの手段として意義あらしめたいと思ふ。

赤色陸海軍の三人男

山川菊榮

軍隊の叛逆と其因由

軍隊の叛逆は、ツァー及び官僚政府にとつては晴天の霹靂であつた。然し露國軍隊の内情を知る者にとつて、寧ろ其起ることの晩かつたことが怪まれてゐた程、紊亂、腐敗、壓制、窮乏が窮まりなく行はれてゐたのである。官僚と資本家は、兵士の武器や被服や靴や食物となるべき、膨大なる資に依て私腹を肥すことを戯ふた。彼等は國防の名に依て人民から苛税を誅求する一方、共同防費を摑んで兵士を飢寒に泣かせ、依て二重に國民の生血を絞つた。

一九一七年八月に行はれたツァーの陸軍大臣の審判は、戰線にあつた露國兵士の慘狀を遺憾なく暴露した。此時判然した所によると、一九一四年．大戰開始の當時露西亞には既に甚しく器が缺乏して居つて、銃は四百五十萬の兵士の數に遙か及ばなかつた。最初に出征した部隊でさへ二名について一挺づゝしか銃をもたず、時が經つに連れて缺乏は益々激しく、後には三人について一挺、四人について一挺、五人に一挺、七人に一挺、十人に一挺となり、果ては一部隊について一挺といふほどにまでなつた。ヤヌシュケウィッチ將軍は、兵士が靴をぬいで、それを銃劍の代りにして戰つた場合を目擊したと證言した。ヴェリチコ將軍は、兵士が長い間、武器を持たずに棒切れで訓練をし、その棒切れを唯一の武器として、實戰に臨んだこともあれば、四千人の一隊が文字通り素手で戰場に向つたこともあるといふ證言を與へた。ロヂアンコが戰場を視察に出かけた時、露西亞の軍隊は敵軍の進擊に對して三回しか發砲することが出來ず、棒切れや石で敵を擲つたといふ事實もある。『我軍隊がどれ程苦しんだかは到底言葉には盡すことは出來ない。然も彼等は裸體で、素足で、空手で獅子のように戰つたのである。』とロ

チヤンは語つた。砲丸の缺乏は特に甚しく、日に何千發となく打ち出す獨軍と對陣しながら、一日一發と制限せられた場合もあり、一九一五年春ガリシアの戰の場合などは、獨逸軍が少くとも七十萬發を打つたに引換へ、露軍は全然應戰の準備がなかつた。殊に敵の二十四箇軍團に對し、味方は十四ケ軍團——然も殆ど武器らしい武器をもたぬ——に過ぎなかつたので、いかに勇敢な露兵と雖も潰滅の悲運を免れることは出來なかつた。擲手の一隊が敵の砲火の前に無謀な突擊命令を受けて、瞬く暇に數千人が全滅したような例は、數ふるに遑もない程であつた。然も兵士に對する將校の冷酷と壓制は益々加はるばかりであつた。將校は兵士を奴隷か家畜のように酷使し虐待し、打つ蹴るは愚か、苟も上官の命令に背いた以上、事情を問はず其場で射殺される事すらあつた。其上彼等は陣中に如何はしい婦人を集めて飲酒亂舞に耽り、時としては明白に敵と內通して、殊更に味方の防備の薄弱の點を砲擊させたりする程であつた。

一九一七年の春までには、露西亞は既に四百五十萬の士卒を失つて居つた。そしてツアーの股肱であつた現役の精鋭は、上の如き事情に依て殆ど全滅し、戰線及び國內に涉されたのは、農村から徵募せられた、全く戰意のない豫後備兵又は新兵のみであつた。兵士はその悲慘な狀態のためだけでも。政府に對し將校に對する深刻な怨嗟の情を抱くに十分であつたが、殊に彼等にとつては、戰爭の目的が全然不可解であつた。彼等はいつ果つべしとも見えぬ此徒らなる虐殺、無意味なる破壞が、死と荒廢と窮乏以外の何物を齎らすべきかを疑つてゐた。戰場の荒廢は云ふまでもなく、露國內地も、輸入の杜絕、生產力の缺乏、膨大なる軍費の徵收等に依て極度に疲弊し、男子は總て戰場に出て、耕すことも刈ることも、機械を運轉することも、馬車自動車を驅ることも、すべて婦人や子供や老人は病身者の仕事となつてゐた。繁華な町々の店は殘らず閉ぢられて、辻にはたゞパンを求めて深夜から立ち盡す婦人の行列が目立つのみであつた。『何のために』『誰のために』この問が兵士の單純な頭腦を往來し始めた時、戰爭はもはや何人の力を以てしても繼續不可能となつた。いかなる刑罰、いかなる威嚇も、欲せざる民衆を驅つて、彼等の所謂『ツアーの戰爭』『軍閥資本家階級の戰爭』に追ひやることは出來なくなつたのである。

……………、…………、……………
……………、…………『…………』『…………』……
……………。

解放せられたる無產者

凍りつく様な北國の冬の朝、町の向ひ側に勞者同士は、山なす雪に隔てられて互に相手の顏を見ずに、僅かに雪の中へ竹筒を通して挨拶を交すが、其聲すらも寒さに凍えてしまひ、やがて春風の訪なふ頃、朗らかな日の光りに始めて雪と共に聲も溶けて、『お早う、お早う』の聲が一時に町を滿たすといふ話がある。嚴寒骨を刺すやうなツァーの專制時代が過ぎ去つて、始めて自由の光に浴した露西亞の民衆の場合は丁度これで、久しく鬱結してゐた不平や要求や思想や感情が一時に迸り出て留まる所を知らぬ有樣であつた。

一九一七年五月某日の深更に露都に着した一旅客は、眞夜中といふに、荒れ果た町の角々に、高聲で談論し合ふ幾團の群衆を見て、すは何事か起ると胸を轟かせたが、後になつて見れば、それは革命後の露都では、日夜至る所で見られる光景だと分つた。劇場や見せ物小屋や學校や俱樂部や、ソヴィエットの集會所や、組合本部や、兵營や、戰場の塹壕の中や、農村の町外れや、工場の中で、毎日無數の講演や討論や演説が行はれた。全露西亞を通じて、町の角、汽車、電車、其他五人でも七人でも人の集る所は、忽ち政治的討論や集會の場所となつた。ペトログラードには毎日各黨各派の大會が浙例四つや五つは開かれ、どの會合でも發言時間制限の動議は否決されて、何人も腹にありつたけのことを云ふことが許されてゐた。民衆は、社會民主黨員の云ふことでも、社會革命黨員の云ふことでも、アナーキストのいふことでも、相手が話し續ける間はヂッと默つて熱心に傾聽した。日曜日などには、終日市の端から端へ驅けまはつて幾つもの講演會や演説會を聞き、疲れ果てゝ、然も滿足し切つて、幾哩もある場末の家へ、痛い足を引ずつて歸る者も多かつた。彼等は幾世紀に亘る暗黑と無智と言論の拘束とに對する償ひを、一時に得ようとするかの如く、眞實眞面目に傾聽し、考慮し、議論した。その議論は修辭や學殖を誇示する、議論のための議論でなく、自己と社會にとつて最も重要な、最も痛切な問題についての、明白な理解と正しき行動の方針を攫んがための努力の一つであつた。

戰線では、兵士は將校と度々衝突を重ねた擧句、その委員會を通じて自治を學んだ。工場では工場委員會が次第に經驗と實力とを貯へて、その新使命を果す能力を備へて來た。智識に飢ゑて居つた全露西亞は、夢中になつて本を讀み始めた。政治、經濟、歴史、何でも彼等は手當り次第に讀んだ。總ての大小都市に於ても、戰線に於ても、諸政黨政派は必ず、時には幾種類もの機關紙を出してゐた。無數の團體から何萬何十萬と發行されるパンフレットは、洪水のように軍隊や工場や農村に流れ込

んだ。久しい間抑壓されてゐた智識欲が、革命と共に、一時に爆發したといふ勢である。ペトログラード・ソヴィエットの本部スモルニー院からだけでも毎日幾臺の自動車、幾貨車に溢れる程の出版物が運び出され、其れが全國に振り撒かれた。露西亞は、燒け砂が水を吸ひ込むように、あらゆる出版物を飽くことなく、貪り吸ふた。然し其讀物は低級な人情本や、僞八百の歷史や荒唐無稽な宗教書の類ではなく、社會學や經濟學の理論哲學及びトルストイ、ゴルキー、ゴーゴルらの著書であつた。當時或人がリガ附近の戰線を見舞ふと、泥濘脛を沒する塹壕の中に、痩せ衰へて靴も穿かず、破れ着物の間から肌ののぞいてゐる、みじめな姿をした兵隊達が、訪問者の姿を見るや否や、立ち上つて『何か讀物をもつて來て吳れましたか』と、異口同音に叫んだといふ話がある。

…………………………………。……………、……

…………、…………、……………………

………………………………………………

………………。

××××××——兵士委員會

軍隊の空氣も全く一變した。…………………………、…………………………………。一例を擧げれば、十一月革命の數月後、ペトログロードの西南數哩の地まで、假政府の首相ケレンスキーが、前線にあつた軍勢を率ゐて攻め上つた時のことである。前線を視察して居た米國社會黨のジョン・リードは、ボリシエヴィキの兵士に捉まり、其通行券が怪しいといふので、危く殺されそうになつた揚句、一應聯隊本部へ連れて行かれた。本部の廣間には兵士が一杯ゐたが、連れて來た兵士の說明を聞くと、『委員、委員』と口々に呼び立てた。やがて只の一兵卒に過ぎぬ委員長が人波をかき分けて出て來て、リードの通行券——勞農政府の出した——の確實なことを認め、そこで彼は聯隊を代表して米國の同志を歡迎する旨を述べた。集まつた兵士は大喝采をした。委員長はリードを導いて將校室に連れて行き、其處で將校と一所に食事をとるように云ひ置いて歸つた。見ると、集まつた將校達は、帝政時代の綬與勳章を其まゝ着けてゐて、瀟洒とした風采といひ、恭々しく從卒に侍かれてゐる工合といひ、何處と云つて歐洲諸國の將校と變りはない。『ハテ、革命は何處に？』とはリードの抱いた疑問であつた。そこで一人の將校に向つて『あなたはボリシエヴィキですか』と聞くと、列みゐる將校連は顔を見合せて、妙な笑を浮べた。中の一人二人は氣味惡げに從卒の方を盜み見した。『いや左樣で

はありません。此聯隊には、ボリシエヴィキの將校は一人しかゐませんが、其男は今日はペトログロードに行つてゐます。聯隊長はメンシエヴィキ、其方の人は立憲民主黨員、として私は社會革命右黨(ケレンスキーを首領とする)です。然し私共は皆なデモクラシーを信じてゐるので、多數の兵士の希望通りに行動してゐる次第です。』

食後、大佐が將校達を相手に卓上に地圖を擴げて、今日の戰況を調べてゐる處へ、先刻の兵卒の委員長と其同僚がはいつて來て、一所に地圖をのぞき込んだ。『では今夜は此處に一泊して、進軍は明日に』と大佐が云ひも終らぬうちに、委員長が口を切つた。『イヤ、もう進軍命令が來てゐます。聯隊は此夜直ぐに此處を立つて、一擧に敵を粉碎しなけりやならんのです。どうか其用意をして吳れませんか。』聯隊長は一寸默つてゐたが、『可いです』といつて地圖を按じながら、軍曹に進擊命令を口授した。軍曹は暫くしてそれをタイプで打つて來、別に寫眞版の寫しを一枚添へてもつて來た。委員長は命令書を見て、地圖と引較べて仔細に研究した擧句、『宜しい』と云つて、ポケツトから取出した委員會の大きな判をペタリと押して聯隊長の前に差出し、自分は寫しをもつて兵卒集會所へ歸つて行つた。『…………………』…………………………………………。

海軍の樣子は、一九一七年十月、バルティック艦隊を訪問した桑港ピユレテインのベアテイー女史が語つてゐる。バルティツク艦隊所屬軍艦革命以來、名まで變へられて、『ニコラス二世』は『同志』となり、『露國皇太子』は『市民』に變り、『共和國』といふの名まであつた。露帝のお召艦であつた大ヨツト『北極星』の艦長は、水兵委員の許可を得てからベツテイーの乘艦を承諾した。ベツテイーは、若しも一年以前に、露西亞の艦長が、自分の主宰してゐる軍艦に訪客を乘せて惡いかを、自分で決める權利がなく、一々水兵委員會の意向を聞かねばならぬことになるだらうと誰かが云つたなら、其人は忽ち醫者の所へ連れて行かれ、精神錯亂の廉で病院へでも打込まれたに相異ないと云つてゐる。『北極星』の中のツアーや皇后の居間や、其他貴賓室として神聖視されてゐた處は、今も猶神聖視されてはゐたが、……………………………………。艦長と雖も許可を得ずに入ることは出來ないのであつた。

艦隊を主宰する委員會は、六つの小委員會に分れてゐた。士官や水兵の食物は、供給委員會に依て管理せられ、其作つた獻立に從つて配給されたが、士官の方のは皿數も多く、品質もよほど上等であつた。『管理委員會』は水兵の生活に關する總ての

問題を決定し、『選拔委員會』は、士官に仕込むに適した有望な人材を抜擢する任務を帯び、審判委員會は、士官や水兵の間の一切の爭議解決の任に當つて居る。水兵は一般に陸軍の兵士よりも教育があり、殊に其境遇上、眼界が廣く、隨つて其思想は急進的で國際的であつた。彼等は以前にはメンシェウィキや社會革命黨に屬してゐたが、コルニロフの反革命後、俄かに左傾して大部分ボリシェヴキとなり、六十名の執行委員中、四十五名迄はボリシェヴィキであつた。

革命以前の動搖時代に、バルティック艦隊では六十五名、黑海艦隊では百名の水兵が士官に殺されたので、革命の成功と共に復讐心に燃え立つ水兵は、將校に對する亡き戰友の怨みを晴さうとした。が、執行委員會は辛じて是を制し、士官をして新制度に對する忠順を誓はしめ、委員會の命令を遵奉することを條件として、在來通りの任務に服させた。たゞ例外としては、或士官が革命を嘲り、露西亞の政府が變つたなど〻は大僞で、未來永劫そんな事のある筈はないと罵倒したので、…………

…………………………、

…………………………。

……………………………………、

……………………………………、

……………………………………、

……………………、…………、……、……、……

…………。士官は主として上流階級の出身で、其生立といひ、教育といひ、境遇と云ひ、革命を理解し同情することは到底困難であつた。彼等の大部分は、以前の水兵と同じやうに、刑罰が恐さに水兵の命令に服してゐるにすぎなかつた。

ヘルシングフォース港の水兵倶樂部は、壯麗な第一流の大ホテルで、あらゆる文明的設備が整つて居り、一萬人の水兵は、上陸中の時間を大抵此處で費してゐた。ベアティーをバルテック艦隊の名に依つて此處へ招待した水兵委員長は、得意滿面で、『革命以前には、水兵はこんな建物へは一足だつて踏み込むことは出來なかつたんです。が是は吾々だけのものではなくて世界中の水兵のものです。吾れは無産階級の人なら誰でも歡迎します』と語つた。水兵は皆極めて清潔で几帳面で秩序的であつた。『共和國』艦乘組の一水兵が、ベアティーの同行の人にまで問ひかけた言葉は、『米國の軍艦もこんなに奇麗になつてゐまか』といふのであつた。

クリレンコ

……………………………………………………、

……………………………………………………

「…………、……………
……。…………、…………、………………
………………。然るにケレンスキーは是等總てを彼等に與へることを拒んだ。其上軍閥の頭目コルニロフの反革命に對するケレンスキー一派の妥協的態度は、民衆の失望と不信任と憎惡とを買ふに十分であつた。そこで『…………
……』…………………………………
…………『…………………」…………
……、……………、…………、…………
…………。…………………

かくて十一月革命が起つた。そして『一切の權力はソヴィエットの手に』移つたのである。此勞農革命の成功と其維持とが、武裝せる勞働者より成る赤衛軍と、正規の陸海軍兵士の力に俟つたことは云ふまでもない。そして勞農政府の成立と同時に、陸軍委員の任命をうけたクリレンコ、アントノフ、デュベンコの三名は、此大動亂の渦中に處して、最少の犠牲を以て最大の效果を收めた殊勳者であつたのである。此三人は三人共、二十代の青年である點に於て、只の水兵又は兵卒上りである點に於て一致してゐる。ブレスト・リトウスクの條約後、トロツキーが陸海軍委員を一手に引受けるまで、露國の軍備は此三人の委員會の支配に委ねられてゐた。

クリレンコは一九〇五年の革命以前に士官學校にゐたことがあるが、社會民主黨員として盛んに革命運動のために働いた結果、屢々投獄され、其年の革命が失敗した後、外國に亡命してゐたのであつた。三月革命の勃發後、彼は歸國して軍隊に入り、其赤化宣傳に最も努めた。ケレンスキーはクリレンコを恐れてゐたが、兵卒の中に餘りに信望があるので手をつけ兼ねてゐた。クリレンコの朴訥にして勇敢な人柄は、忽ち對手を心服させることが出來た。彼は實に口も八丁、手も八丁の働き手で精力絶倫の戰鬪家であると同時に、説得に巧みな雄辯家でもあつた。

一九一七年十一月九日——即ち新政府樹立の二日後——のことである。ペトログロードは、戰線から兵を率ゐて攻めよるケレンスキー軍の噂に戰々兢々として居つた。『…………、…………
…………』…………、…………、……………
…………、…………、……………
…………。所へ突如として、今までボリシェウィキの味方であつたペトログロードの裝甲自動車隊がケレンスキー方に投じたといふ報導が傳はつた。此自動車隊はペ市守備隊の中の最も有力なもので、此隊の向背如何でペ市の運命は定まるのであつた。

が、市内に留まつたケレンスキーの一味とても、此隊を積極的にボリシエウイキと戰はせることは不可能なので、とにかく中立をさせようとした。

九日夜、此自動車隊は態度を決定するために大會を開いた。廣場には何千の士卒が集まり、辯士は自動車の上に乘つて演説した。最初の二名はケレンスキー派の者で、『吾々はもはや戰爭に飽きてゐる。だから相手は外人たると露西人たるとを問はず、血を流すことは已めよう。吾々は此内亂に對しては棄權して、中立を守らう』といふのがその論旨であつた。彼等の演説は喝采を以て迎へられ、あはや形勢は定まつたと見えた時、自動車の周圍が遽かにさわついて、委員や士官が激しく云ひ爭ふ様子が見えたと思ふと、一人の兵卒が、幾もの、抑へる手を無理に振切つて手を擧げ、聲を限りに叫んだ。『諸君クリレンコ君の演説があります。』場内は割れるやうな喝采と怒號に埋められた。と見ると、頭でつかちで足の短い、ヅングリした、小さな、鋭い眼付の兵卒が幾十人の手に支へられて自動車上の演壇に立つた。それがクリレンコである。『同志諸君』と彼は呼んだが、其の聲は疲勞ために異様に嗄れてゐた。『諸君、私はどれで四晩續けて一睡もしないので、殘念ながらよく話すことが出來ません。』と前置をして、彼は勞農政府が既に各國に平和締結の申込をしたこと、革命をブルジョア階級へ賣つた裏切者ケレンスキーに左袒することは、何も直さず、反革命を援ける所以であること、ケレンスキー一派が武力に訴へて新しい社會主義共和國の顚覆を企て、兵士及び農民勞働者を殺戮するのを目撃しながら、是に對する防衛を怠り、『中立』を標榜することは、直ちに反革命的運動に外ならぬことを、簡潔明瞭に、力強く説明した。『……………………………。……………………………。……………………………。……………………?』

彼は約十五分間話した。彼が語り終つた後、喝采はなかつたが、『……………………………』といふ嵐のような呼びが起つた。連日連夜の指揮や奔走に、死ぬほどに疲れ切つたクリレンコは、話してゐる間、やつとのことで立つてゐた、話し終るや、彼は思はずよろ〳〵して轉びさうになつたのを、又た何十人の手が支へて漸くおろした。彼が話してゐる間、疲れて、嗄れた聲の中に、一種名状の出來ぬ、眞實人の胸に迫るやうな誠意が感ぜられた。

頽勢は挽回された。採決の結果、三千名の中、中立を要求する者は僅かに二十五名、他は全部勞農政府のために戰ふ決心を明かにした。クリレンコは自動車に乘つて、同じことを繰り返すために。又直ぐ次の兵營へ奔つた。彼は文字通りの不眠不を

以て、ペ市の内外に亘り、…………、…………。

『働かざる者は食ふべからず』といふのが、公私の場合を問はず、クリレンコの口癖にしてゐる處で、彼の遣方は實にテキパキしたものである。ブレスト・リトウスクの談判の當時は、獨逸語で作つた無數の宣傳文を獨逸軍隊の内部に撒布した。それには露西亞の勞働者が皇帝の紋章を引剝してゐる畫のビラなどもあり、露西亞革命の意味や、獨逸に革命が起つた場合、どんな變化が兵士や勞働者の上に來るかを、分りよく、印象を深く說明してあつたりした。『諸君は露西亞の勞農政府に、何故諸君の代表者を送らないか』といふ質問などもあつた。獨逸軍閥が、佛軍の進擊よりも何よりも恐れたのは宣傳であつた。

翌日獨逸の講和使は露西亞側に抗議を申込み、宣傳を已めぬなら談判を中止すると脅迫した。クリレンコは意味有りげな微笑を泛べながら、兵士に向つて宣傳中止の命令を傳へた。微笑の意味を解した兵士は、どつと笑つた。外務省も此意味を解して是からといふもの、晝夜兼行で働いた。そして幾十萬部の宣傳的出版物はどしどし獨逸に密輸入された。宣傳者は中立地帶を超えて、生命かけで敵地へ潜行した。獨逸で叛逆した一部隊の中に、露西亞の宣傳者が四十人も入り込んでゐたことがある。クリレンコと其幕僚とは、誰が其處へ行つてゐるか、そして何をしてゐるかをチヤンと知つてゐたのである。

アントノフ

アントノフもクリレンコ同樣、一九〇五年の革命前に露國の軍隊にゐたことがあり、革命が失敗した結果外國へ逃れてゐた人で、熱心な革命家で、軍人仲間でも戰術家として定評がある。彼は瘦せて上品な樣子をして居り、どう見ても軍人とは見えず詩人然として居る。

十一月十一日——勞農革命後四日——のことである。士官學校の生徒から成る白衞軍の一隊は、ケレンスキーがペトログラードに攻め入るまで、一二時間支へて居れといふ、市内に殘つたケレンスキー一派の命令に依て、ボリシェウキの手に在つた電話交換局を奪つた。敵も味方も同じ軍服を着てゐるのを利用して、彼等はボリシェウイキの衞兵が交代する時間を見計らひ、其數分前に出かけて、ボリシェウヰの合言葉を使ひ、其僞せ通行劵を示して、マンマと衞兵を欺き、交代と見せかけて難なく交換局を乘取つた。それとは知らぬ陸軍大臣アントノフは、丁度其處へ一人でノコノコやつて來て忽ち捕虜になつた。が、猾したもので、彼は一室に押込められるや否や、隣の方にあつた机

文學士
日本大學教授　松原寛氏著（最新刊）

現代人の宗教

四六判天金箱入
青色ポプリン特製
全一册三六〇餘頁
定價二圓六十錢
送料書留廿四錢

時人の宗教的要求の熾烈なる、今日より甚だしきはない。而も既成宗教は生命を失ひて、今は僅かに其の殘骸を止むるに過ぎぬ。かくて彼等は僧院と教團の廢墟より出る外はなく、剩へ其の熾ゆる魂を託すべき新豫言者の影だに見出し得ない。そしてたゞ徒らに無神荒野を逍ひ歩くのみである。此の時に當たり著者は本書を提げて、宗教の革命を普く宣べ傳へんとしてゐる。彼が永き宗教的煩悶と、深き哲學的思辯との經緯をなせる體驗文字は時人の胸を突かねば止まぬであらう。卽ち哲學的根底よりして、神秘思潮の來るべきを告げ、新らしき宗教の樹立を計り、最高文化の歸趨を明にせんとするものである。深刻なる現代の精神生活者に敢て一本を薦める。

文學士　小原國芳
文學士　松原寛　合著

文化人の藝術と宗教　五月中旬發賣

メーテルリンク著 高田文學士譯	永遠の生命	價一、五〇	送、〇六
フローベル著 田中豊松譯	聖アントアーヌの誘惑	價二、二〇	送、二〇
ゴオルキイ著 昇曙夢英譯	懺悔	價二、八〇	送、二〇
鈴木啞鈴子著	挿繪入二度刷 教訓童話文庫	價二、七〇	送、二四
文部省、內務省	教育學資貯金法	價一、八〇	送、〇八
里見弴著	長編 桐畑	價二、二〇	送、二〇
中戸川吉二著	青春	價二、二〇	送、二〇
宮地嘉六著	長編 群像	價二、五〇	送、二四
宇野浩二著	善男善女	價二、二〇	送、二〇
廣津和郎著	二人の女	價二、二〇	送、二〇

東京神田區南神保町九　太陽堂　振替東京三一七二五番　電話九段一九四四番

自傳

著者は赤色露西亞に於てレーニン、トロツキーと同等の待遇を受けつつある。そして美作に生れたままの野人である。生一本の野武士である。策略なき猪突

片山潜著

的勇士である。トロツキーと共に米國で皿洗ひしたことのある人だ。日本社會主義者中の元勳だ。故郷を戀しと思ひ、故郷にある愛娘を戀しと思ゐながらも、その懐しい故山を踏むことの出來ない悲しさを包み、そして涙を呑みつつ自分の向ふべき主義の爲めに邁進しつつある、本著は著者が生れて始めて執筆した純無垢のかざり氣なき自傳だ、自分といふもの、自分の執つておる道を愛娘にのみ遺さんとして、前半は東京監獄で、後半は北米で執筆した悲壯極まる記錄だ、本著は世界的の意味を以つた或る種の記錄として本社が深き自信の下に江湖に紹介する名著だ。

最新刊

◇四六版上製函入◇
◇定價金貳圓卅錢◇
◇送料金拾八錢◇

◇東京芝區愛宕下町一ノ一◇
◇改造社◇
◇振替東京八四〇二番◇

スタイナハ氏 若返り法研究

内容

の傍に腰をおろして、ポケットから取出したドストエフスキーの小説を一心に讀み出した。

交換局が敵手に陥つたと聞いた勞農側は、忽ち赤衛兵や陸海軍の混成部隊を送つて奪還に取りかゝつた。白衛軍側は待てど暮せどケレンスキーの來る模樣もなく、刀折れ矢盡きて遂に降伏するの已なきに至つた。然し此一隊は、四五日前、冬宮が陷落した時、向後斷じて勞農革命に對して武器を執らぬといふ誓言の下に、武裝を解除されたゞけで釋放された連中である。今その舌の根の乾かぬ先に恩を讐で返したとあつては、今度こそ生命はないものに極つてゐる。そこで愈々敗戰と極ると、我れ勝ちに逃げ惑うて、今の今まで誇りにしてゐた軍服の徽章や肩章をむしり取るやら、何處かの隅で見付けた職工服に着かへて裏口から逃げ出すやら、見られた樣ではなかつた。一人の士官候補生は、其日丁度其處で戰爭の模樣を見てゐたウイリアムスといふ米國人に、死人のように靑ざめて、唇をブル／＼戰はせながら、其服を讓つて異れと生命がけで賴んだ。ウイリアムスは勞農革命の心からの味方で、戰場にも兵營にも工場にも農村にも自由に出入し、兵士や勞働者に何百篇となく演說をし、彼等と共に野營もすれば行軍もした。隨つて彼の顏と同じく、一見露西亞製でない其鳶色の服は、ペトログラードで誰知らぬ者も無いのである。『私がこれをあの男にやつたら、ボリシェウィキの連中が直ぐそれと知つて、私を裏切者といふだらう』と彼は嘆いた、そして『それだけは出來ぬが他に何とか方法を講じてやらう』と通譯に傳へさせた。是を聞いた候補生の萎れ方は見るも痛ましく、力なくうな垂れて出て行く後姿を見送つたウイリアムスは、堪へ難い苦痛の色を泛べた。『あゝ何とかして遣りたい』と傍にゐたベアテイーは我事のように悶えて候補生の跡を追うた。すると後からウイリアムスも追かけて來て、『あの男を見つけて下さい。私は此服を遣る譯には行きませんが、服を此處に脫ぎ捨てゝおくから、彼の男が拾ふのは勝手です。』ベアテイーは廣い交換局の內部を隅から隅まで探しまはつたが、逃げたのか隱れたのか、かの男の姿は見えなかつた。ウイリアムス自身も氣狂ひのようになつて探し廻つたが、直に見付けることが出來なかつた。ウイリアムスは意を決して、アントノフに賴んで白衛兵全部を救ふことに極めた。白衛兵は口々に『助けてくれ／＼』と叫んだ。アントノフはウイリアムスの助言に依て、彼等を再び助命することに決した。丁度そこへ赤衛軍の一隊がドヤ／＼と雪崩れ込んで『アントノフ、アントノフ』と歡極つて叫んだ。

『諸君、私は……としての名譽にかけて、此處に居る者達の

生命を助けるといふ誓約をした。諸君も亦、革命家として其一言を守つて貰ひたい』ウィリアムスも白衛軍のために同じことを繰返した。白衛軍の卑劣な裏切を憎んで其肉を喰つても飽足らぬ程に怒氣を含んでゐた水兵等も、此言葉を聞くと、一齊に手を擧げて賛成を表したが、數人の赤衛兵だけは不平顏をしてブツ／＼云つてゐた。『私は既に誓約を與へた、彼等に害を加へる者があれば、私は直ちに銃殺するとしよう。』アントノフは毅然として云つた。『吾々を銃殺するつて？』と囁いた聲が聞えた。『左樣だ、私は、此米國人に、露西亞の革命家は卑劣で復讐的だと云はれる位なら、吾々皆が死んだ方がマシだと思ふ。』再び採決して見ると、今度はその手が擧つた。

此翌日のことである。アントノフはケレンスキー軍に備へるための市外の防備を視察に出かけた。出發の際、ゴムベルグといふ米國歸りの露國人が米國の婦人記者ブライアントと共に同行を乞ふたが、乘る席がないといふので斷られた。それにも拘らず、ゴムベルグは無理に飛び乘つてついて行つた。ペトログラードの場末まで來ると山のように荷を積んだ自動車はパンクした。一行が途方に暮れてゐると、丁度其處へ戰場歸りの兵士が一人自動車に乘つて來た。アントノフは其兵を呼び留めた。『オイ氣の毒だが、其自動車は吾々が徵發するよ。此方のは駄目だから、』兵士は權力などを認めなかつた。『いけない。僕は第一機關銃聯隊の使ひで、彈丸を受取りに來たのだ。』『然し君、僕は陸軍大臣だ。』これを聞くと兵士は顏を輝かせた。『そりやあ丁度宜かつた。僕は君の所へ行く所だつたのだ。ぢやあ直ぐ彈丸供給命令書へ調印して貰ひませう。』アントノフはポケットを探つたが、鉛筆も手帳もなかつた。そこでゴムベルグの差出した手帳の紙を裂き、ゴムベルグの萬年筆でそれに命令を書いた。『で車の方は』とアントノフが聞くと、『イヤ、もう是で僕の用は濟みました。』といひ樣、兵士はブーとばかり、スモルの方へ奔つてしまつた。

今度は其處へ立派な服裝をした堂々とした紳士が、大型の自動車の中に反身になつてやつて來た。自動車は直ぐに徵發されて、紳士はスゴ／＼と步いて行つた。暫く行くと貯藏食品店があつたので、アントノフは、道中の用意に食糧品を買はせようとした。がポケットを探ると財布を忘れて來たのに氣がついた、乘合せた關係連も無一文である。そこで再びゴムベルグの命で買物をした。但しアントノフは、此時は三日も一睡しなかつた後だのとことである。後、彼はトロツキーを助けて赤軍の編成に盡力し、勞農陸軍の大立物となつてゐる。

デュベンコ

デュベンコは革命當時、僅かに廿五才であつた。彼はホンの平水兵であつたが、水兵仲間に於ける其信望と異常な才能とのために、一九一七年春、バルティック艦隊の中央委員長となつた。露西亞の陸軍は委員會制度であるから、委員長たる彼は、海軍の最高權力となつた譯である。

革命の進行と共に、彼は最も有力なボリシェウィキの一人となり、バルティック艦隊の根據地たるクロンスタットのソヴィエットは、政治上の意見や態度を總て彼に倣うた。水兵間のボリシェウキィの勢力は彼の指導に負ふ所が多かつた。勞農革命の前後に於て、彼の率ゐる水兵團は、常に革命の先頭に立つて活動した。クロンスタットの水兵の間の規律は極めて嚴重で、彼等は革命家としての名譽にかけて、苟も侵すことなきを期してゐた。勞農革命後、度々の反革命運動に失敗したブルジョア階級が、苦肉策を案じて、冬宮及び富豪貴族の邸宅に何十萬本と隠されあつた酒の在所を敎へた時、飢と寒さとに顫へてゐた兵士の中には、遂に其誘惑負けた者が出來、ホロ醉加減で鐵砲を擔ぎ歩く連中なども出來て、一時市の秩序は危くされやうとした。其酒を輸出すれば何百萬留の價値があるので、政府部内でも大分議論があつたが、此時デュベンコと其麾下の水兵は眞先に立つて無盡藏の酒庫を惜氣もなく破壞し、壜に取りついて離れぬ者は、涙を振つて銃刑に處してまでも、ペトログラードの秩序を維持した。此大膽な、徹底的な對抗策に依て、ブルジョアの卑劣な試みは見事に失敗に歸せられたのであつた。

ペトログラードの電話交換局が勞農軍に奪還された後、交換手はブルジョアの使嗾に依てストライキを行ひ、時間短縮、銀値上げ等、いかなる條件を以てしても妥協を肯じなかつた。そこでクロンスタットの水兵が、一ケ月以上交換手の役目をした。……………………………………………………………………。彼等は工場に石炭を運んで、機械を運轉させ勞働者に手を休ませぬやうにした。彼等は遠く西伯利亞まで出掛けて、飢えたる軍隊と人民とを養ふために、食糧品を持て歸つた。彼等はケレンスキー軍をも敗れば、其他の總ての反革命軍や獨逸軍とも戰つた。彼等は身を持することと極めて嚴に、他人を俟つたことに寛容な、勇氣と慈仁とに富む新時代の模範的戰士であり、革命の急先鋒であつた。

彼等が赤衞軍と共にケレンスキー軍と對峙してゐた時のことである。一夜デュベンコは護身用のピストルを一つ持つたゞけで、單身飄然として、敵地に乘り込んだ。すると二時間の後、

さしも剽悍と頑迷とを以て聞えた、ケレンスキーが生命と頼んだ麾下のコサック軍は、殘らず彼を捨てゝ勞農側に味方すると決した。斯くと聞いたケレンスキーは暗に紛れて永久に露西亞から姿を消した。かくして一滴の血を流さずに内亂に勝利を制し、剰へ強大な味方を作つたデュベンコは、凱歌を擧げてペトログラードへ引上げたのであつた。

デュベンコは敵に對する其寛量のために一時人氣を失つた。といふのは、彼が舊時代の士官らを憐んで優遇し、相當に重用もした結果、ブレストの談判の後、獨逸軍に内通して、ナルバ港を戰はずに敵に渡したといふような裏切將校が出たので、彼は其責を負ふて辭職した譯である。

一九一八年一月、第三全露ソヴエト大會開會の當日、デュベは、社會事業人民委員コロンタイと結婚した。これは著名な革命家間には珍しいローマンスの一つであつた。

新刊紹介

□産兒制限論（安部磯雄著）（定價一圓五十錢、實業之日本社發行）

□最近の歐洲（大谷光瑞著）（定價一圓、東京京橋區日吉町、民友社發行）

□新坂町から（三宅恒方著）（定價一圓八十錢、實業之日本社發行）

□ニーベルンゲン（ヘツベル作、關口存男譯）獨逸中世紀文學の無二の傑作と稱さるる「ニーベルンゲンの歌」を脚色せるものである（定價二圓、東京牛込區津久戸町六、精華書院發行）

□シモンズ選集（矢野峰人著）（定價一圓六拾錢、東京神田區中猿樂町、アルス發行）

□生物哲理と人間哲理（高橋正熊譯註）（定價二圓六拾錢、東京神田區錦町三の五、極光社發行）

□グラッドストーン（永井柳太郎著）グラッドストーン傳である。（定價三圓、實業之日本社發行）

時評

所謂憲政の本質と我が政局の進化

長谷川如是閑

一

日本の立憲政治が變態であるとは誰れもいふことであるが、然し正態の立憲政治といふものがあり得べきことであるかどうかは、少なくも歴史の上では疑問なのである。立憲主義といふのはもと〱一種の政治理想であつて、政治の實際がその理想を實現せしむる可能性があるかどうかといふことも、未だ歴史の解決して居ない問題である。

元來立憲主義の機械的根柢をなして居る議會制度なるものは、それが起源を持つと稱せられて居る各國の原始的議會に於て見るとほり、今日の意味で云ふ民主的のものではなく、支配者の機關に過ぎないのである。それはゼルマン族の原始民族に行はれた全員的の性質のものではなく、特權者の政治的機關に過ぎない。此の性質は何處まで行つても議會から消え去らない。

所謂民主的傾向といふ政治上の進化は、ただ右に云つた特權の擴張であつて、所謂政治的本質から離れたものではない。政治的本質とは、政治が起源を持つた處の力の鬪爭に依據して居る社會構成であつて、その形式が如何に變化しても、一貫して權力競爭の法則に從つて居るものなのである。專制主義は恰も最初の形式であるが如く考へられて居るが、事實はさうではない。專制的と立憲的との間に時日の上の前後はない。强ひて前後をいへば立憲式が專制式よりも原始的であつたと認められる。なぜならば、動物の社會はより立憲式であるから　人間が動物から進化した過程に於ては、何處かで立憲式が專制式よりも先に成り立つて居た時代があつたに違ひない。それにも拘らず專制式立憲式に先だつたといふ信仰を一般の間に生じたのは國家の歴史は專制君主が作つたもので從つて歴史上唯一の形式と

して專制政治の歷史を人類生活の最初の形式と決定せしめたのである。

が年月の上で專制政治に先立つて發生した立憲式とは何であるかといえば畢竟政治以前の生活形式である。それはその間に英雄や天才がなかつたのではなく、ただそれ等のものが、政治時代の樣に特權づけられて居なかつたのである、それは無意識的な社會協同の支配であつた。

政治的進化は、此の協同から出立して本能的から次第に意識的進展をとつて、一貫して必ず闘爭的な對立を集團の裡に組み立てゝ來たのである、卽ちそれは大きい對立としては市民と奴隸との對立で、更に市民間に於ける利害の對立があつたのである。政治的集團の斯樣な原始的性質はそのまゝ複雜な形式となつて今日に續いてゐる。卽ち議會制度の進化は協同によつたのではなく、闘爭によつたのである。原始時代より今日に至るまで利害相反するものの協同は必ず闘爭によるのである。政治は此の利害相反による爭の上に成り立つたものである。

此の事情が如何なる進化した政治組織をも本質的には、總て同じ坩鍋の中に融け合してしまうのである。立憲政治を非常に合理的なものであると考えたのが錯誤であつたことは、其處から明瞭である。

二

立憲政治は決して合理的過程ではない。從つて合理的理解によつて解釋されない現象が、立憲政治の過程に於て發生したことを、不思議がつたり、非難したりするのは、矢張り錯誤である。

合理的でないといふことは、偶然的であるといふ意味ではない。其處にも一定の法則は働いてゐる。然かその法則は、政治意識がその道德的根柢とする人類的の法則ではなく、寧ろその政治意識の影に隱れて、無意識的の動力となつて居る必然的の法則なのである。それは所謂道德ではなく、その上か下かに働く力なのである。政治はその超道德的の働きによつて進展するそしてそれが道德の衣を着るのである。

立憲政治が道德でないことは、政治の根本的性質を指摘するまでもなく、その今日の運用を見れば明瞭であるが、此の現在の不道德的現象を人々が立憲政治の脫線の如く考えて居るのは之れ亦錯誤である。それは丁度人類を聖人の如き者と考えて實際の人間の聖人らしくないのを非難して非人間と呼ぶのと同じである。實際の人間に聖人がない如く、道德的といふことを立憲政治の本質的の要素であると考えるのが間違である。

今日の實際的民主的政治に伴ふ種々なる弊害は、それ自から

が政治的生活を構成する要素なのであつて、それなしに政治が可能であると考へるのは空想である。立憲政治の初期の弊害即ち買收とか、利權とか、無智の投票とかいふ今も日本に行なはれて居る様なものは、組織自體の進化によつて所謂自淨作用で次第に消滅して行く可きものであるが、さういふ枝葉の弊害が總て除去されても殘るものは決して道德的のものではない。最も進化した立憲政治が、利害相反する特權者間の力の爭であるとはいつまで行つても道德といふ境地の外にある現象である。

三

元來道德といふものほど實際の現象と沒交渉な觀念的空虛に滿足して終るものはない。一切の現實は道德と沒交渉に進行する。無視された道德は、その事實にくつついていゝか離れていゝか自から迷つて、いつもまごまごして居る。復仇心から起つた四十七義士の行爲は、それに組する道德と、それに刃向ふ道德とでいつまでも組打ちして居る。その問題がきまらなければ仇打ちは出來ないとすると、人間は何もすることは出來ない。此の意味で、立憲政治の不道德性を指摘することは、決して立憲政治を攻撃するものでないことは、いふまでもない。

それは、立憲政治に於て道德を說くことは、戰爭に於て國際公法を說くよりも迂遠なとである。といふとを分らせる爲めである。

なる程今日に於ては、國際公法を全然無視して戰爭をするものはない。然し國際公法を基として戰爭をするものもない。立憲政治家が政治道德によつて相手方を攻撃しようとするのは砲彈の代りに書物を投げつけて敵を破らふとして居る軍人の様なものである。その何よりも確かな證據は、如何なる政治家も「不可能」が來るまでは、如何なる「不合理」にも耐え得るのである。彼等はもともと道德家たらんとして政治家となつて居るのではない。道德よりも大切な生活の事實が、彼れを政治家にして居るのである。生活を階級的鬪爭の形で營み來たつた社會に於ては、一つの階級的集團を有力なる生活の勝利者とする爲めの組織的鬪爭に於て、個人的の道德觀念が何程も働かないことは、國家の歷史が絕えず證明して居る事實である。グラッドストーンの様な道德家でも、政治家としては余り道德の支配を受けなかつた。

道德的といふ點からいへば專制政治の方が、立憲政治よりも立ち優つて居る。所謂政治道德なるものは、專制政治のそれが一番立派に構成されて居る。專制政治は道德上の原因で亡びたり起つたりする可能性があるが、立憲政治に於ては全くその可能性がない。專制君主は道理によつて倒されることがないとはいえないが——それが爲めに君主を道德的に完全にすることがそ

の保全の道であると考へられた位である――立憲政治に至つては全くさういふ事があり得ない。大政黨が押詰で倒されるといふ様なことはない、なぜならば大政黨が倒れないのは王道覇道の道徳を守つて居るからではなく、その組織的構成が道理不道理に拘らず權力の中心である可く組み立てられて居るからである。個人は良心若くは自他の個人的原因で倒れることがあるが組織は組織によつて崩されるほかはない、而して政黨と稱する組織は道德的集團ではなく利害の集團である。だから進歩した立憲組織に於ては組織以外の力で大政黨の權力が減却せしめられることはない、それがあるのは寧ろ變體の立憲政治に於てである。換言すれば日本のそれの様に進歩しない立憲政治に於てである。

四

日本の立憲政治が、短い年月の割合の進歩したものであることは拒まれないが、然し實際の政治狀態が所謂立憲的に働いたためしは少ない。立憲政治の働きは主として政府の交替に於て現はれるので、そのことが立憲政治のバロメーターなのだが、日本の立憲政治は此の試驗ではいつも落第して居る。

政黨の勢力を根柢にした政府は、その政黨の勢力の消長と共に進退するものであるが、日本の政府はそれと沒交渉に起つたり倒れたりして居る。貴族院の策戰に亡ぼされたり、官僚の手に毒殺されたり、焼打のようなモッブの力に征服されたり、そんな風に亡びて居る。從つて之れに代る政府の起りも何等政黨の勢力を第一次的の條件としないで、より非立憲的な他の力に基いて居る。

其處で所謂立憲政治家は政府が政黨の勢力以外の力で生滅する其の不合理を非難する、然し政黨の勢力以外の力といふのは、立憲政治の範疇以外のものではあるが、本質的に政黨の力と別なものではない。階級的勢力である點は全く同じなのであつて、只だ政黨的に組織立てられて居ないだけに過ぎない。

貴族院が常に政府を倒す有力な要素をなして居ることも變態には相違ないが、最も進歩したイギリスに於てさへ、貴族院が政府に對して強い力である地位を失つたのは、僅十年前のことである。その意味は政黨の組織的の力があらゆる他の組織的の力を壓迫し得るといふことの如何に困難であるかを示したもので、日本の様に政黨組織そのものすら滿足に成り立つてない國に於て、政黨以前の政治的組織による力を全く壓迫するのが容易でないことは當然である。

民主政治が完成する爲めには資本主義の經濟組織が充分に發達することを必要の條件とする。イギリスでは自由黨の發達は

同國に於けるブルジョアーの發達と全く道づれとなつて居る。民主主義が資本主義經濟の發達と夫婦關係にあることは、英國のそれと同じく日本の政黨の發達を見てもよくわかる。最近十數年間に於ける日本の經濟狀態の急激な資本主義的發達は、遂にそれまではどうしても出現を困難とした政黨内閣を出現せしむるに到つたのである。そして政黨の首領が同時に官僚の首領である組織が崩れて、ブルジョアーの代表者がそれぞれ政黨の幹部を占むるに至つた。

然し政黨以前の組織的勢力はさう急激には減退しない、政黨的集團の成立する前に成立して居た政治的中心は、貴族院を中心として所謂官僚の集團的勢力に纒められて居る。政黨が此の非政黨的勢力を崩壞せしめ樣として苦心して居ることは色々の方面に現はれて居る。

官僚の政黨化はその努力の第一の結果であつた、それは官僚の改心に基いたのではなく政黨に脅迫された結果である。非政黨主義の憲法を作つた伊藤が第一に改宗したのも、軍閥の子供であつた桂の改宗したのも、官僚とブルジョアーの合ノ子であつた原敬が改宗したのも所謂政黨の脅威を感じてその中で働く外に逃げ道と成功の道とがないことを知つたからである。政黨の罪惡を萬々承知の上でそれに降伏したのは、その外に採る可き道がなかつたからである。

第二に宮廷に對する政黨の努力となつて現はれた。それは政黨政治の發展の上でイギリスに於ける樣に議會と皇室との猛烈な權力競爭から日本が逃れることを得た仕合せな現象の一つであるが、結局は英國に於ける樣に時の政黨政府が有力な宮内官であるといふ組織にまで進まなければならないのである。然も最近までそのことが成功しなかつたが、現在の政友會政府が始めてそれに成功した。

第三には司法制度に對する政黨の關係である。政黨は力の組織であるから、その力の及ばない處へは勢力を及ぼすとは出來ないが、然し力の及ぶ部分に對しては決して遠慮しては居ない司法制度が立憲的の起原を持つたものでないことは、それが神の名に於て若くば君主の名に於て行なはれて居ることによつても察しられる。さうして神の名によつて行はれた爲めに往々君主を司法制度の下に包括しやうとする、そのことが後に特に君主を司法制度の外におくといふ規定を國法の上で定めるに至つた原因である。それほど超國家式の理想を持つた司法制度でも、事實は神が行つたものでなく人間が行つたものであるから。人間的勢力は必ず裁判を拘束する。それが出來なかつたのは全く神の力で裁判した日本の探湯（クガタチ）若しくば諸國の古代法が罪人を流

れに投じてその浮沈によつて裁判し、時代の裁判丈である。其の後の裁判には人間的勢力に決してそれと没交渉ではあり得ない、裁判の獨立といふことは實は個人的若くば階級的勢力が社會的識意による裁判を、拘束する事實があるから出來る丈それから逃れて、社會的意識に據らうといふ社會本能から出たことなのである。で專制時代には專制政治家の勢力が裁判を犯した。政黨政治の時代には政黨の勢力がそれを犯すのは必然である。犯すといふのは誤弊があるが、合法的にそれを拘束することも含なのである。即ち政黨政府の國家に於ては裁判の勢力は、可成政黨の勢力から超然たらしめやうとする社會本能による意識はありながら、力の組織の必然の結果として其處にも力を及ぼさない譯にいかなくなるのである。なぜならば司法制度は一般の政治と關聯してそれと協同してその國家的職能を盡す機關であるから、政治的動機が政黨に立脚する以上司法制度もこれに伴ふ進化を余儀なくせられるのである。其處で昔の專制君主がしたと同じ様に裁判そのものは神聖に保ち、然して組織の上から、希望する結果を得ようとする。進歩した司法制度も此目的で組み立てられて居る。裁判官の裁判は神聖であるが裁判制度は司法行政と稱する必ずしも不可侵物でない組織によつて組み立てられて居る。此の意味で專制的なナポレオンの司法制度も立憲的なアメリカの司法制度も本質的に何の差異もないのである。

日本の政黨が、所謂官僚といふ政黨以前の組織によつて占領されて居た司法制度を政黨政治の上から弊害若くは迷惑と考えたのは、久しいことである。政黨内閣と官僚式司法制度との醜い矛盾は已に多年月の間にしば〳〵經驗したことである。政友會が貴族院から政黨的色彩のあるものに司法行政の重要な地位を與えたといつて非難されて居るのは、如何に非難されても止むに止まれない過程なのである。

五

かくして政黨は次第に其の道德的責任による進退から自由にされる。右の過程が完成すればもう政黨は道德的には倒れも起こりもしない。それが君主專制から政黨政治への政治革命的過程の完了である。

然し、其の經過が充分完成されない日本の現在に於ては政黨的勢力は未だ全能ではない。政黨の首領は今尙何等かの意味で政黨以前の黨派的組織の子供である。官僚、軍閥、貴族院等に非政黨的組織を以て組織されて居る勢力から全く自由にされて、居るものは少ない。原は、全然その關係に拘束されてた爲め偏に政黨的勢力を完成せしめて此非政黨的拘束から自由にならふと務めた人である。即ちブルショア階級の解放に努力した人であ

る。今の高橋首相は氣分に於ては、非官僚式のブルジョアジー氣分に滿ち〳〵た人で、その氣分を原の如く政黨の組織的完成を待つて味はふうとする忍耐心に乏しく、組織的力を離れて勝手にその氣分を發散せしむる爲めに、今度の樣な滑稽を演じたのである。然も高橋首相のブルジョア政治的デカダンの氣分は、舊式の官僚的道德政治に對するブルジョアー式反感を暴露させて居る點で何となく、痛快の感じを與える。それが原より下手の辯に原と違つて可愛らしく見られて居る原因である。

斯くの如く完成の途中にある日本の政黨は年々に所謂非政黨的政治道德を輕蔑し得る地位を占めつゝある。政友會內閣に對する政治道德上の猛烈な攻擊は、次第に無力になりつゝある。シーメンス事件で、一個の老議員の首相に對する人身攻擊のために崩壞した時代から見ると皮肉な意味の進步である。根を張つた政黨組織は個人の道德的自殺若くは他殺等をその個人だけのことにしてしまふのである。有力なものは惡人の組織でも盛んになる無力なものは善人の組織でも、ものにならないといふのが政治的勢力の物理である。況んや双方とも何れを善惡と定むることの出來ない同じ種類の人間同士の組織に於て、善惡が組織の生死を定むることの出來ないのは當然である。

六

其處で現政府の反對者が、何か變態的の現象が發生して、政友會內閣はそれによつて倒れるほかはないと感じて居るその希望が甚だ心許ない次第となる。さういふ變態は大臣の中から泥棒でも出たら知らぬこと、嘘つき(二枚舌)位が出たのではとても起ることはない。この意味で山縣の死は反對黨の爲めに損失であつた。然し山縣が實際上どれ丈その點で賴みになつたかは彼れがもう少し生きて居たならば試驗される筈であつたが、早く死んだことは彼れにとつて幸であつた。なぜならば彼れは早晩その試驗で落第するに極まつて居るからである。

政友會があらゆる惡德の塊の樣に云はれつゝ次第にその勢力を增していく處に、立憲政治の本質が示されて居るのである。在野黨が今後政友會に代つて勢力を得る場合も又全く同じ過程によるのである。政黨政治に於ては、昔王者の道德によつて榮えた君主があつたかも知れないのに反して、道德によつて榮えた政黨といふものは決してないのである。

處が先進立憲國に於ては、立憲政治の右樣の進化と甚だ一致しない政治的形勢に陷つてゐる。英米殊に英國の如きは傳統的の議會主義は全く混亂して所謂變態の超政黨的組織が國家の危機に際して必然の組織であるが如き實際の形勢を作つて居る。丁度昔の朝廷が立憲式でない政治的黨派の協同の下に組み立て

られた如く、現在のイギリスは、政黨は政府部内の勢力の分野といふ事になつて居て、一政黨の支配――立憲政治の本義――が成り立つて居ない。其處で同國では斯樣な政府の崩壞する立憲的手續を知らない。英國憲法の教科書は此場合何んの助けにもならない。つまり立憲主義は全く脱線してしまつたのである。

其處で政黨以前の形勢が英國に於て復活しつゝある。政治的勢力は資本主義的經濟組織の根柢によらないで、個々的若くは傳統的政治動機を中心として渦卷いて居る。丁度日本の官僚政治と政黨政治の過度時代に、伊藤の勢力とか、山縣の勢力とか、大隈の勢力とか、三井系とか、岩崎系とか、さういふ組織的中心が政治的氣壓を支配して居たと同じ樣なことが、今の英國で繰り返されて居る。

さうなると、ロイドジョーヂとか、ボナーロウとかチヤーチルとか、カーゾン、ノースククツクとかいふ個人の道德や不道德、氣分感情が政治的支配の有力な動機になる。左樣なことに立憲政治が組織的に不可能ならしめやうとしたことなのである。然るに今日その禍を彼れ自から演出して居る。

それは英國ばかりの現象ではなく、寧ろ英國は、最も進んだものは如何に容易に逆轉し得るかの例を示して居るに過ぎない。玆に於て、後進國としての問題は、立憲政治がその最も完成した形に於て數千年來の舊政治と共通の根據に立つたものであることを知らしめられて居る點である。

立憲政治家が、憲政の運用に於て政治の極致を見ると考へることは、論理の世界に於て可能であるが事實の世界に於ては空望に終るであらふ。然しそれは現在の政治的生活を投げ棄てることによつて救はれることではない。

政治は建築が物理の法則を無視して成り立たないと同じ樣に生活の必然を離れて小說の樣に創作されるものではない。…………………政治の進化は起り得ない。今日の立憲政治の行詰りは此組織の……を示して居るのである。政治による國家生活の改造は歷史的に同一の過程の繰り返しである。政治から國家が退却すると、夫が今後の國家的進化の一つの方法である。

今日ではさうした過程を取た國家は强國の間には全くない。そのやうな經過を取つて居ると思はれるものは和蘭である。瑞國から排除せられた丁抹は次第に國家生活の樂園となら逃ふとして居る。それは同國が權力爭奪の生活たる政治から逃れて社會的互助の方へと進んだ爲めと觀察されて居る。

で一切の問題は畢竟國家問題の根抵に横たはる社會問題そのものであつて、今日本の人々が苦悶して居る政治的不合理も此大き、問題の解決と伴なはなければいつまで經つてもその苦悶から逃れる時はない。

交番の燒打から人民の燒打へ

山川均

昔は交番の燒打ちといふようなこともあつたそうである。燒かれたのは警察で、燒いたのは人民である。燒かれたのは國家の權力を代表した支配者で、燒いたのは被支配者である。

黑い物と白い物とは、どちらが黑いかと問ふのは無意味である。黑いのが即ち黑い物だからである。國家の權力——支配者の意志——警察——と人民とが對立した時に、どちらが惡いかと聞くのは無意味である。國家生活の善とは、國家權力のことであり、支配者の意志のことであり、警察のことだからである。

そこで人民が交番を燒打ちした場合には、人民の方が惡るいに極まつて居る。

ところが時勢は進歩して、人民は『立憲的』になり、交番は石造になつた。そこで舞臺は回轉して役割は一變した。今度は警察が人民を燒打ちする順番になつたのである。

大分縣別府警察署では、先月二十六日の朝、署長の指揮の下に、出し拔けに同町的ヶ濱の民家六十戸を燒拂つた。之が先づ一としきり新聞に書き立てられた、警察の燒打事件である。

警察が人民を燒打ちしたのであるから、人民が警察を燒打ちした場合のように、一も二もなく人民が惡いとは極つて居らぬ。そこで其筋では『調査』をし、『報告を待つ』た上でないと、どちらが惡るいのか分らない。それから二週間ばかり經つたが、今以つて分らない。

然し追つつけ分かるだらう。警察の處置が惡るくなかつたことが、追つつけ分かるだらう。

第一、警察の處置には——新聞の記事だけでも——相當の理由がある。

燒拂つたのは金持の邸宅でもなければ、資本家の別莊でもない。乞食小屋である。乞食小屋が場所もあらうに、(五十一字缺)

そこで——新聞の記事によると——××××××××××

×、警察は果斷の處置を取つたものである。第二には燒拂ひの方法も――新聞の記事によると――風『上から火を放ち』とあるから、先づ當を得た巧妙な燒き方であつて、此點も手落ちとは思はれぬ。

この問題の骨を、得たり賢こしと咬えて來たのが、年ぢう緣の下で吠えてはゐるが、さりとて飛び掛つて喰ひ附くほどの勇氣もない反對政黨の瘦犬である。憲政會では此問題を調査しておいて、明年の議會の取つておきの問題にするさうである。年から年中、生ま乾きの薪割木のように、燃え上がるでもなく、いぶつてばかしゐる反對政黨から見ると、流石に政友會は代表的のブルジョアジーの政黨である。乞食小屋が目障わりになる。燒拂つてしまへ。之は確かに面倒のない方法である。ブルジョアジーの支配に反抗する思想――之も燒き拂つてしまへ！ブルジョジーの搾取に反逆する運動――之も燒き拂つてしまへ！獨立なんぞと騷ぐ亡國民――之も燒き拂つてしまへ！印度も朝鮮も愛蘭も埃及も、序でに勞農ロシアも、大風上みから火をつけて燒き拂つてしまつた方がよい。（四月八日）

ゼノア會議

山川均

一

ホフマレ將軍とキユールマンが、ブレスト・リトウスクの講和條約を提げて伯林に引揚げた時には、彼等は勞働者の露西亞を永久に征服したと考へたに相違ない。そのブレスト・リトウスクの講和條件は、今どうなつたか。

クレマンソーとロイド・ヂョーヂがベルサイユの平和條件に獨逸を調印させた時には、彼等は永久に獨逸を屈服し得たりと考へてゐた。彼等は戰爭の罪惡から生ずる一切の報ひを永久に呪はれたる獨逸の頭上に轉嫁し得たと考へてゐた。そして歐羅巴の資本主義の安定は、この一片の紙屑で恢復し得たと思ふて

ゐた。そのベルサイユ講和條件は今どうなつたらう。成る程ベルサイユ條約は、儼然として用紙の上に殘つて居る。けれどもベルサイユ條約の上に建て直ほされた歐羅巴はどうなつたか。ベルサイユ講和會議以來、色々の名目の下に國際的の會議が、絕え間なく開かれ、主として賠償問題のみを討議した重要な會議すらも、幾度となく繰返されて居ることは、ベルサイユの歐羅巴改造が、畢竟、紙の上にのみ存して居る事を語る者ではあるまいか。巴里、ロンドン、カンヌと持ち廻はられた會議の結果が――歐羅巴の『指導者』が智嚢を絞つた四年間の小田原評議の末にやつと思ひ當つた最後の妙案が――勞農露西亞、ボリセヰキの露西亞の協力を求めることであつた。之がゼノアの國際會議である。

二

先づ戰爭の手傷を負ふことの、最も少ない英國のお勝手元を窺いて見ると、昨年の十二月には、輸出入額は最低の記錄に達した。失業者は昨年の秋に二百二十萬、半失業者が百二十萬に達し、益々增加はしても減少せぬ。消費稅、關稅の收入は減少する。そして米國には莫大な借金の利子を支拂はねばならぬ。ロイド・ヂョージの唯一の活路は、思ひ切り國費を切り詰めるの一途である。そこで昨年の暮に、政府はゲデスを首班とする特別委員會を設け、十七億五千萬圓の政費節減の方法を調査することゝなつた。其內七億五千萬圓は省の廢合、人員の淘汰などで節減することゝなつたが、殘りの十億圓については、委員會は辛うじて七億五千萬圓の節減の方法を立てた。そして其內四億五千萬圓は、軍事費の節減であつた。英國が何故にワシントン會議で大統領ハアデングに屈服し、米國の歡心を得る爲には東方に於ける米國唯一の脅威である日本との同盟を弊履の如く捨てたかは、此一事によりても知ることが出來る。英國の資本主義を救ふ爲には、如何なる代價を拂つても、米國との軍備競爭を避けなければならなかつたのである。

戰勝によつて、歐羅巴大陸の主人になり澄したつもりの佛蘭西はどうだらう。

佛蘭西の豫算を見ると經常費だけでも二百三十億法に達して居るが、其內、百五十億法は國債の利子、五十億法は軍事費であるが、國庫の收入は百七十五億法であつて、經常歲入を以てしては、利子と軍事費だけをも支辨することが出來ぬ。然るに經常費の外には、尙ほ五十億法の占領地の軍事費と二百三十億法の軍備費及び戰爭後復興費を合した總計二百八十億法の臨時費である。この費用は一體どこから出る？　云ふまでもなく獨逸の償金を唯一の引當てにするのである。佛蘭西が英國以上に、獨逸に對して常に苛酷な態度を取つて居るのは、獨逸を搾取す

る外には、佛國の資本主義を破産から救ふの道がないからである。

ところが獨逸には、固より此要求に應ずる力がない。獨逸の富は約一千億馬克で、戰前の二分の一以下となつて居るが、國民の收入年額は約百六十億馬克で、之れまた戰前の四割に減じて居る。ところが獨逸の國債は二千五百億馬克であつて、國富の二倍半に上ぼつて居る。その上、聯合國に支拂ふ可き償金一千三百二十億馬克がある。

ヴエルサイユの條約は儼として存して居る。然しながら獨逸に支拂ふ能力のないといふ事實も、一層大なる權威を以て、儼として存してゐる。獨逸の償金が取れねば、佛蘭西の資本主義は一日も立ち行かぬ。英國の資本主義も、同じ程度でこそないが同じ影響を受けねばならぬ。そして之が世界的大政治家がありたけの智慧を絞つたヴエルサイユ會議の『資本主義の建て直ほし』だつたのである。

三

世界全體の上から見ると、どうかと云へば、交戰列國の戰前の富は約六千億弗であつて、之から生ずる國民的收入の總額は八千五億弗であつた。戰爭は約三千億弗を費やしたので、現在の富の總額は約四千億弗に減じて居る。唯だ增加したのは國債と紙幣であつて、國債は二千五百億弗、即ち富の總額の六割二分に相當し、紙幣は戰前の十倍となつて居る。

此間に利益を占めたのは日本と米國とであつて、米國の輸出超過は、一九一五年から二〇年の間に百八十億弗に上ぼつたばかりでなく、原料品の輸出國だつた米國は、一躍して工業國となつた。そして色々な形で米國が歐羅巴に貸してゐる金額は百八十億弗であつて、利子の不拂ひの爲に、此金額は一日に一千萬弗づゝ殖えて居るのである。

そこで歐羅巴の經濟的安定を恢復する爲には、第一に獨逸に對して償金を棒引せぬまでも、事實上棒引に均しい支拂延期を行ふことであるが、之は先づ米國が、歐羅巴に對して同一の特典を與へぬ限りは行はれぬ。然るに米國は、ゼノア會議に參加をすらも拒んで居るので、會議が此方面に重要の成功をしようとは思はぬ。

第二には思ひ切つた軍事費の節減であるが、ゼノア會議が資本主義國家の對立を除く力のない以上は、此方面にも大した成功をする筈がない。資本主義の世界は、よろめきながらも終りまで此軍事費といふ脚の鎖を引きずつて野倒れをするに相違ない。

第三には――そして唯だ一つ望みのあるのは、諸國との經濟

關係を再興することである。資本主義の世界は、露國をゼノア會議に參加せしめることによつて、勞農露國の協力を欠いでは歐羅巴の復興の不可能なことを自認すると同時に、事實上、勞農政府を承認した譯であるが、若しゼノア會議の結果、對露問題の解決を見るならば、資本主義の世界が、最初の社會主義共和國を名實共に承認することになる。そこでゼノア會議とは、要するに露國の協力を得ざる歐羅巴の無力を自認して、勞農政府の承認をする爲めに開かれた會議に外ならぬ。今夕の新聞電報を見ると聯合國委員は、若し露國が聯合國側の條件に應じなければ、『露國なしに會議を繼續すべきこと』を暗示したといふとである。露國を承認する爲の會議を露國なしに繼續する！確かに奇拔な思想である。ゼノア會議は固より露國なしにも繼續することが出來る。けれども露國なしのゼノア會議は、畢竟ベルサイユ會議よりカンヌ會議に至る、幾多の小田原評議に、今一つ新しい小田原評議の名前を加へることに過ぎぬ。

若し聯合國側が法外な要求をせぬ限りは、會議は此方向だけには、相當の成功を收めることが出來る。そして露國は必ずしも、帝政時代の國債の承認を拒ばぬであらう。現在の露國が、直ちに國債の支拂ひに應じ得たことは自明であるから、之を認めると認めぬとは、大した問題でない。今日の國債が、十年の後に、否な。五年の後にすらもどうなるかは、疑問である。露國としては、大抵なことは我慢して、差當り自國の工業化と社會主義的經濟の建設の爲に、外國資本の利用を計るに相違ない。對露問題の解決すると否とは、露國が舊債を認めるかどうかと云ふ事よりも、舊債の支拂延期に對する保障として聯合國側の求める租借乃至は利權の條件が、過大に失しないかどうかといふ事にある。ゼノア會議が他の一切の事に失敗しても、對露問題の解決に成功することが出來たなら、確かに歷史的の會議といふことが出來る。資本主義國家と無產階級國家とが、一定の國際關係の下に併存することは、過渡的狀態には過ぎぬか、人間の歷史が初めて經驗した過渡的狀態だからである。

四

無產階級が政權を掌握した一九一七年十一月の革命以來の三年間は、歐羅巴の資本主義國は、武力の干渉によつて勞農政治を覆へそうとした。此努力が失敗に終ると、其次の一年間は、彼等は內部からの崩解を待つて、傍觀の態度を取つた。そして彼等が最後の望みを懸けたのが、最近の飢饉であつた。彼等は無產階級の露西亞は、今に倒れる、今に倒れるといふ自己欺瞞の爲に、露西亞の協力なくしては、歐羅巴の復興の不可能だといふ事實に目を閉ぢてゐたのである。

デニキン、ユーデニツ、コルチヤク、セミヨノフ、ウランゲル波蘭、とルウマニアのブルジョアジーとによつて機關銃とタンクと封鎖とによつて、四年の間勞農露國に其の『非人道』と『野蠻』とを敎へようとした歐羅巴の資本主義國の世界的政治家は、野蠻な露西亞から…………爲に、ゼノアに集まつた！（四月十六日）

獨都に於ける片山潛氏

△私は再び莫斯科に歸らうとは考へない、十一月上旬にコンミニストでなかつたと云ふ理由の下に露西亞を追放された私は、遂々夏服一着で伯林の降誕祭(クリスマス)を迎へなければならない事になつたのだ。

△私は今、心から日本に歸る事を急いで居る。それは莫斯科に殘つた大庭柯公氏の現狀を報告したいのと、そして私自身の感傷的な欲求とからである。だが伯林政府は非道く私を警戒して居る。若し日本大使館が私のコンミニストでない事を證明しないなら、露西亞へ逆送しなければなるまいと威嚇して居る。日本大使館では若い法學士の書記官が、とても君等の想像できぬほど、嚴重に取り調べて與れた、其れが日本人が其の同胞に對する態度であらうかと思ふほど高壓的であり猜疑的であつた。其れに堪へ忍ぶ事が何うして出來やう。何うでもなれと抛げ出すより途はなかつたのだ。伯林政府が勝手に大使館へ交渉するが可いのだ、そして大使館では身を置く處なき同胞國民の一人を何とでも勝手に判斷するさ。（編者記、其の後の彼の便りに、森戶、櫛田兩氏の盡力で漸く大使館の了解を得、目ならず歸國するであらう）

十二月六日の夜、中米から露西亞へ、伯林の一角をかすめて行かうとする彗星を見た。實際に私達は片山潛氏の事を考へると、ラジウムの燃へ輝くを想ふ。露西亞に居た頃、大庭氏に聞かされた材料から想像して、齒の拔け落ちた老衰した片山さんを想像して居た。

△其れが遇つて見て全ての豫想を裏切られた氣がしたのだ。一九二一年六月の雜誌「改造」に掲載された木版の肖像畫は可成り片山氏の線と感じを出して居た。だが更に血色の勝れた何だか淺褐色の感じを持つた老紳士だ。黑緣の圓形の眼鏡の下から惡星のやうに鋭い瞳が對手の腹の中を射るやうに思ふ、とても本國に働いて居る此の年齡の日本人には見られさうにもない强さと生氣が横溢して居る。

○

△私は伯林に入つて以來の經過を、寧ろ訴へるやうな氣持ちで話した、そして目下稍々抛げやりな態度になつて居ると附け加へた。すると片山さんは、何でも私が、大使館に泣きついて伯林に這入つたやうに誤解したらしく『其は駄目だね』と强く短かく一言して、稍々怒氣を含んだ唇を一文字に結んでしまつた。それに片山さんは浴後だつたので額には汗が滲み、頭からは湯氣が立つて居たものだ。

△東亞から露西亞に入つて再三ならず死を決した私も斯う云ふ恐ろしい人格に出會つては全く駄目だ、それに部屋には火氣が絶へて居たのと夏服を着て居たのとで、思はず身震ひを初めた。

△だが誤解だと知れると片山さんの態度は急に親切になつた、

『私の云ふまでもなく、共に日本人だから日本のために、盡しませうよ。』と云ふ一句を話の至る所に挾む、何だか片山さんの人格そのもののやうな言葉だ。

△別れる時、私の生活費や旅費の事まで心配して下すつたが、私は近いうち日本から來る筈だし御好意を感謝して別れた、固く手を握られながら――。

△私はペトログラードで「インターナショナル」の一六――一七卷に掲載された氏の論文を見た。ペトログラードのコンミニストは「良(ウー)き頭腦(ムタイ)」だと云つて氏を賞讃して居た。さうだ。氏にお目に掛つた室内の卓子の上に「東洋經濟雜誌」が一冊載つて居た。氏は其の表紙を撫でながら「總て日本の主要な印刷物が手に入れる事の甚だ困難なる」をくりかへして云つた。

△日本人つて奴は不思議な人間だぜ、伯林では皆が私を恐がつて寄りつかないんだ。だが結局其れが幸ひだ。

『お互に日本人だから、日本の爲めに、盡しませうね。』片山さんは、さう云はれた。ね。

（富永カンテンスキー）

五月號創作

第十一指の方向へ　武林無想庵

或る男　武者小路實篤

歌麿　高橋誠

お富の貞操　芥川龍之介



第十一指の方向へ

武林無想庵

日に十枚なんて、とても覺束ない。御覽のとほり、まる〱二タ月、かゝりどほしにかゝつて、よんやらやツと百三十八枚だ。一日を平均して了ふと、たつた二枚と十分の三にしきやならぬ。はなはだ甲斐性のないお話だが、これが私の精一杯といふ力量なら、何とも手のつけて見やうはない。

ところで、その精一杯といふ、その何とも手のつけて見やうのない、その私自身の力量なるものをば、最初立案した目安どほりにして、かりに一枚一圓の金貨本位で、とりあへず換算して見るとすると……云ふまでもなく百三十八枚は百三十八圓だ。さうしてそれが丸二箇月間の全金額なんだから、日割にすると、百三十八圓の六十分の一、即ち二圓三十錢ならしとなる。

然るに一方、翻つて、それに伴なつた私達一家の支出額はと云ふと、神戸へ上陸して以來、この二箇月間に消費した金高は、〆て一千二百圓に達してゐる。これを百三十八圓の總收入に對比すると、つまり、差引一千〇六十二圓の欠損となる。蓋し一日十七圓七十錢の不足だ。云ひ換へれば、私自身の精一杯の力量は、要するに、毎日十七圓七十錢宛のマイナスによつて、金貨本位の日本貨幣と交換されるべき運命にまで、余儀なくされつゝあるといふ事になる。

明らかにこれは不合理な生活だ。不合理であつて、同時にまた不可能な生活だ。不合理な生活は、或は續けて續けられぬ事もないか知れぬ。けれども不可能な生活を續けてゆく事は、人間には絶對に不可能だ。

たとへば、爰に一定の與へられた金額があつて、さうして徹頭徹尾たゞその定額の制限内のみで、人間が若しどうしても生活しなければならぬものとすれば、人間の生活は否應なしに金錢の茨で束縛されて了ふ。從つて潑剌たる本來の生命の手も足も出なくなる。これは必ずしも與へられた金額の高によらない。何となれば、貨幣は社會制度の欠陷から生じた、人間生活の消極的要求を充たすべく、止むを得ず案出された産物だからなのだ。それゆゑに貨幣には元來自由性がない。自由性のないものはすべて不合理だ。さうして人生に於ける一切の不合理は、私にとつては不俱戴天の敵だ。即ち百三十八圓の制限内で、冗談にも一家を支へて見ようなんどゝいふ意志は、毛頭私の心からは生じて來さうな筈もない。然らば百三十八圓の收入から、傍若無人に千二百圓の支出を企てる氣かと云ふと、それは私には絶對に不可能だ。

二タ月で千二百圓、月にして六百圓、日にして二十圓、それだけの金は、私達一家の生活には、貨幣制度の撤廢されないかぎり、何としても必要だ。さうして私自身の精一杯の力量は、四捨五入して一日二枚平均に限る。云ひ換へれば、二枚書くのに二十圓の金が必要だといふ事になる。即ち四百字詰一枚十圓の原稿料は、私としては、たとへ理が非でも、これはどうあつても、是非申受けなければならないといふ結論になる。

——どうだね？　それなら當分心配はないだらうが……と、私は子供を抱いた看護婦にソワニエされつゝある病床中の女房に向つて云つた。

と、女房は蠟石のやうに血の毛の失せた、蒼ざめきつた顏に、強ひて微笑を浮かべて見せながら、

——私の惡口を書いて、それが一枚十圓に賣れてくれたら、私はそれこそ本當に安心して死にます……が、そんな茶氣のある本屋は、とても世の中にはないでせう……と、力なく答へた。

——たとへ女房の惡口でも何でも、私は一字一句、滿腔の藝術的良心に愬へつゝ、一生懸命に書いてゐるのだ。若し其の努力で、滿足に妻子が養へず、醫者や看護婦を自由に聘する事も出來ないと云ふのなら、私はまたヤケクソになる。

――さうして又お酒ばかり飲むの？

――いや、酒なンぞ飲まない。その代り、爆彈製造にとりかゝる。

――そんな事をされちや、なほ困るわ……一枚十圓に賣れなくてもいゝから、まあ、氣長に穏しく稼いで行つて下さい……その内に賣れさへしたら、今度は本屋の方から、爭つて一枚五十圓でも百圓でも出すやうになるでせうから……

私も今ではかうした女房の意見に耳を傾けるやうになつた。併し、その頃は……鵠沼の宿屋にゐた頃は……

居ても立つてもゐられないほど、それほどセツパ詰つまつた心の狀態にあつた。何一つ手につかぬ。何一つ考へる氣にもならぬ。と云つて、何もせず、何も考へず、たゞジツと座つてはなほゐられぬ。苦しまぎれに、生可な坐禪など組んで見る。形式ばかりの死猶狙跌座が、かうした際には何の益に立たう！

たまらなくなつて、私は部屋の外へ出た。さうしてその足ですぐ階段を下りた。と、そこに人がゐた。女が一人ゐた。階段の降り口と檜柱一本を隔てた、一寸した小さな洗面所の前へイんで、ほツそりと前屈みにイんで、眞白に堅練を塗つたばかりの襟足が、折からケバケバしく動いてゐる最中であつた。氣をつけて見るまでもなく、勿論、それは道子女史の首に相違なかつた。

――へえ？ いつの間に引越して來たんです？ と、朱鷺色の細帶一つだが、さすがに締りのよさゝうな、恰好のいい腰の邊へ、すりつくほどにピタリと近よつて、私はやり場のない熱烈な息をば、頭の上からいきなりホツと浴びせかけた。

女はギョッと顧返つた。

――アラ、どなたかと存じましたわ。と、わざとらしくニツコリして、――昨晩引越してまゐりましたの……あちらはあんまりお賑やかでムいますのでね。と、恰も吐きかける私の毒氣からでも身を避けるやうに、一歩二歩タチタチ

と跡じさりした。

——そこですか？　と、私は丁度私の部屋の眞下に當る部屋の入口を指した。

——えゝ。と、女は姿見に映る自分の顏を眺めながら、指先でチョイチョイと小鼻の上を觸つて見たりした。

——なぜ僕の隣りへ引越して來なかつたんです？

——オホホ。でも、それぢやあ、あんまり押しつけがましうムいますからねえ………それに………と云ひさして、女は一層聲高に笑つた。

——それに？　どうしたんです？

——あのお方がお出でになつた時、きつとお邪魔になるに違ひないと存じましたんで………と、女は秋波を湛へた眼で一寸睨む眞似をした。

——あのお方とは誰の事です？

——おトボケなさつても駄目。御存じないのはあなたばかりでせうよ、多分ね………と、今度は打つ眞似をして、それから『えゝ、えゝ、そりやあもう』と云つたやうに、二度三度愛くるしい顎の先を動かして見せた。

——あなたまでがそんな事を云ふから困る。あれはたゞ妹の親友だと云ふにすぎないんです。たつた一人の親友が、アメリカへ行つて了つたんで、その心の欠陷を充たす爲に、せめてその兄貴にでも逢つて、わづかに親友の面影を偲ばうと云ふぐらゐな、極めて單純な話で、それであゝして時々やつて來るんです。決してみんなが騷ぐほどの問題ぢやありませんよ。冗談ぢやない。

——ホラ、さうムキになつて云譯なさるだけなほ可怪しいわ。みんなが騷ぐほどの問題だつてお宜しいぢやムいませんか？

——驚いたね。こりやとても敵はない。ドレ、それぢや、足元の明るいうちに、サツサと引上げる事にしますかね。

と、私はエヘラエヘラと笑ひながら、片手に握つてゐた鳥打帽子を冠つた。さうして、

――いや、お化粧のお邪魔さま。と云ひすてゝ、颯然と隣りの建物の廊下へ移つた。

――鎌倉へお出かけですか？　まあ、お樂しみなこと！　と、朗らかな女の聲が、後ろから襟元へぶつかつて、私の神經の中樞へゾツと浸徹つた。

電車を降りたのは鎌倉だが、鎌倉の大町だが、私のゆきついた先は、すぐ傍の郵便局であつた。實父から届いた二百圓の郵便爲替が、鎌倉局の指定になつてゐたからだ。

とにかく金だ。金を手にする事だ。その持つてゆきどころに困るほど、それほど窮屈しきつてゐた私の懊惱も、高は纔に二百圓だが、と、金の顔を見ると、十圓紙幣を數へて二十枚受取ると、不思議な事には、忽ち一條の血路を發見したやうな心持になつた。同時に、東京に於ける氣に入つた飲食物や、それから待合や遊廓の、臥床の中なる藝者や花魁の半裸體が、馥郁として、繚亂として、見る見る仕掛花火に口火がついたやうに、華輪車の如く目まぐるしくクルクルと、陰慘な私の腦中に廻轉しはじめた。私はニヤリと薄氣味のわるい笑みを洩らした。

が、郵便局を出て、いそ／＼とガードの下を潜つた時、どうしたのか、俄に華輪車の廻轉が停まつて、その中から途方にくれた奥さんの顔が、さめ／＼と滲じみ出た。

『けふあたり、或はあすかあさつて、ひよツとして行違ひに、留守中の宿屋へ、意地わるく尋ねて來はしないだらうか？』はツとさう思ふと、私は我知らず踵を引返した。さうして、『さうだ。一應東京へゆく事を斷つて來なければならない。さうだ。』と、急にわく／＼して、のどかに石の鳥居の立つた、松林の間の砂道をば、雪駄ですべり／＼海岸の方へいそいだ。

が、滑川の橋を渡つて、材木座の區域内へ踏込むと、私の歩武はおのづと緩やかになつた。さうして暫く左右に連らなつた田畠の間を拔けて、やがて辿りついた最終の右側なる畔路をば、マルグレ・モアに、しかし思ひ切つて曲つた頃には、もうスツカリ厭氣がさしてゐた。それでも惰性で門の前まで行つた。コンモリと植込に圍まれた、奥床しい別莊の門の前まで……はじめて、、、、、、、、、、、、、の前まで、、、、

と、私はそこで立竦んで了つた。あたりはシンと靜まりかへつてゐた。植物の香と土の匂ひとが、ひた〳〵と身に迫つた。

『ばからしい。』と、私は思つた。『どうして俺はこんな下らない氣にばかりなるんだらう？』と、つく〴〵自分の心の愚劣さ加減に愛想がつきはてたやうに思つた。

で、そのまゝコソコソと元の畔路へ引返して、ひろ〴〵とした綱手まで戻つた時、私は何となくホツトして、『まアよかつた』といふやうな心持がした。さうして足早に橋の上まで歸つた。と、枯蘆の間から、四つ手網が一つ、ゆら〳〵と水面へ浮び上る瞬間が、ふと眼に這入つたので、それに興趣を感じたわけでもなかつたが、私は思はず立留まつて、欄干へ靠れた。

『なぜ俺はかう意久地がないのかしらん？』と、愚痴ツぽい心が、未練がましく私を責めた。恰も進んで門内へ踏入る勇氣の出なかつた事が、いかにも男らしくない行爲でゞもあつたかのやうに。

私はもう一度出掛けやうかと思つた。が、その氣はすぐに否定された。否定されたかと思ふと、すぐまた首を出した。すぐまた否定された。行かうか？　行くまいか？………私は欄干へ頰杖をついて迷つた。

四つ手網には、纔かばかりの塵芥の外、何一つ獲物もかゝらなかつた樣子で、またゆら〳〵と枯蘆の間へかくれた。

『どういふわけで些細な事にかうまで迷ふんだらう？　俺はどうしても低能兒だ！』さう思ふと、なさけなくもなつた。悲しくもなつた。生きてゐるのが心苦しくもなつた。と、急に腹立たしくなつた。ムカムカツと反感が起つて來た。何物に對してといふアテもなしに。

『低能兒ぢやなぜ悪い？　低能兒だつて、生きてゐられぬといふ法はない。俺は生きる。低能のまゝで生きる。生きてやる。生存競爭に敗けるまで、生きられるだけ生きてやるのだ。』と、恰も生そのもの absurdité に對する面當のやうに、向きになつて、イライラと、心の中で絶叫した。

紙卷に火をつけて、私は欄干を離れた。橋を渡つて、松林へ這入つた。で、再びガードのところまで來ると、私の足

は忽ちまた電氣にでもかゝつたやうに、ブルブルと痙攣して竦んだ。

『さうだ。手紙でも出して置かう。』といふ念が、ヒラリと腦裡を掠めると、私は人目を忍ぶやうに左へ折れて、かき消す如く郵便局の中へ姿をかくした。

今度は無事に停車場へ行きつく事が出來た。發車間際だつたので、とかうの思案する暇もなく、白煉瓦のトンネルを潜つて、一ト息にプラットフォームの上へ出た。さうして列車の到着するのを待つた。と、「やつぱり手紙など出さなけりやよかつた。」などゝいふ妄念が、表皮の薄い心の一角を食破つて、又ぞろヒョイと嘴を出した。叩きつけると、すぐ引込んだ。すぐ新しい薄皮が、食破られた隙間を塞いだ。緜然と列車が來た。

まだ本當にプロレタリアとなりきれない證據には、私は無意識に青切符を買つて、當前のやうな顔して二等車に納まつたものだ。二等車はガラあきであつた。東京通ひの別莊組が、蟲酸の走るばかり、お互ひに衒耀と絢爛とを競ひつゝ、時を得顔に爭ひ乘る時間ではなかつたと見えて……

紺青色の鮮やかなクションを兩側に縁取つた、長い二等室の一隅には、ブルンネツトの豐麗な髮の毛をばふと〳〵さ波打たした、病身らしい十三四の女の子が、その母親らしい西洋婦人に、すりつくやうにして腰かけてゐた。反對の一隅には、四十恰好の色澤のいゝ、仕立卸しの印半纏を着た男が、赤靴を穿いた足をば、遠慮なくクションの上へ長々と伸ばして、いゝ心持さうに睡つてゐた。が、その息は酒臭さうであつた。さうしてそのドンブリの蔭なる白縮緬の三尺からは、重さうな金鎖がダラリと腰掛の端へ這ひ出してゐた。

私は中央へ陣取つた。と、列車は間もなく動き出した。向ふの宿屋も動き出した。洋館の屋根も、別莊も、海も、山も、町も、木叢も、みんな一齊に動き出した。私は汽車が好きだ。子供の時から好きだ。子供のやうに好きだ。ソラ、トンネルだ。

私の前には美しい女がゐた。乘つた時から目についてゐたのだが、又それが爲に中央へ陣取つたわけなのだが、さす

がに氣がさして、眞斬にジッと視線をそゝぐ無遠慮さにはなれなかつた。それほど美人だつた。それほど氣になつた。それほど見ぬふりをして、チョイチョイと樣子を覗つた。

年の頃はまづ十八九であらう。割合にジミなお召の不斷着に、歌麿のやうに飽まで軟らかさうな肉線を浮かして、ひどく艶めかしい色をした。錦紗の羽織を無造作に引きかけてゐた。羽二重肌の瓜實顏で、就中、その目元と口つきとが、たまらなく可愛らしかつた。毛筋の細い、しかしさう地の薄くない洗髮が、櫛卷が、ばかに全體を意氣なものにして見せた。潑蛇の目色の、市村格子の、氣のきいた日和下駄の爪皮が、不用意に突ツかけたその足首と共に、うす暗い蔭から私の心の琴線に觸れて、否應なく懊惱の抛射を吸收した。

どこからどう見ても、少しも處女らしいところはなかつた。さうかと云つて、人の妻君では無論なかつた。妾か？妾としても、ありふれた花柳界上りのそれではなさゝうだ。ラシヤメンか？　それにしては、横濱くさいところがあまりになさすぎた。

『とにかく、かういふ女をオモチヤに出來る男は、よつぽど幸福だ。』と、私は思つた。さう思ふと、その男が憎くなつた。さうしてその男は日本人でも西洋人でも、必ず資本階級に屬してゐるに相違なかつたので、一層資本主義といふものが、切實に自分の仇敵であるやうな思ひをした。

『萬人の浴し得られないやうな……、寄つて集つて××××××！』と、私は心中でさう叫んだ。すると、現在、、、、、、、に勝誇つてゐる、、、、、、、、、、、、、、、、見苦しくも、小氣味よくも、累々と脚下に轉がり落ちる有樣が、まざ／＼と心に浮んで來た。同時に、泉のやうに滾々と溢れ出る、プンと腥い紅血の中で、この女がスッカリ、、、、、、、、、滴たるやうな白淨々の、、、、、、、、、、、、、、はやりきつた、、、、、、、、手取り足取り、思ふ存分、、、、、、、、、、一擧手一投足が續いて目の前にチラチラした。ふと『、、、、、兩つながら禁じ難し。』といふ、大東閨話の名文句が、キラリと冴えを見せて、私の胸の中に閃めいた。

私はニヤリとした。さうして女を見た。が、女は知らぬ顏で、膝の上へ薄い横文字の本を擴げて、大して讀み耽るで

もなさゝうに眺めてゐた。横文字の本！　私は一寸意外な感に打たれた。洗髪の美人が横文字の本！　市村格子の爪革をした女が横文字の本！　立花屋がワイルドのサロメを繙いてゐるよりも、私には一層奇異に思はれた。

『何を讀んでるのか知らん？』と、私はソッと好奇心の眼を光らして窺み見た。

女はやがてページをまくつた。と、細い白金の指環に箝め込んだ、素晴らしいダイヤが燦爛とした。眼が少し近いのと、光線の具合が悪いのとで、どうもよく分らなかつたが、その字配りから察すると、何だか外國の教科書らしいやうな氣がしたので、聊か失望した。表紙は舶來の海老茶色をしてゐた。一度も習つた事はなかつたが、昔ナショナルやロングマン以前に行はれた、私はローヤル・リーダアの、その第一讀本などを想ひ出した。今時、この若さで、まさかそんな黴くさい書物をヒネくる筈もなからうが、それにしても、その教科書らしい體裁が、何としても不服であつた……大きに憚りさまな話だけれど。

二等車位へ乘れさへしたら、それだけでもう萬事が解決したやうな恰好をして、印半纏は高鼾でまだ眠つてゐた。ブルンネツトはクションの奥へ膝を突入れて、窓硝子へ頬をすりつけて、貪るやうに外の景色に見入つてゐた。丁度戸塚のトンネルを出たばかりのところであつた。

私も外を見た。このあたりは何となく山奥を偲ばせるやうな趣きがあつて、比較的里離れをしてゐた。山や谷のたゝずまひに、中々侮り難い風情があつた。西洋人の好みらしい別莊も、チラホラと一つ二つ見えた。

『さうだあんなやうな別莊に閉ぢ籠つて、それこそ出雲八重垣でもつくつて見たいやうな女だ。』と思つて、私はまたチラリと女を見た。

下讀みはもう濟んだと見えて、女はこれも蛇蛇の目色をしたツバクロの中へ丁寧に書物をしまつてゐた。私はこの女にかつら下地が結ばせたくなつた。さうして五つ六つ年を跡戻りさせて、清元の稽古所へ通はしてやりたくなつた。が、時代はもうとうの昔、容赦なく私の空想を置きさりにして、大股でズンズン先へ進んで了つた。汽車は程ケ谷を通過した。

女と西洋人親子とは横濱で降りた。入れちがひにドヤドヤと乘客が這入つて來た。さすがにその物音に目がさめたも

のであらう。印半纏はムツクリ起反つて、アクビまじりに、ジロリ、ジロリ、小癪にさはるやうに入る來る人々を睨めつけてゐた。

新橋へ降りるたび、私は一體何のためにかうして東京へ來るのかと、いつもきまつて、來て見ると用のない自分を不思議に思ふ。東京には何十萬軒家があるか分らない。何百萬人ウヨウヨしてゐるか分らない。が、そのうちの一軒として、そのうちの一人として、炎々たる私の心の要求と、切實に、熱烈に、シツクリと密觸した、食ひ入るやうな交渉を開き得る家も人も絶對にないのだ。それは强がち東京に限つたわけではないかも知れないが、ヒネくれきつた私のやうな人間にとつては、到るところの人生のすべて、到るところの社會のすべてに對して、反感の外は、瞋恚の外は、全く何も持ち得ないのかも知れないが、かうして新橋へ降りるたび、今更のやうに、恰もそれが東京だけにでも限つたやうに、しみ〴〵とさう思ふ。

『何のために東京へ來たのだ？　何しに來たのだ？………なアに、二百圓懐にしたから出て來たのだ。それだけだ………旨いものが食ひたくなつて出て來たのだ。それだけだ………刻薄なVoluptéに苛まれたくて出て來たのだ。それだけだ………それだけなのだ………なアに、それだけなのだ……

『母の墓まゐり？　それはウソだ。それは淺薄な口實だ。それは偶然けふが母の死んだ祥月命日に該當してゐるといふまでの話だ。なるほど、長年母の世話にはなつた。その記憶だけはたしかにある。が、記憶が何だ？　何のタシになる？　そんなものが母親に對する感謝の念の裏書きにでもなると思ふのか？　一歩讓つて、殊勝にも、かりに感謝の念を起し得たものとして、それがどうなのだ？　死ぬ前はもとより、死んでから一層シンニフをかけて、ヘヸイをかけて、飽くまで母の希望に裏切りつゞけて來てゐるではないか？　さうしてそれを氣の毒とは思つても決して惡い事だとは信じてゐないではないか？

『友人の四十九日？　それもウソだ。それも口實だ。俺は一度でもあの友人を愛した事があるか？　徹夜して一緒に酒

をのんだ？　一緒に女郎買ひに行つた？　それが友人を愛してゐた事なのか？　友人の方からは、非常に厚く、非常に濃やかに、或は俺を愛し、俺を敬し、俺を信じ、恐らく兄事してまで交はつてゐてくれたもの丶やうだ。それに對して、俺はあの友人をどう思つてゐたか？　どう取扱つてゐたか？　俺に對するあの友人のそれと同じやうに、俺は果して同程度の友情を披瀝して、あの友人を愛したか？　あの友人を敬したか？　あの友人を信じたか？　なアに、生きてゐた時でさへ、あの友人の事なんぞ、俺はまるツきり眼中に置いてゐなかつた。あの友人ばかりには限らない。俺は俺自身の事の外、いや、寧ろ俺自身の疑惑の外、一切の友人は勿論、一切の他について、一切の非我について、全然考へた事はなかつたのだ。今だつてその通りだ。』

　いつの間にか新橋を渡つてゐた。いつの間にか銀座の歩道をあるいてゐた。が、どこへゆかうといふ意向も、見當も、私の頭には、間斷なく妄念同志の修羅場を現出しつゞけてゐる私の頭には、てんで浮んで來る余地はなかつた。從つて全く無方針であつた。全く無目的であつた。さうして私の爪先は、習慣的に、遺傳的に、四足獸以來の反射作用を繰返しつゝ、たゞ無意識に運ばれてゆくにすぎなかつた。

　プンといゝ匂がした。煉香の薫りが鼻先を掠めた。鳩居堂の軒下を通りすがつてゐたものだ。

『さうだ。沈香でも買つてつてやらうかしらん？　死んだ時、香奠をやりはぐつて了つた代りにナ。』と、私はふと思つた。と、急に四十九日の法會に列席する氣になつた。で、二三歩跡戻りして、ツカツカと鳩居堂の店頭へ這入りかけた。と、また、すぐ厭になつた。慌だゝしいはかりで落ちつきのない、形式ばかりで內容の皆無な、僞善ばかり往來して眞實味の通らぬ、所謂法會なるもの丶光景が、苦々しく識域にコミ上げて來たからだ。

　彈ねとばされたやうに、私は店頭を離れた。さうして尾張町の交叉點へ立つた。そこにゐた巡査と同じやうに、ポカンとして歩道の突角へ立つた。

　例によつて夥だしい人間だ。滿員の電車がしつきりなし縱横に隱顯する。タンクのやうな乘合自動車が、甲蟲のやうなオトが、タクシイが、恰も亂打する世の終りの警鐘にでも脅かされたやうに、周章狼狽して、右往左往に出沒する。

取殘された人力車は、危なッかしげにその間を縫ひながら、喘ぎ〳〵這ひまはる。人間は飛礫のやうだ。石合戰に抛げつけらるゝ、擲きつけられて翻筋斗をうつ、河原に撥ねかへる飛礫のやうだ。

『……が起つたら、澤山人死にのありさうなところだ。』と、私は思つた。さうしてゾッとして群集を見た。が、この國にかぎつては、決してそんな忌しい事の起らう筈もなさゝうに、又ない事を確信して疑ふ餘地もなさゝうに、群集はそれ〳〵そのまゝの秩序に甘んじ顏に、それ〳〵そのまゝの泰平に多忙を極めてゐた。

『かうやつて、銘々に一つ宛の虛僞と不條理とを、後生大事に持ちまはつてゐれば、これで一日が暮れるのだ。一日が無事安穩に暮れさへしたら、虛僞で御座れ、不條理で御座れ、そんな事はもう問題ぢやないのだ。金だ。金だ。金だけ握れば、それでいゝのだ。眞理が何だ？　正義が何だ？　すべて過去の夢ぢやないか？　そんなものが、何でいま要るものか？　金だ。金だ。たゞそれ金だ。徹頭徹尾金だ。最期まで金だ。死ぬまで金だ……あゝ、いやな世の中だ！』

とさう思ふと、私はジレつたくて耐らなくなつた。『諸君！』と、だしぬけに呶鳴つてやりたくなつた。、、、、、、たくなつた。トタンに、交叉點の中心に直立して、操り人形のやうに手を上げたり下げたり、たえず身體の方向をば、クルリクルリと、風見の如く轉換させつゝある、恰も社會奉仕そのものゝ權化のやうな、緊張しきつた交通巡査の姿が、ふと目に映つたので、思はずヒヤリとした。氣がつくと、傍にも巡査が一人ブラリブラリしてゐた。私の足は直ちに動き出した。步道に沿うて、何氣なく左方へ折れた。

――貴下はいかなる御用命で御來朝になりましたか？

――C'est simplement, Monsieur, pour gouter de "Templa" à la Témquine, n'est-ce pas?

鹿爪らしい新聞記者の問に應じて、二三年前、フランスの或る實業家が、言下にニコニコと、さう云つた當意即妙な返答をしたので、座にあるものは悉くアッとあいた口が塞がらなかつたさうだ。

それほどまでに、果して天下の珍羞かどうか知らないが、足都合がいゝのと這入りやすいのとで、私はよく天金の二

階へ押上る。時間に制限のない身の上だから、たとへどのやうに込合つてゐても、平氣でチビリチビリと盃を舐めながら、何十番でも悠然と待つてゐる。

今しがた、新橋の停車場へ降りた時は、何の爲に東京へ來たものやら、あまりに目的がなさすぎて、殆んど途方にくれた位だが、かうして偶然目の前へブラ下つた、墨痕淋漓たる天金の看板に、遮二無二引張り上げられて見ると、さうしてかく明瞭を極めたる、甚だ單純な、甚だ均等な目的下に殺到した、稻麻竹葦も物かはといふ老若男女の間へ割込んで見ると、不思議な事には、どうやら當然納まるべき筈のところへ、正に滯りなく豫定どほり、判然落ちつき得たやうな心持になつたものだ。

立錐の隙間もない群集の一角から、わづかに發見し得た私の席は、便所と隣合つた小座敷の間際であつた。階段の方からグルリと延びて來た廊下の末端は、丁度私の鼻の先で行詰まつてゐた。と、そこに開閉自在の扉の袖があつた。さうしてその袖に手首や臂や肩先を小突いては、入替り立替り、善男善女の思ひ／＼に出入する度毎に、千態萬狀のニユアンスを攪拌した、凡ゆる行糞送尿の錯綜せる臭氣が、さなきだに室内に漲つて低迷した、ギチギチした、脂ぎつた雰圍氣と飽和して、芳烈に、峻烈に、私の空腹のどん底へ、刳ぐるが如く沈み徹つた。

私は寧ろ小氣味がよかつた。さうして思ひ入れその匂を吸收した。

「さうだ。この匂だ。この匂こそ、肉迫した、詮じつめた生そのものの眞劍味ではないか？　嚴肅なる生活そのものゝラボトワアルから、永劫に、不易に、宇宙に向つて發散しつゝある靈氣の脈搏ではないか？　この匂を取除いて、果して人生には何物が殘る？　何物も殘らない。何物もない。さうだ。この匂を中心として、俺自身の生命は、ガツガツと、必死と、鼓を先途と、旋風の如く輪轉しつゞけてゐる眞最中なのだ。哲學も、宗教も、科學も、藝術も、要するに、ただこの匂からのエマナチオンとしてのみ、俺自身には纔かに價値が保てるのだ。この匂のない哲學も宗教も、この匂のない科學も藝術も、それゆゑに、俺には絕對に空なものだ。絕對に無用なものだ……」

銚子代りの二本目に、例によつて海老ばかりとかカキ揚げとが、各一人前宛の箱に這入つて、思つたよりも早く私の

前へ並べられた。私はニツコリして先づ海老ばかりの方の蓋を開いた。

『天麩羅にかぎる。』と、私は舌鼓を打つて、さう思つた。『腹のすいた時、待ちに待つて、好きなものを口の中へ入れた刹那ほど、それほど間違ひのない幸福が、この人生にまたとあらうか？』と、さう思ひながら、ムシヤムシヤと一疋平げた。丁寧に尻尾まで平げた。尻尾は殊に旨かつた。カリカリして歯當りが何とも云へなかつた。

『、、、、の行はれる世が來たら、さしづめ天麩羅のスペシアリテを代表する一般市民の食堂となつて、このまゝに殘り得る家だ。爰ばかりぢやない。橋善、高七、中清、天新……一文も持たずに、どこへでもお好み次第に行けるのだ。』とそんな事を思ひながら、二疋目を食つた。

『天麩羅と蒲焼と彌助とを考へないで、又鮪のさしみと海苔と佃煮とを考へないで、東京市民に、、、、、、、ようと企てる位愚な事はない。凡ゆる東京のプロレタリアが、擧つて好む食物をば、悉く、、、、、、、、、、、、、、、了ふ事から始めなければならない。食物から衣服だ。衣服から住宅だ。一切の衣食住を、、、、、!……』と、そんな事を思ひながら、三疋目を食つた。

一人前の箱は見る〱カラになつた。私の箸は引續いてカキ揚げの方へ移つた。さうしてそれもまたゝく併呑して了ふと、今度はカクヤでさら〱と茶漬を二杯食つた。と、さすがに腹がいツぱいになつた。私は滿足らしくゲーイとオクビを一つした。

『さア、晩には何を食はう？……金田へ行つてシヤモを食はうか？　それとも前川の中ぐしにしようか？……』などゝ、どこまでも意地ぎたなく食ひけにばかり支配されながら、やがて勘定を濟ますと、間もなく天金を出た。

私はひどくいゝ心持になつた。

ホロ醉にくづれた顔を振上げて、服部の大時計を仰ぐと、さうしてまだ二時過ぎたばかりだと確かめると、私は、『本願寺へ出掛けてやらう。』と即決した。

酒の氣が少しでもある時とない時とでは、私の頭はまるで覗きカラクリのやうに、バタバタ、ガラリと調子が變つて了ふ。醒めて否定する事は醉つて肯定する事だ。前者の躊躇は後者の敢行だ。疑ひ、迷ひ、怯え、尻込む、さうした薄志弱行は彼に屬する。乾燥ぎ、浮かれ、笑ひ、怒る、さうした輕擧妄動は是に屬する。死んだ友人にも同一徹な傾向があつた。

さつきとは別人のやうに、私は勢よく鳩居堂へ這入つた。さうして亡き友人の佛前へ手向けるつもりで、飛切り上等の箱入りになつた煉香を買つた。黒と白の水引もかけて貰つた。序でに自分用の沈香も買つた。白檀も買つた。梅香も買つた。もつと醉つてゐたら、恐らく伽羅まで買ふ氣になつたかも知れぬ。それほど私は香が好きだ。

鳩居堂を出ると、各種の香を包んだ紫色の袱紗を抱へて、私はすぐ築地行の電車に飛乘つた。

死んだ友人は江戸ツ子だつた。八幡鐘から臍の緒を曳きずつて來たやうな、鋸屑や介殼の、苦みばしつた木の香潮の香から、止むを得ず搾り出された深川ツ子だつた。

『遮斷生活』など〻標榜して、四疊半の中二階にまで鍵をかけて、一切人には面會しない時代だつたが、はじめて寄越したこの友人の敬虔な手紙を見て、その人知れず道を求むる眞面目な態度に動かされて、私はふと會つて見る氣になつて返事を出した。道を求むる心！

道！　少くともそれが二人の友情をつなぎ合はした糸口に相違なかつた。道！　二人には勿論藝術であつた。同時に宗教であつた。いや宗教と藝術とを打成一片とした。さうして所謂藝術でない、所謂宗教でない、生々しい何物かであつた。

が、お互ひに初對面の顏を見かはすが最期、二人の間には忽ち烏賊鍋が躍り出で〻、直ちに道を遮ぎつた。菊正の銚子盃が矢叫びの如く飛びちがつて、道の表面を暗くした。蹣跚として、滄浪として、無頼漢、破落戸となりすまして、板橋街道を練歩いたのが第一日であつた

第一日は第二日に續いた。第二日は第三日に續いた。三年四年は轉瞬にして過ぎた。その間、酒と淫蕩とは、恰も極印を打たれたやうに、必ず二人の交情に附纏つた。

去年以來、友人は參禪をはじめてゐた。隻手の聲を松蔭の扉(トビラ)から、一心不亂に敲き出さうとして、密々の工夫を凝らしてゐた。私は健氣だと思つた。『とう〳〵自力で捉まへたナ。』と思つた。同時に、『俺の役目もすんだのだ。』とも思つた。二人の道はそこで左右へ岐れたのだ。手に手をとつて、諸共に參禪の道に進む事は、まだ中々私のベデカアへは出て來さうにもなかつたからだ。のみならず、公案などはいつの間にかそツちのけにして、禪そのものすら、弊履の如くかなぐり棄て去つて、かく最も安價なる、甚だとりとめのない雲水の旅に上つて了つたものだ。恐らく萬がムシロに變(ヘン)化(ゲ)して、疊を叩いて杳然として去り、その行くところさへ知らぬのがオチであらう……

讀經は始まつた。

――佛說阿彌陀經……如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園……いつ聞いても同じ經だ。何度きいても同じ經だ。きいてもきかなくても同じ經だ。あつてもなくても同じ經だ。私にはもうこの經文から、宗教的の價値はもとより、文藝的の、考古學的の、或は音樂的の興味すら、全く感ずる事が出來なくなつて了つてゐた。

土龍のやうな太陽光線を怖ぢ恐れた、いやに陰氣な、幽闇い佛間の奧に、かの內陣と稱して、片腹いたく人間味を回避した、神秘くさげな格子張りの蔭に、古代めかした油皿や蠟燭の薄あかりに、チラチラする塗金の斷面を漾はした、極樂淨土の阿彌陀佛も、緣のきれた私自身の心には、もう何程の功德も莊嚴もなさゝうに窺はれた。

勿論、どこの隅々を探しても、死んだ友人の面目などが殘つてゐさうな筈はなかつた。德川時代の封建制度が、切棄御免の素町人共から、巧にその反抗心をば蕩かし去つた、穩しやかな門跡信仰の、その『美風』をそのまゝに、千番一番に、危機一髮に、動もすれば誤魔化されやすい、善良極まる家族主義者等へ、難なく傳統して來たまでの話だ。その家族主義に對する叛逆なのだ。その叛逆から始まつた道行なのだ。その道行が絕對絕命の三十五年だつたのだ。その絕對

絕命こそ、即ち死んだ友人の面目だつたのだ。さうしてその悲壯な道行とは、三十五年の眞面目とは、こんな法會が、こんなコンベンショナリズムが、何等の關係も存し得ぬ事は、太陽を仰ぐよりもよツぽど明らかだ。

――皆様、どうぞこちらへ………と、所謂燒香なるものが、一トわたりすみかけると、誰やらが號令をかけた。と、今までジツと辛抱して、その愚鈍な讀經の聲をば、固唾を呑むやうな恰好をして、神妙にきかされてゐた人々は、ホツと夢から覺めたやうに、責任解除の寬ろぎを感じたやうに、眉を開いてぞろ〳〵と佛間を出た。さうして比較的明るい書院のそこ爰へ、落葉のやうに、サラサラと一ト塊りづつ散亂した。

サラサラと！　さうだ。さういふ音もした筈だ。見渡すと、大抵みな折目正しい仙臺平の袴を穿いてゐたからだ。さうして洋服でない人々は、殆んど一人殘らずと云つてもいゝ、一樣に端然と黑羽二重の紋付羽織に身をかためてゐたものだ。中に例外の無作法者も、一人二人はあつたけれど、たとへ小倉でも、擊劍用然としてゐても、袴だけは克明にくゝりつけてゐた。從つて、よごれくさつた大島の着流し一張羅で、場所柄をも辨へず、臆面もなく岡々しく、大胡座などかいてゐる人間は、私を除いて誰もなかつた。

が、さすがに自分ながら、あんまりいゝ心持もしなかつたと見えて、『別に異を立てるつもりではない。洋服も禮服も持合はさぬまでなんだ。また胡座をかいてゐるのは、一分と正座してゐられぬほど、この通り肥つてゐるからなんだ。』などゝ、心の中で言譯がましく呟いたりしてゐた。さうして死んだ友人の父なる人に、丁重を極めた挨拶に及ばれた時などは、變に恐縮して、

――こんな失禮な風體をも顧りみず………なんかんと、白々しい言辭を發したりした。

そのうちに酒が出た。オヤと思ふ間に、引續いて吸物椀だの、燒鳥の小鉢だの、壽司まで皿に盛られて、順々に現はれた。肉食妻帶の淨土宗には、坊主さへ優婆塞だから、無論水淨火淨の面倒はなかつたが、又人知れず障子の棧の埃をつまんで、嫌味たらしく珍饌嘉肴へ彈じき落す似而非持戒にも及ばなかつたが、さうして私は原始佛教の信者でも何でもなかつたが、何しろどうも、詰込んだ天金腹がいつぱいなので、義理にも箸はつけられなかつた。が、併し酒だけは

飲んだ。引受け〳〵遠慮なく飲んだ。盃の顏さへ見ると、そこが寺の書院だらうが、四十九日の法會だらうが、そんな見さかひは一擧に超越して、忽ち天下泰平の氣分となり、悠々自適の姿となり、便々と、ダラリと、いつまでゞも飲みつゞけてゐたくなるのだ。困つた性分だ。

死んだ友人の父なる人は、今度は盃を捧げながら、再び私の前へかしこまつた。

――生前に於きましては、忰は特別にあなた樣の御指導を蒙りまして……格別に御厚情を辱うしまして……えゝ逆樣ながら、亡き忰に代りまして……、しきりに何やら云ひはじめた。

――なアに、酒ばかり飲んでゐたんですよ。二人とも飲み出すと止められないんでね……と、私はいゝ心持になつて受けた。

――どうか、これを御緣に、宅へもチヨクチヨクお越し下さいますやうに……えゝ、それからどうぞ、亡き忰の事につきまして、新聞雜誌の紙上へ、充分にお書き下さいまするやう、何分共に、くれ〴〵もお願ひ申上げまする……これ、お銚子を早くこちらさまへ……と、さう云つて、父なる人は忙しさうに向ふへ立つて行つた。

入替つて、弟なる人が酌に來て、矢繼早に注いでくれた。この人も何だか長々と口上を述べてゐたやうだつたが、それはもう耳には入れてゐなかつた。

――や、しばらく！　その後どうだい？　鵠沼には美人はゐないかね？　錢湯のやうにガヤガヤした騷音の中から、さういふ聲が突然きこえたので、私はヒヨイとその聲の方を見た。

五六年顏を見なかつたKが、脊廣など一着して筋向ふに陣取つてゐた。

――何んだ、君か！　鵠沼に美人？　そりやアゐるとも。澤山ゐる。少くとも東京よりや澤山ゐる。

――肺病患者ばかりだらう？

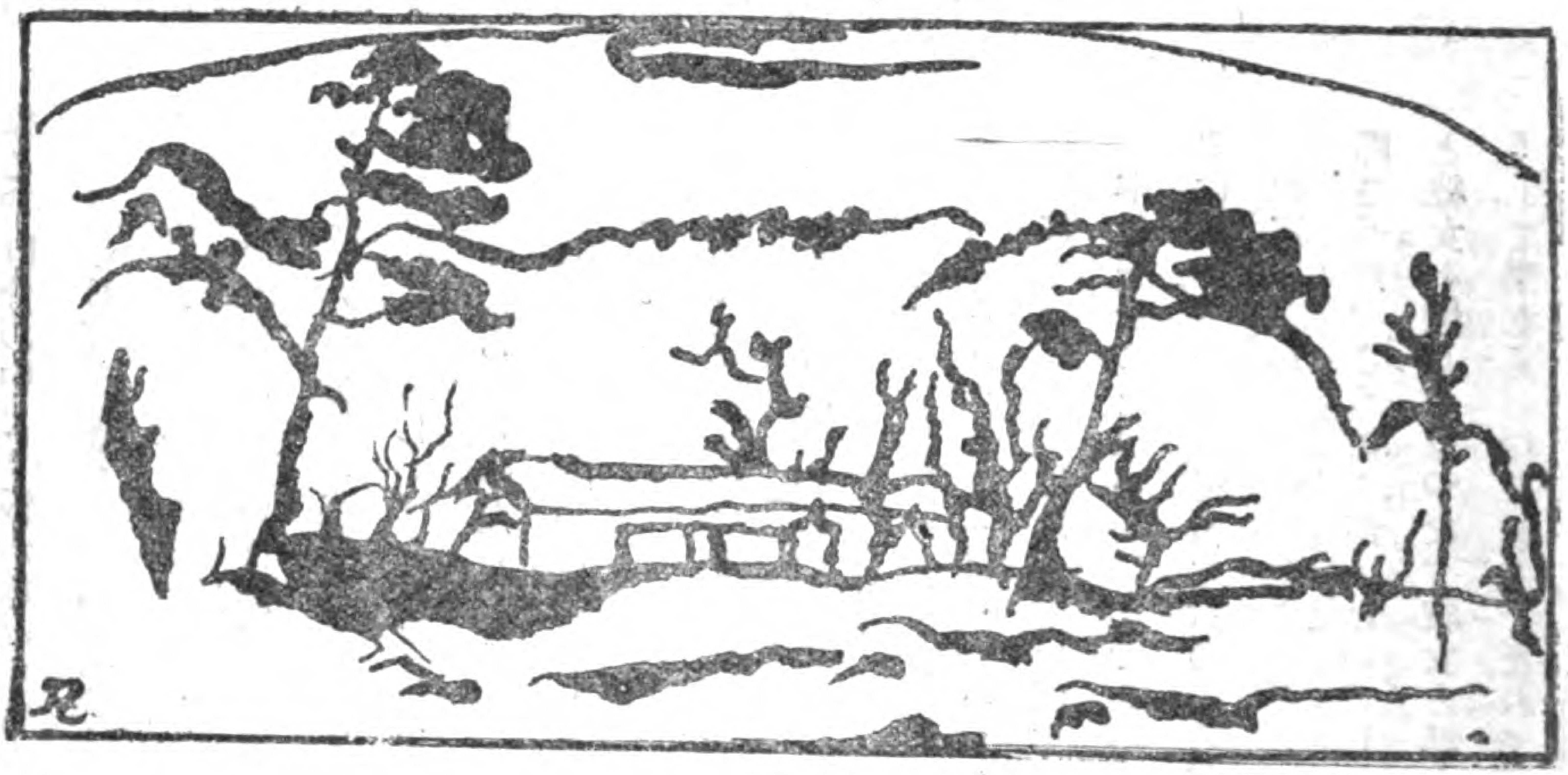
――なアに、肺病はみんな男ばかりだ。

――齋藤美代子に逢つた事があるかい？

――ウン、逢つた。山極道子といふ海千が引張つて來たツけ。

――へえ？　山極道子が鵠沼にゐるのかい？　いつ日本へ歸つたんだらう？　あいつは女天一坊だぜ。氣をつけない

とひどい目に逢ふぞ。
――さうかなア？　見たところは、たゞ薄ツぺらな女にすぎないがなア……
――ところが、あいつにやア、さすがの孫逸仙も手を焼いたさうだからね。
――孫逸仙がお目出度かつたんだらう。
――今、何してるのだい？
――T氏の弟子になつて、小說を書いてるのだそうだ。
――危險千萬な話だなア。
――併し、あの女は小說を書くよりや、妾でもしてる方が、遙かに適任のやうだ。
――そりや、その通りだ。現在は誰の妾か知らん？
――當人の口吻から察すると、何でも緋桃式虛業家の妾らしい。
――からかつてやつたらどうだい？
――我輩か？
――さうサ。
――我輩は孫逸仙ぢやないからナ。
恐らく天に酒星が瞬たいて、ふんだんに地から酒泉でも湧いて、さうして何代變らうとかまはないから、たゞそれ水さへ向けてくれる相手があれば、私はどんなところへでもかく大胡座を据ゑたまゝ、永遠であれ、無窮であれ、天壤と共に極まりなく、それこそさゞれ石が巖となつても驚かずに、この通り泰然自若として、尻の腐るまでかうした輕口を鬪はしつゞけてゐる氣であらう。
――そろ〳〵引上げようぢやないか？　と、隣にゐたYが見かねたやうに促がした。
いつとなくKもゐなくなつてゐた。心づくと、殘つてゐるものは、私の周圍二三人を除いた外、あとはたゞ死んだ友人の家族らしい人々ばかりであつた。
――ウン、行かう。どこへでも行かう。と、私はヒヨロヒヨロと立上つた。酔李白のやうに立上つた。



或る男

武者小路實篤

一一四

彼のその時分（一九〇八年）の日記を見ると、彼女のことと、自分の仕事、生活のことが一番問題になつてゐる。彼女のことはあとでかくとして、仕事についてや生活については彼はこんなことをかいてゐる。

「この調子でゆくと今後「荒野」はずい分ひどい評をうけるだらう。しかし自分を知らぬ人の評だから氣にするのは馬鹿である。人に罵倒されても平氣でゐられるやうにならなければならない。

自分はどうしても行の人とならなければならない。しかしそれは慈善家になるのではない、自分の近しい人の眞の慰藉者になることである。彼女にしてこの仕事を賛成してくれるならば自分は立派にこの仕事をして見せる。自分はこの仕事を完全にして見せる。この仕事の範圍は小であらう。しかしこの仕事を完成すれば、他人を刺戟し、他人をして同じ仕事をするやうにさせることが出來る。かくて自分の仕事を眞似する人が澤山出來る。しかる時自分は小ではない。自分は今後筆がとれないでも失望する必要はない。自分の仕事は愛さへ自分の胸の中にありさへすれば出

來る。自分の中より愛が逃げ去らない限り自分はこの仕事をして見せる。現在自分はその雛型の生活をやつてゐる。志賀はある日僕を賢者だと云つた。心に苦しみを持つてゐる人を慰藉することは自分の得意とする處で、又自分の好きなことだ。」(四月二十一日)

「今日は本の買ひたい日だ、讀みたい日ではなく買ひたい日だ」(二十二日)

「この頃の自分には名譽心は殆んどない。されば人にほめられても嬉しくなく、そしられても悲しくないわけだ。處がほめられると嬉しく、そしられると悲しい。しかしそれは名譽心の仕業ではなく、自分のしたいことの出來る、出來ないの不安からくるのだと思ふ」

「この頃僕等の仲間が皆閉口してゐる。自分の閉口は新しい生涯に入る不安だ。志賀や正親の閉口は新しき生涯に入れぬ不安だ。

　朝正親の處にゆく、別に之と云ふ話もなかつたが氣持がよかつた。今朝自分は自分の小なのに馬鹿に氣がついた。それで馬鹿に人なつかしい氣がしてゐた。それと雨風の日にわざ〱來てくれたと云ふ正親の嬉しい氣とが甘く調和したのだらう」

「マイエルーペンフエイの「現代の宗教」を心地よく讀み終る、近頃になく心地よくよみ終つた。現代の宗教は自己を犧牲にする宗教ではなく、自己を完全にする宗教である。矢張り本をよむのはいゝことである。中でも眞面目な思想家の本を讀むことはいゝことである。感じて知り得ざりし自己を知ることが出來る。……自分は經驗のないのによはる必要はない。公然の秘密を看過する習慣のあることを恐れる」(二十三日)

「德富さんから、荒野をよんだとハガキがくる。その內に「お坊ちやまの作だ」と云ふ意味のことが書いてあつた。實際さうだ、さうにちがいない。しかし自分はお坊ちやんの作と云はれるのが何よりつらい。急に淋しい氣がした。すると彼女を戀しく思つた、彼女と話したく思つた。自分が筆をとつて何事も出來ない。ならば自分は呑氣に生活する。さうして樂しく一生を送る。それで不安を感じるまでは自分の好きなこととしてくらす。しかし自分は德富さんの考と自分

の考の異ることを益々知つた。さうして徳富さんに對して昔ほども親しめないと思つた。さうして淋しく感じた。自分のしたいことは新しい家を新しい基礎の上にたてることだ。徳富さんのしたいことは舊き家をこわしてそこに（同じ基礎の上に）新しい家を立てやうと云ふのだ。今の中年の世の中の悲慘なことを知れる人の考は徳富さんと同じ考へらしい。」（二十八日）

「淋しい、淋しい、淋しい。死なねばならぬ人間、死なねばならぬ人間。自分はこの頃、悲慘な境遇にゐる人のことを思はなくなつた。なるべく見ないやうにしてゐる。自分に憐な人間を助けるだけの力があるだらうか。あるならば憐な人間のことを思はないやうにすることはいゝことだらうか。わるいことである。いゝことでは斷じてない。汝はこの頃たゞ自己のことのみ考へてゐる。さうして安逸を望んでゐる。汝よ〳〵。奮ひたて、汝力なくとも、力限りをつくしたと云ふ事實は汝に大なる力を與へん」（二十九日）

「自分はこの頃又自信がなくなつた。さうして自分は人知れずこの世を去る一人である氣がする。今の自分はそれに安じられる。しかしそれでは自分の仕事は出來ない、自分は餘りに大きな望みをもつてゐる。力不相應の望をもつてゐる。自分はこの望みを捨る時平和な一生が送れる。さうしてさう心に責られないと思ふ。しかしこの望みを捨てない間は自分は苦しまなければならない。而して常に悶えなければならない。」（五月十日）

「自分はこの頃になつてなにか仕事が出來るやうに思つて來た。その仕事は大きい仕事ではないかも知れないが、有益な仕事だ。さうして自分でなければ出來ない仕事だ。それは新しき社會をつくることだ。理想國の小さいモデルをつくることだ」（十九日）

「自分は戀のことを思ふ度に貧しき青年を憐む。戀しく思ふ人があつても二人が食ふあてもなく、子を養ふあてもない人のことを思ふ。さうして自分の幸福すぎるのを恐れる。金なき人、自由なき人を思ふ度に、自分は自分の餘り吞氣なのを憎む。自分は食ふ爲に自己の嫌いなことをする人を憐む。かゝる人の爲に自分の一生を捧げなければならないと思ふ。しかしそれは舊い家を修繕するのではなく、新しき家をたてることだと思ふ」（二十四日）

「何んだか氣分がすぐれない。氣分がすぐれないと元氣がなく、自信がなくなる。昨日の自分も、今朝の自分だが、元氣がまるでちがう。今朝の自分には自分が何者にもなれないやうな氣がする。そのかはり一生を平和にくらせるやうな氣がする。しかしかゝる生活をする時は世の悲惨なる方面を見ないやうにしなければ駄目だ、どうしても自分は今の世に滿足して樂しく一生を送ることの出來ない男だ。

「自分を全く他人として見る時、自分を有爲な人間と思ふ。しかし自分を自分として見る時には不安だ。死や病氣は別として有爲な人間とは思へない。自分はつくられた通りに動く人間である。他力的の人間だ。腦が自づと働いてくれるまでは何にもかけない。腦が偉大なことを考へてくれ、或は感じてくれ、さうして書けと命じてくれなければ偉大なものは到底かけない。しかも自分の腦が自づと偉大なことを考へ或は感じてくれるかどうかは疑問だ。又その時、その腦の云ふ通り書けるか書けないか疑問だ。十の內一だけ望があるのだ。だから不安だ。」(三十日)

「五時半頃思つた。『自分は小なる〳〵人間である。自分の如きものは死ならうが生きやうが大したことではない。自分はいかなる境遇にゐても不滿足に思ふ價値なき人間だ。自分はいかなる境遇でも滿足して見せる。さうしてその境遇で出來るだけのことをしやう』と、かう思つたら少し元氣になつた。少し安心を得た、なぜだか知らない」(三十一日)

「自分は夏目さんや、獨歩氏や、二葉亭氏や藤村氏や花袋氏のやうになつても滿足することは出來ない。これ等の人の如く自分はなれるとすら思はないが、なつた所がなんでもないと思ふ。自分はトルストイの如くならうが、イブセンの如くならうが、一寸嬉しい位いにきり思ふまい。自分のしたいと思ふ仕事は遙かに大きいのだから。しかし一方に於ては無名の人、平凡の人として一生を送らうとも、さう閉口しない。だから自分はさうあくそくしないでゐられるのだ」

「トルストイの處女作は二十四才だ。ツルゲネーフは二十五才だ。僕はまだ二十三才だ。(共西洋風で)あせる必要はないが、一つや二つ歳をとつたからとて急に偉くもなるまい。自分はたゞつくられたゞけのことをしやう。それでいゝわけだ」(六月一日)

「夕食後正親の處にゆく、正親は『世間知らずを巧いと思つた』と云つたら少し元氣になる。八時近く志賀が僕の處で

すかされて正親の處にくる。九時過ぎ正親の弟が歸つて來た。輔仁會雜誌の校正の內から『荒野に就て』の書いてあるのを正親の弟が持つて來た。志賀がよむ。餘りほめてあるので、恥かしいやうで嬉しい、寒くなつた。今迄羽織をぬいでゐたが羽織を着た、それでも寒い。讀み終つたらなほつた。なほ元氣になる。歸りに思つた。自分は多くの人に或者になると期待されてゐる。しかるに自分はどうだ。なまじつか期待されゝるだけ苦しい。自分でも或者になれるやうな氣もする。今は七分三分の處だ。一番いけない處だ」（六月六日）

（こゝに「世間知らず」とあるのはどんな作か今の彼は覺えてゐない。原稿も發表する氣にもなれないものだつたので、なくしてしまつた）

彼は一方到底滿足させることの出來ない、大なる望みをもつてゐる、しかし他方ごく僅かなことに滿足出來る素質を持つてゐる。こゝに彼の努力主義と、呑氣主義が、彼の內に同じく巢喰つてゐられる元因がある。そして彼の一生にある安體さを與へてゐる。

彼は兩刀つかいである。彼には進むことも退くことも、あせることも、同時に出來る。かくて彼は自己の生命を、疲らさずに生長させることが出來る。

彼はあきらめると同時に立ち上る、だが進む時には同時に倒れた時の用意が出來てゐる。倒れても起き上れる用意が出來てゐる。この世から悲慘な目にあふ人をのこらず救ひたい。之が彼の本願であるが、同時に彼は、何事もすることが出來ずに死んでゆくこともあきらめるやう用意をしてゐる。

一一五

しかし彼は他人のこと許り考へてゐる男ではない。彼が他人の不幸をなくなしたがるのも實は自分の心の平和とよろこびを愛するが故である。自分の言葉で云へば、自己の內にある人類的本能を滿足さしたい爲である。しかし彼は人類的本能許りをもつ男ではない。彼は男である。殊に閑人である。彼の世界には常に一人の女が必要である。彼の日記にはうるさい程、彼女のことがかゝれてゐる。

彼は彼女と結婚したいことを母にうちあけ次ぎに叔父にうちあけた。二人は贊成した。そして調べてもらつて彼女の名のたかであること。そして性質がよく、學問も相當に出來ることを知つた。たゞその報告書に、彼女のことを「十人並よりや丶美し」と云ふ意味の ことがかいてあるのが、不服だつた。絶世の美人とでも彼はかいてほしかつたのだらう。彼はそれによつて彼女の若いのにおどろいた。彼は彼女を戀してから足かけ三年になつてゐる。彼が戀し始めた時は彼女が十四五の時だつた。彼女は今十七になつてゐる。一月十四日生れ。

彼はまだ彼女と話したことはない。日記にはこんなことがかいてある。

「今日は行きもかへりも彼女は下を向いてゐた。歸りに彼女は赤い椿をもつてゐた。去年の日記を見たら四月十九日の處に『白椿を胸にあて丶もつ彼女、彼女と白椿』とかいてあつた。今日は四月十八日、今年は閏年、明日は日曜、白と赤と、一寸面白い氣がした」

「彼女は今日も此方を向いた。自分は今迄になく親しさを感じた。不安も感じなければ、恥かしさも感じない。自分の妹と顏を見合せたら、こんな感じがするだらうと思つた。

「歸りの彼女を門に迎へた(?)。彼女と自分とは他人ではないと思ふ。しかし二人とも他人らしくよそおつてゐるのだと思ふ」(二十一日)

「彼女は忘れものをしたのか窓の前の角まで來て急に走つて家に歸り、走つて出て來た」(二十二日)

「彼女の後ろ姿を見て、彼女こそ自分を救ひ得る人だと思つた。それと同時に自分こそ彼女を救ひ得るものだと思つた」(二十三日)

「彼女は笑つてゐた。しかしこつちは見なかつた。彼女の笑つてゐる顏を見る時、自分は彼女を美しいとは云へない」(二十八日)

「彼女は學校へ行かなかつたのだらうとは思つたが、もしかしたらと少し具合がわるいが、窓によつてゐた。すると常に彼女と一緒に學校にゆく人が他の友に窓の前で別れる時、

「H（彼女の姓）さんは今日學校お休みよ」

と云つた氣がした。自分に云つてゐるやうな氣がして氣まりのわるいやうな嬉しいやうな氣がした。

『彼女は病氣か知らん』

こゝまで書いて十分許りしたら彼女が學校から歸つて來た、可笑しい。」（五月十一日）

「彼女通る、此方を一寸見た、顏を眞赤にして誰かに丁寧にお辭儀をした。と思つたら俊子さん（彼の近處の女で彼の從妹の友で彼も二三度話した）にだ。それから又一寸此方を見た。優しい美しい女だと思つた。心も同じく優しく美しき女だと思つた」（二十日）

「この頃自分には彼女と益々親しくなつたやうに感じられる。彼女もさう思つてゐるだらうか」（二十五日）

「彼女は今日心地よく笑つて通つた。此方を一寸見た」（二十六日）

「ゲーテの傳は面白い、ケツチエンとゲーテの關係の處、自分をしてお貞さんとの關係を思ひ出させないではおかない。殊にゲーテの手紙には熱烈なる戀が目に見へるやうにかゝれてゐる。嫉妬に燃える處、和解する處の筆の力、さすがにエルテルを書いた男だけのことがある。刺戟が强すぎてつゞけて數頁は讀めない」（二十七日）

「午後二時十五分過ぎ彼女に逢ふ爲に家を出た。角の郵便函の處をまがつて坂の上に行つたら彼女の姿が見えた。彼女も氣がついたらしい。彼女は目をことさらに反對の方にむけたと思つたら、又此方を見た。ゆきちがふ時は此方を見て居た。二三度目ばたきをした。自分はたゞ逢ふために出たのだが正親の處に行つた」（二十九日）

「四時過ぎから馬鹿に元氣がなくなつた。自分は何にも出來ない人間のやうに思へて仕方がない。たゞ彼女、彼女！彼女が自分を救つてくれ、自分を高きに導いてくれると思ふ。彼女がゐなかつたら、自分は旅行でもしないとたまらない。

早く彼女との關係をきめたい。彼女が自分の妻になることを承知してくれたら、いかに嬉しいだらう」（三十一日）

「今、彼女が通つた。今日はちんちくりんの着物をきてゐた。まぬけな顏してゐた」（六月一日）

「神田へ行かうと出掛けたが、彼女に逢つたらゆきたくなくなつて歸つて來た。彼女は實に清い女だ。清過ぎる女だ。お貞さんに得られぬものが彼女に得られると同時にお貞さんに得られたものが彼女には得られない。彼女は少し清すぎる。若いからかも知れない」(五日)

「彼女は後ろ姿を見送ると、心の底の底までさびしくなる。

彼女は可憐な女である」(八日)

「彼女は今日此方を隨分長い間見てゐた。

淋しい嬉しさを感じた。淡い深い嬉しさを感じた(七時二十分)

しかし今になつて考へれば三秒も見てゐなかつたらう。(十時)」(十一日)

「彼が三輪田女學校の先生から聞く處によると、品性もよく、學問も出來、身體もよく、非難すべき處はないと。母から今朝聞く、嬉し、されど氣まりがわるかつた。

今朝彼女は嬉しさうに笑つて通つた。何時もの彼女に似ず淋しくなかつた」(十七日)

しかし彼は彼女の他に一人の處女の美に瞬間的にひかれたことはあつた。彼はその女についてかうかいてゐる。

「その女は美しい。彼女はまだ蕾に近い。その女は花に近い、自分はその女と夫婦になれる人間ではない。性質があはないらしい。その女には無邪氣な自然らしい處はない。すべての行爲が人工的だ。彼女よりはおとなしい。しかし彼女程自然ではない。彼女は子供らしい處がある、されば自分のあるものは彼女で滿足が出來ない　このあるものはその女を望んでゐる。其女は美しい溫和しい、女らしい女だ。彼女は美しい、溫和しい淋しい子供らしい女だ。しかし自分の心は到底其女とは共鳴し得まい。彼女とは全然共鳴するやうに思はれる　自分の目には彼女の方が多くの缺點を持つてゐると思はれる。

換言すると、自分の如き男はその女に眞價を認められることは出來ない　愛されることは出來ない。彼女には眞價を認められ、愛される望があると思ふ。」

その女は、彼の從妹の友達で、彼の家に一度來た。彼はその前から往來で逢つて知つてゐたが、その時から、その女

の美しさが氣がついた。しかしその女は、世間的な女だと彼は思つてゐる。情熱的な處や、一圖になれない質と思つた。彼女はたよつたもの通りに動くことによろこびを感じられる女のやうに思つた。しかし彼はその女にもう一度心を動かした。そしてその女は彼の世界から全く姿をかくした。しかしその女の名は杉子と云ふので、彼は時々その名を彼の愛する女主人公の名につかつた處を見ると、幾分厚意が殘つてゐるのであらう。

「夕食後、神田に何か面白い本はないかと云つて見たらなかつた。そのゆきしなに堀ばたで其女と其女の母らしい人に逢つた。其女はほゝえんでゐた。今日程その女を美しく思つたことはない。彼女など足元くらいだと思つた。しかし其女は自分の美を自覺してゐる。だから自分は彼女の方が遙かに高いと思ふ」（二十三日）

彼はその後まもなく札幌に（有島）武郎さんをたづねた。

北海道は彼にはなつかしい處である。彼には遠いとは思へない。北海道の小樽にはお貞さんが居るから。しかし彼はお貞さんに逢はなかつた。そして武郎さんのゐた農學校の寄宿舍に一週間許りゐて、歸つた。その歸りのことは、彼のかいた「ペルシヤ人」と云ふ簡單な短篇にかいてゐる。彼は武郎さんに隨分厚意をもつことが出來、札幌の風景も氣に入り、お貞さんも小樽にゐたが、彼女のことがあるので、歸りを急いだ。その後まもなく、兄と母と叔父の相談の結果高島さんにたのんで彼女の家に行つて戴き、結婚の申し込みをした。そして斷られた。彼は日記にかうかいてゐる。

「今朝高島先生が三輪田氏を訪問するわけ（昨夕の話によれば）、その後、彼女の家にゆかれるか知らん。それとも彼女の家には又今度かいづれにしろ近い内にきまる。幸あれよ二人に、二人の幸は何人の幸ぞ。

晝飯後山内（里見）君の處へ行つた。不在、暫く待つてゐたら、田中君と歸つて來た。暫くして志賀が來た。五時前自家より電話がかゝる。「高島先生がいらつしやつた」と。

さうひどくはなかつたが、少しは胸をおどらせながら歸つて來た。歸つて便所へ入つて出てくると母が心配さうに、「高島さんが行つて下さつたら、まだ若いからそんな話はとすぐことわられたさうだ」と少しは不平さうに云はれた。自分は悲しくないことはなかつたが、樂に顏色に顯はされないで居られた。「向ふがさう云ふ考へなら勝手にするが

いゝ」と自分の内の或ものは云つた。

『彼女は知らないのだ』とあるものは云ふ。

『ゆつくりしたつていゝ、その内に他にゆくやうなら勝手にゆけばいゝ。ゆかなかつたらその時又云ひ出せばいゝ』とあるものは云つた。

『すべてを母や兄に任せろ』とあるものは云つた。自分はこのあるものに從つた。

彼女はきつと兄から結婚のことで高島と云ふ人が來たと聞いたらう。その時直ちに僕からと感じたらう。感じないやうならば彼女は僕を愛してゐないのだ。愛してゐないのならば僕は樂に思ひ切つて見せる。

もし僕からも感じたなら、どう思つてゐるだらうと思つた。悲しんでくれるかと思つた。しかしさう痛切には感じまい。よし感じたにしても僕程も感じまいと思つた。

僕は彼女と結婚が出來るとは思はない。しかし出來ないとも思はないしかし出來なかつた處でさうひどく閉口はしないだらうと思つた。もし彼女の口から「妾は貴君の處にゆくのは嫌です」と云はれたなら、自分は「さうですか」と平氣で、否、平氣を裝つて彼女のことを斷念するであらう。自分は彼女の幸福ならんことを祈る。

高島先生に逢つた。自分の室に案内した。先生は六時頃に歸られた。先生にはお氣の毒なことをした。（後六時半）夕食後正親が來た。毎週土曜に一枚以上何か書いて集めやうときめた。八時過ぎ、志賀と山内と園池君が來た。正親は十時頃歸つた。他の人は十一時過まで、賑かだつた」

「昨日はよく眠れた。しかし覺めてゐる間はさすがに淋しい氣がした。彼女との關係は全く絶えたやうに思はれた。しかしするだけのことはしたのだからと云ふ自覺は自分に勇氣を與へた。さうして一滴の涙をもこぼさなかつた。もしこれが彼女の口から斷られたなら、少しは泣いたかも知れない。しかし思ひ切りはいゝ。僕は思つた程よわらないで彼女のことを思ひ切つたらう。

自分は彼女の兄の言葉を色々に解して見た。

彼女の兄には彼女を嫁したい人があるのだ、これが一つ。

餘り不意だつたので、驚いたのだ。それに本當にまだ彼女が若いからそんな話はあとでいゝと思つた。これが一つ。

見も知らぬ人から妻にくれと云はれたので、餘り亂暴なのを怒つた。これが一つ。

まだ他に色々の理由があらう。自分は第一の理由でないかと思ふ。さうしてそれを一番恐れる。

恐く兄がまだ若いから斷つた裏に彼女の意志はあるまい。

自分にはどうしても彼女が自分を嫌つてゐるとは思はれないが。もとより非常に愛してゐるとは思はれないが、どつちかと云ふと愛してゐる方だと信じてゐる。

もし彼女が自分を愛してゐないならば、自分は樂に思ひ切つて見せる。しかし思ひ切つたら彼女が愛してゐたとなつては困る。自分はどう考へても彼女程自分の妻にむく人はこの世に居ないと思ふ。

彼女より自分の心を引つける人はあるだらう。しかし彼女程、自分のやうな仕事をする者に適した妻はないと思ふ。

自分は彼女を意志の强い女だとは思はない。兄や親の云ふことを聞いて好まぬ人の處へでもゆく人だと思ふ。

さう思ふ時自分は淋しく涙ぐまれる。しかし泣きはしなかつた。(泣きさうにはなつたが)。

自分と彼女との關係は今後どうなるか到底わからない。しかしどうならうとも自分は自分の仕事に進んで見せる。少くともそれによつて時間を空費しないで見せる。しか　彼女の未來に幸あれよ。

自分の未來にも。」（七月十八日）

（二十二日に彼の兄は上海にたつた。一人の病身の赤坊と妻を東京において、この赤坊は兄が上海にゐる内に死んだ。芳子と云ふ名だつた。芳子の短い九ケ月許りの一生を彼は「芳子」と云ふ題でかいてゐる。恐らく彼の全集にのる價値をもつ最初の作であらう）

二十四日の日記に彼は彼女についてかうかいてゐる。

「今はさうでもないが、今朝方、彼女をなつかしく思つた」

彼はこの淋しい最中に勇氣を與へるために回覧雜誌をつくることにきめたのだ。前號に「白樺」といふ題をつけたとあるのはまちがいだつた。「白樺」は第二期の回覧雜誌につけた名だつた。二十五日の日記に彼はかうかいてゐる。

「午前、正親が來た。先日正親が來た時（彼女の家からことわられた日の晩）、毎週土曜に皆のかいたものをあつめて「暴矢」（ボヤ〳〵してゐたからつけた名）と云ふ回覧雜誌をつくらうときめた。一枚以上は皆（四人）かゝなければいけないのだ。それが今日出來た、初號だけに七十一頁の大雜誌（？）になつた」

「暴矢」と云ふ宛字はその後木下の反對があつて「望野」となほされた。

八月二日の日記に彼は「今日で十一日、彼女の姿を見ず、どうしてゐるだらう」とかいてゐる。そして同三日に、

「彼女は窓の前を通つた。こつちを見た眞白な顏をして、彼女の顏を見てから又強く親しく感じた。

五日には

「夕食後彼女通る。彼女の姿が見へなくなる少し前に彼女は不意に首をひつこめた。なんだか輕蔑されたやうにも嬉しくも感じた」とかいてゐる。

（彼女のことをあまりかくのは氣がひけるがついでにかいてしまう。いやな人はとばしてほしい。）

「彼女を今日で一週間許り見ない。彼女と樂しく話が出來ることは今の自分の望み得る最大の幸福である。しかし不幸にして彼女と一言も話すことが出來なくとも自分はなすべきことをして見せる」（二十六日）

「夕食後、電燈をつけて本を讀んでゐたら彼女が通つた。最も通るべき時に通つた。自分は幾度か躊躇したが、思ひ切つて門に出て何氣なく彼女の歸るのを待つてゐた。彼女は僕の姿を見ると同時に下を向いて、氣まりわるさうに通つた。何時もよりもなほ氣まりわるさうだつた。しかし怒つてはゐないらしい。寧ろ淋しさうであつた。僕は彼女が僕から結婚を申し込んだことを知つてゐると信ずる。自分は自分の恥を知らざる行ひを恥ぢた。しかし自分の門に出て待つてゐた眞の意味を彼女は感じてくれたと思ふ。門に出てゐてよかつたと思つた。彼女ももし僕を愛してくれてゐるなら喜んでくれたゞらう。」（二十七日）

「彼女の學校は明日から始まるやうな氣がする。さもなければ今日彼女は姿を見せるわけだと思ふ。自分は彼女の學校の始まることをよろこぶ。第一に毎日見ることが出來ること。第二に今迄のやうに何時姿を見せるかわからなくないから彼女が學校に行つてゐる間、安心して散歩の出來る事。」（二十八日）

「彼女の學校今日から始まるらしい、彼女通る。自分は泣くことの好きな男だ。人から見ると悲觀者に見へる男だ。しかし根本に於て僕程、樂天家は少ないと思ふ。自分はいかに悲しむ時でも、いかに心配する時でも、いかに苦しむ時でも心の奥底では必ず神を讃美する男だと思ふ」（九月五日）

「この頃は彼女をなつかしく思ふ、戀すると云ふ程、熱烈ではない、しかしこの頃の方が抱いて彼女の唇に熱い接吻を與へたい。少くも無邪氣に話がしたい。秋は孤獨では淋しすぎる」（二十二日）

「午後、彼女の歸るのがおそい、窓によつて待つてゐるがおそい、何となく淋しい。

彼女は角をまがつてまもなく姿は見えなくなつた。すると馬鹿に淋しく涙ぐんだ。彼女も涙ぐんでくれたらうと自分は思つた」（十月五日）

「朝八時半の汽車で正親は沼津にゆく、それを送りにゆく、彼女の家を見ると、戸を閉ぢて、白い紙がはつてある。引越したのか。自分は淋しい氣がした、涙ぐんだ。色々のことを考へながら、新橋に歩いてゆく、正親はまだ見へない暫くして來た。

正親を送つてから丸善に行つた。彼女のことを思ふと淋しい。色々の本を見てゐる内に志賀が來た。歸りに一緒に歸つた。志賀は學校に閉口してゐる。同情した。志賀は二時半頃いや／＼學校へ行つた。

自分は彼女が引越したから勉强をして淋しさをまぎらさうと思つた。

それから今日買つて來た。シユラートのホキツトマンの傳をよんだ。

自分は豪健な人間になりたいと思つた」（八日）

「彼女のことを思ふと淋しい。彼女も淋しいだらうと思ふ。この淋しさに打ち克つには自分は一歩進まなければならな

い。自分は進んで見せる」（十日）

彼女が引越してからも彼は彼女の學校のそばに遠慮しながら逢ひに出かけて二度逢へなかつたが三度目に彼は逢ふことが出來た。日記にかうかいてゐる。

「今日も駄目かとUの家の前を通つてやゝゆくと、向ふから三人の女學生がくる。眞中のが彼女らしい、果して彼女だつた。

今更のやうに彼女を美しく淋しく貴く思つた。さうして自分には過ぎた女だと思つた。彼女の夫となる人は最も幸福な人である。自分はこの幸福な人になりたい」（十月十九日）

「あの所を最初の三輪田女學校の人が通つたら、八幡宮を下りやうと思つて待つて居た、三人通つた。急いで下りた。市ケ谷見附にかゝつた時電車が出た。その中に彼女が乘つてしまつたかも知れないと思つた。彼女はいつもおそいから大丈夫だらうと學校の方へ行つた。女學生に十人以上逢つた。そしてその内に彼女はゐなかつた。もう故意には彼女を見にくるのはやめやうと思つた。

自分は今朝鏡に向つて目の下まぶちの太くなつてゐるのを見て、自分はこの頃賤しくなつたやうに思はれた。彼女に逢ふことが出來なくなつてなほ自分は彼女の夫となる資格がないやうに思はれた。彼女は自分よりもつと高尚な男の妻となるべき人間と思つた。しかし果して彼女は自分より高尚な夫を持つだらうか。思ふに彼女程人の妻として立派た人はあるまい。尊き夫を持つとも、賤しき夫を持つとも、必ず妻として模範の人間になつてくれるだらうと思ふ。

自分は彼女に理想的な夫を持たしたく思ふ。しかし更に自分は彼女を自分の妻にしたい、しかしこの頃は絕望してゐる。」「十一月二日）

「久々にて彼女に逢ふ。彼女は快活に笑ひながら下を向いて友と話してゐた。見ると淋しい氣がした。さうして彼女は以前より一層婉になつたやうな氣がした。面やつれがして齢とつたやうな氣がした。

下向いてゐたから僕に氣がつかないのかと心配してゐたら、通り過ぎようとする時、顏をあげてこつちを見た。しか

し以前の如くに大膽には僕の方を見なかつた。僕も大膽に見ることは出來なかつた。さうして涙ぐんだ。彼女に逢つたせいか、あとはずつと氣分がいゝ。」

「昨日に反して今日は元氣がまるでない。本を讀む氣もなければ、書く氣もない。箱に書を入れかへたり、散歩したりこれが一生つゞいたら、自分は生れた甲斐のない人間だ。眞の怠惰者だ。不愉快だ」（十八日）

「又、彼女に逢つた。彼女は下を向いてゐた。さうして少しもこつちを見やうとはしなかつた。さうして微笑んでゐた。常より低くゝ見えた。

自分は彼女と自分の間が益々接近しつゝあるやうに感じる。さうしてもう他人のやうな氣がしない。そのくせ夫婦になることは七分通りむづかしいやうに思つてゐる」（二十六日）

「昨日は馬鹿に彼女をなつかしく思つて淋しかつたせいであらう。寢てゐると急に正氣を失つたやうな氣がした。暫くすると段々正氣づいて來た。見ると自分は何時のまにか彼女の家に來てゐる。さうして彼女の兄にしきりと彼女を自分が愛してゐること、彼女を妻にほしいと云ふことを云つてゐる。彼女の兄は「まだ若いから」とかなんとか云つて承知しない。

その室の隅のふとんの中で少女が泣いてゐた。自分はそれを彼女だと思つてゐた。目がさめてからなんだか二人は一緒になれる運命を持つてゐないやうな氣がして淋しかつた。

三日前からの風邪氣まだ去らず。鼻がいたい。」（十二月六日）

彼の日記は其處で終つてゐる。

一一六、

同じ年の十月三日に彼は志賀や木下にさそはれて本郷の中央會堂に催眠術を見に行つた。それは大學の心理學の實驗の爲めに行はれたので、七時頃から始つた。

彼は學校をやめてからあまり人ごみに出たことはなかつた。彼は術者が三四人の子供に催眠術をかけて、水をのまし

て、砂糖水だと云つたり、唐辛の水だと云つたりした。砂糖だと云はれるといかにもうれしさうにのむ。唐辛の水だと云ふと辛がつて大さわぎをする。皆笑ふ。彼は一寸いやな氣がした。そのあとで、ぬい針を子供達の頬にさして見せた子供達は平氣でゐたが、見てはならないものを見せられた氣がした。彼は一種舟醉のやうな胸のむかつきを覺えた。つゞいて四五人の學生がためしに壇へ登つて行つた。皆笑つた。彼も笑はうとしたが、少しも可笑しくなかつた。その內に冷汗が彼の額に出て來た。だん／＼氣が遠くなりさうになつた。このまゝ居ては大變と思つた。其處で彼は隣りにゐる志賀に氣分がわるいと云つた。志賀は彼の顏を見るとびつくりした。外に出やうと云つた

二人は二階で見てゐたので音をなるべくさせないやうに階段をおりた。彼は段々あたりがくらくなつた。始めの階段をおりた時はまだ自分であるけた。しかし二番目の階段をおりた時は、正氣を段々失なふのがわかつた。

志賀があわて切つて「しつかり、しつかり」と云ふのが遠くから聞えてくる。そのあわて方が只事でないので、彼はこのまゝ自分は死んでゆくのではないかと思つた。死んだ時の母の嘆きを思つたが、頭がぼんやりしてゐるので、あまり強くは感じなかつた。

階段をおり切つた時はもう何處と云ふこともうわからなくなつた。たゞ倒れたかつた。そしてとう／＼土間の上に彼は倒れた。

少し正氣づくと、志賀が何か大きな聲で鐵の柵の向ふに集つてゐる人に聲かけてゐる。助けをたのんでゐるらしかつた。しかし誰もなかへ入らうとはしなかつた。彼は苦痛も感じなかつた。恥かしいと云ふ感じもなかつた。自分の土間の上にたほれてゐることも、見られてゐることもすべて夢よりもなほぼんやりしてゐた。その內に、少し氣がはつきりして來た。志賀の肩によりかゝつて立つた。そして志賀によりかゝりながら、電車道をよこ切つた。そして向ひの店へ行つた。志賀は大きな聲を出して病院のあり場所を聞いた。そして彼は又志賀によりかゝりながら、病院の方へ行つた。途中で彼は段々はつきりしてきた。志賀のふるえてゐるのが彼は感じた、病院についたら志賀はあわてゝとんきよな聲を出して聞いた。

「もし〳〵こちらは病院ですか」。中々出て來ないので志賀は益々大きな聲を出す。やつと出て來た。

「一寸門を開けて下さい」

「わきの勝手口からお入り下さい」

しかしふるえて、あわてゝゐる志賀は中々戸を開けることが出來ない。反つて彼に敎へられてあけた。

彼は志賀が心の底から心配してくれたことを感謝したい氣になつてゐた。醫者にやつと見て貰つたら腦貧血だつたことがわかつた。二人は安心して大笑ひした。

志賀は二人乘りの車にのつて歸らうと云つたが彼は「もういゝ、風邪ひくと馬鹿げてゐるから歩いて歸らう」と云つたそして二人は、びつくりしたことや、本當に彼が死ぬかと思つたことなぞ話して大笑ひしながら歩いた。へんに興奮してゐた。死なゝいでよかつたと二人は思つた。そして心からうれしかつた。

九時過ぎに木戸も彼の家に氣にしてやつて來た。三人は興奮して話した。

死ぬと云ふものがこんな風なものなら、大したことはないと彼は思つた。そして彼は志賀の友情を今更のやうに信用した。

一一七

彼等四人は益々よくゆきゝした。

その上、だん〳〵彼は學習院のより若い、文學好きの仲間と知りあいになつた。志賀が有島生馬と仲のいゝ友達だつたので、生馬は佛蘭西に行つてゐたが、その弟の里見をよく知つてゐた、そして里見を通して同級の園池、兒島達を知つた。又志賀は柳や郡を知つてゐた。それ等が彼の友達になつた。

そして集るとは文壇の話、西洋の天才の話なぞを盛んにした。そして見聞を廣め、勇氣を得、反省や、會得の上にいろ〳〵得をした。彼の文壇の門出にあたつて、よき友をもつことが出來たことは彼にとつて大なる幸福であつた。

一一八

翌年、彼が二十五になつた時、彼等の仲間には三つの回覽雜誌があつた。彼等四人の回覽雜誌は今度は白樺と名づけられてゐた。里見、園池達は麥と云ふ雜誌を出し、柳と郡は中野の桃園で出すと云ふので桃園となづけた雜誌をつくつてゐた。それ等はお互に見せあい、批評しあい、そして訪ねたり、訪ねられたりした。かくて彼等十人あまりは仲のいゝ文藝好きの仲間をつくつた。

外國人のものが多くよまれたが日本人では夏目さんが皆に愛された。藤村好き、獨歩好き、白鳥好きなぞもゐた。荷風がその時分歸國して華々しくなつた。彼等もよろこんでよんだ。その時分から彼等の仲間は道樂するものと、しないものゝ二つに別れかけた。

志賀が始めて遊んだことを彼にうちあけた時、彼がいやな顏したことは志賀には意表外だつた。彼等は思想的にはいつのまにか、肉をも肯定する方に傾いてゐたから。

彼等は忠君愛國を超越してゐた。金持を嫌ひ、親の壓制を蔑視し、自由と仕事にあこがれた。しかし彼等は食へる仕事をもつてゐなかつた。彼等は遠慮なく大膽なことを云ひ、大聲を出して話しあつた。志賀の室から見へる向側の女中達は彼等のことを（氣違ひさん）と云つてゐた。

彼は彼女のことゝ仕事のこと、讀んだものゝことをあたりかまはずしやべつた。他人にきかれることなぞは頭にをいてゐなかつた。しかし世間を何となく恐れた。

彼はその氣持を「なまぬるい室」と題してかいたことがある。

「なまぬるい室に青年がゐる、

外は風が吹いてゐる、と青年は思つてゐる。

この風にふれる時、なまぬるい室に育つた自分は縮み上つてしまふ、と青年は思つてゐる。

青年はなまぬるい事の大きらいな男だ。しかし風にふれるのがこわい。

出やう／＼と思ふが、風にふれることを思ふと、もう少ししてからでいゝと思ふ。

「この頃青年は自分の心のなまぬるくなつて來たのに氣がついた、この自覺は青年には耐え難いものだつた。しかし風がこわい。

さうして青年は今だに不安にうたれながらなまぬるい室に生活してゐる。さうしてなまぬるい青年になりつゝある。」

彼は之からとび出したいと思つた。そしてその方法を考へた。それは矢張り雜誌を出すことより他にいゝ考へは浮ばなかつた。

其處で彼は又雜誌熱が出た。彼は始め志賀に話した。志賀は「君がやるなら出來るだけ助けはするが」と云つた。正親町も以前程乘氣はなかつた。反つて若い人々が乘氣になつたそして段々話がはこんで行つた。同級の細川も乘氣になつた。札幌にゐる武郎さんも贊成した。それで十四人程仲間が出來た。其處で相談の結果、毎月四圓づゝ皆が出すことにした。そして一ケ年の間、金と原稿とをためて出すことにきめた。

題は何とつけやうと又皆あつまつて相談した。いろいろ意見があつて定まらなかつた。投票できめた處が三票か、四票が最高點で白樺は二點入つたか、入らなかつたかだ、其處で最高點を得たものを、つけることに一先きめた、しかしそれは多くの人にとつてはあまり氣のすゝまないものであつた、彼はもうその名を忘れてゐる。そして當時、まだ沼津にゐた正親町にその名を報告した時、正親町からその名に反對して來て白樺と云ふ名でなければ、自分は雜誌をやる仲間からぬけると云つて來た。

彼はその手紙を見てよろこんだ。そして正親町を失なつてまでその名に執着する人はあるまい、又その名でなければ仲間からぬけると云ふ程、執着強い人もあるまい、名はどうでもいゝだらう。正親町にぬけてもらうことは出來ない。から彼は云つて「白樺」と名づけることにきめるやう皆を說いた。不服さうな人もあつたが正親町をぬかしてもよいと云ふ人はない。それで白樺と云ふ名にきまつた。そして始め不服な人々はあとでこの名によろこびを感じた。



歌麿

高橋誠

一

一九は歌麿の姿を見ると小走りに奥から走り出た。

「あんまりおそいからまた繪でも描いてゐて約束のことなぞ忘れて了つてゐるのかと思つてた。」

「そうか。そんなに待つてゐたのか。暑い盛りから出掛けるのもと思つて、見合はしてゐたのだつた。」

日本橋の繪本双紙問屋蔦屋の台所内は、今日の藪入を店に殘つてゐる者は、六拾近い飯焚の重吉爺さんと、下働らきのお直婆さん以外には一人も外には居なかつた。家が市中や近在にある者は皆ゆうべから歸つていつてゐたし、家や知人のない者も朝から皆淺草あたりへ出掛けてゐた。

「歌麿さん。――一九さんと一緒にお出掛なさるのかい。用心なさいよ。ふところを當てにされると飛んだ眼に合ふからね。」

重吉爺さんがにこ〳〵し乍らさう云つた。

「大丈夫だよ。今日は持つてるんだ。おい、これだい。」

一九はすばやく懷ろから巾着を出して振つて見せて、そしてまたそれを急に懷ろ

へ擲ち込んだ。「はつはつは。」

巾着の中では確かにがちやり／＼と音がしてゐた。「去年も『爺さん。淺草へ連れていつて上げやう。』と云つて淺草へ連れ出し乍ら、汁粉屋へひつぱり込んでおいて歸り際になつてから『勘定の金を落した。』なぞと云つてこの俺にとう／＼金を出させるんだもの。」

「おいお止しよ。爺さん。あれはもうすつかり濟んでる筈ぢやなかつたか。」

「うん。それはそうだけれど……。」

爺さんは強ひても追及はしないで笑つてゐる。

お直婆さんは火鉢のそばに坐つて、一服やり乍らきいてゐたが、

「ほんとに一九さんの呑氣にはあきれるよ。」

一九は嬉しそうに又た巾着を出して振つて見せた。そして爺さんには背中を向けて、お直婆さんと顔を見合せ乍らひよいと舌を出してみせた。お直婆さんは人のいゝ笑ひ顔をし乍ら、爺さんの方をちらと見てそして又た素知らぬ顔をしてすましてゐた。四五年前に二人しかない子供の總領に死なれて、今ではたつた一人の娘しか持たないこの婆さんは、淋しがつて一九を自分の子供のやうに可愛がつてゐた。巾着の中の金はゆうべ一九がお直婆さんからそつと借りたものである。

「あ、忘れものをしてゐた。」

一九はすた／＼と奥へ這入つていつた。歌麿はとり殘されてぼんやり台所の入口のところで待つてゐた。

「道やは居ないの。」

さら／＼と衣ずれの音がして蔦屋の娘お絹の姿が障子のところへ現はれた。

歌麿ははつとした。何故か急に顔が赤くなるやうな氣がした。

「あ、居ないの。爺やと婆やと……。」

そして入口を見乍らそこに歌麿の姿を見出すと、きまり悪氣にまた奥へ這入つていつた。黒い漆を塗つた腰の高い障子のかげから、女の黒髪と黒い眸と、長い振袖のくれなゐと、鹿の子絞りの帯とが今し方ひよいと覗いてゐたあの情景を歌麿は頭の中で尚も見つゞけてゐた。

一九がその障子のかげに再び姿を現はして、長い廊下を息せきやつてきたあとの輕い吐息をついた時、歌麿はまたもとの自分に立ち返つた。

「さあ行からか。」

一九はもう下駄を履いてゐた。奥へ這入つてとつてきた扇子でもつてぽんと、つる〳〵な青い頭を一つたゝいた拍子に、彼の足は下駄を履き、彼の顏は後ろを向いてゐた。

「爺さん。婆さん。お留守居番役は何分ともに宜しく。」

歌麿の顏を見て得意らしく一九はそり返つた。

外へ出ると四時過ぎの眞夏の日さしが暑かつた。眩しさうに光を見廻はして「暑いな。」と云ひ乍ら一九は頭の上に扇子をかざした。

「去年重吉爺さんをひつぱつて淺草へ行つたんだ。あの爺さんのケチなのには平常から困つてゐるのだ。今日だつて外へ出ると金がいるものだから外へ出ないで内でぢつとしてゐる。――それでね。一遍あの爺さんをびつくりさせてやる積りにしてゐたものだから、汁粉屋を奢る事にして店へ這入つていつた。勘定になつて金を持てゐないと云つた時の爺さんの周章てさ加減つたらなかつたよ。」

一九は得意さうに笑つた。歌麿は默つてきいてゐる。

「しかし、今日は大丈夫だよ。ゆふべお直婆さんから借りて置いたから。何しろお直婆さんは、それ、君にも婆さんがいつもよく話すだらう、あの吉原に出てゐる娘の花魁の話さへきいてやれば喜ぶからね。よつぽど娘の花魁が得意らしいよ。」

「うん丸木屋とか云つてたね。」

歌麿はまだ行つた事のない吉原の事を思ふと、發作的に力强い元氣な聲がでてくるのを覺えた。

「だから金を借りる時にはいつでもあの娘のことを訊いてやる事にしてゐる。」

歌麿の頭の中ではまたぐる／＼と働らき出すものがあつた。腰の高い障子の影から姿を現はした女があつた。朦朧としてその女が意識の奥で見えかくれつするかと思ふと、お直婆さんの娘らしい花魁が浮んできた。

「一遍いつて見やうか。そして歸つてから婆さんを驚かしてやらうか。」

一九は元氣な聲で尙もつけ加えた。

「婆さんからの使だと云つて丸木屋の……。」

また扇子を頭から下ろして、かなめをちゞめて、一九はぽんと自分の頭を一つたゝいてみせた。

赤い提灯が百も二百もポーつと兩側にぶら下つてゐる。歌麿は白晝の町の遠くを見透した。その白晝の町と重り合つて、丁度厚紙の裏打した裏にあたる部分のところへ赤い提灯の百も二百もを彼は感じたのである。厚紙がだん／＼薄くなつて白晝の町が消えて裏の提灯ばかりとなつた時歌麿は絵畫三昧の境地をふといつの間にか味つてゐた。

一九は一九で何か思つてゐる。歌麿は歌麿で何か思つてゐる。一九の心の中では一直線に「婆さんを驚ろかしてやらう。」今の考が先きを急いで進んでいつた。歌麿の心の中では、そふした「行爲」を想ひ見ると同時に、それに加はつていろ／＼のものが幻として、もつれ／＼てその中へ這入つてきた。でも二人とも落ち付いた心持を心の底の方では感じ合つてゐた。

「馬琴先生がきのふ店へやつてきた。そして奥の坐敷で主人と何か暫らく話してゐた。」

一九は心の內から今の考をひき離して、何を思つたかとんな事を云つた。

「三馬さんや、春水さんは此頃見えないの。」

歌麿は馬琴には興味が少かつた。丁度自分が此頃土佐派の畫風に漸く倦いてきたのと同じやうに、自分は馬琴にも漸

く倦いてきたと思ふ。

「あゝ、時々見える。俺はあの馬琴先生の鹿爪らしいのには何時でも困つちまふ。」

「俺だつて三馬さんや春水さんの方が好きだよ。俺もあの春水さんの文を繪でゆきたいと思ふ事がある。」

一九はしんみりと何か考へる風をした。恐らく三馬の浮世風呂のことでも思つてゐるのではあるまいか。蔦屋の店で「どうさ引き」をして毎日暮す。明礬水を刷毛でひく毎日の仕事にも可哀さうに一九はきつと、倦いてきたに違ひない。此男こそ浮世風呂のやうなものを書かしたらいゝのにと歌麿は思つてゐる。

突然一九は手を打つて「あつはゝゝ。」と笑つた。

歌麿は急に自分の畫才を一九から嘲られたやうに感じて一種の恐怖と不安とでひやりとした。そして一九の方を恐る恐る向いてみた。土佐派の繪で春水の文が描けるかと一九が嘲つたのであるまいか。

「あゝ、そうだ。うん、そうだ。」

一九は手を打つておどり上つて喜んでゐる。歌麿はそれを見てほつと安心した。

「一九先生また何か考へついてゐる。」

歌麿はそれから一九といろ〳〵な話をし乍ら歩いた。蔦屋へ來る文人達の事やら、商賣の事なども訊いたが、しかしあのお絹の事丈けは妙に訊く事ができなかつた。

淺草へついて歌麿たちは觀音堂を拜んでからすぐに裏へ廻つた。そこには鳥山石燕が役者の中村喜代三郎に似せて描いた近頃評判の似顏の扁額が奉納してある筈であつた。歌麿は此の扁額を見るのが云はゞ目的で今日はわざ〳〵神田久右ヱ門町の寓居から一九を誘つてやつてきたのである。

繪馬堂を見上げた時、歌麿の眼にはぢきに石燕の扁額が眼についた。顏の曲線が如何にもなだらかに、もの柔かく描けてゐる。彩色の繪の具が心には痛い程、そのくせ眼にはもの柔かい程の感じを出してゐる。歌麿は在來の繪の世界とは異つた世界をふと感じさせられたやうに思つた。

「評判ほどのものではありませんな。」

白髯の老人が歌麿たちの傍でこれもやつぱり繪を眺めて居た。

「第一俗惡ですな。」

胡摩鹽の老人がそれに答へた。

「畫法に協つてませんな。筆の省いていゝところを省かないで、省かないでいゝところを省いてゐる。それにあゝ云ふ鼻や眼の描きやうと云ふものは今迄の畫の型にはありませんしな。」

白髯は切りに畫風のことを云ふ。

「それにあんな俗惡な色彩は好もしくないですな。濃淡の調和も破れてゐるし畫が一體に荒んでゐる。氣韻と云つたやうなものが全く欠けてゐる。」

胡摩鹽は氣韻と雅致とを說いてゐる。

町家の丁稚と主人らしい者とがこれもやはり繪を見上げ乍ら小さな聲で遠慮するかのやうに話してゐる。

「何だか妙な描きぶりだな。しかしよく似てるぢやないか。うちのなくなつた爺さんの繪もこんな風にして描いて貰つておくとよかつた。」

「そうで御座りますね。今迄はこんな似顔繪と云ふやうなものは御座りませんでしたからね。」

「そうだ。しかし皆が誰も彼もお賴みするとなると、石燕さんも大した金もうけだ。」

町家の主人らしい事を云つてゐる。

白髯と胡摩鹽とが立ち去りぎはに

「どうも石燕と云ふ奴は異端ですな。我々畫かき仲間にはとても入れてやる譯には參りません。墮落した畫風が流行つてきてあんな畫を眞似る者が出てくると追々氣韻や雅致が畫からなくなつて了ふ。畫道のために惜い事です。しかし俗におもねる畫を描いて異端の道に落ちてゆく石燕も氣の毒ですな。折角の腕を持ち乍ら……」と憤慨して行つた。その

あとでどこかの武家の娘らしい者が母らしい人と共に下僕を連れて觀音堂にお參りしてからこちらへ廻つてきた。見上げ乍ら

「お母さま。これがこないだの役者なの。」

「あゝ。」

そして又すぐに向ふへ立ち去つて了つた。武家の娘を見送つてから歌麿は、も一度仰いで見た。そこでは凡てがもの柔かく感じられた。剛ばつた型と云ふものがなかつた。凡てが自由である。その自由が動いてゐる。拘束さるゝ事なしに動いてゐる。その自由が舊い型にはまつた繪の見方からすれば、成程あの老人たちの眼にも映つたやうに雜然とした無秩序にも、拘束のない無規律にも感じられるであらう。時として俗惡な氣持を感じさせるかも知れない。しかし夫れがために、一層よくほんとうの人間の感じが現はれて出でゝきてゐる。親しみ易さが感じられてきてゐる。歌麿の眼にはどこ迄も生きた人間が自分をさそつてゐるやうな氣持が感じられる。一九も「喜三郎に生き寫しだ。」と云つて感心して眺めてゐる。歌麿は木の香の匂ひそうなその額を仰ぎ乍ら墨痕鮮かな筆の痕と、如何にも快い色彩とに見とれてゐた。

「虚勢を張つてみたつて駄目だからね。」

そう云つて此繪は自分の弱さをあらはしてゐるかのやうである。「自然」そのもの丶内に見える弱さをそのまゝに描き出してゐる。繪そのもの丶内にそうした弱さが痛々しい迄によくあらはれ出てゐる。柔かな線が夫れを語つてゐる。豐かな色彩がそして觀者に訴へてゐる。土佐派の畫の中には自然のやさしさは出てゐた。しかし夫れが冷く靜止してゐた。自分の弱さを感じさせない。この畫に描かれた眼は怨や、憎みや、喜びや、哀れみやを表す人間の眼として描かれてある。冷い表情のない眼ではない。憎しみや、怨みや、侮りやを時としてはあらはす生きた眼として描かれてある。しかしこれが人間なのだから。そう云つて詫びてゐるかのやうである。觀者の心の中に在る人間的な要素を皆とり入れて凡てを繪の上に投げかけて、そして夫れを見せてゐるかのやうである。弱々しさに反つて力がある。親しみがある。痩せ我慢をした畫ではない。今迄學んだり見たりしてきた繪とは違ふ。歌麿は胸もとをどやされたやうに思つた。

歌麿は焦躁の心持を感じ始めた。ぢつとして見て居るに堪えない。何かしないでこのまゝにしては居られない。心の内で何かしら切りに動くものを感じる。歌麿はこれから一九が如何する積りか聞いて見たかつた。描きたい。現したい。もく／＼としたものが内で動いてゐる。途方に暮れた時、運命のなすがまゝに任せてずる／＼に曳かれてゆくのが人の心の常である。歌麿はどうしていゝか分らなかつた。そして一九のなすがまゝにならうと思ひはじめてゐる。燈籠に灯がついて、仲店の店々の提灯に灯がついて、奥山では拍子木を叩く音、人を喚ぶ聲が激しくなつてきた。

打水をした觀音堂の前の敷石を歩いて、夕暮の氣がもや／＼と觀音堂の内部を暗で以て深く抉り込んでゆくのを見乍ら歌麿はまた吉原風俗のことを想つた。急に輕やかな氣分を感じた。眼の前がぼうつと少し明るんできたやうな心持である。とまた忙しいやうな心持もその間を流れ這入つてくるやうにも感じられる。涼しい風が汗ばんだ肌を吹いて過ぎる。

「一九さん。丸木屋へいつてみるの。」

歌麿は訊いて見た。始めは吉原へいつてみるかと云はふと思つたが思ひ返してまた丸木屋と云つた。一九はしかし夫れには答えないで立ち止つたまゝ、燈籠の蔭で子供たちが線香花火をぱち／＼やつてゐるのを見てゐる。美しい星くづが夕暮の闇を蹴とばして、赤く黄に燈籠のかげの空間に散らばつては消えるのを見てゐる。

「面白いな。一つ花火線香を買つて來やう。歌麿さんすまないけれど一寸待つて居てお呉れでないか。」

と云ふかと思ふと一九は暗の中へ走り去つてしまつた。歌麿は燈籠のかげで長い間子供たちの花火線香を見てゐた。一心に見てゐた。我を忘れて見てゐた。がしかしいくら待つてゐても一九はとう／＼歸つては來なかつた。

その筈である。一九は單獨行動をとる事にきめたのであつた。花火線香の妙案を子供たちに依つて授つた彼は早速に婆さんの娘の花魁を驚かすために之を應用することにきめたのである。歌麿がぼんやりと一九を待つてゐた頃には一九は花火線香を買ひとゝのへてきて、さて焚きしめるお香の大さが、たどんの大さ程あつたならばその中に仕込まふものをなどと考へ乍らまた妙案に頭を惱ましてゐたのであつた。東海道膝栗毛の未來の作者は早くも小さい冒險にとりか

ゝらうとして武者ぶるひをしてゐたのであつた。おとなしい歌麿が居つては邪魔になる。飄逸輕妙な一九には歌麿を置いてきぼりにする位の事は何の心配もいらぬ事であつたのである。

歌麿は子供等の花火線香に見とれ乍ら散つては消える花火の星屑のあとを追ふては、定まらぬ形の渦のもつれを空間に描いては消してゐた。がとう〳〵それにも倦いてきた。一九を待ちあぐんだ末に、歌麿もおしまいには多分彼が一人で丸木屋を覗きにいつたであらうとは思つた。がしかしまだ知らぬ吉原の大門をくゞつて一人で一九のあとを追ふてゆく程の氣にはなれなかつた。思想の上では奔放な考をもつてゐても、藝風の上では異端の萌芽を抱かうとしてゐても、さてそれを自分の行動の世界で體現さすのには歌麿にも少し度胸が足りなかつた。一九を思ふと腹もたつ。がしかしはぐれて見るとさびしかつた。これから何處へゆかうと云ふあてもない。一九の輕妙さが反つて羨ましい氣もする。

「一九と云ふ男は輕妙な男だ、あの男はぢきに外へ向つて働らくが俺は重厚だ。そして何時も内へ内へと働らいてゆく。だから苦しい。」

歌麿は思つた。

「重吉爺さんが慾張りだと見ると、その慾張りを利用して汁粉屋へつれていつて何日ぞやもやつた様な事をして周章てさす。そして心の中では輕い冷罵と皮肉とを加え乍ら素知らぬ顔ですましてゐる。それであの男は胸がすつとするのである。婆さんが花魁の娘の自慢をすると、うまくだまして金を借りるがそしてその金でもつと花魁をからかつてくる或意味で婆さんの自慢を茶にしてゐる。萬事かうした輕い意味での冷罵がある。世間に對して不平があれば、輕い諷刺の行爲でもつて、そうした鬱勃とした氣分を自分の心の中から發散させて了ふ。」

そう思つた時歌麿は「自分は」と思つた。「自分の心の中には何時でも何かしらこだわつてゐるものがある。何を求めてゐるのかは自分でもよく分らない。がしかしそれは恐らく藝術の世界で何らかの形として表はして發散させねばとても發散さす事のできぬやうな種類の鬱勃である。だから苦しい。」

藝術的にそしてまた内面的に味はされてゐる苦悶からの壓迫である。がしかしそれのみに止らない、自分の心の上には

外からも亦加へらるる壓迫がある。社會的に壓迫せられてゐる。生活と云ふ形式からも束縛をうけてゐる。

「がしかしあの『蟲ゑらみ』が繪本になつて世間へ出たら少しの間はそうした生活の方からの束縛はゆるむ事だらう。」

闇が次第に濃くなつてきた。星がきらきらと空には光つてゐる。淺草を出た彼はどこともなしに町を彷徨ひ歩いてゐる。重つ苦しい心もちを抱いて歩いてゐる、

「早く名を成したいな。藝術的に自分の力量を自覺したい。」と思つたり、「自分の藝術的力量を、其處に具體化して現はして、そうしてそれをがつしりと捉んでみたい。」などと思つてみたりし乍ら、「そうなると自分はやつぱりあの一九ではとても淋しくてやり切れないだらう。」などゝ感じたりしてゐる。そして自分自身が自分自身であつて一九でもまた馬琴でもない事が嬉しい氣もしたりしてゐる。

氣がついてみると彼はまた淺草に這入つてゐた。人込の中をもまれ乍らに彼は仲見世から奥山の方へと歩いてゐたのである。明るい灯の流れの中を行きながらも自分の心のみが暗い事を感じ人に棄てられたやうな淋しさを泌々と彼は覺えてゐた。

丁度ある花屋の前に立つてぼんやりと花の鉢を見てゐた時である。彼の頭の中には、ひよつとしたら一九があの女のことを思つてゐるのではあるまいかと云ふ考が起つた。一九はあゝした飄逸輕快な男であるのにこのごろ自分の家へ來て二階で話してゐる時には妙に話の途中で暗い顏をする。そして隣りの家の庭を見おろす。」

「あの娘は可愛いゝ娘だ。この頃となりではよく三味線の音がする。あの娘だらうか。」

と歌麿は思つた。

「梅暦や春告鳥やそれからまた鶴の浮世双紙や――一九にもこの頃そうした書物が興味をもつて讀まれ始めてきてゐるらしい。一九は吉原へいつて今頃如何してゐるだらうか。」

丸木屋の格子先に立つて見込し乍ら、中を覗き込んでゐるのでもあらう一九のことを思つた序でに歌麿は、隣りの家

の緣側に腰を掛けてこちらをひよいと見上た拍子に、にこりと妖かに今朝方自分にお辭儀をした娘の艶めかかしい姿を思ひ浮べてゐた。二ケ月ばかりも前に引き越して來た隣りの家に娘が居ることを知つたのはつい一月ばかりも前のことであつた。一九も遊びに來てゐた。

「歌麿さん。一寸と。」

障子のかげに立ち乍ら一九が呼んだ。

「なに。」

一九は默つてゐると云ふやうな合圖をしてそつと障子の紙の破れ目を指した。また例のいたずらだなと思ひ乍ら歌麿は、半ば好奇の心で一九の指すまゝに障子の破れに目をやつた。

やつぱりその時も今朝と同じやうに娘は、緣側に腰を掛けてゐた。娘を始めて見て歌麿はおやと思つた。白いふくら脛を緣側に垂れながら女は狹い庭の石を眺めてゐた。綺麗である。がそれよりも艶めかしさが、その時ある恐ろしさの心もちを覺えさせた。歌麿は自分の心の内にもこの頃一種の冒險的な心が兆してきてゐる事を覺えてゐる。その考へてゐる事を覺えてゐる。單に頭の中で考へてゐるばかりではなく、その考へてゐる事を實現させやうとする力が内から働らきかけてくるのを感じる。彼はそのために艶めかしさに對して恐怖を感じる。童貞。童貞。歌麿は一九がそばにゐるのを一寸きまり惡く感じた。

一九があれからよく自分の家へ遊びにやつてくる。使の歸りだと云つては寄り、使のゆきがけだと云つてはよる。何氣ない顏で庭を見下ろすそして、

「百日紅が綺麗だね。」

となりの庭に咲いてゐる百日紅を一九は指さす。歌麿も立つていつてみる。毎日見てゐる百日紅だけれど妙に歌麿もそんな時には氣になる。歌麿は一人の時にでもよく、となりの庭を見下し乍ら窓によりかゝつて小聲で唄を歌つてみるやうな、ふとした氣紛れな輕い心に時々なる。

「……しかし娘は如何思つてゐるだらうか。惚れた弱身でと云ふ言葉もある。……その實は何でもない事かも知れない。」

女が今朝お辭儀をした眼のことを思ひ乍ら、石竹のくれないの色を歌麿は花屋の店さきで、尙も見つゞけてそして自分の眼を疲れさしてゐた。一九に話したらと思つて、「いや〳〵そんな事はない。」同時に歌麿は、一九の女には好かれさうもないあの恰好を一寸と可笑しく思つた。

花屋を出ると歌麿は飲食店の立ち並んだ小さな迷路のやうな道へと這入つていつた。ぐる〳〵と廻る。そして廻つている内に何處がどこと云ふ事も分らなくなつてくる。何もかも分らなくなつてくる。そのくせ輕い豫期の心がはたらいて今度は右へ廻るのだらうかと思つてぐん〳〵進んでゆく。蠑螺の殼へ這入つてゆくやうな面白さである。一ぜん飯などゝ書いた木の札や丼などゝ書いた木の札やが立つてゐたりする。暖簾にお酒などゝ染めたのもあつた。食慾をそゝるやうな食べ物がどこの店にも並べられてあつた。――歌麿は自分の心がこの迷路の世界のやうに迷つてくれゝばいゝと思ふ。この頃の自分の心は自分でも分らぬ時が多い。迷路。岐路。くる〳〵と廻つてゐる内に思はぬところへ出てくる。ばつたりとゆきあたつたかと思ふと横へ折れて出るとそこが可成り廣い路となつてゐる。明暗のかげ模樣が心のおもてに織り込まれる。當惑。豫期。喜悅。不安。そしてまた享樂。そんなものを包んで迷路の世界はぐる〳〵と廻つて居る。歩いてゐる内にどうにかなるであらう。自分でも分らない此頃の自分の心はこの迷路の世界そのものゝやうな氣がする。ゆきあたつてそして横へ折れる迄は自分でも自分の心が分らない。ゆきあたつて始めて、これが自分の心だつたかと始めてさとる。思ひがけない自分の心をこのやうにして見出す。時として本能があの店さきの飮食物のやうに自分の心を誘ふ。酒だ。酒だ。そう云つて、愁を醉で紛らそうとする心があつて誘惑をもちかけてくる。時としては酒を呷つてその本能が自分の心の中で唄ふこともある。「だが淋しいな。」と歌麿は思つた。「だがつまらないな。」歌麿はまた隣りの娘の事を思つてゐたのである。「やつぱりつまらない。」近づく事ができない。「だからやつぱりつまらない。」

白粉を濃く塗つた女が暖簾のところに立つてゐて、「一寸とよつてらつしやいよ。」と云つたりすると歌麿はわざと大膽になつてそんな女の顏を覗き込んだりした。光をうけた顏の半面が明るくて、影

になつた半面が暗かつた。髪の匂とそして白粉の匂とを嗅ぐと、それでも「はつ」と思つた。

歌麿はその晩おそく歸つた。が運命と云ふものは妙なものである。どうにかしてくれと云つても奇緣が熟しないと丸くは生れない。歌麿は心の中にあるものを、只迷路の彷徨で一旦發表せしめた計りであつた。家へ歸つてはもはや一九のことも想はなかつた。すやすやと何とも思はずに疲勞が誘ふ深い眠へと落ちていつた。今はとなりの家の三味線の音もきかなかつた。夢は常よりも安らかであつた。それは悔もない安らかなそしてまた幸ひな眠であつた。

二

秋になつた。爽やかな氣が空にも地にも流れそめた。歌麿は少し心が落ちついてきたやうに思ふ。描かう。描かう。と云ふ欲が切りに内から働らきかけてくる。それは苦しくもある。がしかしこの頃さう云ふ風に心の中で働らきかけてくるものゝ姿が自分にも、少しはつきりしてきたやうに思ふ。女人。自分の藝術的衝動の源に横つてゐる憧がれの心持はかうした對象に向つて働らきかけてゆくやうに思ふ。何人を愛してゐるかと問はれると困る。たゞ心の中で求める心がある。心熱がその「求める心」に集まる。そうして集まつたその「求める心」からして自分の願望努力の凡てが發してゆく。「求める心。」その中には女人の影が映つてゐる。この影をめぐつて心熱は集まり、この影のまはりからして、また心熱は發散し去る。

自分のもつてゐる願望、欲求の凡ては一度はこの女人を求める心へとたちかえつてゆく。そしてまたそのところからして再び出でゝゆく。自分のなす一切の行爲の價値批判、意味判斷は凡てこの心の下に於てなされる。「この心は恐らく自分が男としての生命をこの世でうけた時に既に始まつてゐるであらう。」とそう思ふ。男性と云ふ體制の下に在つて此の世を見る眼には、人の世の意義がかやうな色合をもつて染められた上でなくては一切のものは凡て映ることができない。

「求めよ。」と作られた。そして求めてゐる。名を求めてゐる。富を求めてゐる。がしかしその「求める」と云ふ「心」を敎へてくれたものは女人である。自分は女人を求める心を内にさとつた時始めてまたその「求める」と云ふ心をもさとつた。名を求める。富を求める。力を求める。そうした求める心を自分に敎へてくれたものは、女人を憧がれる事を初

めて知つた心の内にあつたその「求める心」であつた。

歌麿の心の中には非現實的なまぼろしが多かつた。がしかし只さり氣ないそうした求める心も現實の世界で何等かの形をとらねばならなかつた。現實の世界に根據を得なければならない。具體化させられてそうした幻の「求める心」が、現實界へ浮び出てこねばならない。歌麿の心の内に隣りの娘が時としてじつと坐を占める所以である。生れ乍らにして男として持たせられてゐた「求める心」の坐席に時として隣りの娘が坐を占める。時として双紙屋の娘が坐を占める。がしかしそれでも尙非現實的なまぼろしが尙ほまぼろしの形を脫し得ないでゐる。歌麿はそれがために苦しむでゐる。運命と云ふものが生れながらにして在る。それを現實の世界で具體化してゆくのが自分たちの生きてゆく間の行爲ではあるまいか。自分の姿、自分の運命を現實の世界へ刻み出してゆくのだ。立體的に自分を時の中へ延ばしてゆくのだ。

秋になつた。歌麿の心の中でも切りに「描きたい」と云ふ欲望がはたらきかけてくる。自分の心の内を凝視し乍ら歌麿は筆をとつたり、想を構へたりする。大川端を或る晩一九と二人で歩いてゐた。平常は言葉の多い一九も妙にその晩は言葉少なに默つてゐた。星がきら〳〵ときらめき出して、薄暮がいつの間にか川のおもてを被ひ始めてゐた。水が輕やかに流れてゐる。歌麿も殊勝な心もちになつた。向ふ岸がだん〳〵ぼんやりしてきて、向ふ岸の上の空が薄ぐろくなり、家並のかげが濃くなつてきても、空の深さは依然としてはかり知る事ができぬやうに、消えそうにもない薄暮のかなたを見せてゐた。

色。形。—薄明。水。空。

歩いてゐる内に歌麿は自然の繪が立體的な深さを以てずん〳〵と進んでゆく事を感じた。自然の繪は動き進んでゆく。ぢつと胸に手を置いた。

「一九さん、俺はつまらないと思ふのだ。」

「どうしてさ。」一九は何事をか期待してゐるかのやうな態度を見せた。

「なにね。繪の事なんだ。」

一九は何だつまらないと云ふ風をした。

「歩き乍ら考へたがね。自然と云ふものは斯うやつて向ふ岸を見給へ。今し方まで向ふの家の形がはつきり分つてゐたのにもうぼんやりと分らなくなつてしまつた。がしかし繪だね。立派な繪だ。」

そう云ひ乍ら薄暮の大河に瞳をやつた。瞳の底には感激の光が光つてゐた。一九は何だつまらないと云ふ風を尙もつゞけてゐる。

「がこの繪がね。變つてゆくのだ、動いてゆく。薄暮が染めてゆく。筆を加へてゆく瞬間瞬間が一つ一つの繪なのだ。動いてゆく繪だね。そうした動いてゆく全體そのものから受ける感じ。それも亦自然の繪の與へる感じなのだ。こうしてゐる俺たちもやつぱり畫の中で、づれ動いてゆくからね。そしてまた繪の中で手をふり、足をふつて動く事ができる。」

そしてまた胸に手を置いて、

「第一大きいね。深いね。構圖も構想も、そしてまたそれを組み立てる材料も——例へば川だね。谷だね。家だ。人だ。今に月も出てくるよ。」

そして輕い息を思はずついた。一九にもそれが感じられた。

「だからつまらないと云ふのだ。自然の繪を描いてもつまらないと思ひ出してきたのだ。」

一九はなる程と云ふ顏を一寸と見せてうなづいた。がぢきにまた元氣そうな聲で云つた。

「俺はこの頃妙案を考へついてゐるのだ。」

「そうかい。どんな事を思ひついてゐるのだ。」

歌麿は眞顏で問ふた。

「なあに小説のことなんだ。」そしてすぐに、

「俺はね、東海道の旅行記を書いたら面白いと思つてゐるのだ。二人の主人公が滑稽のありつたけを盡し、馬鹿のありつたけを盡して旅行すると云ふ筋だ。きつと面白がつて人が讀むよ。」

「そいつはいゝな。」

歌麿はいつも世間を對象にしてゐる一九を想つた。面白がつて人が讀むよ。一九はそれで滿足であつたのである。歌麿はまた繪本『蟲ゑらみ』の事を想ひ出した。あの稿本を蔦屋へもつていつてから三月の餘になる。何時出版してくれるのだらうか。一九を通して時々主人に聞いて見るが一向に要領を得ない。このごろそれで、少からず嫌氣がさしてきてゐる。蟲ゑらみと云へばもう蟲の鳴き出すころだ。ちゝろと鳴く。りん／＼と鳴く。歌麿は大川端を歩き乍らうすら寒いやうな心もちを覺える。あれが何とか片がつく迄は自分の心も落付き兼ねる。描かうと云ふ心をどちらへ向けて進んでゆかうかとも迷ふ。一その事美人畫を描く繪師にならうかとも思ふ。此ごろ世の中がさびしくなつてきた。自然を計り描くよりも生きた人間を描きたい。大川端の川端に立つて自然の繪を見乍ら歌麿は痛感した。自然に對する畏敬の心の反面には現世的な、異教徒的な享樂の心もちと云ふものもあつた。歌麿の心の内にもこの頃そうした心持が色濃く感じられる。地上の濁つた快樂と云つたやうなものゝ親しさが、なぜかこの頃の自分にはもの賑はしく感じられる。正教の道を歩み、古典の道を歩んでゆくよりは、異端邪宗の教に趣くことが自分にとつてはむしろふさはしいことのやうに感じられる。歌麿は邪宗の教を憧がれるやうな心もちを内で感じてゐる。

因襲や、作爲や、倫常やの既成の型にあてはめて自分の心を外界へ出してゆく事が、歌麿には漸くいとはしくなつてきた。自分の心の内に在る本能や、衝動や、願望やの一切をこめてそのまゝ藝術の世界へ表し出したら世間の人は自分を目さして異端邪宗のともがらと斥けるであらうか。藝術的耽溺と云はふか。遊戲三昧と云はふか。歌麿は自分の中に動いてゆく人間的生命の凡てを畫と云ふ形で一旦あらはして、さてそれから、そうした人間的生命をまた畫と云ふ形で改めて感じ味ひたいと思ふ。人に隱れてゞも描きたい。異端であらうが。邪宗であらうが。人にかくれてゞも信じないでは居られぬやうな心である。

「一九さん。俺は一そのこと、俗人向きな繪かきにならうと思ひ出してゐるのだ。自然を描くよりも、美人畫や、風俗畫や、そんなものを描く方が俺には向いてゐるやうだから。」

「いゝね。それも。」

一九は極無造作な返事をした。歌麿にはそれがもの足らなかつた。そして少しせき込んで云つた。

「俺はね。もう疲れたのだ。虚僞な繪に疲れたのだ。嘆異や、發見やのない、生命のない繪には倦いてきた。俗毒でも何でもいゝ。もつと生氣のある繪が描きたいよ。乾からびた繪にはもう懲々してきた。その點で君が書かうと云ふその戯作にも俺は贊成するよ。」

歌麿はいつになく興奮したやうな調子でもつて一九に話しかけた。人間的な要素を諧の中にとり入れて描き出す事に依つて、自分の心の内に在る表現慾は燃やされる。鬱勃とした心もその處を得る。一九も恐らく戯作の世界を描き出しつくり出して、その世界で充分の活躍をする事であらう。現實の世界でなし得ない滑稽、諧謔のありつたけを、斯うして描き出しつくり出した自由奔放な戯作の極樂境で、やつてみやうと云ふのであらう。行動の世界をおしひろげて非現實な世界にまで及んでゆかうとする。自由を求める心は限りがない。現實の世界では種々な世間的な事情のために、壓抑せられてゐるがために實現し得ないでゐる願望のさまぐ\を作者は一旦創作の世界へさらけ出すと、もう自由氣儘に之を實現しやうとする。創作の世界では主人公は自由に戀もできる。戀せられる事もできる。時としては人をあやめる事もできる。人のために泣く。壓抑せられたまゝ心中にわだかまつて、そして鬱勃としてゐる斯うした願望の氣分を作者と云ふものはこのやうにして晴らしてゐるものである。つり込まれて讀みゆく人も亦同じやうに作者や主人公になり切つてそして非現實の世界で現實的な願望を充たそうとする。歌麿は一九の返事を待つてゐた。突然一九は

「靜かに…」

と手をふつてみせた。三四軒さきの家から二人の人影が飛び出した。捉み合つてゐる。闇が濃くなつて今ではもの丶形ははつきりとは分らない。

「隱れて見て居やう。」

一九は慌しく、ものにおびえたやうに急いで歌麿をひきよせて傍の家の軒下に立たせた。

「お前さん。あたしを如何する氣だえ。今更あんな女に見かえられてたまるものか。」

女の聲が邪高に闇の中からきこえてくる。男の帶をとらへて離さぬ樣子である。

「痴話喧嘩だね。」歌麿が呟くと一九は「うむ」と低い聲で答えた。二人は少さくなつて家の壁に食つつき乍らぢつと見てゐた。歌麿は艷めかしい輕い声をどこともなしに心の底で感じてゐる。白い腕が闇の中で動いてゐるやうに思はれる。氣のせいか髮の亂れもちら／＼見えるやうに思ふ。

「靜かにおしよ。みつともない。聞えるぢやないか。」

「い〻や靜かにできないよ。聞えたつてあたしや構やしないよ。」

女は恥も外聞もないかのやうに興奮してゐた。

「そんなに憎けりや、さあ、どうでもしておくれ。」

女は焼けつくやうな調子で云ふ。

「誰もお前が憎いとは云はないよ。人聞きが惡いぢやないか。家へ這入らう。俺はも少し遊んで行くからお離しよ。」

「い〻や。憎いに違ひない。お前さん。今日までの事を如何思つてゐるのだ。」

急に興奮の極度に達したらしく女は憤つた。

「さあ今迄の事を如何思つてるのだ。」

「もうい〻からさ。人聞きの惡い。内へ這入らう。」

「人間の惡いのはお前さんだ。あたしやいくらでも大きい聲をしてやるのだ。こ〻は往來の眞中だよ。さあいくらでもお前は恥をおさらしな。」

「澤山だよ。歸るよ。さあ離しつてたらばさ。」

男は力をこめて振つた。女はよろ／＼とした。そして男の足にからまれて倒れた。女は立ち上るとまた男の許へ走つていつた。

「そんなに憎いあたしなら殺しておくれ、さあ殺しておくれ。そしてあの女と一緒になつてみるがいゝ。女の一念だよ。」飛びかゝつていつた。男は受身の抵抗を試みた。しばらく格鬪がつゞいた末に女は倒されてしまつた。

「おれが惡かつたからあやまるからさ。」

と云ひなだめながら男は、はあ〳〵と息を切つてゐる。女はしく〳〵と泣いてゐる。

どうにも斯うにもしにくゝなつてくる。憎いのか。可愛いゝのか分らなくなつてくる。只狂ひたくなつてくる。愛の狂ひは時としておのれの血を見て反つて歡喜の心持を味ひ、已れの血を見て勝利のよろこびを味ふ。單調無事には誰しも倦む。新らしい刺激をと求めて止まない。そしてそうした心持をこんな狂ひの内にはらすのである。愛する者に打たれ、愛する者を打つ。痛苦の感じを味はし、味つて、そしてそのところで二人の人間が兩個の人間としてゞはなく、一個の存在としての感じに這入らうと云ふのである。誰も彼も皆内に在るものを表現せしめやうとして悶えてゐる。女はさめ〴〵と泣いてゐた。愛する男から打たれたる滿悅か。一體となれるよろこびか。たゞしは又棄てられむとする淋しさに堪えぬ悲愁の涙か。今迄は高飛車の調子であつた女の態度が急にぐつたりとなつてしまつた。

歌麿はさめ〴〵と泣いてゐる女の傍に立つてぢつと女を見下ろしてゐるその男を心憎く感じた。怒れる間、泣ける間は女も幸である。對手があつて泣いてゆける間はまだ幸ひである。泣いてゐる姿を見て貰へる間は幸ひである。歌麿は嫉妬に似た心もちをその男の上に感じてよろ〳〵とした。

「やつぱり美人繪師として立つてゆかう。自分には女より外のものはないのだ。いや此世の中には男、女の戀ひ慕ひ、求めてゆく事より他には何もないのだ。外の事はみんな僞りごとだ。」

歌麿と一九とは默つてまた歩き出した。二人は別々の心を抱いてそして默つてゐた。隅田川には樓船が浮んでゐた。艶めかしい女の晴れやかな笑ひ聲が聞えて夜の空氣を賑やかさでもつてかきまぜやうとする。ゆら〳〵と搖れる提灯の灯の光を水の上に流して、艫には黑い人影を映し出してゐる遊山の船も浮んでゐた。爪彈の三味線の音をきくと一九は吉原を想つたし、歌麿は藝術的な苦悶を味つた。影燈籠に似た今の出來事——闇の中で見きゝした二人の男女の爭。

――それは自分の心の中で相手つてゐる或る心の象徴ではあるまいか。ふとそんな事を思つた。人間的な運命の下に二人の男女がどうにも出來ぬもどかしさに堪え兼ねてゐる。二つの身體は別々である。せめても二つの心を一つに融合したい。二つの身體を合體して一として感じたい。

　さうした儚ない願の果てに、血のにじむやうな痴話喧嘩もする。もどかしさだ。二つの身體、二つの心は人間である以上合致する時はない。人間として生れてきた儚ない運命からうける掣肘である。人間としての生命につきまとふ束縛である。歌麿はどこでもかしこでも、如何ともし難い束縛と、拘束と、掣肘とを感じた。

「一九さん。例の『蟲えらみ』はその後如何なつてゐる。」

　と恐る〳〵歌麿は訊いた。

「あの『蟲えらみ』か。度々主人にも話してゐるがね。この頃店の仕事が忙しくつてね。」

　一九は言葉を切つた。そしてまた

「第一八犬傳を引きうけてゐるのでその方の仕事に追はれるものだから主人もつい〳〵君の方のはのび〳〵にのばしてゐる。――ひよつとしたらあれも當分出版できないかも知れぬよ。」

　とう〳〵望も薄くなつてきた。經濟的壓迫から逃れやうとする望も今ではなささうである。歌麿は何時に似ぬ暗い心で家路を指して歸つた。

「藝術も何にもない。只食へればいゝのだ。」

そんな自棄な心が湧いてくる。薄ら寒い秋の夜である。蟲がちろ〳〵と鳴いて星ばつかりがきら〳〵としてゐた。

三

　あくる年の春ごろの話である。

　歌麿はこの頃メランコリアにかゝつてゐるやうに自分でも思ひ始める。淋しい氣がする。もの足らぬ氣がする。上野にも花が咲きそめたらう。向島にも花が咲きそめたであらう。歌麿は時々愁ひ顔に二階から隣りの庭を眺めて、其庭に

も訪れて來た春の姿を見やうとするけれど、やつぱり心は浮々として來ない。

「一九もあの後大分性格が變つてきたな」と思ふ。罪のない戯れ氣分を今でも昔のやうに持つてはゐる。がしかしどこやらに晴れやらぬものを心の底で抱いてゐるかのやうに思はせる。是迄は凡てが公開でいつた一九の心が今では、そこに自由に開放してみせる事を欲しない心の隈をもつてゐるかのやうである。公開のまゝで生長し、公開のまゝで發達してきた一九の心が是れからは秘密の内に發達し、秘密の内に生ひのびやうとしてゐるかのやうである。

時としてはこんな出鱈目を云ふ事がある。

「馬琴さんが君の繪を店で見て感心してゐた。」

「そうかい。」歌麿はそれでも嬉しく思ふ。

「石燕さんの繪は惡く云つてゐた。」

「如何云つて。」

「あれは俗惡をはまると云ふのだ。君の繪なぞはその點になると自然の氣韻が出てゐて面白いと云ふのだ。」

「あとから一九にかつがれた事がいろ／＼の事情から分つたりする。

「またかつがれた。」

そんな時に限つて歌麿はいくばくかの金を一九から借りてゆかれてゐる。そうした一九に限らずこの頃歌麿は、誰に逢ふのも嫌である。一人で戸を鎖して一晩中繪を描いてゐるやうな事が多い。現實と云ふやうなものがいとしく感じられる。いつかの晩に見た二人の男女の爭のことが妙に頭をはなれない。

「一九と云えばあの男もこの頃一向に來なくなつた。」と氣がつく。歌麿は自分のメランコリアの始まりと、そして又一九が來なくなつた事とが二つとも、同じやうに一月ほども前から始まつてゐる事を自分でも知つてゐる。その頃から隣りの三味線の音を聞かない。隣りの娘の姿を見なくなつたのも同じく其頃からである。噂はまち／＼である。隣りの主人が商賣に失敗してそして夜逃げ同樣に姿をかくしてしまつたそのあとで、娘の評判を誰云ふともなしに、今では歸藝

者として左褄をとつて吉原から出てゐるなぞとも傳へてくる。

歌麿は自分の心が自分でも知らぬ間にいろんな色に染められ、いろんな形の中に作られてあつた事に氣がつく。

「あの娘が居なくなつてから私は自分の心を彩つてくれる繪師と、そしてまた自分の心を刻んでくれる彫刻師とを失つた。」と思ふ。

「その繪は殘つてゐる。その彫刻は殘つてゐる。いつの間にかあの娘が私の心の中で描きまた刻んだものが、今でも尙ほ私の心中に殘つてゐる。」

歌麿は心の中に根を張つて、そして心の中で次第に生長してゆく思想や感情やの事を想つた。

「記憶。印象。なつかしみ。——そんなものが私の心の中で生きたものゝやうに日々に生ひのびてゆく。」

一度あの娘に遇つてみたいと思ふ。メランコリアはいたずらに「まぼろし」を空中に固定せしめやうと儚ない努力を歌麿の心の中で試みてゐる。娘の殘してくれた斯うした置き土産を歌麿はそれとも知らないで自分の中で感じてゐる。

「描きたい。描きたい。女人を描きたい。」

艶めかしい春の夜かぜの觸れ心地を宵やみの中に感じると、歌麿は女人の柔かい肌のことを想ふ。闇は女人の烏羽玉の黑髮か。風は女人のうなじの白さか。歌麿は自分の心の中に逃れ入つてはそこでも亦迷妄のまぼろしを見る。

曉の光が鎖し込めた雨戸の間を洩れて這入つて來乍ら、薄氣味の惡い「まんだら」の白い編目を一室の暗の中にぼやけたやうに染め出そうとしてゐる。春さむの朝である。薄氣味のわるいそのまんだらが紫いろからぼんやりとした靑白さに變つて行くかのやうである。

歌麿は筆を下ろしてひよいと頭を上げた拍子にこうした曉の光が染め出した編目を見て、苦々しそうに眉に皺をよせた。

「まだ朝か。」

そこいらがざわ／＼としてくる朝のことを彼は思つた。しみ／＼と味ふことや、美しさに醉ふと云ふ事やを知らぬ人

間ばかりが動き出す世界のことを思ふと彼は思はず眉をよせた。あながちにそれは此頃歌麿をおそふてゐるあのメランコリアのさせるわざでもなかつた。彼の心の中にはさま〴〵の色あるもの、形あるものゝ美しさが絡れ合つてもやもやとしてゐる。彼は現實の桎梏をいとふていつも己が心の内へと這入つてゆく。そしてそのところで唯美三昧の心もちを味ふのである。風にもあてじと自らの心を愛で培ふ。

歌麿はあの嫌な人間たちの起き出す朝のことを思つた時、今までの張り詰めてゐた心持が急に弛んで來るのを覺えた。一心不亂に描いてゐた畫から自分の心がこんな風にして離れてくると輕い疲勞も感じられる。それに頭も少しづきんづきんと痛んできた。ふら〳〵とするやうな心持も感じられる。がしかし夫れは薄ぐらい行燈の灯の柔かい光を被ひかぶせやうとして、無遠慮に這入つてくる隙間もる曉の青白いあの冷い光の刺激の辛辣さ故でもなかつた。曉の光はまだそれ程ではなかつた。

「も一息だ。」

歌麿は曉の光が浮かした縞目のほの白さの中へと散らばつていつた心を再びとり集めて仕事にかゝつていつた。がともすると焦躁の心持を感じる。歌麿の心の内には曲線のくねりと、そしてまた色彩の快さと許りが一ぱいにつまつてゐるのに、折線のとげ〳〵したやうな世界がこれから始まらうとして、今にも白晝が曉のあとを追ふて來さうである。とげ〳〵した痛さのものゝ上を踏んでゆくやうな心もちを歌麿は感じない譯にはゆかない。がそれよりも恐いことは今まで、鈍く、そしてもの柔かく當つてゐた行燈の光の代りに、紙上の女人の半ば裸身の美くしい肌の上に今にも針のやうに鋭い白晝の光が落ちて來て、あの柔い肌を傷け、いためはしないかと思ふやうな懸念である。

今迄は咫尺の紙の上に、そしてまたその紙の上ばかりに、行燈の灯の明るさがひろがつてゐた。そして黄白い咫尺のその明るさの空間内にのみ、歌麿の心がとり集められて居たのに、今では曉の明るさが白々とした明るさを室一ぱいに蒔き散らして同時に彼の心をも、室一ぱいに蒔き散らしてしまひさうである。彼は不機嫌さうに筆をとゞめてそしてまた首を上げた。

行燈のかげの衣桁には鹿の子絞りの緋の帶揚が下つてゐる。疊の上には、つげの小櫛が落ちてゐる。笄が落ちちらばつてゐる。向ふには友禪の振袖が疊の上に飜つてゐる。斯うした借り物を室一ぱいに並べて、これらのものが感じさせる艶めかしさの心持に守られ乍ら、歌麿は筆をとつてゐた。朦朧としたものゝ中に明暗のかげが生じてゐる。瞬が來ようとしてゐる一室の内の明暗の深みの中で、そしてまた淺瀬の上で、浮き沈みしてゐる斯うした艶めかしいものゝ色彩を、彼は今快い疲れを以て眺めてゐる。

折線的な、そしてまた爭鬪的な白晝が襲ひかゝつてきて歌麿の快い疲れの唯美三昧の心に早くもひゞを入れやうとし始めてゐる。

「ほんとに憎いよ。歌麿さん。」江戸末期の頽廢的な女人を描いて、女人たちをめぐつて流れてゐるあのやるせない當時の人々の溺惑的な享樂の悶えを浮世繪のおもてににじみ出させて、そして江戸の女たちから後には哀怨の小唄でそう唄はれたと歌麿のことを私も何かの本で讀んだ事がある。――が後にとは云はない。歌麿は此時既に早くどこかで呟ぶやうな哀韻をきいた。「ほんとに憎いよ。歌麿さん。」彼は描かれた繪の上を見た。柔い曲線が何とも云へぬ感じを自分ながらに感じさせる。肩を半ば露はして乳房のふくよかさを見せてゐる女である。あの高く盛り上つた乳房を畫かうとした時女はさへぎつた。

「あら嫌よ。歌麿さん。そんなところを見ては。」

歌麿はそれにも關はらず女の肩から衣をぬがしてしまつた。女はぐつたりと恥かしさをおしかくして、それでももはや否まないでぢつとしてゐた。歌麿の心の中に在つたLibidoは此時滿悅を覺えた。もく／＼として心の中でわだかまつてゐたものが壓抑から開放されて躍り上つた。彼は一刷毛さつと、薄べにで乳房の上をなでゝさうしてほゝ笑んだのであつた。夜中のことであつた。彼はそれから續いて、そのまゝ半襟の中へすうつとかくれていつてゐる、もう一つの肩をさぐつていつた。うなじのあたりをそつと撫でゝそしてまた彼は筆をそこで止めた。繪は次第に完成されてゆく。女人はさまざまの心持を以つて歌麿に相對する。

「もういやよ。」

泣いて訴へる。怨むやうに睨む。かと思ふと愛撫に滿悦したやうな艶やかしいほゝ笑みを見せる。

そのほゝ笑みが何時の間にかあの隣りの娘のほゝ笑みになつてゐたので驚いた。氣がついてみると彼はこの様に姿をかえて、やつぱりあの隣りの女を描いてゐたのである。彼の心の中にこの頃生じたメランコリアはどこ迄もあの娘に執着してゐた。そして彼をしてあの娘を吉原風俗化してこんな風に描かしめたのである。首を少し傾けて、そしてものを思案し乍ら火鉢によりかゝつてゐる。その調子の内にはどこ一つこだわるやうな堅さもない。玉のやうに美しい五つの指をはめた足の先からふくら脛——立て膝をして少しとり亂した風情である。

歌麿はそれを見てさも滿足したやうに「ほつ」と深い息をついた。「あゝ疲れた。」頭がまたづきん〳〵としてきた。ふら〳〵するやうな昏迷を感じる。がそれは如何にも快い疲勞である。汗のにじむやうな緊張した心もちで彼は、ゆふべから一息もつかずに筆をとつてゐた事を想ふ。

もく〳〵と心の中で渦を巻いてゐた心の一つが、畫のおもてに浮び上つて出た時には彼は胸がやぶれそうな喜びを味つた。これだつた。これを狙つてゐたのだつた。始めて明るみへ出されて、自分が表現しやうとし、感じやうとしてゐたものを、今あり〳〵とこのやうにして、見ると、彼は胸が痛むほどの喜びを味つた。表現の喜びを得た心は壓抑の苦から逃れ出でゝ躍り上つた。それが何でもない曲線の一つであつたりもしたが、描き出されて、さてその上でそうしたその曲線となるまでにはどんなにそのものは心の中で重つ苦しくこだわつてゐたか。眼のふちの曲線となつて繪のおもてに現れやうとして心の中では如何に、生れ出づる惱みを惱んでゐたか。黒髪の絡として、自らを現はれ出さうとして如何に心の中で時の熟してくるのを待つてゐたか。そんな描かれぬ線のもつれが歌麿の心の中ではゆふべからいかにこんぐらかつてゐたか。描いては憧がれ、憧がれては描き、つぎからつぎへとその描かれない心の中に在る線を一つ一つにほぐして描いていつた。

「あゝ、この女だつた。」

いつの間にか出來上つた女の顔を眺めて、彼はそれが隣りの娘である事をはじめてさとつたのである。裸かな腕がくつきりと心の面へ雪のやうに現はれ出でゝきたり、緋の袖口が歌麿の眼さきでちら〳〵とふるえてみたりした。女人の衣の裾を捉まへたと思つたら、それが肉つきのいゝ脛であつたりもした。蠱惑と幻惑との世界で彼は散る花の舞を見、吹く風のもつれを見た。彼は疲れ果てゝぼんやりした。

疲れた心がぼんやりと何を思ふでもなく、そこいら中をさまよふてゐる内に、ぼうつと心の一角では明るみが感じられた。廓に賣られてゆくやうな運命をもつた女であると知つたならば自分にもあの女に對しても、ほかの考へやうがあつた筈である。彼は自分の卑怯さを叱つた。異常の興奮が疲れた心のおくで、もく〳〵と頭をもたげやうとした。道德、倫常、因習、そんなものがあの頃如何に自分を傷つけ、いためたか。異常の興奮はさう云つて、復讐の心持を、道德、倫常、因習に向つて働かさせやうとした。血みどろになつて道德たちのために傷け、いためられて、一旦實現を望んで心のおもてへ迄浮び出で乍らも、もろく〳〵敗れてまた無意識心の心の海へと沈んでいつたその願望の心は、異常の興奮をもつてまた道德因習を狙つて歌麿の心のおもてへ、このときこのやうにして現れ出でた。

歌麿は自分の精神形體の凡てを通じてはたらきかけてゆく女人をみた。自分の心の中で、そしてまた限もなくゆき亘つて常に感じられる對女人慾をまざ〳〵と感じた。藝術創作の衝動の形となり、權勢慾の形となり、知識慾の形となり、その女人慾はさま〳〵の姿をとつて現はれる。底を覗いてみるといつも凡てのものゝ内には女人がかくれてゐる。見たいは女人の肌を見たいであり、知りたいは女人の心を知りたいであり、得たいは女人の心と身とを得たいである。どんな形をとつてゞも、どんな形に姿をかえてゞも自らを現はそうとせねば止まぬものが心の内に在る。一線を描いても、一色を加へても、その一線、その一色の内に女人の住むでゐる事を感じないでは歌麿も筆を働かし得なかつた。

歌麿は今、薄白むでゆく光の中に坐つて冬の曉のうすら寒さにおびやかされ乍ら、またゝきそめる行燈の灯かげを見詰めてゐる。

「秘戯」。歌麿は人知れぬ本能の秘戯に今まで耽つてゐたやうに思ふ。

「またあの嫌な人間どもが起き出すのか。」

歌麿は眉をひそめた。戸を鎖して夜描く。自分の心に安慰を得たいために、そしてまた他からして心持を破られないために、ひそやかに人知れずと彼は思つた。歌麿は緊張を感じた。表現を望む心。秘密を好む心。二つの心の渦の中でゆふべから異常の興奮を感じ乍ら、鼠の音にも氣を兼ねて心をうれしむで筆をとる。が疲れの出てくるまゝに横になつた歌麿はやがていつの間にか、うつら／＼の半醒半眠の境へと這入つていつた。

彼の無意識心のおくでは「完成のよろこび」や「表現を得たるよろこび」や「自由の姿になつたよろこび」やがおどりくるつてゐた。

疲勞が心的構成の各要素の間を聯結する統一の力をゆるめた時、夢魔のやうにかげを射して現れ出てくるものは、「悔恨」「怨恨」「悲愁」「諦觀」の心であつた。隅田川のふちを歩き乍ら自然を嘆異したあの心もちが、悔恨や悲愁に守られ乍ら己が姿を現はした。

「本能か。女人か。――自然に對する畏敬の心はどうだ。神を畏れつゝしむパイアスな心はどうだ。崇高なるものに憧がれ永久に生きやうとし、恒常に生きやうとするその心は何だ。本能が恣まゝに己が慾をみたそうとする時、いつでもそれを制する心がはたらくのはあれは何だ。本能に溺惑しやうとする心そのものゝ内には、既にそれを制しやうとする心が含まれてゐる。本能をみたす丈けの目的が人間の生きてゆく目的ではない。自づから自然の前に跪いて祈りをさゝげるやうな心持になる時のあの心はあれは何だ。現實本位な安つぽい偷安ではとても人間の心は滿足できぬものなのだ。」それに答える第二の思想があつた

「可哀相に歌麿は疲れたんですよ。精神的にも、肉體的にも、生活に對して疲れたんですよ。自然に對して自分の小を知つた。そうして可哀相に諦らめを感じたんですね。地上で、現實的な、惑溺的な、偷安的な、享樂的の國を建やうとしてゐるのですね。とても自然には及ばない。人間的な俗的なものでもいゝから――そう云つて濁世を飲んで一日の苦しみを忘れやうとしてゐるやうなものですよ。理想に遠し、努力には倦いたし――まあ云つたら一種の頹廢ですね。パ

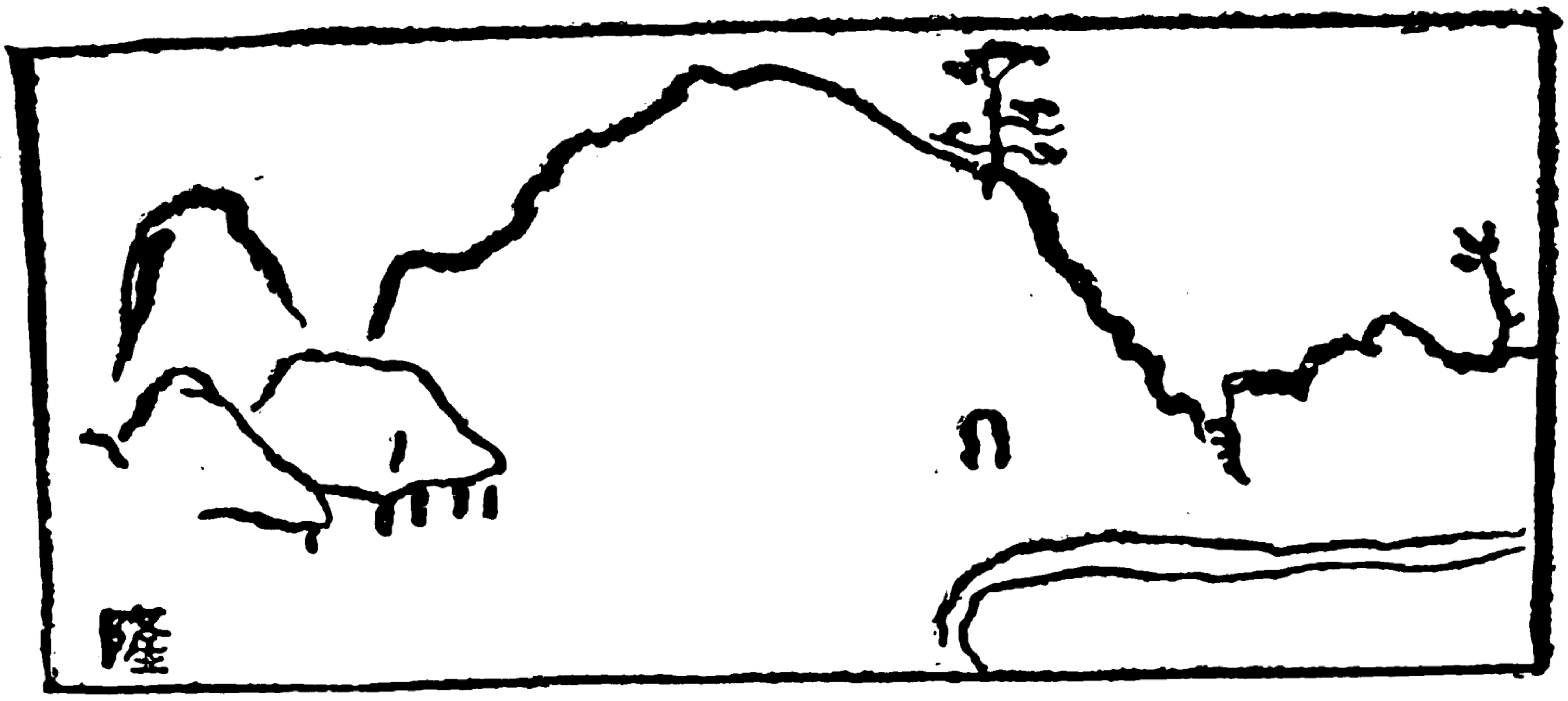
イアスだの、エターニチイだの、そんなものには縁がないよ。手近いところで勢一ぱい樂しまう。さう云ひ乍らも、可哀相に涙を流して、それでも非現實的な理想を繪のおもてゞ女人として描いて、しかもそれに氣がつかないでゐるのですからね。人間つてものはこんなものでせうよ。」未練がやつぱりあるところが可愛いゝものでさあね。」

第一の思想がまた云つた。

「淨麗と云つたやうな心はあれは何だ。靈智に照らされ乍ら、例へば晃々とした冷嚴の光を浴びて立つた時、人が感じるやうな、あのよろこびの心の内にも女人が住んでゐるか。本能なぞは未だだ。悲しいあきらめだ。そして神にまで進まうとする心を獸にまで返さうとするものだ。永遠を望み、恒常を望み、理想に向つて進む精進の力こそは神にまで赴かむずの人の心だ。この力の下に、神になる心が統一される。結束統一の力がなくなつたときが享樂だ。頽廢だ。世俗的な疲勞だね。」

歌麿はまだうつら〳〵としてゐる。

いつしか、斯うした對話の主人公が胡麻鹽と、白髮との姿となつて彼の夢の中へ這入り込まうとした時、一九が「でも似てるぜ。となりの娘に。」とどこかで叫ぶ聲を歌麿は聞いたやうに思つたまゝそれを機縁に前後を知らぬ境へとおちていつた。



お富の貞操

芥川龍之介

一

明治元年五月十四日の午過ぎだつた。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山の彰義隊を攻撃する。上野界隈の町家のものは匆々何處へでも立ち退いてしまへ。」——さう云ふ達しのあつた午過ぎだつた。下谷町二丁目の小間物店、古河屋政兵ヱの立ち退いた跡には、臺所の隅の鮑貝の前に大きい牡の三毛猫が一匹靜かに香箱をつくつてゐた。

戸をしめ切つた家の中は勿論午過ぎでもまつ暗だつた。人音も全然聞えなかつた。唯耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時々急に降り注いでは、何時か又中空へ遠のいて行つた。猫はその音の高まる度に、琥珀色の眼をまん圓にした。竈さへわからない臺所にもこの時だけは無氣味な燐光が見えた。が、さあつと云ふ雨音以外に何も變化のない事を知ると、猫はやはり身動きもせずもう一度眼を糸のやうにした。

そんな事が何度か繰り返される内に、猫はとうとう眠つたのか、眼を明ける事もしなくなつた。しかし雨は相不變忽になつたり靜まつたりした。八つ 八つ半、――時はこの雨音の中にだんだん日の暮へ移つて行つた。

すると七つに迫つた時、猫は何かに驚いたやうに突然眼を大きくした。同時に耳も立てたらしかつた。が、雨は今までよりも遙かに小降りになつてゐた。往來を馳せ過ぎる駕籠舁きの聲、――その外には何も聞えなかつた。しかし數秒の沈默の後、まつ暗だつた臺所は何時の間にかぼんやり明るみ始めた。狹い板の間を塞いだ竈、蓋のない水瓶の水光り、荒神の松、引き窓の綱、――そんな物も順々に見えるやうになつた。猫は愈不安さうに、戶を明いた水口を睨みながら、のそりと大きい體を起した。

この時この水口の戶を開いたのは、――いや、戶を開いたばかりではない、腰障子もしまひに明けたのは、濡れ鼠になつた乞食だつた。彼は殆頰かむりの首だけ前へ伸ばしたなり、少時は靜かな家のけはひにぢつと耳を澄ませてゐた。が、人音のないのを見ると、これだけは眞新しい酒莚に古手拭をかぶつた儘、そつと臺所へ上つて來た。猫は耳を平めながら、二足三足跡すさりをした。しかし乞食は驚きもせず、後ろ手に障子をしめてから、徐ろに顏の手拭をとつた。顏は髭に埋まつた上、膏藥も二三個所貼つてあつた。しかし垢にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧ろ尋常だつた。

「三毛。三毛。」

乞食は髮の水を切つたり、顏の滴を拭つたりしながら、小聲に猫の名前を呼んだ。猫はその聲に聞き覺えがあるのか平めてゐた耳をもとに戾した。が、まだ其處に佇んだなり、時々はじろじろ彼の顏へ疑深い眼を注いでゐた。その間に酒莚を脫いだ乞食は脛の色も見えない泥足の儘、猫の前へどつかりあぐらをかいた。

「三毛公。どうした？――誰もゐない所を見ると、貴樣だけ置き去りを食はされたな。」

乞食は獨り笑ひながら、大きい手に猫の頭を撫でた。猫はちよいと逃げ腰になつた。が、それぎり飛び退きもせず、反つて其處へ座つたなり、だんだん眼さへ細め出した。乞食は猫を撫でやめると、今度は古湯帷子の懐から、油光りのする短銃を出した。さうして覺束ない薄明りの中に、引き金の具合を檢べ出した。「いくさ」の空氣の漂つた、人氣のない家の臺所に短銃をいぢつてゐる一人の乞食――それは確かに小說ぢみた、物珍らしい光景に違ひなかつた。しかし薄眼になつた猫はやはり背中を圓くした儘、一切の秘密を知つてゐるやうに、冷然と坐つてゐるばかりだつた。

「明日になるとな、三毛公、この界隈へも雨のやうに鐵砲の玉が降つて來るぞ。そいつに中ると死んじまふから、明日はどんな騒ぎがあつても、一日椽の下に隱れてゐろよ。………」

乞食は短銃を檢べながら、時々猫に話しかけた。

「お前とも永い御馴染だな。が、今日が御別れだぞ。明日はお前にも大厄日だ。おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜めあさりはしないつもりだ。さうなればお前は大喜びだらう。」

その内は雨は又一きり、騒がしい音を立て始めた。雲は棟瓦を煙らせる程、近々と屋根に押し迫つたのであらう。臺所に漂つた薄明りは前よりも一層かすかになつた。が、乞食は顔も擧げずに、やつと檢べ終つた短銃へ、丹念に彈藥を裝塡してゐた。

「それとも名殘りだけは惜しんでくれるか？いや、猫と云ふやつは三年の恩も忘れると云ふから、お前も當てにはならなさうだ。――が、まあ、そんな事はどうでも好いや。唯おれもゐないとなると、――」

乞食は急に口を噤んだ。途端に誰か水口の外へ歩み寄つたらしいけはひがした。短銃をしまふのと振り返るのと、一乞食にはそれが同時だつた。いや、その外に水口の障子ががらりと明けられたのも同時だつた。乞食は咄嗟に身構へ

ながら、まともに闖入者と眼を合せた。

すると障子を明けた誰かは乞食の姿を見るが早いか、反つて不意を打たれたやうに、「あつ」とかすかな叫び聲を洩らした。それは素裸足に大黑傘を下げた、まだ年の若い女だつた。彼女は殆衝動的に、もと來た雨の中へ飛び出さうとした。が、最初の驚きから、やつと勇氣を恢復すると、臺所の薄明りに透かしながら、ぢつと乞食の顔を覗きこんだ。

乞食は呆氣にとられたのか、古湯帷子の片膝を立てた儘、まじまじ相手を見守つてゐた。もうその眼にもさつきのやうに、油斷のない氣色は見えなかつた。二人は默然と少時の間、互に眼と眼を見合せてゐた。

「何だい、お前は新公ぢやないか？」

彼女は少し落ち着いたやうに、かう乞食へ聲をかけた。乞食はにやにや笑ひながら、二三度彼女へ頭を下げた。

「どうも相濟みません。あんまり降りが強いもんだから、つい御留守へはひこみましたんで。――何、格別明き巣狙ひに宗旨を變へた譯でもないんです。」

「驚かせるよ、ほんたうに。――いくら明き巣狙ひぢやないと云つたつて、圖々しいにも程があるぢやないか？」

彼女は傘の滴を切り切り、腹立たしさうにつけ加へた。

「さあ、こつちへ出ておくれよ。わたしは家へはひるんだから。」

「へえ、出ます。出ろと仰有らないでも出ますがね、姐さんはまだ立ち退かなかつたんですかい？」

「立ち退いたのさ。立ち退いたんだけれども、――そんな事はどうでも好いぢやないか？」

「すると何か忘れ物でもしたんですね。――まあ、こつちへおはひんなさい。其處では雨がかかりますぜ。」

女彼はまだ業さ腹うに、乞食の言葉には返事もせず、水口の板の間へ腰を下した。それから流しへ泥足を伸ばすと、

ざあざあ水をかけ始めた。平然とあぐらをかいた乞食は髭だらけの顋をさすりながら、じろじろその姿を眺めてゐた。彼女は色の浅黒い、鼻のあたりに雀斑のある、田舎者らしい小女だつた。なりも召使ひに相應な手織木綿の一重物に、小倉の帶しかしてゐなかつた。が、活き活きした眼鼻立ちや、堅肥りの體つきには、何處か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。

「この騷ぎの中を取りに返るのぢや、何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は？え、姐さん。――お富さん。」

新公は又尋ね續けた。

「何だつて好いぢやないか？それよりさつさと出て行つておくれよ。」

お富の返事は突慳貪だつた。が、ふと何か思ひついたやうに、杯杓を片手に持つた儘、新公の顏を見上げると、眞面目にこんな事を尋ね出した。

「新公、お前、家の三毛を知らないかい？」

「三毛？　三毛は今此處に、――おや、何處へ行きやがつたらう？」

乞食はあたりを見廻した。すると猫は何時の間にか、棚の擂り鉢や鐵鍋の間に、ちやんと香箱をつくつてゐた。その姿は新公と同時に、忽ちお富にも見つかつたのであらう。彼女は杯杓を捨てるが早いか、乞食の存在も忘れたやうに、板の間の上に立ち上つた。さうして晴れ晴れと微笑しながら、棚の上の猫を呼ぶやうにした。

新公は薄暗い棚の上の猫から、不思議さうにお富へ眼を移した。

「猫ですかい、姐さん、忘れ物と云ふのは？」

「猫ぢや悪いのかい？――三毛、三毛、さあ、下りて御出で。」

新公は突然笑ひ出した。その聲は雨音の鳴り渡る中に殆氣味の悪い反響を起した。と、お富はもう一度、腹立たしさに頬を火照らせながら、いきなり新公に怒鳴つけた。

「何が可笑しんだい？　家のお上さんは三毛を忘れて來たつて、氣違ひのやうになつてゐるんぢやないか？　三毛が殺されたらどうしようつて、泣き通しにて泣いてゐるんぢやないか？　わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざわざ歸つて來たんぢやないか？――」

「よんござんすよ。もう笑ひはしませんよ。」

新公はそれでも笑ひ笑ひ、お富の言葉を遮つた。

「もう笑ひはしませんがね。まあ、考へて御覧なさい。明日にも「いくさ」が始まらうと云ふのに、高が猫の一匹や二匹、――これはどう考へたつて、可笑しいのに違ひありませんや。お前さんの前だけれども。一體此處のお上さん位、わからずやのしみつたれはありませんぜ。第一あの三毛公を探しにお前さんをよこすのだから、……」

「お默りよ！　お上さんの讒訴なぞは聞きたくないよ！」

お富は殆どぢだんだを踏んだ。が、乞食は思ひの外彼女の權幕には驚かなかつた。のみならずしげしげ彼女の姿を無遠慮な視線を注いでゐた。實際その時の彼女の姿は野蠻な美しさそのものだつた。雨に濡れた着物や湯卷き、――それらは何處を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露はに肉體を語つてゐた。しかも一目に處女を感じる。若々しい肉體を語つてゐた。　（未完）

これはこの短篇の三分の一である。わたしは現在インフルエンザの爲に、これ以上稿を續ける事が出來ない。讀者並びに改造社の寛恕を請ひたい所以である。　作者記

編輯を了へて

□花は散つた、火は燃えつゝある、日曜の人出の多い日に帝國ホテルは燒けた、泣喚の叫びは山下橋、日比谷を中心として洋服の貴婦人紳士から發せられた。英太子の隨員、それから倫敦から來た記者連の驚愕と、悲嘆は臨の見る目も氣の毒であつた。ア、大仕掛の火事になると、東京の小仕掛けの消防ぢや皆目利目がない。

□梟雄セメヨノフは米國クンダリで投獄、米國法廷で日本がセ軍に資金を供給したことは明瞭になつた、その罪は何れにあるか、それから別府では警察官が民家に火を放つたことは殆んど明かな事實のやうだ、その罪は何れにある。

□商大に轉じた山内得立君は目下フッサール教授の下にある、近く歸朝したら高田、左右田等と商大の花形となろう同じ商大の福田氏が學士院に列したのは意外であつた、實力から云へば寧ろ遲きに失するが、赤門以外の人で、しかも論客で、そして年少である福田氏の拔擢は慥かに近來の異數、穗積、小野塚兩氏の出來と賞めて置から。

□學校騷動一兩ごとに加はる昇格なぞ眼中になき青年こそ天下に大事業は出來る、名を捨てゝ實を取れ、名聞を云々するものに碌なものなし、昇格を政爭に使ふ政府者に唾棄すべし、大學、高等學校は若い教授、氣骨ある人物を選べ情實のため、老教員擁護をやる醜態はやめよ。

□法科大學あたりで古いノートで條文講義はヨセ、時はモウ大正だ、新時代に法律政治を學ばんとするものは先づ哲理に赴け、基礎科學、基礎哲學を含まざる講義に何等の價値と權威があらう、

□去る二月二十三日、モスコーで赤衛軍の第四週年祝賀の大觀兵式が擧行された、そしてクレムリンの廣場でトロツキーが閲兵したのも面白いがヘイウッド、クララ・ツエトキン、片山潜の三外人が大臣待遇格でその場に納まり返つていたのは大に異彩を放つたそうな。

□チチエリンとロイドジョージの角力なか〳〵面白い、聯合國を一手に引受けて惡戰しつゝあるチ君はどれだけ成功するだろうか。惜しいのは此會議にレニンとトロツキーを逸したことだ。

□河上肇氏の寄稿にあづかつたことを感謝する、それから阿部次郎君は「人格と世界」なる大論文を置土產に四月末渡歐する、渡歐後は本誌に力作を發表する。

□リツケルト教授の論文は好評嘖々、それに無想庵の小說は異常な人氣で四月號は賣切れた、無想庵は五月號以降本誌によりて力篇を發表する。

□本號に「歐脣」を發表した高橋誠君は京大出の秀才だ、それが理學士で川崎造船所の技師だからチヨト面黑い。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共 郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共 郵稅不要

註文の注意

▲御注文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價送り御拂込ありたし但し郵劵代用一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾壹年四月廿日印刷納本
大正拾壹年五月一日發行

編輯發行兼印刷者　東京市芝區伊皿子町四十番地　平山眞一郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

五月號八拾錢

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話　芝（長）一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替東京八四〇二

アインスタインと相對性理論

增

ニュートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對理論は、最早學界に於て絕體のものとなりました。それで現今までの物理學上の公理、定義は根本から轉覆されました。その相

◇四六判布製
◇寫眞七葉

文化

リッケルトの歴史哲學

文學博士 米田庄太郎著

四六版上製函入
六百五拾餘頁
定價四圓七拾錢
送料廿五錢

本書に對する

七版發賣

大阪朝日新聞批評　近世の哲學者は申し合せたやうに歷史哲學についての研究を發表してゐる、中にもこのごろメキ／＼と頭をもたげて來たところの獨逸西南學派において最も多く發表されてゐる、ヴインデルバント及びその流をくんで、而も出藍の譽高く、マールブルヒ流のコーエンと並び稱せられるリッケルト教授が即ちそれである、併しながらリッケルトは未だ歷史哲學を組織的に發表するに至らず、（中略）主として、他の認識論その他を參考に推論する外はない、米田博士はよくその間の連絡をとり、リッケルトの考へを祖述し得てゐる、リッケルトの認識論そも／＼から哲學としての歷史に關する一切の概念及び價値に亙つて餘すところなく、沼々六百五十頁の大冊となる、この邊はいつもながら流石に米田博士で、その努力とその精力とにひたすら感服の外はない、（中略）リッケルトから觀れば、ラムプレヒトの「デイ・モデルネ・ゲシヒッツウイセンシャフト」の如きは、極めて淺薄なものであろうが、併し或る一派の純史學の方から批判すると、リッケルトの立場には種々な缺陷があるに違ひない、或はそういふわけからして、リッケルトの歷史哲學は今なほ未成品で、

各新聞の批評

その完成の道程にあるかも知れぬ、(中略)ハイデルベルヒ大學でファウストの講義やつてゐるくらゐの一種の文學者である、隨つてその歴史哲學、、無味低級な哲學者の觀方とは自ら異るところがある筈である、(中略)今やリツケルト教授は少くともわが日本における哲學界の流行兒となつて居り、ハイデルベルヒにその講義を聽くべき多くの留學生が行つてゐる、當分日本の哲學界はその學說の流布に忙殺されるであろう、本書の價値はこの邊にもあるといへる尙術語の譯し方が漸く穩當に綺麗に、親しみ易くなつて來た。

讀賣新聞批評　西南獨逸派の價値哲學を始めて新らしい形態に大成し同時に偉大な歴史哲學原理を創した獨逸現代の哲學者リツケルトの歴史哲學を米田博士が其の該博の知識を以て說述したものである「認識論の根本思想及哲學の一般的方針」から以下「哲學體系第一部に於る歴史哲學思想」迄凡て五章現代倫理、美學、哲學、宗敎其他の一切諸象に亘つて卓拔で深刻な思索を潛め先人未到の根本原理をそこから發見して一々之を歴史哲學の生長に交渉して居る、最も現代的な知識の要樞を提げて何人をも啓發せねば止まない思想界の大著である

時事新報批評　社會學者の立場より其研究に重要な歴史哲學の代表者リツケルトの思想體系を著作の年代に依つて解說し歐米學者の仲介を俟たずして直接原著に就き研究した結果を公明な批判的態度を以て講述したところに本書の價値と一般讀者に與へる感銘の大な

本書に對する

る事が認められるリッケルトの始めの認識論の根本思想及び哲學の一般方針を第一に擧げ歴史哲學考察一般を其の次に更に認識論の立場の修正及び哲學概念の大成を記し歴史哲學問題の詳論に關して説明し、リッケルト最近の大著「哲學體系」第一部に於ける歴史哲學思想を紹介して詳密且つ忠實である。

萬朝報批評　近年歴史學方法論の問題は獨逸加之一般學界の興味を惹いたが中でもリッケルトの歴史哲學説は最も目覺しかつた、此書は獨逸語を讀まぬ讀者の爲に彼の歴史哲學思想を單に抽象的に理解させるだけでなく「同氏自身の云ひ表はし方をも味ひつゝ、之を其の發達せるがまゝに大體上會得される」やうに記述したもので、彼の認識論の根本思想より、價値哲學の一班を説き、然る後に歴史哲學問題の詳論に入つてゐる。

國民新聞批評　所謂西南獨逸派の價値哲學の大成者にして同時に又歴史哲學の大成者であるリッケルトの其の學説を其の發達せるまゝに説述して抽象的に理解させるだけにとゞまらず生きて發達せるがまゝに會得させようとつとめ又同氏の主要なる著作の大要を出來るだけ同氏自身の言葉によつて傳へようと力めた點など頗る周到精細によく出來てゐる我が學界の爲に有力な參考となるべきを疑はぬ。

報知新聞批評　新理想主義の勃興は、現代思想界に於ける一大警鐘であつた、大戰の

各新聞の批評

洗禮を受けて、思想上の大苦悶の裡に蘇へりたる新ドイツの青年は、爭つて新理想主義の明星たるリッケルトに赴き、今や哲學界に於けるリッケルトの名は、科學界に於けるアインスタインと共に、革命的なる權威を以て現代人の心に臨み、あらゆる讃美と渇仰とを集めて燦として思想界に一大光芒を放つに至つたのである、本書は著者米田博士が、專攻の社會學を研究するに當り、新理想主義の歷史哲學、特に西南獨逸派の歷史哲學は、社會學上文化の發達を研究する上に於て、極めて有益なりとし、同派の明星たるリッケルトの歷史哲學の大要を說述して、理想主義の眞面目を傳へんとし、夥しき著書全部を研究して、其高遠なる考察を發表したものである、其内容はリ氏の哲學の原理を簡明に論述せる「哲學の體系」を始め認識論の原理及哲學の一般的方針を樹立せる「認識の對象」又リ氏の思想の詳細を盡くしたる大著「自然科學的概念構成の限界、歷史哲學の論理的序論」「文化科學と自然科學」其他に於て說く所を組織的に紹介論評し、巧に鹽梅統一して、リ氏の哲學原理及び歷史哲學思想の發達を知らしめ「余は本書をリッケルトの歷史哲學に精通せらるゝ人々に對して書いたのでなく、まだ之を知らない人の爲に書いたのである」といつて居る、改造社が新思想の紹介に對する不斷の努力は、今更贅する迄もないが、リッケルトの哲學に最も造詣深き米田博士に囑して、逸早くも讀書界に本書を提供した事は、やがて我思想界に、一大光明を點ずるものと

して、讀書子の最も慶賀する所であらふ、現代思想の最高峰に立たんとするもの、カント以來の大思想に學ばんとするものは先づ本書に依つてリッケルトの哲學に聴く可きである。

大阪毎日新聞批評　「文化哲學叢書」の第一編である。西南獨逸派に價値哲學がリッケルトによつて全く新らしい形態に大成された。即ちリッケルトは新歴史哲學の原理を確立し且つ之を詳論し、更にその體系の基礎を定めた哲學者であるが、まだ之を組織的に論述して居ない。そして始めてその組織的論述を企てたのはメーリスであるが、メーリスの説は米田氏が嘗て氏の著「新理想主義の歴史哲學」中に詳しく說述した。而かも米田氏は更に、一にはリッケルトの歴史哲學思想を出來るだけ眞の發達せるがまゝに說述して「生きて發達せるがまゝに會得させたい」といふ考から、二には「獨逸書を讀まない同胞をして同氏の主要なる著作の大要を、出來るだけ同氏自身の言葉に依つて傳へたい」といふ考から主としてリッケルトの歴史哲學に精通してない人々の爲に書いたのださうだが殊に第五章「哲學體系第一部に於ける歴史哲學思想」の如き、最も精細にリッケルトの思想を組織的に論述してゐる。諸學者の是非一讀すべき良書だと思ふ。

東京芝區愛宕下町一ノ一　**改造社**　振替東京八四〇二番

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可 大正拾壹年四月廿日印刷納本 第四卷第五號 五月號 定價金八拾錢